古今和歌六帖全注釈　第五帖

目次

凡例……2
諸本について……4
注釈　第一帖……7
あとがき……282

凡例

一　底本は永青文庫叢刊『古今和謌六帖（上）』（汲古書院　昭和五八年）とする。漢字、仮名遣いなど底本どおりに翻刻する。ただし、読みやすさを考慮し、濁点を付し、異体字は通常の文字に改めた。またミセケチは「り」のように文字の左側に傍線を付して表した。

一　校合した本は以下の三本である。

（ア）宮内庁書陵部蔵『古今和歌六帖』（五〇六・一三）　御所本
（イ）宮内庁書陵部蔵『古今和歌六帖』（五一〇・三四）　桂宮本
（ウ）榊原家旧蔵大久保正氏所蔵『古今六帖』　大久保本

【異同】の項に（ア）を「御」、（イ）を「桂」、（ウ）を「大」と略称して本文の相違を記した。ただし、これらの傍記などは略した。また、漢字、仮名遣いの差は原則として記さない。これらの書誌については別に記した。

一　歌には通し番号を付した。和歌の【現代語訳】はわかりやすいように適宜言葉を補うなど配慮した。【語句】には意味とその用例をなるべく挙げた。

一　和歌は題のもとに分類されているが、各題については初出の箇所に◎印を付し、簡潔な説明を加えた。

一　【所載】にはその歌が、他の書物に掲載されていることを示す。

例　古今集・春上・一一／忠岑集Ⅰ・三二／忠岑集Ⅱ・五／……

これは古今和歌集の春上の部の一一番にあり、また、『私家集大成』において忠岑Ⅰと略称される家集の三二番に、同じく忠岑Ⅱと略称される家集の五番に、その歌があることを示す。原則として、『新編国歌大観』の巻一、一二、三、四、五までと、『新編私家集大成』の中古Ⅰ、Ⅱの範囲で集名と歌番号とを記した。ただし歌合の判詞等は除いた。

一　特に万葉集はその訓読の様相が『古今和歌六帖』と深い関係があるので、以下のようにした。

例　万葉集・一四二二（旧一四一八）石激　垂見之上乃　左和良妣乃　毛要出春尓　成来鴨
イハソソクタルミノウヘノサワラビノモエイヅルハルニナリニケルカモ　いはばしるたるみのうへのさわらびのもえいづるはるになりにけるかも

これは、『新編国歌大観』の万葉集に基づく。すなわち、漢字本文は西本願寺本の表記、カタカナはその訓読部分を示し、ひらがなは新しく付した訓読である。（旧一四一八）は旧番号である。

一　【参考】には類似しているが同一とは言えない歌、注記として付された作者名などについて述べた。

一　散文作品の引用は特に断らない場合、『新編日本古典文学全集』（小学館）によった。

一　五首ずつごとに担当した者の名を後に記した。

諸本について

数葉の鎌倉期古筆切を除くと、中世極末期を遡る善本はなく、現存の諸本間に大きな異同はない。大きく版本系と写本系に二分する。

版本系とは寛文九年刊本、および、それを底本とし、写本四本で校合した山本明清『古今和歌六帖標注』、『旧国歌大観』、『校註国歌大系』（第九巻）など。

また、写本については、十二本の書誌が図書寮叢刊『古今和歌六帖　下巻』（養徳社　一九六九年①とする）にあり、現存最古の写本が永青文庫叢刊『古今和謌六帖』（解題　荒木尚、汲古書院　一九八三年　②とする）に影印本として刊行された。

本書は、永青文庫本を底本とし、桂宮本、御所本、大久保本（榊原家旧蔵）の三本によって校合した。それらの書誌を簡単に記す。

一、永青文庫本（②の底本）

縦二五・七センチ、横二〇・三センチの袋綴、六冊。縹色楮紙の表紙。左肩に朱地に金泥で竜紋を画いた題簽があり、「古今和謌六帖　第一」と記して貼付する。墨付一一〇丁。遊紙、前後各一丁。奥書がある（一帖の他、三・四・六の各帖にも奥書がある）。

この本は、文禄四（一五九五）年、細川幽斎が富小路秀直（一五六四―一六二一）をもって借り出した世尊寺行能筆の禁裏本を忠実に書写したもの。ただし、第三帖幽斎筆のほか、四五人の寄合書という（②による）。

一、御所本

縦二八・〇センチ、横二〇・五センチの袋綴、六冊。黄蘗染の鳥の子紙の表紙。題簽は藍色内曇り、鳥の子紙の小短冊。一面十行、歌二行書。奥書は次の桂宮本と同様、一帖のほか、三・四帖にある（①による）。

一、桂宮本

縦二六・六センチ、横二〇・六センチの袋綴、六冊。鼠茶地の鳥の子紙の表紙。題簽は後補。一面十二行、歌一行書。奥書は一帖のほか、三・四帖にある（①による。①の底本）。

一、大久保本（榊原家旧蔵）

縦二八・〇センチ、横二〇・六センチの袋綴、六冊。灰色がかった紺色の表紙。左肩に白地の題簽があり「古今六帖第一」と記して貼付する。一面十行、歌一行書。印記「楽山亭文庫」「吏部大卿　忠次」「文庫」。奥書は桂宮本と同様、一帖のほか、三・四帖にあり、さらに別の奥書が一・二・五帖にもある（①による）。榊原家旧蔵。ついで大久保正氏蔵。現在は福留温子氏蔵。

古今和歌六帖　第七

古今和歌六帖　第三

水　みづとり　をし　かも
にを　かめ　いを
こゐ　う　すゞき　たい
ふな
あゆ　ひを　かは　かえづ（は）
はし　ひ　ゐせき　しがらみ
夜かは　あじろ　やな　え
いけ　ぬま　うき　たき
にはたづみ　うたかた　さは　ふち
せ　うみ　あま　たくなは
しほ　しほがま　ふね　つり
いかり　あみ　なのりそ　も
みるめ　われから　うら　かひ
なぎさ　しま　はま　ちどり
はまゆふ　さき　いそ　なみ
みをつくし　かた　みなと　とまり
【異同】ナシ　【異同】ナシ

一四五二　水　あしひきの山したとよみ行みづのときぞともなく思ほゆるかな

【異同】ナシ

【現代語訳】山の麓を鳴り響かせて流れて行く水は絶え間なく流れて行く、私も、絶え間なく恋しく思われることだ。

【語句】◎水　古今六帖の「水」の題のもとには、「山下水」「したがくれ行く水」「石清水」等、山や谷、あるいは野の草の下を流れて行く水を、人事と結びつけて詠んだ歌が収載されている。○あしひきの山したとよみ

山の麓を鳴り響かせて。「あしひきの」は「山」に掛かる枕詞。「山下」は、山の下の方。麓。「とよむ」は、あたりを揺るがすように音が響く意。「三輪山の山下とよみ行く水の水脈し絶えずはのちもわが妻」（万葉集・三〇二八〈旧三〇一四〉）。〇ときぞともなく　時を定めず。時を分かたず。絶え間なく。当該歌では、山裾を流れて行く水が絶え間なく流れる意に、絶えず恋しく思われる意を込めて、上三句は「ときぞともなく」を導く序。〇思ほゆるかな　恋しく思われることだ。所載欄の文献では、「恋ひわたるかも」、もしくは「恋ひわたるかな」「恋ひやわたらん」となっている。

【所載】拾遺抄・恋上・二九五／拾遺集・恋一・六四五／万葉集・二七一三（旧二七〇四）悪氷木之　山下動逝水之　時友無雲　恋度鴨　アシヒキノヤマシタトヨミユクミヅノトキトモナクモコヒワタルカモ　あしひきのやましたとよみゆくみづのときともなくもこひわたるかも／人麿集Ⅰ・一八〇／人麿集Ⅱ・二七五／人麿集Ⅳ・二五七

一四五三　あしひきのやましたみづの木がくれてたぎつこゝろをせきぞかねつる　源よしのあそむ

【異同】ナシ

【現代語訳】山下水は木蔭に隠れて激しく流れる、私も人知れず湧き返る心を、せきとめかねてしまったよ。

【語句】〇あしひきの　「山」に掛かる枕詞。〇やましたみづ　山下水。山中の木々などが茂った下に隠れて流れる水。表面に表せない恋の心の比喩に用いることが多い。「人知れず思ふ心はあしひきの山下水のわきやかへらむ」（新古今集・一〇一五）。〇たぎつこゝろ　激しく湧き返る心。九五七番歌参照。「たぎつ」は、山下水が激しく流れる意と、そのように恋心が激しい意とを掛け、上三句は、「たぎつ」を導く序。「石清水いはぬものから木隠れてたぎつ心を人はしらなむ」（伊勢集・三九六）。〇せきぞかねつる　（激流をせきとめかねるように）こらえかねてしまった。制止しかねてしまった。「嘆きせば人知りぬべみ山川のたぎつ心をせかへてあるかも」（万葉集・一三八七〈旧一三八三〉）。「ぞ」は強意の係助詞。「つる」は、完了の助動詞「つ」の連体形。「たぎつ」「せく」は「水」の縁語。「ことに出でて言はばいみじみ山川のたぎつ心をせきぞかねつる」（古今六帖・二六五二）。

【所載】古今集・恋一・四九一／後撰集・恋四・八六〇／新撰和歌・二一〇／新撰朗詠集・四六六／奥儀抄・一八七

【参考】作者名「源よしのあそむ」とあるが、所載の文献によって作者名が異なる。古今集は「よみ人知らず」とし、後撰集は「女のもとにつかはしける」という詞書を付して「よしの朝臣」の歌とし、新撰朗詠集は伊勢の作とする。古今六帖は、後撰集と一致する。これについて、山本明清『古今和歌六帖標注』は、後撰集から採られたと思われるがはっきりしないとする。片桐洋一『古今和歌集全評釈』は、古今集と後撰集の作者名の相違について、古今集所収の古歌を源善朝臣が利用して女に贈ったのに対して女が返歌し贈答歌になったのを、後撰集が採録したのであろうとする。

一四五四　足引のやました水のしたくゞりゆくほどしらぬ恋もする哉

【異同】ナシ
【現代語訳】山下水は草木の下をくぐり抜けてどこへ流れて行くのかわからない、私も、人目につくことなく、どうなるかもわからない恋をすることだなあ。
【語句】○足引のやました水　一四五三番歌参照。○したくゞり　「したくぐる」は、物の下を通り抜けること。「下くぐる水に秋こそかよふらしむすぶ泉の手さへ涼しき」（中務集・四〇）。当該歌では、山下水が、木や草などの下をくぐり抜けて流れる意と、自分の恋が人目につかずひそかに思う意を込める。○ゆくほどしらぬ　どこへ行くのかわからない。山下水の流れて行く行方は物の下に隠れてわからない意に、自分の恋がどうなるかわからない意を込めて、初・二句は、「したくゞりゆくほどしらぬ」を導く序。
【所載】ナシ

一四五五　ことならばやましたみづとなりなゝむ人めしげきのなかもゆくべく

【異同】ナシ
【現代語訳】同じことなら、我が身が山下水となってしまえばいいなあ。山下水が草木の茂った下を流れて行くように、人目が多い中でも、それをかいくぐって逢いに行けるように。
【語句】○ことならば　どうせ同じことなら。「ことならば山ともはやくなりななむここらのもみぢ散り積りつつ」（好忠集・二六二）。○やましたみづ　一四五三番歌参照。○なりなゝむ　なってしまってほしい。なってしまってくれ。なってしまえばいいなあ。「なゝむ」の「な」は完了・強意の助動詞「ぬ」の未然形、その下の

「なむ」は、あつらえ望む意の終助詞。「おなじくはわが身も露となりななむ消えなばつらきことのはも見じ」（元真集・三〇七）。〇人めしげきのなかもゆくべく　山下水が草木の茂った下を流れて行くように、人目が多い中でもそれをかいくぐって逢いに行けるように。「人め」は、他人の見る目。「しげき」は、人目が多い意に、草木が繁茂する意を響かせて、「山」の縁語。「人目のみしげきみ山の青つづらくるしきよをぞ思ひわびぬる」（後拾遺集・六九二）。

【所載】ナシ

〔以上四首担当　長戸千恵子〕

一四五六　しのぶれどくるしきものをあし曳のやましたみづのつねにながれて

【異同】ナシ

【現代語訳】思いを秘めているけれど苦しいものであるよ。山下水が人目につかぬ所で絶えず流れるように、いつも人知れず涙がこぼれて。

【語句】〇しのぶれど　恋の思いを秘めているけれど。思いを秘めた状態は苦しいもの。逆接をとるのは不審。傍記に「しのぶれば」とあるのが妥当か。「しのぶれば苦しきものを人知れず思ふてふこと誰に語らむ」（古今集・五一九）。〇くるしきものを　苦しいものであるよ。「ものを」は強い詠嘆。「秋の夜も名のみなりけりあふといへば事ぞともなく明けぬるものを」（古今集・六三五）。〇やましたみづ　山下水。一四五三番歌参照。ここでは繁みの中を流れることから、人目につかないようにの意を持たせる。〇つねにながれて　「ながれて」は「流れて」に「泣かれて」を掛ける。「山高みした行く水の下にのみながれて恋ひむ恋はしぬとも」（古今集・四九四）。

【所載】ナシ

一四五七　なつののゝ草したがくれゆく水のたえぬこゝろあるわれとしらずや

【異同】ナシ

【現代語訳】夏の野の草の下に隠れて絶えず流れ行く水のように、ひそかに絶えることなき思いのあるわたしだと、あなたは知らないのですか。

【語句】〇なつののゝ　夏の野の。夏の野に生い茂る草のさまは、ますます募る恋の思いのイメージと重なる。

「秋近くなるも知られず夏の野のしげき草葉と深き思ひは」（斎宮女御集・八一）。○草したがくれ　草の下に隠れて。「夏の野の草したがくれをみなへし色にいでねどしるくもあるかな」（能宣集Ⅲ・一〇六）。○ゆく水の流れゆく水の。初句からここまでが「たえぬ」を導く序詞。○たえぬこゝろ　絶えることなく思いつづけている心。「たえぬ」は、水の流れるさまと、恋の思いがずっと続いていることを表わす。
【所載】続後撰集・恋一・六三九

一四五八　おもふとはなにをかさらにいはしみづこゝろをくみて人はしらなむ

【異同】ナシ
【現代語訳】あなたのことを思っていますとどうして言いましょうか、決して言いますまい。石清水をくみ取るように、私の心をくみ取ってあなたは知ってほしいものです。
【語句】○なにをかさらにいはしみづ　どうして言いましょうか、決して言いますまい。「なにをか」の「か」は反語。「いはしみづ」は「岩清水」に「言はじ」を掛ける。「さらに」はその「言はじ」と呼応して、決して言わないという強い否定。○いはしみづ　岩間から湧き出る清水。「相坂の関にながるるいはし水いはで心に思ひこそすれ」（古今集・五三七）。○こゝろをくみて　心を汲みて。私の心をくみ取って、の意。「くみ」は「いはしみづ」の縁語。
【所載】ナシ

一四五九　春ごとにながるゝ河を花とみておられぬ水に袖やぬれなん　伊勢

【異同】ナシ
【現代語訳】春になるたびに、流れる川に映る花をそれかと思って折ろうとしても、折ることの出来ないその水に、袖が濡れることになるのでしょうか。
【語句】○おられぬ　をられぬ。折られぬ。水面に映る花なので、手折ることができない。
【所載】古今集・春上・四三／新撰和歌・八九／伊勢集Ⅰ・九八／伊勢集Ⅱ・一〇〇／伊勢集Ⅲ・九八／古来風体抄・二二九

【参考】作者名「伊勢」は所載欄の文献に一致する。

一四六〇　いはせやまたにの下水（したがくれ行水のイ）うちしのび人も見ぬ間にながれてぞふる（いでにけりイ）

【異同】ナシ
【現代語訳】岩瀬山の谷の下を行く水が音も立てずに流れているように、物言わず思い続け、人の見ていない間に涙をこぼして過ごしているのですよ。
【語句】○いはせやま　岩瀬山。竜田川の東側にあり対岸の三室山に対する岩瀬の森付近の山か。能因歌枕では摂津国とする。「我をのみいはせの山にこるなげきくやしともえぬ日ぞなかりける」（古今六帖・九〇八）。○たにの下水　谷の下を行く水。目に見えないところで流れている、の意を持つ。「音羽山谷の下水音にのみ聞きてわたらぬ袖もぬれけり」（頼実集・九八）。初句からここまでが「うちしのび」を導く序詞。○ながれてぞふる「ながれて」は「流れて」に「泣かれて」を掛ける。「ながれ」は「水」の縁語。
【所載】後撰集・恋一・五五七／新勅撰集・異本歌・一三七七／伊勢集Ⅰ・一五〇、四一〇／伊勢集Ⅱ・一五〇、四一四／伊勢集Ⅲ・一五一、四五四

〔以上五首担当　青木太朗〕

一四六一　ぬま水のなみにはたてゞそこふかみくさがくれつゝあふよしもがな

【異同】ナシ
【現代語訳】沼水は波立つこともなく、底深くて草に隠れて目立たない。その「草がくれつつ」ではないが、人目につかないようにこっそりと逢う手立てがあればいいのに。
【語句】○ぬま水のなみにはたてゞ　沼水の波は立てずに。表面には表れないで、ということ。沼は水草に覆われて波も立てずに穏やかなために人に発見されにくいものだが、そこに恋情を詠む歌は多い。○そこふかみくさがくれつゝ　（沼の）底が深くて草に隠れている。世間の人に知られずにこっそりと、ということ。
【所載】ナシ

一四六二　おとなしの山のしたゆくさゝらみづあなかまわれも思こゝろあり

【異同】ナシ
【現代語訳】音無しの山の下を流れている小川よ。静かに。私も恋しく思う人がいるのだ。
【語句】○おとなしの山　音無しの山。能因歌枕では尾張の歌枕。しかし、「おとなし」は「おとなしの川」「おとなしの滝」など「音の無い」という意味で用いられることが多く、ここもあえて特定の場所とする必要はない。「おとなしの山にや今日は鶯の声めづらしく人の聞くらん」（夫木抄・四六三）。○さゝらみづ　さらさらと音を立てて流れる細流。「ささら」は細かく小さいさまの形容であるが、当該歌では細流の音をも表すか。「ささら水」の用例は和歌にはあまりないが、重之女集の百首歌中に「山河の岩間をわくとささらめく水も凍ればおとづれぬかな」（六四）がある。○あなかま　しーっ、静かに。「あな」は感動詞、「かま」は形容詞「かまし」の語幹か。雑音、騒音をとがめる時に用いる。「あなかま」は、通常、会話に用いられるが、和歌にも「まだ散らぬ花もやあるとたづねみんあなかましばし風に知らすな」（後拾遺集・一二〇一）のように用いられることもある。ここは、「音無山の下を流れるささら水」というささやかな音に対してまで「あなかま」と注意する面白さを詠じたか。○思こゝろあり　（人を）思う心がある。「あづまぢの佐野の船橋はじめより思ふ心ありいとひすな君」（古今六帖・二五五七）。
【所載】金葉集二度本・恋下・五〇五／金葉集三奏本・恋下・五〇二／万代集・一七五三／伊勢集Ⅰ・四〇九／伊勢集Ⅱ・四一五／伊勢集Ⅲ・四五三／綺語抄・一六九

一四六三　おく山のこの葉がくれにゆく水のをときゝしよりつねにわすれず

【異同】ナシ
【現代語訳】奥山の木の葉隠れに流れている川の水の音、貴女の評判を耳にしてからというもの、片時も忘れることはありません。
【語句】○この葉がくれに　木の葉が生い茂っている下を見え隠れするように。○をときゝしより　おときゝしより。音を聞いた時から。「水の音」に「評判（音）」をかけて「評判を聞いてから」の意を表す。上三句は「音」にかかる序。「逢ふ事は雲居はるかになるかみの音に聞きつつ恋ひや渡らん」（古今六帖・八一〇）。
【所載】続千載集・恋二・一一四六／万葉集・二七二〇（旧二七一一）奥山之　木葉隠而　行水乃　音聞従常不所忘　オクヤマノコノハカクレテユクミヅノオトキキシヨリツネワスラレズ　おくやまのこのはがくりて

ゆくみづのおとききしよりつねわすらえず／人麿集Ⅱ・四八七／人麿集Ⅲ・三二五／人麿集Ⅳ・二五八／綺語抄・一八九

一四六四　まつをのみときはとおもへばよとゝもにながるゝ水もみどりなりけり　つらゆき

【異同】ときはとおもへは―ときはとおもふは（御・桂）
【現代語訳】松だけが永遠に不変の色であると思っていると、なんと、長い間ずっと流れている水も松を映して常緑であるよ。
【語句】○ときはとおもへば　不変のもの（常緑）と思っていると。「……思へば……」は「……と思っていると、意外にも……」と展開する例もあり、ここでは松だけでなく川も緑だった、という意外性、面白さを導く。「山際に鶯鳴きつうちなびき春と思へば雪降りしきぬ」（赤人集・一三六）、「ひぐらしの鳴きつるなへに日は暮れぬと思へば山のかげにぞありける」（猿丸集・二八）など。○よとゝもに　いつもいつも。絶えず。「よとともに燃えゆく富士の山よりも絶えぬ思ひは我ぞまされる」（古今六帖・七七七）。○ながるゝ水もみどりなりけり　流れている水も緑色だったのだ。松の常緑を映している水も、松と同じく常磐であるということ。「色のみぞ勝るべらなるいその松かげみる水もみどりなりけり」（古今六帖・四一〇三）。
【所載】拾遺抄・雑上・四三三／拾遺集・賀・二九一／貫之集Ⅰ・一一八
【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

一四六五　君がよにあふさか山のいはしみづこがくれたりとなに思ひけむ　たゞみね

【異同】ナシ
【現代語訳】逢坂山の岩清水が木々に隠れて見えないように、私も世に埋もれているとどうして思っていたのでしょうか。いまは、わが君の御代にめぐりあって名誉ある身となりました。
【語句】○なにおもひけむ　どうして思っていたのだろうか。○こがくれたりと　木隠れたりと。木に隠れてしまっていると。ここでは、世に知られず埋もれているということ。

【所載】古今六帖・第二帖「山」八四二番既出
【参考】作者名「たゞみね」は所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当　犬養廉・尾高直子〕

一四六六　つくばねのいはもとゞろにおつるみづたえんものとはわがおもはなくに

【異同】ナシ
【現代語訳】筑波山の岩も轟かして落ちる水は絶えることなく、そのようにあなたとの仲が絶えるであろうとは私は思いませんのに。
【語句】○つくばねのいはもとゞろにおつるみづ　「絶え」を導く序。「つくばね」は茨城県にある筑波山のこと。山頂は男体山と女体山の二峰からなる。ここは、女体山の西から落ちる男女川をさしたものか。「つくばねの峰よりおつるみなの川恋ぞつもりて淵となりける」（後撰集・七七六）。○たえんものとは　絶えるであろうとは。「ん」は推量。「水が絶える」に「仲が絶える」を掛ける。「絶え」は「水」の縁語。所載欄の万葉集では、「よにもたゆらに」とあり、揺らぐ思いの比喩となっている。
【所載】万葉集・三四一〇（旧三三九二）筑波祢乃　伊波毛等杼呂尓　於都流美豆　代尓毛多由良尓　和我於毛波奈久尓　ツクハネノイハモトドロニオツルミヅヨニモタユラニワガオモハナクニ　つくはねのいはもとどろにおつるみづよにもたゆらにわがおもはなくに／夫木抄・一二五一一

みづとり

一四六七　みづとりのかものはいろのはるやまのおぼつかなくもおもほゆるかな　さかの女郎

【異同】さかの女郎イ―さかの上郎（大）　おもほゆるかなイ―おもほゆるかも（御・桂・大）
【現代語訳】水鳥の鴨の羽の色をした春の山がぼんやりと霞んで見えるように、あなたの気持ちがはっきりしないでもどかしく思われます。
【語句】◎みづとり　鴨、鴛鴦、雁など水辺に棲息する鳥の総称。主に鴨、鴛鴦をいう。万葉集の用例は枕詞がほとんどだが、後に冬の景物として詠まれるようになる。○さかの女郎　伝未詳。参考欄参照。○みづとりの

一般には「鴨」の枕詞。ここは「水鳥である鴨」と続くとみる説もある。○かものはいろのはるやまの　鴨の羽色は緑が目立つので、「春山」の修飾とした。初句からここまでが「おぼつかなくも」の序。初・二句と同じ表現が家持にも見られる。「水鳥の鴨の羽色の青馬を今日見る人は限りなしといふ」（万葉集・四五一八〈旧四四九四〉／古今六帖・五〇）。○おぼつかなくも　「おぼつかなし」は対象がぼんやりとしていて、はっきり知覚できない状態。また、そういう状態に対して抱く不安・不満の感情。「をちこちのたづきも知らぬ山中におぼつかなくも呼子鳥かな」（古今集・二九）。

【所載】万葉集・一四五五（旧一四五一）水鳥之　鴨乃羽色乃　春山乃　於保束無毛　所念可聞　ミヅトリノカモノハイロノハルヤマノオホツカナクモオモホユルカモ　みづとりのかものはいろのはるやまのおほつかなくもおもほゆるかも

【参考】作者名「さかの女郎」とあるが、所載欄の万葉集では笠女郎（伝未詳）が家持に贈った歌である。『校証古今歌六帖』は作者名「さかの」は「かさ」を上下に誤ったものとする。「さかの女郎」を作者とする歌は、古今六帖・三五七五（万葉集・五九七〈旧五九四〉では笠女郎作、夫木抄・一三三三六では家持作）にも一首ある。

一四六八　紅葉ちるあきはきにけりみづとりのあをばの山のいろづく見れば

【異同】紅葉ちる―もみちする（御・桂・大）

【現代語訳】紅葉の散る秋は来たんだなあ。青葉の山が色付いたのを見ると。

【語句】○紅葉ちる　他本では「もみちする」。「する」の方が歌の整合性はある。○みづとりの　「青葉」の枕詞。○あをばの山　青葉の山。若狭の国の歌枕。現京都府舞鶴市と福井県大飯郡高松町とにまたがる山。

【所載】ナシ

【参考】「秋の露はうつしにありけり水鳥の青葉の山の色づく見れば」（万葉集・一五四七〈旧一五四三〉）、「白露はうつしなりける水鳥の青葉の山の色づくみれば」（古今六帖・一六八）、「白露はうつしなりけり水鳥の青葉の山の色づくみれば」（古今六帖・九二一）などの類歌がある。

一四六九　いもこふといねぬあさけにみづとりのこゑよはり行いもがつかひか

【異同】ナシ
【現代語訳】あの娘が恋しくて眠れない明け方、水鳥の鳴声がかすかになっていく。水鳥はあの娘の使いだろうか。
【語句】○あさけ　朝明け。夜の明ける頃。○みづとりの　水鳥の。所載欄の万葉集では「をしどりの」。○こゑよはり行　声弱りゆく。声がかすかになってゆく。「風寒み声弱りゆく虫よりも言はで物思ふ我ぞまされる」（拾遺集・七五一）。所載欄の万葉集では「こゆかくわたる」（「ここを通って渡っていく」の意）、人麿集・夫木抄では「これよりわたる」、和歌童蒙抄では「こゑよびわたる」とあり、「わたる」の方が歌の整合性はある。
【所載】万葉集・二四九六（旧二四九一）妹恋　不寐朝明　男為鳥　従是此度　妹使　イモコフトイネヌアサケニヲシドリノココニワタルハ（コレヨリワタル）イモガツカヒカ　いもにこひいねぬあさけにをしどりのこゆかくわたるいもがつかひか／夫木抄・八〇二二／人麿集Ⅲ・五三二／和歌童蒙抄・七五九

大女らうのこ

一四七〇　水とりのうかぶこのいけのこのはおちてうける心をわがおもはなくに

【異同】底本ハ行間ニ作者名小字補入。
【現代語訳】水鳥の浮かぶこの池の木の葉が落ちて（池水に）浮いている。浮いた気持ちは私にはありませんのに。
【語句】○大女らうのこ　伝未詳。参考欄参照。○水とりの　水鳥の。所載欄の万葉集では「鴨鳥の」。○うける心を　浮いた気持ちを。上三句は「うける」の序詞。「うけ」に「（木の葉が）浮く」と「（心が）落ち着かない」意を掛ける。「水鳥の浮きて心はまどふかなみやぢの池に年は経ぬれど」（夫木抄・一〇八四一）。
【所載】万葉集・七一四（旧七一一）鴨鳥之　遊此池尓　木葉落而　浮心　吾不念国　カモトリノアソブコノイケニコノハオチテウカベルココロワガオモハナクニ　かもとりのあそぶこのいけにこのはおちてうきたるこころわがおもはなくに
【参考】作者名「大女らうのこ」とあるが、所載欄の万葉集では作者は「丹波大女娘子」で、「丹波」は氏とも国名とも考えられる。夫木抄・一〇七四五番には「鴨鳥のはなちの池に木の葉散ればうとき心をわれ思はなくに」（よみ人知らず）という類歌がある。

〔以上五首担当　三浦狭依〕

たゞふさ

一四七一　水とりのはかなきあとにとしをへてかよふばかりのえにこそ有けれ

【異同】ナシ
【現代語訳】水鳥の泳いだ跡がはかなく消える、それと同じように、何年たっても、効のない手紙が通うだけのご縁だったのですねえ。
【語句】○水とりの　一四六七番歌参照。「水鳥」は鴨、鴛鴦、雁など水辺に棲息する鳥の総称。主に鴨、鴛鴦をいう。「水鳥の」は、「はかなき跡」にかかる枕詞ともみなされる。○はかなきあと　はかなき跡。蒼頡制字の故事により、鳥の足跡は筆跡、手紙に喩えられる。例えば、「返ごとせざりける女の文をからうじて得て」という詞書とともに見える「跡見れば心なぐさの浜千鳥今は声こそ聞かまほしけれ」（後撰集・六三五）等の例がある。当該歌では、水鳥が水面を泳いだ跡のはかなく消える波紋の意に、はかない筆跡、すなわち効のない手紙の意を重ねる。○えにこそ有りけれ　「えに」は、「江に」に「縁に」を掛ける。「に」は、断定の助動詞「なり」の連用形。「縁に」の「縁」は、「えん」の撥音の無表記。「秋かけて言ひしながらもあらなくに木の葉降りしくえにこそありけれ」（伊勢物語・第九十六段・一七一）。
【所載】後撰集・恋四・八三六／奥儀抄・三〇九／袖中抄・一八一／和歌色葉・三二九
【参考】作者名は「たゞふさ」とあるが、所載欄の後撰集では、「ただ文かはすばかりにて、年経侍りける人につかはしける」という詞書とともに「よみ人知らず」として入集する。さらに当該歌に対する「返し」として、「浪の上に跡やは見ゆる水鳥のうきて経ぬらん年は数かは」（八三七・よみ人知らず）という歌が収載されている。「跡」「江」は、「水鳥」の縁語。

一四七二　みづとりのおのがうかべるこゝろもてふちをもせとやおもひなすらむ

【異同】ナシ
【現代語訳】水鳥が、自分が水に浮かんでいる心持ちによって、深い淵をも浅い瀬だと思いこんでいるのだろうか。あの人も、自分の浮気な心から、私が深く思っているのに、その思いが浅いと思いなしているのだろうか。

【語句】○うかべるこゝろ　「うかべる」は、水鳥が水の上に浮かんでいる意と、心が浮ついている意とを重ねる。「にほ鳥の常に浮かべる心には音をだに高く鳴かずもあらなん」（うつほ物語・二六六）。○ふちをもせとやおもひなすらむ　深い淵をも浅い瀬だと思いこんでいるのだろうか。「淵瀬とも心も知らず涙河おりやたつべき袖の濡るるに」（後撰集・六一一）という例のように、「淵」を思いが深いことに、「瀬」を思いが浅いことに喩え、私の思いが深いことがわかっているのに、しいて浅いと思いなしているのだろうかと、相手の心中を推量している。
【所載】ナシ
【参考】「うかべる」「淵」「瀬」は、「水鳥」の縁語。

一四七三　風ふけばよどをむつぶる水とりのうきねをのみやわがねわたらん

【異同】ナシ
【現代語訳】風が吹くと淀を慕う水鳥の浮き寝、私もつらい憂き寝ばかりを続けるのだろうか。［第二句と第五句に疑問があるので完全な訳を示すことができない。］
【語句】○よどをむつぶる　未詳。「むつぶ」は、親しくする、仲良くするの意。風が吹いて波が荒くなると、水の流れが淀んでいるような所を慕って其処に逃れるということか。所載欄の夫木抄では、「よどをもとむる」。○うきね　水鳥が水の上に浮かんで寝る意の「浮き寝」に、恋のつらさゆえの「憂き寝」を掛け、三句目までは「うきね」を導く序。「水鳥の鴨のうき寝のうきながら浪の枕に幾夜経ぬらむ」（新古今集・六五三）。○わがねわたらん　他に用例が見当たらないが、「我が寝渡らん」か。私は憂き寝を続けるのだろうか、の意か。所載欄の夫木抄では、「われなげくらん」。
【所載】夫木抄・七〇三六／和歌童蒙抄・七五八

一四七四　人ごとのしげみはさればみづとりのかものうきねのやすけくもなし

【異同】ナシ
【現代語訳】人の噂のうるささは本当にやっかいなので、それをはばかっての一人の「憂き寝」は、安らかではいられない。水に浮く「鴨の浮き寝」が安らかではいられないように。

【語句】○人ごとのしげみ　「人ごと」は他人の言葉、人の噂。「しげみ」はうるさくて、やかましくて。「人言をしげみこちたみ己が世にいまだ渡らぬ朝川渡る」（万葉集・一一六〈旧一一六〉）。○されば　然れば。そうだから。それ故に。第二句は本文不審。○みづとりの　「鴨」にかかる枕詞。○うきねのやすけくもなし　「うきね」については一四七三番歌参照。「やすけくもなし」は、「やすし」のク語法「やすけく」（安らかなこと）を打ち消し、安らかでない意。鴨の「浮き寝」は安らかではいられない意に、人の噂をはばかって恋しい人にも逢えず一人で寝るつらい「憂き寝」は安らかではない意を掛ける。

【所載】ナシ

【参考】万葉集の「我妹子に恋ふれにかあらむ沖に住む鴨の浮き寝の安けくもなし」（二八一七〈旧二八〇六〉）、古今六帖の「わぎもこが恋ふるにやあらん沖にすむ鴨の浮き寝の安けくもなし」（一四九五）と下句が同じである。

一四七五　はねのうへの霜うちはらふ人もなしをしのひとりねけさぞかなしき

【異同】をしのひとりね―おしのひひとりね（御）

【現代語訳】羽の上の霜を払ってくれる人もいない。まるで鴛の独り寝のように、私も独り寝をした今朝は悲しいことだ。

【語句】◎おし　をし。ガンカモ科の水鳥、鴛鴦のこと。雌雄が常に離れることなく夫婦仲の良い鳥とされ、それだけに、鴛の独り寝は特に切ないものとなる。「雌雄未嘗相離」（倭名類聚抄）、「水鳥、鴛鴦（をし）いとあはれなり。かたみにゐかはりて、羽の上の霜はらふらむほどなど。」（枕草子「鳥は」）、「さむしろに思ひこそやれ笹の葉にさゆる霜夜の鴛鴦の独り寝」（金葉集二度本・二九八）。○はねのうへの霜うちはらふ人もなし　羽の上に置いた霜を払ってくれる人もいない。「葦辺行く鴨の羽がひに霜降りて寒き夕は大和し思ほゆ」（万葉集・六四〈旧六四〉）や「……鴨すらも　妻とたぐひて　我が尾には　霜な降りそと　白たへの　羽さし交へて　打ち払ひ　さ寝とふものを……ひとりかも寝む」（万葉集・三六四七〈旧三六二五〉）のように、古来、寒い夜に鳥が羽の上に置いた霜を妻と互いに払い合うことや、それにひきかえ霜を払い合う妻のいない独り寝の寂しさが詠まれている。

【所載】和歌童蒙抄・七六一

〔以上五首担当　長戸〕

一四七六　冬の夜をねざめてきけばをしぞなくはらひもあ|へず霜やをくらん

【異同】ナシ
【現代語訳】古今六帖・第一帖「しも月」二一四番既出。

一四七七　いけにすむなをゝしどりの水をあさみかくるとすれどあらはれにけり

【異同】ナシ
【現代語訳】池に住んでいて、浮き名が流れるのを惜しむという名を持つおしどりは、水が浅いので、隠れようとするけれど、その仲の良さが人目についてしまっている。そのように、私も名を惜しみ、隠れて人目につかないようにと思っていたけれども、やはり知られてしまったことです。
【語句】○な　名。世間の評判のこと。○をし　名を「惜し」と「鴛鴦（をしどり）」の掛詞。おしどりは番いの仲が良いことで有名。名を惜しむのであれば、目立たぬようにするはずが、いつも仲良く番いでいて隠れようがないという矛盾をあげる。「名」と「をし」の組み合わせは非常によく詠まれた。○水をあさみ　水が浅いので。「……を＋形容詞語幹＋み」の形。○かくるとすれど　隠れようとするけれど。おしどりが「名を惜しむ」との名を持ちながら、その姿をよく見られていることに自分たちの仲が、人目を忍んでいるつもりでも、露見してしまっていることを、重ねている。
【所載】古今集・恋三・六七二

一四七八　をし鳥のかはべにひとりなく（すむイ）よしもみぎはのなべてさえまさるらむ

【異同】ナシ
【現代語訳】（いつも番いでいるという）おしどりが川辺で一羽鳴いている夜にかぎって、汀のあたり一帯の寒さがいっそう厳しくなっていることだろう。
【語句】○よしも　夜しも。「しも」は強調。「霜」を響かせる。○みぎは　水際。水のほとり。○なべて　すべ

て。○さえまさるらむ　「さえまさる」は寒さや冷たさが一層厳しくなること。「笹の葉におく霜よりもひとりぬるわが衣手ぞさえまさりける」（古今集・五六三）。
【所載】ナシ

一四七九　きみが名もわがなもをしのひとつがひおなじえにこそすまゝほしけれ

【異同】ナシ
【現代語訳】あなたの名も私の名も噂になるのは残念ですね。いっそおしどりのひと番いが同じ入江に住むように、一緒に住みたいものです。
【語句】○きみが名もわがなも　あなたの名も私の名も。「名」は世間の噂、評判の意。「をし」（惜し）に掛かる。一四七七番歌参照。「君が名もわが名も立てじ難波なるみつとも言ふなあひきとも言はじ」（古今集・六四九）など、よく用いられた表現。○をし　「惜し」と「鴛鴦（をし）」の掛詞。「惜し」は人の噂になるのが残念、不本意だ、の意。○え　江。海や湖の入江のこと。「縁」をひびかせるか。
【所載】ナシ

一四八〇　しろたへのなみふみちらすをし鳥のはかなきあとを（と）人やまちみむ

【異同】ナシ
【現代語訳】白い波を踏み散らすおしどりの足跡のように、頼りない鳥の跡である文を散らしてもいいような頼りないものと思って、あの人は待っているのだろうか。
【語句】○ふみちらす　「踏み散らす」に「文散らす」を掛ける。鳥は花を踏み散らすとする例（「うぐひすの花ふみちらすこのもとはいたく雪ふる春べなりけり」万代集・四二二）が多いが、ここでは波を散らす。また、文を散らすとは、恋文を他人に見せて恋仲であることを露見させることで、源氏物語・帚木巻雨夜の品定め冒頭部分に大切な恋文は厳重にしまい、気楽な関係の文は頭中将に見られても構わない光源氏の描写がある。○をし鳥のはかなきあと　おしどりの頼りない足跡。「鳥のあと」は八雲御抄に「書　たまづさ（中略）鳥の跡とも。」とするように、文・筆跡のこと。○人やまちみむ　人は待って会おうとするだろうか、しない。「人」は相手の女性。「や」は疑問の意を含む反語。自分の思いは軽いものではないと強調する歌。

【所載】ナシ

〔以上五首担当　杉本まゆ子〕

一四八一　しもこほり心もとけぬ冬のいけによふけてぞなくをしの一声

よしもち

【異同】ナシ
【現代語訳】霜が凍り固く解けぬ冬の池に、夜更けて鳴く一羽の鴛鴦の一声。恋人の心も打ち解けず、独り夜更けに、それを切なく聞くことだ。
【語句】○しもこほり　「霜と氷」ではなく、霜が凍り。「……さむく目ごとになりゆけば　玉の緒とけてこきちらし　あられ乱れて霜凍り　いやかたまれる　庭のおもに……」（古今集・一〇〇五）。○心もとけぬ　凍った霜も解けず、人の心も打ち解けず、の意。○をしの一声　鴛鴦は番いで過ごすのが尋常だが、一羽のみのわびしさに鳴く一声。
【所載】新古今集・恋一・一〇五九／元真集・一六四
【参考】作者名「よしもち」とあるが、所載欄の文献では「元真」の作。

一四八二　うかぶともしづむともなきみなそこになをゝしどりのそこにとぞ思ふ

つらゆき

【異同】なをゝしとりの―猶鴛とりの（大）
【現代語訳】水底に浮かぶでも沈むでもない鴛鴦、恋の浮名の立つことは避けたいけれど、私の思いは其処に、と思っております。
【語句】○うかぶともしづむともなき　鴛鴦の動きを「水面に浮く」と、「下に沈む」の両方で表した。○みなそこに　水底に。第五句の、相手を指す「其処」を導く働きをするか。○なをゝしどりの　「名を惜し（む）」の動詞の一部「をし」に、「をしどり」の「をし」を掛ける。大久保本の書写は副詞「なほ」と解し、漢字「猶」をあてたものであろう。○そこにとぞ思ふ　相手を指す「其処（そこ）」であれば、（私の心は）あなたに、と思うの意。傍記の「ともにとぞ思ふ」であれば、あなたも私とおなじ思いであってほしい、と思うの意。

【所載】貫之集Ⅰ・六七一
【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

かも

一四八三　すにぬ(ねイ)ればいさごのいけにまがふとりてにとるばかりなり(れイ)にけるかな　つらゆき

【異同】ナシ
【現代語訳】砂洲にじっとしていると砂の色に見間違える鳥、手に取れるほど人に馴れたことよ。
【語句】◎かも　鴨。川、池に遊ぶ水鳥の一種。雌雄で羽の色が異なる。雄のほうが羽は美しい。万葉集以来の歌材。霜、氷の冷たさに鳴く鴨や鴨の羽色の美しさを詠むほか、番いの鴨を羨望し、独り寝のわびしさを詠むものなどがある。古今六帖では「かもめ」を含む。○すにぬれば　洲に寝れば。砂洲に羽を休めている状態。所載欄の躬恒集では、初句「すにをれは」。○いさごのいけにまがふとり　所載欄の躬恒集では「いさこのいろにまかふとり」。「いけ」は誤写と見て、「いろ」で解釈した。白砂と見まがう白い鳥。白い鴎。○なりにけるかな　傍記の「なれにけるかな」で解釈する。「鴎が人に馴れる」とは『列子』黄帝篇にある海辺に住む男の話をふまえる。参考欄参照。
【所載】躬恒集Ⅰ・四七／躬恒集Ⅲ・二〇八／躬恒集Ⅳ・二三、四一一／躬恒集Ⅴ・六八
【参考】『列子』にある男と鴎の話とは、海辺に住む男が毎朝鴎と遊びたわむれていたが、ある日父親に「ひとつお前鴎をつかまえてきてくれないか」と所望され、翌朝海辺に行くと鴎は上を舞うばかりで一羽もおりてこなかった、というものである。言動という常識を越えた感応をいったものとされる。
　作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致しない。躬恒集によれば 亭子院大井川行幸和歌の一つであり「かもめなれたり」の詞書のある二首のうちの一つ。古今六帖がこの歌を「かも」の項目に含むのは、「かもめ」も「かも」の同類としたからしい。

一四八四　しらなみのうてどもたゝずむれゐつつ人にとほかもめなれたるとり　みつね

【異同】めなれたるとり―めめれたるとり（桂）
【現代語訳】白波が打っても飛び立たず、群れ集まっている「人にとほかも」人に馴れた鳥。［第四句が意味不明なので、完全な訳が示せない。］
【語句】○うてどもたゝず　白波が体を打っても飛び立たず、の意。○むれゐつつ　群れ居つつ。幾羽も集まっている。○人にとほかも　不明。「遠かも」か。所載欄の忠岑集Ⅲ・Ⅳでは「人になつかん」とある。○めなれたるとり　目慣れたる鳥。所載欄の忠岑集では「めなれたる」ではなく「みなれたる」。人に馴れた鳥。一四八三番歌の参考欄参照。
【所載】忠岑集Ⅱ・一二四／忠岑集Ⅲ・一〇四／忠岑集Ⅳ・八九
【参考】作者名「みつね」は所載欄の文献に一致しない。忠岑集Ⅲによれば大井川行幸和歌であった。第四句から第五句へうつる部分に、「かもめ」を物名としており込んでいるようにも見える。

一四八五　なれてこしおきのかもめはつげなくにのちのこゝろをいかでしりけむ

【異同】ナシ
【現代語訳】人に馴れてやってきた沖のかもめは、こちらが何も告げていないのに、今日という日が重陽の節句の後宴の日だと、どうやって知ったのだろうか。
【語句】○なれてこし　馴れて（こちらへ）やってきた。この歌は与えられた題「鴎馴人」に基く。一四八三番歌の参考欄参照。○のちのこゝろ　普通は「恋人たちが会った夜の後朝の心」の意。だが、ここでは延喜七（九〇七）年九月九日の重陽節の翌日の後宴のこと。宇多法皇が文人、歌人を召し、詩歌を詠ませた晴れやかな日であった。○いかでしりけむ　かもめが人を恐れずやってきたことを、このめでたき日をどうして知ったのかと表現した。宇多法皇を讃える心を背景に、鴎が馴れて近寄ることを歌う。菅家文草二に「人は鳥の意を知り、鳥は人を知る」（「春日於相国客亭、見鴎鳥戯前池有感、賦詩」〈春の日に相国が客亭に於いて、鴎鳥が前の池に戯るるを見て感あり、詩を賦す〉）とあるのをふまえる。これは大臣藤原基経の邸の池に鴎の遊ぶのを見て、その邸の主を讃えたものである。
【所載】躬恒集Ⅰ・四六／躬恒集Ⅲ・二〇七／躬恒集Ⅳ・二二／躬恒集Ⅴ・六七
【参考】所載欄の躬恒集には「かもめなれたり」という題を有する。「大井川行幸和歌」と呼ばれたこのみゆきに歌人として召されたのは貫之・躬恒・是則・忠岑・伊衡・頼基であった。古今六帖の一四八三からここまで

の三首はいずれも「大井川行幸和歌」として詠まれたものである。

〔以上五首担当　平野由紀子〕

一四八六　冬の夜のかものうはげにをくしものきえて物思ふころにもあるかな

【異同】ナシ
【現代語訳】冬の夜の鴨の上毛に置いた霜が消える、消えいるほどにもの思うこの頃であるよ。
【語句】○冬の夜の　所載欄の後撰集には「冬の池の」、興風集Ⅰ・Ⅱには「うきてぬる」とある。○かものうはげにをくしもの　鴨の上毛に置（お）く霜の。「うはげ」は表面の羽毛。ここまでの上三句は、「きえて」を導く序詞。○きえて物思ふ　霜や雪など消えるものをあげて、そのように消えて（死んで）しまいそうに、恋に思い悩むことをいう表現。「空に知る人はあらじな白雪の消えてもの思ふわが心とは」（古今六帖・六九五）。
【所載】後撰集・冬・四六〇／興風集Ⅰ・四八／興風集Ⅱ・五〇
【参考】当該歌と下句が同じ歌に、「かきくらしふる白雪のした消えに消えてもの思ふころにもあるかな」（古今集・恋二・五六六）がある。

一四八七　ねにたてゝよるはわぶてふうきかものわがみがくれにとひもきなゝむ

【異同】わかみかくれに―みかくれに（大）
【現代語訳】声に出して夜はつらがって鳴くという水の上に浮いている鴨、憂き我が身も同じ、どうか籠もっている私のもとに訪ねて来て欲しい。
【語句】○ねにたてゝ　音に立てて。声に出して。所載欄の夫木抄「音になきて」。○よるはわぶてふ　「わぶ」は、思うようにいかず嘆く、つらく思う、の意。「てふ」は「といふ」の縮まった表現。「まこも刈る掘江にうきてぬる鴨の今夜の霜にいかにわぶらん」（古今六帖・六七七）。○うきかも　鴨が水面に浮く意の「浮き」に、人事の「憂き」を掛ける。「みくさゐる入江になるるうき鴨のやすからぬ世は思ひ知りにき」（新撰六帖・九三六）。○わがみがくれに　「我が身」に「みがくれ（水隠れ）」を掛ける。「みがくれ」は、動詞・下二段「みがくる」（水中に隠れる）の名詞形で、鴨が水面下に隠れる意に、自分が籠もっている家を掛ける。「けふはかく引きけるものをあやめ草わがみがくれに濡れわたりつつ」（紫式部集Ⅰ・六四、Ⅱ・六〇）。○とひもきなゝむ

訪ひも来ななむ。「ななむ」は、完了の助動詞「ぬ」の未然形に願望の意の終助詞「なむ」が付いたかたち。
【所載】夫木抄・七〇一二

一四八八　なにはめのみづくきかよふあしがものしたにかよひてあはれとぞ思

【異同】みつくきかよふ―みつうきかよふ（御・桂・大）
【現代語訳】難波女が手紙を通わせる。人知れず心の中では思いを通わせて、いとしいと思うことだ。
【語句】○なにはめのみづくきかよふあしがもの　「なにはめ」は、既出七八六番歌参照、難波の海女のこと。「水茎かよふ」は手紙が交換される意で、「みづくき」（手紙）に「難波」の縁で「御津（みつ）」が掛けられているか。「あしがもの」は、目にみえない水面下で葦鴨が足をしきりに動かしていることから、「下」を導く。○したにかよひて　心のなかでは思いを通わせて。「言に出でて言はぬばかりぞみなせ川したに通ひて恋しきものを」（古今集・六〇七）。○あはれとぞ思　しみじみと愛しいと思う。
【所載】ナシ

一四八九　あしがものさはぐいりえのしらなみのしらずや人をかく恋んとは

【異同】ナシ
【現代語訳】葦鴨が騒いでいる入江に立つ白波、知らないのでしょうか、あの人を私がこんなにも恋い慕っているであろうとは。
【語句】○あしがものさはぐいりえのしらなみの　葦鴨の騒（さわ）ぐ入江の白波の。沢山の鴨が羽をばたつかせて立てている入江の白波の。上句は、「白波の知らず」と同音を重ねた序詞。「あしがものさわぐ入江の水の江のよにすみがたき我が身なりけり」（新古今集・一七〇七・人麿）。○しらずや　知らないのであろうか。「や」は疑問の意で、結びは省略。「人をかく恋ひむとは知らずや」の倒置法。○人をかく恋んとは　「人」は恋の相手。「恋ん（こひむ）」の「ん（む）」は推量。「かく恋ひむものと知りせばゆふへおきてあしたはけぬる露ならましものを」（万葉集・三〇五一〈旧三〇三八〉）。
【所載】古今集・恋一・五三三／新撰和歌・二五〇
【参考】人麿集Ⅱに、当該歌に類似した「芦鴨のいりてなくねのしらすげの知らずや妹をかく恋ひんとは」（五

二三）がある。

一四九〇　あし辺ゆくかもの羽をとのをとにのみきゝつゝ人を見でやゝみなむ

【異同】ナシ
【現代語訳】葦の生えているあたりをゆく鴨の羽音、そのように音（噂）に聞くばかりで、あの人に直接に逢えずに、この恋は終わってしまうのだろうか。
【語句】○あし辺ゆくかもの羽をとの　葦辺ゆく鴨の羽音（おと）の。初・二句は、「音にのみ」を導く序詞。○をとにのみきゝつゝ　音にのみ聞きつつ。噂に聞くばかりで。○見でやゝみなむ　逢わずに終わってしまうのだろうか。「で」は打消の意の接続助詞。「奥山の峯を飛びこし初雁のはつかにだにも見でややみなむ」（躬恒集Ⅰ・三二〇）。
【所載】ナシ
【参考】当該歌は、万葉集の「あしへゆく鴨の羽音の音にのみ聞きつつもとな恋ひわたるかも」（三一〇四〈旧三〇九〇〉）とは、「もとな恋ひわたるかも」の箇所だけ異にする。

〔以上五首担当　斎藤熙子・加藤静子〕

一四九一　よしのなるなつみの河のかはよどにかもぞなくなる山かげにして　ゆはらのおほきみ

【異同】ナシ
【現代語訳】吉野にある夏実川の淀で鴨が鳴いているようだ。ちょうどあの山陰にあって。
【語句】○なつみの河　夏実川。大和国の歌枕。奈良県吉野郡吉野町菜摘付近の地（吉野離宮のあった宮滝のすぐ東）を流れる吉野川の呼び名。○かはよど　川の水の流れが緩く、淀んでいるところ。○かもぞなくなる　鴨ぞ鳴くなる。「なる」は伝聞推定「なり」の連体形。上の係助詞「ぞ」を承ける。鳴いている声を聞いて鴨だと推定している。○山かげにして　山陰で。「山かげ（山陰）」は、山に隠れて見えない部分。ここは川沿いの山の陰。鴨が鳴いている場所を特定しつつ、鳴き声だけで目には見えないことを示す。
【所載】新古今集・冬・六五四／万葉集・三七八（旧三七五）吉野尓有　夏実之河乃　川余杼尓　鴨曽鳴成

山影尓之弖　ヨシノナルナツミノカハノカハヨドニカモゾナクナルヤマカゲニシテ　よしのにあるなつみのかはのかはよどにかもぞなくなるやまかげにして／夫木抄・六九九八

【参考】作者名「ゆはらのおほきみ」は所載欄の文献に一致する。

一四九二　よそにゐて恋つゝあらずはきみがいゐのいけにすむてふかもならましを

大ともの坂上のらう女

【異同】よそにゐて―よそにつゝ（御・桂・大）　恋つゝあらすは―こひつゝあはすは（御・桂・大）

【現代語訳】離れたまま恋い続けていないで、いっそのことあなたの家の池に住むという鴨になればよかったものを。

【語句】○よそにゐて　「よそ」は他の所、遠く離れた所。「よそに居て恋ふれば苦し我妹子を継ぎて相見む事計りせよ」（万葉集・七五九〈旧七五六〉）。○恋つゝあらずは　恋い続けておらずに。「ずは」は、打消の助動詞「ず」の連用形＋係助詞「は」。……ないで。多く「……ましを」「……ましものを」といった仮想表現と呼応して、「……なんかしていないで、いっそのこと……であった方がましだ。」の意となる。「かくばかり恋ひつつあらずは高山の磐根しまきて死なましものを」（万葉集・八六〈旧八六〉）。○かもならましを　鴨であればよかったのに。「まし」は反実仮想。「かく恋ひむものと知りせば夕置きて朝は消ぬる露ならましを」（万葉集・三〇五二〈旧三〇三八〉）。

【所載】万葉集・七二九（旧七二六）外居而　恋乍不有者　君之家乃　池尓住云　鴨二有益雄　ヨソニヰテコヒツツアラズハキミガイヘノイケニスムトイフカモニアラマシヲ　よそにゐてこひつつあらずはきみがいへのいけにすむといふかもにあらましを

【参考】作者名「大ともの坂上のらう女」は所載欄の文献に一致する。

一四九三　いのりくるかもとおもふをあやなくにかもめさへたゞなみて見ゆらん

つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】［第二句は土佐日記により「かざまともふを」として解した。］ずっと祈り続けてきた風間だと思

ったのに、あいにくどうして鴎までがただ並んで（立つ波のように）見えるのだろう。
【語句】○いのりくる　祈りくる。ずっと祈り続ける。「祈りくる神ぞと思へば玉鉾の道の遠さも知られざりけり」（貫之集・四六一）。○かもとおもふを　「鴨と思ふを」か。諸本に異同はないが、上句の「いのりくる」と意味的に繋がらない。題が「かも」なので「かも」とした可能性はあるが、本来この第二句は、所載欄にある土佐日記の「かざまともふを（風間と思ったのに）」であったと思われ、それに拠って訳した。「かざま」は風がやんでいる絶え間。船旅を進めるために風の絶え間が願われるのである。○あやなくも　「あやなし」は、筋が通らない。わけがわからない。○かもめさへたゞなみて見ゆらん　どうして鴎までがただ並んで見えるのだろうか。「なみて」は「並みて」。並んでの意味だが、上句と整合しない。土佐日記は、「なみとみゆらむ」とあり、白い鴎が並んでいるさまを波に見立て、ようやく風がおさまったと思うのに、あいにくと風のせいで波が立っているように見えるとなり、理解しやすいが、ここでは一応本文通り、「なみて」に「なみ」を響かせているとみて「なみて見ゆらん」で訳した。「らむ」は、目に見えている現在の事実について、その原因、理由を疑いながら、推量する意。どうして……なのだろうか。
【所載】土佐日記・四五（二月五日条）
【参考】作者名「つらゆき」とあり、土佐日記に「ある童」の作として載る。

一四九四　しきたへのまくらのしたにわれをなせかものうきねはくるしかりけり

【異同】まくらのしたに―まくらにたにも（御・桂・大）
【現代語訳】いっそ枕の下に私を置いてください。鴨が水の上で浮き寝をするような、孤独な憂き寝はつらくてたまらないのです。
【語句】○しきたへの　枕詞。「敷栲」が寝具として敷く布であることから、「床」「枕」「手枕」に掛かる。○まくらのしたにわれをなせ　私を枕の下にしてください。恋の苦しみに流す涙で、枕の下が海や川となって、枕が浮いてしまうという例歌として「しきたへの枕の下に海はあれど人を見るめは生ひずぞ有りける」（古今集・五九五）、「涙河水まさればやしきたへの枕の浮きてとまらざるらん」（拾遺集・一二五八）などがある。「なせ」という命令形の例は珍しいが、枕の下にいれば、不安定な浮き寝（つらい憂き寝）をしなくてよいという趣向。○かものうきね　鴨の浮き寝。「うきね」は鴨が水に浮かんだまま寝る「浮き寝」に、つらい一人寝「憂き寝」を掛ける。「枕」と「憂き寝」の両方をもつ歌の例は、「敷栲の枕ゆくくる涙にぞ浮寝をしける恋の繁き

に」（万葉集・五一〇〈旧五〇七〉／古今六帖・三二三二）、「枕」と「鴨のうき寝」は、「水鳥の鴨のうき寝のうきながら浪の枕に幾夜へぬらむ」（新古今集・六五三）がある。一四九五番歌参照。
【所載】ナシ

一四九五　わぎもこが恋ふるにやあらんおきにすむかものうきねのやすけくもなし

【異同】ナシ
【現代語訳】妻が私を恋しく思っているのだろうか。沖に住む鴨がゆらゆらと落ち着かぬ浮き寝をするように、安らかに眠ることもできない。
【語句】○わぎもこが恋ふるにやあらん　私の妻が恋しく思っているのだろうか。「わぎもこ」は男性から妻、恋人など親しく思う女性を指していう語。所載欄の万葉集では、「我妹子に恋ふれにかあらむ」と、妻を思う男の一人寝の苦しみを詠んだ歌であるが、当該歌は逆に、妻が恋うために、夫が安らかに眠れない意となり、夫を思う妻が、夫の夢、面影に立つことを詠んでいることになる。○かものうきねのやすけくもなし　鴨の浮き寝のように安眠することもできない。「浮き寝」に「憂き寝」を響かせる。鴨は浮きながら寝るので、絶えず波に揺られて落ち着かず、安らかに眠ることができない、そのように男も安らかに眠れない。「かものうきね（鴨の浮き寝）」は、一四九四番歌参照。「やすけくもなし」は、「やすし」のク語法「やすけく」（やすらかなこと）を打ち消し、やすらかでない意。
【所載】万葉集・二八一七（旧二八〇六）吾妹児尓　恋尓可有牟　奥尓住　鴨之浮宿之　安雲無　ワギモコニコフルニカアラムオキニスムカモノウキネノヤスケクモナシ　わぎもこにこふれにかあらむおきにすむかものうきねのやすけくもなき

〔以上五首担当　中野方子〕

一四九六　さいたづまおおさきのいけにかもぞはねきるをのがをにふるをける霜はらふとにあらしィ

【異同】さいたつま―さいたまの（御・桂・大）　かもそはねきる（にイ）―かもそはきる（御・大）　ふるをける霜はらふ―ふるをける（大）
【現代語訳】埼玉の小埼の池で鴨が羽をばたつかせしぶきをあげている。自分の尾に降り置いた霜を払うとい

うのであろう。[傍記や所載欄の「とにあらし」で現代語訳した。]

【語句】○さいたづま　底本「さいたづま」は、植物のイタドリ（虎杖）、もしくは春の若草を意味し、下に続かない。よって、他本「さいたまの」や所載欄「さきたまの」で解した。和名類聚抄「埼玉郡」に「佐伊太未」とある。○おさきのいけ　をさきのいけ。小埼の池。所載欄の万葉集新訓「をさきのぬま」、夫木抄に「池」「沼」の両方が見える。「小埼の沼」は、現在の埼玉県行田市埼玉あたりに比定され、かつては大きな沼が広がっていたらしいが（『日本歴史地名大系11　埼玉県』平凡社、一九九三年）、現在は水も涸れ池も沼もない。○かもぞはねきる　鴨が羽をばたつかせて水しぶきをあげる。「きる」は他動詞「霧る」。ここは水しぶきが立って霧のようにけぶって見えるさまの形容。○をのがをにふるをける　己（おの）が尾（を）に降る置（お）ける。所載欄の文献「……ふりおける」に拠り、自分の尾羽に降り置いている、の意で解した。○霜はらふとにあらしイ　「霜はらふ」は、羽についた霜を振り払う、意。「とにあらし」は、「と」が引用を示す格助詞、「に」が断定の助動詞「なり」の連用形、「あらし」が「あるらし」の約。所載欄の文献は「とにあらし」まであり、旋頭歌である。

【所載】万葉集・一七四八（旧一七四四）前玉之　小埼乃沼尓　鴨曽翼霧　己尾尓　零置流霜乎　掃等尓有斯　サキタマノヲサキノイケニカモゾハネキルオノガミニフリオケルシモヲハラフトニアラシ　さきたまのをさきのぬまにかもぞはねきるおのがをにふりおけるしもをはらふとにあらし／夫木抄・一〇七六一、一一三九二

にほ

一四九七　にほどりのしたやすからぬおもひにはあたりのみづも氷らざりけれ

【異同】氷らさりけれ―こほらさりけり（御・桂・大）

【現代語訳】鳰鳥が表面には見えぬが水面下で休みなく足を動かしている。あらわれぬ思いの火はあつくあたりの水も氷らないのだった。

【語句】◎にほ　「鳰鳥（にほどり）」とも詠まれる。水鳥の一種、カイツブリ。「鳰」は和製漢字で、水に入る鳥の意の会意文字。足を櫂のように使って潜水して泳ぐ。池や湖沼、流れの穏やかな川に生息する。その習性に関わって、「潜（かづ）く」と続いたり、並んで泳ぐことから、「なづさふ」「二人」「つれ」などの語を伴うことがある。池の氷とともに詠まれたり、水や氷の下をひそかに通う、誰にも知られずに思うなど、恋の歌にも詠まれる。○にほどりの　「下」を導く。「にほどりの下こぐ波し立たぬかな池の氷やあつくなるらん」（長

能集・一九八)。○したやすからぬ思　「した」は表面に対する見えない部分のこと。ここは、水の「下」と「下やすからぬ」の掛詞で、鳰鳥が水面下で足を絶えず動かしていることと、ひそかな恋ゆえに心おだやかならざる思いにあることの両意がある。「思ひ」に「火」を響かせる。○氷らざりけれ　第五句の末は、他本のように「……ざりけり」とあるのがよい。

【所載】拾遺抄・冬・一四五／拾遺集・冬・二二七／六百番陳状・三六

一四九八　霜のうへにとびかふかものはかぜにはひとりあるひとのいもねかねつる

【異同】ナシ

【現代語訳】霜の上で飛び交っている鳰鳥の羽風には、独りいる身がいっそう冷え冷えとし、寝つくこともできない。

【語句】○とびかふかものはかぜ　飛び交ふ鴨の羽風。小題が「にほ」なので、本行の「鴨」は不審。傍記や所載欄の夫木抄「にほ」に拠って解した。「羽風」は、鶯・ほととぎす・鴛鴦などによく詠まれる。鳰鳥の羽風を詠んだまれな例として、「にほどりの羽風に波のおとせぬは池のこほりのひまやなからむ」(六条斎院歌合永承四年十二月・九)がある。○ひとりあるひと　床のかたわらに恋しい人がいない人、自身を指す。「秋萩のしたば色づく今よりやひとりある人のいねがてにする」(古今集・二二〇)。○いもねかねつる　寝も寝かねつる。寝ようとしても寝つけない、の意。寒夜に水鳥の飛び交う気配、独り寝の冷気は増してますます寝つくことはできない。霜夜の恋の心情。

【所載】夫木抄・一二八二四

一四九九　にほ鳥のおきなががはゝたえぬともきみにかたらふことつきめやは

【異同】おきなかかは—奥中川(大)　きみにかたらふ—きみにかたらぬ(御)

【現代語訳】息長川の流れがもし絶えたとしても、あなたと親しく語りあう言葉は尽きようか、尽きることはない。

【語句】○にほ鳥のおきなががは　「にほ鳥の」は、鳰鳥が長く水中に潜ることができることから、「息長(おきなが)」にかかる枕詞。「にほ鳥」は水鳥のカイツブリの古名。「おき」は、上代語で「息(いき)」のことだ

が、単独の例はないという（『古語大辞典』）。「息長川」は、近江国の歌枕。天野川（あまのがわ）の中下流域は古代の豪族息長氏の本拠地で、「息長川」の名称があり、滋賀県坂田郡南部を西流して琵琶湖にそそぐ（『日本歴史地名大系25　滋賀県』平凡社、一九九一年）。○たえぬとも　もし絶えてしまったとしても。「ぬ」は完了の助動詞の終止形、接続助詞「とも」は逆接仮定条件を表す。○かたらふこと　親しくむつまじく語り合う言葉。○つきめやは　「め」は推量の助動詞「む」の已然形。「やは」は反語。尽きることがあろうか、いやない、の意。

【所載】新勅撰集・恋四・九三八／万葉集・四四八二（旧四四五八）尓保杼里乃　於吉奈我河波半　多延奴等母　伎美尓可多良武　己等都奇米也母　ニホドリノオキナガカハハタエヌトモキミニカタラムコトツキメヤモ

にほどりのおきながかははたえぬともきみにかたらむことつきめやも／夫木抄・一一一一八

【参考】所載欄の万葉集によると、聖武上皇・孝謙天皇・光明皇后らが河内国に御幸した折、伎人郷（くれのさと）の馬史国人の家で宴を催したときの、あるじ国人が詠んだ歌で、古歌か新たに作った歌かは未詳の注が見える。

一五〇〇　にほどりのおなじうきねをするときはよぶかきこゑをともにこそきけ（なイ）

【異同】ナシ

【現代語訳】鳰鳥が水に浮いたまま寝る、私も同様に辛い独り寝をするときは、夜深くなく声をともに聞くことです。

【語句】○おなじうきね　「浮寝」は、水鳥が水に浮かんだまま寝ること。「おなじ」とあるのは、自分も「うき（憂き）寝」をする、ということ。「鳰鳥の底のかよひぢいかならんうきねの床も氷りはてつつ」（文保百首・二五五九）。○よぶかきこゑ　夜も深くなってなく声。○ともにこそきけ　「ともに」は、にほどりの鳴く声と自分の泣く声とを一緒に、の意か。「きけ」よりも傍記「なけ」（「鳴け」と「泣け」の両意）の方が解しやすい。

【所載】ナシ

〔以上五首担当　犬養悦子・加藤〕

一五〇一　君が名もわがなもたてじいけにすむにほといふとりのしたにかよはん

【異同】ナシ
【現代語訳】あなたの名もわたしの名も、世間の人の噂にのぼるようなことにはしますまい。池に棲むあの鳰という水鳥が、表面にはそれと見せず水の下でしきりに水をかいているように、わたしもうわべはなにげなくしながら、人に知られぬようにして、あなたのところに通いましょう。
【語句】○君が名もわがなもたてじ　あなたの名もわたしの名も人の噂になるようなことにはすまい。「名立つ」は、その者の名が世間の評判になること。恋にかかわって用いられることが多い。「君が名もわが名も立てじ難波なるみつともいふなあひきとも言はじ」（古今集・六四九）。○いけにすむにほといふとりの　池に棲む鳰といふ鳥の。「したに」を導き出すための措辞。○したにかよはん　下に通はん。人に知られぬようにして、ひそかに通おう。「したに」は、表にあらわれぬように、かくれて、ということ。
【所載】ナシ
【参考】古今六帖・二九七一番歌（古今集・六四九）と、初・二句が同じである。

一五〇二　あふことのなぎさによするにほどりのうきにしづみて物をこそ思へ

【異同】ナシ
【現代語訳】思う人に逢うことのないわたしは、あの渚に寄っている鳰鳥のようなもの。鳰鳥が水に浮き沈みしているように、わが身の憂さにこころが沈みこんで、もの思いをしていることだ。
【語句】○あふことのなぎさ　逢うことの「無き」に「渚」を掛ける。○うきにしづみて　身の憂さにこころが沈みこんで。「浮き」に「憂き」を掛ける。上三句は「うき」を導き出すための序詞。「うき」「しづみ」は「にほどり」の縁語。
【所載】袖中抄・五五六

一五〇三　にほどりのすだくいけみづこゝろあらばきみにわがこひ心しめさね

さかのうへのらう女

【異同】底本ハ行間ニ作者名小字補入。　すたくいけみつ―すさく池水（大）

【現代語訳】鳰鳥の群れ集っている池水よ。もしそなたに心というものがあるならば、どうかあの方に対して、わたくしが恋の思いを抱いているということを知らせておくれ。
【語句】○にほどりのすだくいけみづ　鳰鳥が群れ集っている池水。○こゝろあらば　もし有情のもののような心があるならば。非情の池水に対して言っている。○しめさね　示してくれ。「ね」は希求、誂えを表す助詞。活用語の未然形に付く。
【所載】万葉集・七二八（旧七二五）二宝鳥乃　潜池水　情有者　君尓吾恋　情示左祢　ニホドリノカヅク（スガク）イケミヅココロアラバキミニワガコヒココロシメサネ　にほどりのかづくいけみづこころあらばきみにあがこふるこころしめさね／綺語抄・五九〇
【参考】作者名「さかのうへのらう女」は大伴坂上郎女のこと。所載欄の万葉集に一致する。

一五〇四　はるのいけの玉もにあそぶにほ鳥のあしのいとなき恋もするかな

【異同】ナシ
【現代語訳】春の池の美しい藻に遊んでいる鳰鳥は、脚をいとまなく動かしている。それと同じようにわたしも、思いやむいとまもない恋をすることだなあ。
【語句】○玉もにあそぶ　藻のところで遊んでいる。「玉も」の「玉」は美称。初句から第四句の「あしの」までは、「いとなき」を導き出すための序詞。○いとなき　いとまなき。やすむひまもない。「ひぐらしの声もいとなく聞こゆるは秋ゆふぐれになればなりけり」（後撰集・四二〇）。
【所載】後撰集・春中・七二／和歌童蒙抄・七六八

一五〇五　ひとりのみみつのほりえにすむにほのそこはたえずもこひわたるかな

【異同】ナシ
【現代語訳】ただひとりで御津の堀江に棲んでいる鳰鳥は、表にはそれと見えなくても、水の底ではたえず脚を動かしつづけている。わたしもたったひとりで、心のうちで、たえずあの人のことを恋いつづけていることだよ。
【語句】○みつのほりえ　御津の堀江。「御津」は、官船の出入りのあることを尊んで言った語。近江の大津坂

本の港も「御津」と呼ばれたが、ここは難波の「御津の堀江」であろう。難波の「御津の堀江」は、大和川の氾濫を防ぐ目的で、大阪湾への導水のため六世紀ごろに開削された水路。「津の国の御津の堀江に雨ふればみぎはも見えずまさるわが恋」（伊勢集・三九三）。〇そこはたえずも　心の底ではいつも。水の「底」に心の「底」を掛ける。〇こひわたるかな　ずっと恋いつづけていることだなあ。「こひわたる」は、恋う状態が長く継続しているさま。

【所載】夫木抄・一二八二三

〔以上五首担当　山下道代〕

う

一五〇六　としごとにあゆしはしればさはた川うやつかづけてかはせたづねん（るイ）　やかもち

【異同】かはせたつねん―うはや尋ん（大）

【現代語訳】毎年沢田川では鮎が勢いよく泳ぐので、（今年もその季節がきたから）鵜のやつを潜らせて、川瀬を探り求めよう。

【語句】◎う　鵜は海や海に近い湖に群がって棲み、黒色で嘴が長い水鳥。よく魚を捕るので、古くから鵜飼いに使われた。歌では夏の景物として鵜飼いの情景、篝火の川に映るさまなどがよく詠まれる。〇あゆしはしれば　鮎し走れば。鮎が勢いよく泳ぐので。鮎は美しい姿と芳香で、食用として珍重される。春先に川を遡り、秋は産卵のため川を下る。「し」は強調したり、強く指し示す意の助詞。〇さはた川　沢田川。京都府相楽郡を流れる泉河（木津川）の瓶原（みかのはら）付近の旧称。〇うやつかづけて　鵜のやつを潜らせて。「うやつ」は鵜を親しみをこめて、または卑しめて言う語。

【所載】万葉集・四一八二（旧四一五八）毎年尓　鮎之走婆　左伎多河　鸕八頭可頭気氐　河瀬多頭祢牟　トシノハニアユシハシレバサキタガハウヤツカヅキテカハセタヅネム　としのはにあゆしはしらばさきたがはうやつかづけてかはせたづねむ／夫木抄・一一二一八、一一二二七／和歌童蒙抄・四三七

【参考】作者名「やかもち」とあるが、所載欄の万葉集、夫木抄には作者名なし。和歌童蒙抄は家持とする。

一五〇七　しら河のせをたづねつゝわがせこはうかはたゝせめこゝろなぐさに（さばイ）（らイ）（んイ）

【異同】ナシ
【現代語訳】白川の瀬の魚のいそうな所を探しては、いとしいあなたは鵜飼いをなさったらどうでしょう、心をなぐさめるために。
【語句】○しら河　白川。現在の京都市左京区を流れる川。比叡山と如意ヶ岳に源を発し、北白川から岡崎を流れて、祇園付近で鴨川と合流する。○せこ　女からみて、夫または恋人の呼び名。○うかはたゝせめ　「うかはたつ」は鵜を川に放って、川魚、特に鮎を捕ること。またその設備。「めひ川の速き瀬ごとに簗さしやそともの男は鵜川たちけり」（万葉集・四〇四七〈旧四〇二三〉）。「うかはたゝせめ」は鵜飼いをなさったらどうでしょうの意。「せ」は尊敬の助動詞「す」の未然形、「め」は推量の助動詞「む」の已然形。相手に対して勧誘したり、婉曲に命令したりする意を表す。○こゝろなぐさに　心を慰めるために。
【所載】万葉集・四二一四（旧四一九〇）叙羅河　湍乎尋都追　和我勢故波　宇可波多多佐祢　情奈具左尓　シクラガハセヲタヅネツツワガセコハウカハタタサネココロナグサニ　しくらがはせをたづねつつわがせこはうかはたたさねこころなぐさに／夫木抄・三一七八、一二六七五／和歌童蒙抄・四三八

一五〇八　うかはたちとりさむ（はイ）あゆのしたはたえ（たイ）我にかぎりにおもひしおもへば（あはイ）

【異同】うかはたち―う川たり（大）
【現代語訳】鵜飼いをしてお捕りになる鮎の下鰭は［第二句第三句に意味不明の語句があるので、完全な訳が示せない。］私を限りなく深く思っていてくださるのだから。
【語句】○うかはたち　一五〇七番歌参照。○とりさむあゆの　諸本異同はないが、意味不明なので所載欄万葉集の「とらさむあゆの」によって訳した。お捕りになる鮎の。○したはたえ　「はた」は鰭（ひれ）、「したはた」で臀ひれまたは尾ひれを言うか。「え」は意味不明なので所載欄万葉集の「は」の誤写と考え、「は」で訳した。○かぎりに　想いの限界まで。○おもひしおもへば　心から思うのだから。「し」は強めの意の助詞。万葉集の「思ひし思はば」ならば、歌意はよく通る。
【所載】万葉集・四二一五（旧四一九一）鸕河立　取左牟安由能　之我波多波　吾等尓可伎無気　念之念婆　ウカハタチ（タテ）トラ（トリ）サムアユノシガハタハワレニカキムケオモヒシオモハバ　うかはたちとらさ

むあゆのしがはたはわれにかきむけおもひしおもはば／和歌童蒙抄・四三九

一五〇九　ふるかはのそこのこひぢにありときくかめのこふともしらせてしかな

【異同】ナシ
【現代語訳】布留川の川底の泥の中に棲むと聞いている亀、その亀の劫のように、私は万年もあなたを恋しているとでも知らせたいものだなあ。
【語句】◎かめ　水陸両棲の爬虫類。鶴と共に長寿の動物としてめでたいものとされる。○ふるかは　布留川。大和国の歌枕。奈良県天理市布留の地を流れる川。亀の縁で「古い川」の意を掛ける。○そこ　川底。「其処」を掛ける。○こひぢ　泥（こひぢ）のこと。「恋路」を掛ける。○かめのこふ　亀の劫。「劫」は極めて長い時間のこと。亀は万年のよわいを持つとされる。ここでは「劫」に「恋ふ」を掛けた。「流れては龍田の川の底にすむ亀のこふとも君は頼まむ」（夫木抄・一一〇一九）。○しらせてしかな　知らせたいものよ。「てしかな」は願望を表す終助詞。
【所載】夫木抄・一三〇六六

一五一〇　おほゐ川ゐせきにふせるかめの山のいのちのかぎりあひ見てしかな

【異同】かめの山の―かめ山の（大）
【現代語訳】大井川の堰に臥している亀の山、その名のように命の限り万年も逢っていたいものだ。
【語句】○おほゐ川　大井川。山城国の歌枕。桂川の部分名。川に堰を設けて、流れを調節していたのでその名がある。○かめの山　亀山のこと。山城国の歌枕。京都市右京区嵯峨天龍寺町。大井川の北岸にある山。初句から三句までは「いのちのかぎり」にかかる序詞。○てしかな　一五〇九番歌参照。
【所載】ナシ
【参考】夫木抄・一三〇七一番歌に「久安百首、長歌」として「大井川　よろづ代を経て　棲む亀の　よはひゆづると　むれたりし　あしまのたづの　さしながら」という一首がある。

〔以上五首担当　林マリヤ〕

一五一一　なみ間よりいでくるかめはよろづよとわがおもふことのしるべなりけり　つらゆきィ

【異同】底本ハ行間ニ作者名小字補入。
【現代語訳】波間から出てくる亀は、あなたの齢がいつまでもつづくものと、私が思う、その手引きとなるものだったのでした。
【語句】○かめ　一五〇九番歌参照。長寿の生き物とされ、特に人の寿を祝う時に用いられた。「鶴亀も千年のちは知らなくにあかぬ心にまかせはててむ」（古今集・三五五）。○しるべなりけり　案内役となるものだった。「なりけり」は今はじめて気がついたという気持ちを表す。
【所載】貫之集Ⅰ・六九三／貫之集Ⅱ・七八
【参考】所載欄に見える貫之集Ⅰでは、「延長五年九月、右大臣殿せざいのあはせまけわざ、内舎人たちばなのすけなはつかうまつる、すはまにかける」という詞書のもとに歌七首が列挙され、そのうちの一首。「右大臣殿せざいのあはせまけわざ」は貫之集Ⅱでは「左大臣せんざいのまけわざ」とあり、『平安朝歌合大成』三三の「小一条左大臣忠平前栽合」である可能性が高いが、当該歌は歌合本文にはなく、「まけわざ」とあるのもはっきりしない。貫之集によれば、その負態に詠まれた歌は「日、月、松、栢、鶴、亀、千鳥」の七首である。なお作者名「つらゆきィ」は、底本では小字補入の形式をとっているが、一応貫之集によって確認できる。

一五一二　わたつみのかみのしまけるいをゆへにこぎなつかれそあまのつり舟　いほ

【異同】わたつみの―わたつうみの（大）
【現代語訳】海の神がまわりを取り囲んでいる魚なので、漕ぎ疲れるな、漁師の釣り船よ。
【語句】◎いほ　配列や歌の内容から考えると、ここは「庵」ではなく、「魚」の意で、正しい表記は「いを」。○わたつみのかみ　海の神。本来「わたつみ」はそれだけで海の神を意味したが、のち、海の意に転じ、当該例のように更に「神」を伴うようになった。○しまける　「しまく」は、巡る、囲む意。「繞　モトホル・シマク・メグル・カクム」（類聚名義抄）。○こぎなつかれそ　漕ぎ疲れるな。「な……そ」は禁止をあらわす。

【所載】ナシ
【参考】「わたつみのかみのしまけるいを」ということが、一体どういうことなのか。なぜ「こぎなつかれそ」と言っているのか。状況がとらえにくく、わかりにくい。あるいは海の神に関する信仰のようなものとかかわりがあるか。

一五一三　いせのうみにつりするあまのいをゝなみうけもひかれぬこひもするかな

【異同】ナシ
【現代語訳】伊勢の海で釣りをする漁師は魚がいないので、うきもひかれない、私はあなたに認めてもらえない恋もすることだ。
【語句】○いをゝなみ　「魚を無み」で、魚がいなくて、の意。○うけもひかれぬ　釣り具の一種である「うき」もひかれない意に、「承け引く」、承認、同意もされない意を掛ける。「つらけれどなほぞ恋ひつる水瀬川うけもひかれぬ身とは知る知る」（兼盛集・五二）。上三句は「うけもひかれぬ」を導き出す序。
【所載】ナシ
【参考】表現の類似した恋の歌に、「伊勢の海に釣りするあまのうけなれや心ひとつをさだめかねつる」（古今集・五〇九）がある。

一五一四　ゆくみづのしたなるこひのくるしきはあみのひとめをつゝむなりけり

【異同】ナシ
【現代語訳】流れる水の下を泳ぐ鯉が苦しいのは、網の目を用心しなくてはならず、人知れず思い悩む恋が苦しいのは、人目を気がねしなくてはならないことだったのだ。
【語句】◎こゐ　正しくは「こひ」。ここは「鯉」の意で、歌では「恋」の意に掛けて詠まれることが多い。○したなるこひ　表面にあらわれない恋。水中の「鯉」に、人知れず思い悩んでいる「恋」を掛ける。○あみのひとめ　網の「一目」に、「人目」を掛ける。色葉和難集に「あみのひとめと云事　あみをも人の目にたとふるなり」とある。「網の一目」は「鯉」の縁語。○つつむ　気がねをする。はばかる。用心する。

【所載】ナシ

一五一五　よど川のそこにすまねどこひといへばすべていをこそねられざりけれ

【異同】ねられさりけれ―ねられさりけり（大）
【現代語訳】鯉のように、私は淀川の底に住んでいるわけではないのだけれど、やはり恋といえば、まったく眠ることができないのだった。
【語句】○よど川　琵琶湖を水源とする宇治川に、桂川・木津川が合流するあたりから下流をいう。鯉を多く産したらしく、後世「淀鯉」と称してその美味が賞された。「あはれなりこひにて世をばつくせとや身は淀川の底にすまねど」（散木奇歌集・一一一七）。○こひといへば　「鯉」に「恋」を掛ける。○いをこそねられざりけれ　眠ることができなかった。「いを寝ず」に「魚（いを）」を掛けるか。綺語抄には、「漢書に、魚はいをねず、更にといふ事のある也」と言い、和歌童蒙抄には、「漢書、鯉不寝と云へり」とある。
【所載】綺語抄・六三七／和歌童蒙抄・八二八

〔以上五首担当　久保木哲夫〕

ふな

一五一六　おきにゆきへにゆきいまやいもがためわがすなどれるもふしつくふな　たかやすの大君

【異同】おきにゆき―おきへゆき（御・桂・大）
【現代語訳】沖に行ったり岸の近くに行ったりして、たった今あなたのために私が捕ってきた、藻にくっついて伏し隠れていた鮒ですよ。
【語句】◎ふな　鮒。コイ科の淡水魚。体長は普通一五センチ前後だが、まれに四五センチほどに及ぶ。古今六帖のこの項には二首収載されているが、そのうち一首は物名として詠み込んだものである。○おきにゆきへにゆき　沖に行き辺に行き。「おきに」は、所載欄の万葉集には「おきへ」とあり、岸辺から離れた沖の方の意。「辺」は、沖に対して岸に近い部分。○いまや　今や。「今」を強めて言う語。「や」は強意の間投助詞。○いも　妹。男性から、妻・恋人など親しい女性を呼ぶ称。○すなどれる　「すなどる」は、魚や貝を捕る意。「る」

は、完了・存続の助動詞「り」の連体形。○もふしつくふな　古今六帖の本文に従うと、「藻伏し付く鮒」、即ち、藻にぴったりとくっついて伏し隠れている鮒の意か。所載欄の万葉集には「もふしつかふな（藻臥束鮒）」とあり、藻に伏し隠れている一束（一摑み）ほどの長さ（握った四本の指の幅ほどの長さ）の小さな鮒の意。
【所載】万葉集・六二八（旧六二五）奥弊徃　辺去伊麻夜　為妹　吾漁有　藻臥束鮒　オキヘユキヘニユキイマヤイモガタメモワガスナドレルモフシツカフナ　おきへゆきへをゆきいまやいもがためわがすなどれるもふしつかふな／和歌童蒙抄・八三〇／和歌色葉・九八
【参考】作者名「たかやすの大君」は、所載欄の万葉集に「高安王裹鮒贈娘子歌一首」とあるのに一致する。

一五一七　人しれずすみづのしたにはかよへどもあふなはとらじとおもひし物を

【異同】ナシ
【現代語訳】人知れずひそかに思いを通わせているけれども、逢っているという噂は立てられまいと思ったのになあ。
【語句】○みづのしたにはかよへども　ひそかに思いを通わせ恋い慕うけれども。「みづの」は「した」を言うための措辞。「下にかよふ」は人目につかぬよう思いを通わす。「言にいでて言はぬばかりぞ水無瀬河下にかよひて恋しきものを」（古今集・六〇七）。○あふなはとらじ　逢ふ名は取らじ。逢うという噂・評判を立てられまい。「ながれてもあふ名はたてじすみの江のみをつくしにてたちははつとも」（散木奇歌集・一〇九九）。「あふな」の「ふな」に、「鮒」を詠み込んだ物名歌。
【所載】ナシ

すゞき

一五一八　すゞきつるふけゐのうらのあまにもがいまなきゆきていへつしまみん

【異同】ふけゐのうらの―ふなゐの浦の（大）
【現代語訳】鱸を釣る吹飯の浦の海人であればいいなあ。そうして、たった今でも、泣きながら行って、家の島を見たいなあ。
【語句】◎すゞき　鱸。スズキ科の浅海魚。秋の水温の低下とともに沖から湾口に移動して越冬、産卵する。

古今六帖のこの項に収載された三首すべてが、「鱸釣る」と詠まれている。〇ふけゐのうら　吹飯（ふけひ）の浦。一般には和泉国、現在の大阪府泉南郡の深日（ふけ）の浦があてられる。一方、平安時代には、現在の和歌山県和歌山市、水軒川中流以南辺りの吹上浜（ふきあげのはま）をも、「ふけひのうら」と詠んでいる。〇あまにもが　海人であったらいいなあ。「海人」は、魚貝を捕ったり海藻を刈ったりして、海で漁業に従事する人。「にもが」は、「……であったらいいなあ」という願望を表す。「伊勢の海の沖つ白波花にもが包みて妹が家づとにせむ」（万葉集・三〇九〈旧三〇六〉）。〇いへつしま　家つ島。家のある島。当該歌では普通名詞。ちなみに、固有名詞としては、播磨国の「家島」が、万葉集以来、その名から望郷の念をそそるものとして、「いへしま」とも「いへのしま」とも詠まれた。なお、所載欄の夫木抄には「いへつつま」とある。

【所載】夫木抄・一三二一〇

【参考】海で漁をする海人なら、「家つ島」を見に行くことができるが、海人ならぬ自分にはできないという望郷の思いを詠んだか。

一五一九　すゞきつるあまのたくひのよそにだに見ぬ人ゆへにこふるこのごろ

【異同】ナシ

【現代語訳】鱸を釣る海人の焚く火は岸から遠く離れている、私は、その「よそ」ながらでさえ見ることもできない人ゆえに、恋しく思うこの頃だよ。

【語句】〇よそに　よそながら。「よそ」は、離れた所、自分とは無縁のものの意。「よそに見し檀（まゆみ）の岡も君ませば常（とこ）つ御門（みかど）ととのゐするかも」（万葉集・一七四）。初・二句は、陸から海上遥かに離れた漁り火を見る意から、「よそに（見る）」を導く序。「すずきとるあまのを船のいさり火のほのかにだにや妹にあはざらむ」（奈良帝御集・一七）。〇見ぬ人ゆへに　見ぬ人ゆゑに。見ることのできない人のせいで。

【所載】万葉集・二七五四（旧二七四四）鈴寸取　海部之燭火　外谷　不見人故　恋比日　スズキトル（ツル）アマノトモシビヨソニダニミヌヒトユヱニコフルコノコロ　すずきとるあまのともしびよそにだにみぬひとゆゑにこふるこのころ／夫木抄・七九二六／人麿集Ⅱ・五四五／和歌童蒙抄・八二七

一五二〇　あらいそのふぢえのうらにすゞきつるあまとか見らんたびゆくわれを

【異同】ナシ
【現代語訳】荒磯の藤江の浦で鱸を釣る海人だと、人は見ているのだろうか。旅行く私のことを。
【語句】○あらいその　荒磯の。「荒磯」は、岩石が多く荒波の打ち寄せる海岸。○ふぢえのうら　藤江の浦。播磨国の歌枕。現在の兵庫県明石市西部の海岸。○あまとか見らん　海人だと、見ているのだろうか。海人だと思っているのだろうか。「か」は、疑問の係助詞。「見らん」の「らん」は、現在推量の助動詞で通常終止形に続くが、上代では「見らん」の形になることが多い。
【所載】古今六帖・第四帖「たび」二四二三／万葉集・二五三（旧二五二）荒栲　藤江之浦尓　鈴寸釣　泉郎跡香将見　旅去吾乎　アラタヘノフヂエノウラニスズキツルアマトカミラムタビユクワレヲ　あらたへのふぢえのうらにすずきつるあまとかみらむたびゆくわれを　一本云、白栲乃　藤江能浦尓　伊射利為流　一本云、しろたへのふぢえのうらにいざりする、三六二九（旧三六〇七）之路多倍能　藤江能宇良尓　伊射里須流　安麻等也見良武　多妣由久和礼乎　シロタヘノフヂエノウラニイザリスルアマトヤミラムタビユクワレヲ　しろたへのふぢえのうらにいざりするあまとやみらむたびゆくわれを／夫木抄・一三二〇七／人麿集Ⅲ・六一五／和歌童蒙抄・二六一、八二六
【参考】古今六帖に作者名はないが、所載欄の万葉集では「柿本朝臣人麿羈旅歌八首」とある中の一首。万葉集には、他にも「潮はやみ礒廻（いそみ）に居ればかづきする海人とや見らむ旅行く我を」（一二三八〈旧一二三四〉）など、水辺にいる旅人の自分を、他人は海人だと思って見ているのだろうかと詠む類歌は多い。
〔以上五首担当　長戸〕

一五二一　あふことをあときのしまにひくたいのたびかさならば人もしりなん
たひ

【異同】あときのしまに―あこきの嶋に（大）
【現代語訳】「あときの島」で網を引いて鯛を捕ることが度重なれば人に知られてしまうように、あなたと逢うことが度重なったならばきっと周りの人も知ることでしょうね。
【語句】◎たひ　鯛。スズキ目タイ科の海産魚の総称。万葉集に二例、神楽歌に一例ある。勅撰集では詞花集が初出。○あときのしま　未詳。他に用例なし。所載欄の夫木抄では「あこぎ」とする。「あこぎ」は三重県津

市を流れる岩田川河口から南一帯の海岸。謡曲「阿漕」はこの歌を典拠とする。○ひくたいの　ひくたひの。網を引いて鯛を捕ること。二、三句が「たびかさならば」を導く序詞。
【所載】夫木抄・一〇五六六、一三一九七

あゆ

一五二二　きみませばものもおもはず玉川のせにふすあゆのやなぼこりして

【異同】ナシ
【現代語訳】あなたがいらっしゃったので、何の物思いもいたしません。玉川の瀬に伏している鮎が梁の上でおどり跳ねるように、私の心も浮き立って。
【語句】◎あゆ　鮎。サケ目アユ科の淡水魚。万葉集・巻五の「松浦川に遊ぶ」歌群が知られる。歌題としては拾遺集・巻七（物名）に「ひぼしのあゆ」「おしあゆ」がある。○玉川　同名の河川として、万葉集に詠まれた武蔵国の玉川（多摩川）や能因法師が訪ねた陸奥国の野田の玉川、山吹で知られる山城国の井手の玉川などが知られるが、ここはどの「玉川」であるか特定できない。○せにふすあゆの　瀬に伏している鮎が。瀬に棲む鮎を擬人化して「瀬に伏す」という。「賀茂川の瀬にふす鮎のいをとりて寝でこそ明かせ夢に見えつや」（大和物語七〇段・一〇一）。○やなぼこり　梁ぼこり。魚が梁の上などでおどりはねること。「やな」は、川に杭を打ち斜めに張った簀で魚を捕える仕掛け。
【所載】ナシ

一五二三　あたらよをいもともねなでとりがたきあゆとる〳〵といはのうへにゐて

【異同】ナシ
【現代語訳】せっかくの夜を妻とも寝ないで、捕るのが難しい鮎を捕ろう捕ろうと岩の上で座って過ごしてしまったよ。
【語句】○あたらよ　もったいないような夜。すばらしい夜。「玉くしげ明けまく惜しきあたら夜を衣手離れて独りかも寝む」（万葉集・一六九七〈旧一六九三〉）。○ねなで　動詞「寝（ぬ）」の連用形「ね」に完了の助動詞「ぬ」の未然形「な」、打消のはたらきをする接続助詞「で」がつづいた形。○いはのうへにゐて　岩の上に

居て。そのまま夜を過ごしてしまったという意を持つか。
【所載】ナシ

一五二四　うぢがはのせゞにありてふあじろ木におほくのひをもわびさする哉
ひを

【異同】ナシ
【現代語訳】宇治川の瀬々にあるという網代木にいる多くの氷魚（ひを）ではないが、（あなたは）多くの日々をつらくさせることよ。
【語句】◎ひを　氷魚。「ひうを」の約。鮎の稚魚。ほとんど半透明色で、二、三センチメートル。白魚に似る。宇治川とその支流の田上川・瀬田川のものが有名。網代を仕掛けて捕る。万葉集に一例。平安時代には「日を」を掛けて詠まれることが多い。○うぢがは　宇治川。山城国の歌枕。琵琶湖より発し宇治を通り、桂川や木津川と合流、淀川として大阪湾に注ぐ。網代、氷魚などが景物。○あじろ木に　網代木に。「網代木」は網代を仕掛ける杭。「網代木に心を寄せてひをふればあまたの夜こそ旅寝してけれ」（蜻蛉日記・一四七）。初句からここまで「おほくのひを」を導く序詞。○おほくのひをも　多くの日をも。「ひを」は「氷魚」に「日を」を掛ける。○わびさする哉　つらい思いをさせることだ。思い人の不在が原因か。
【所載】ナシ

一五二五　ながれくるもみぢのいろのあかければあじろにひをのよるも見えけり

【異同】あかければ―ありければ（大）
【現代語訳】川を流れ来る紅葉の色が赤くて明るいので、夜になっても、網代に氷魚の寄るのが見えることだ。
【語句】○あかければ　「赤ければ」に「明かければ」を掛ける。「紅葉せばあかくなりなん小倉山秋まつほどの名にこそありけれ」（拾遺集・一三五）。○ひを　氷魚。一五二四番歌参照。○よるも見えけり　「よる」は氷魚が「寄る」に「夜」を掛ける。「月影のたなかみ河に清ければ網代にひをのよるも見えけり」（拾遺集・一一三三）。
【所載】公忠集Ⅰ・一三／公忠集Ⅱ・一二

〔以上五首担当　青木〕

一五二六　すぐしくる日をかぞふともうぢがはのあじろならねばよらじとぞ思

【異同】ナシ
【現代語訳】今まで過ごしてきた日数を数えたとしても、宇治川の網代ではないので寄るまい、あなたにはなびくまいと思います。
【語句】○ひをかぞふとも　日数を数えたとしても。「日を」に「氷魚（ひを）」をかける。「流れくる日を数ふれば網代木によるさへ数も知られざれけり」（宇津保物語・四二六）。○うぢがは　宇治川。琵琶湖に発し宇治市を南流する川。○あじろならねばよらじとぞ思　網代でもないので、寄るまいと思う。網代は川の瀬に竹や木を編んだものを網を引く形に立て、その端に簀をあてて魚をとるのに用いたもの。「氷魚」「寄る」は「網代」の縁語。「よらじとぞ思」は、「氷魚が寄らない」に「あなたには寄らない（なびかない）」という意をかける。
【所載】ナシ

一五二七　みよしの丶おほかはみづのゆをびかにあらぬ物ゆへなみのたつらむ

【異同】ナシ
【現代語訳】み吉野を流れる大きな川は広々として波も立たない。しかし（我々は）そうではないので波が立つのでしょうか。
【語句】◎かは　川。地表に集まった水が重力に従って、低い場所へと流れ、ついには海や湖に流れ込む水の流路。河川。和歌では、景色を詠じたもの、「淵」「瀬」と共に恋情の深さ浅さを詠じたものなどが見られるが、古今六帖では、「川」という題のもとに各地の川が集められ歌枕の手引のような役割を果たしている。○みよしの丶おほかはみづ　み吉野を流れる大きな川。吉野川のことであろう。○ゆをびかに　ゆほびかに。ゆたかに広々としたさま、ゆったりと穏やかなさまを表す形容動詞の連用形。和歌には珍しく、散文でも用例の少ない表現。源氏物語・若紫に「近き所には播磨の明石の浦こそなほことにはべれ。何のいたり深きくまはなけれど、ただ海のおもてを見渡したるほどなん、あやしくこと所には似ず、ゆほびかなる所に侍る」とあり、海が広々として穏

やかなさまを表している。○あらぬ物ゆへ　あらぬものゆゑ。……というわけでもないので。「ものゆゑ」は逆接にも順接にも用いられる。ここは順接。○なみのたつらむ　波が立つのだろう。波が立つ、という表現は、自然の景として詠まれる場合が多いが、当該歌のように人間関係にかかわって比喩的に詠まれる場合もある。
【所載】ナシ

一五二八　かはのせになびくをみればたまもかもちりみだれたるかはのつねかも

【異同】ナシ
【現代語訳】川の瀬になびき揺れているのを見ると、玉藻だろうか。散り乱れているこのありさまは、川の常のことなのであろうなあ。
【語句】○たまもかも　美しい藻だろうか。「玉」は美称。「かも」は詠嘆を含む終助詞的な用法。○ちりみだれたるかはのつねかも　（玉藻が）散り乱れているのは、川の常というものだろうなあ。「玉藻」が「散り乱る」という表現は珍しいが、激しい流れに揺れ乱れている玉藻の様子が詠じられることもある。「おきへにも寄らぬ玉藻の浪の上に乱れてのみや恋ひ渡りなむ」（古今集・五三二）。
【所載】拾遺集・雑上・四八九／万葉集・一六八九（旧一六八五）河瀬　激乎見者　玉藻鴨　散乱而　在川常鴨　カハノセノタギルヲミレバタマモカモチリシミダレテアルカハトカモ　かはのせのたぎちをみればたまかもちりみだれてあるかはのつねかも／人麿集Ⅰ・三四／人麿集Ⅱ・二一七

一五二九　みがくれていきづきあまりはや河のせにはたつとも人にいはめや（んイ）

【異同】ナシ
【現代語訳】水に潜って苦しくなって息をしきれずに流れの速い川の瀬に立ったとしても（そのように苦しい恋でも）、どうして人に（あなたのことを）もらしましょうか。
【語句】○みがくれて　水中に隠れて。「河の瀬になびく玉藻のみがくれて人に知られぬ恋もするかな」（古今集・五六五）。○いきづきあまり　息をし切れずに。「いきづく」は息をするという意だが、深く息をする、嘆息する、苦しそうにあえぐ、という用例がみられる。「かくのみやいきづきをらむあらたまの消えゆく年のかぎり知らずて」（万葉集・八八五〈旧八八一〉）。「……あまり」はある行動などの程度が度を超すことを表す。「隠り沼

の下ゆ恋ひあまり白波のいちしろくいでぬ人の知るべく」（万葉集・三〇三七〈旧三〇二三〉）。○せにはたつとも　川の瀬に立ったとしても。「もののふのやそうぢかはのはやき瀬に立ちえぬ恋もあれはするかも（一云、たちてもきみはわすれかねつも）」（万葉集・二七二三〈旧二七一四〉）のように、激流に押し流され立つこともできないくらい苦しい恋、として解釈した。

【所載】万葉集・一三八八（旧一三八四）水隠尓　気衝余　早川之　瀬者立友　人二将言八方　ミゴモリニイキヅキアマリハヤカハノセニハタツトモヒトニイハメヤモ　みごもりにいきづきあまりはやかはのせにはたつともひとにいはめやも

一五三〇　むかし見しきさのをがはをけさみればいよ〳〵きよくなりにけるかな

【異同】ナシ

【現代語訳】昔見た象の小川を今朝見ると、一段とすがしく清らかになったことだ。

【語句】○むかし見し　昔見た。所載欄の万葉集では、作者は大伴旅人。旅人は他にも「我が命も常にあらぬか昔見し象の小川を行きて見むため」（万葉集・三三五〈旧三三二〉）を詠む。○きさのをがは　象の小川。奈良県吉野郡にある象山（きさやま）の麓を流れ、吉野川に流れ込む川。

【所載】玉葉集・雑二・二〇六七／万葉集・三一九（旧三一六）昔見之　象之小河乎　今見者　弥清　成尓来鴨　ムカシミシキサノヲガハヲイマミレバイヨイヨキヨクナリニケルカモ　むかしみしきさのをがはをいまみればいよよさやけくなりにけるかも

【参考】所載欄の万葉集の詞書によると当該歌は大伴旅人の一首。また、当該歌は、万葉集では吉野の離宮への行幸に際し大伴旅人が勅命を予想して用意した長歌の反歌。以前の行幸に供奉した際の吉野離宮を回想して詠じた一首。

〔以上五首担当　犬養廉・尾高〕

一五三一　にごりなききよたきがはのきしなればそこよりさくとみゆる藤なみ　たゞみね

【異同】ナシ

【現代語訳】濁りの無い清滝川の岸なので、水底から咲いているように見える藤の花ですよ。
【語句】○きよたきがは　清滝川。京都市西北部を流れる川。愛宕山の東のふもとを流れて保津川に注ぐ。「清（し）」がつくことから、濁りのない、澄んだ流れとして詠まれることが多い。「ます鏡清滝川の底澄みて散らでも花の陰ぞうつろふ」（夫木抄・一一五五）。○そこよりさくとみゆる　藤が水に映って川底から咲き出しているように見える。水面の映像を水底にみる例は多い。「手もふれで惜しむかひなく藤の花底にうつれば浪ぞ折りける」（拾遺集・八七）。○藤なみ　藤の花房が風になびく様子を波に見立てていう語。「岸」「底」「波」は「川」の縁語。
【所載】夫木抄・二一〇〇／忠岑集Ⅰ・三〇／忠岑集Ⅱ・六七／忠岑集Ⅲ・九七／忠岑集Ⅳ・一八二
【参考】作者名「たゞみね」は所載欄の文献に一致する。忠岑集の詞書により、藤原定国の四十賀の屏風歌だとわかる。公卿補任によると定国は延喜六年七月二日に四十一歳で薨じた。

一五三二　たえずゆくあすかのかはのゆらざらばゆへもあらしと人のみらくに（よどみなばイ）（しもあるとイ）（やおもはんイ）

【異同】ナシ
【現代語訳】絶えず流れる飛鳥川の水がゆらゆらと動かなかったら（いつも通っている私が行かないと）、何か理由があるらしいと人がみるでしょうに。
【語句】○たえずゆくあすかのかはのゆらざらば　絶えず行く飛鳥川の水がゆらゆらと動かなかったら。「ゆる」はそのもの全体がゆらゆらと動く意。「絶えず流れる飛鳥川の水がゆらゆらと動かなかったら」で、常日頃と異なることをたとえる。いつも逢いに行く自分が行かなかったら、または、いつも来るあなたが来なかったら、の意を寓する。「ゆらざらば」は「ゆかざらば」の誤写か。所載欄の古今集は、傍記と同じ「よどみなば」、万葉集では「よどめらば」。○ゆへもあらしと人のみらくに　理由があるらしいと人がみるでしょうに。「ゆへ」は「ゆゑ」。「ゆゑあり」の形で用いられる。「あらし」は「あるらし」を縮めた形。あるらしい。「みらくに」は、「見る」を体言化するク語法に助詞「に」が付いて、詠嘆をこめる。
【所載】古今集・恋四・七二〇／万葉集・一三八三（旧一三七九）不絶逝　明日香川之　不逝有者　故霜有如人之見國　タエズユクアスカノカハノヨドメラバユヱシモアルトヒトノミラクニ　たえずゆくあすかのかはのよどめらばゆゑしもあるごとひとのみまくに
【参考】作者名はないが、古今集左注に「この歌、ある人のいはく、中臣東人が歌なり」とある。中臣東人は、

母藤原鎌足女、中臣宅守の父で、万葉集・五一八（旧五一五）番に阿倍女郎に贈る歌一首が入集する。

一五三三　をちへゆくこちかせがはにたれしかもいろさりがたきみどりそめけん

【異同】ナシ
【現代語訳】（遠方へ行く）こちかせ川に、誰が色のあせにくい緑色を染めたのだろうか。
【語句】○をちへゆく　遠方へ行く。「をち」は「こち」の対語で、「こちかせがは」を導く措辞。○こちかせがはに　こちかせ川に。「こちかせ川」は所在不明。「こちかせ川」の「こち」に「こちら」の意を掛ける。「をちへゆくこちかぜ川の水もなほ春こそ淵の色深くなれ」（春秋歌合・六八）という例歌によれば「こちかぜ川」である可能性もある。所載欄の伊勢集では「こちらへ来よ」の意の「こちこせ川」となっているが、「こちこせ川」も所在不明。○いろさりがたき　色があせにくい。「さる」は日光や雨風などにさらされて色が薄くなる意。「雨ふれは色さりやすき花桜薄き心も我思はなくに」（貫之集Ⅰ・六〇四）。「をちへゆく」「こちかせ」「さりがたき」が一つの文脈を作るか。
【所載】伊勢集Ⅰ・四〇二／伊勢集Ⅱ・四〇六／伊勢集Ⅲ・四四六／実方集Ⅱ・三〇一／実方集Ⅲ・五二
【参考】竹鼻績『実方集注釈』（貴重本刊行会、一九九三年）は、当該歌と伊勢集との関係を、同一歌の改変か異伝であろうとし、実方集にある理由は不明だが歌そのものは実方の作ではないとする。伊勢集の古歌混入部にあり、伊勢の歌でもない。

一五三四　てる月のかつらのかはしきよければうゑしたあきのもみぢをぞみる

【異同】ナシ
【現代語訳】（照る月のように）桂川は清いので、（月に照らされて）地上の紅葉と水に映った紅葉と、上と下に秋の紅葉を見ることです。
【語句】○てる月の　「かつら」を導く措辞。○かつらのかはし　「かつらのかは」は桂川。「し」は強調の助詞。「桂川」は京都市西部を流れる川。上流を保津川、嵐山付近を大堰川という。ここでは「月の桂」（月に生えているという、丈の高い桂の木）を響かす。「照る」「桂」は「月」の縁語。○うゑした　うへした。地上の紅葉と水に映った紅葉をさす。「岩つつじ水にうつろふ影みればうへした花の咲くかとぞみる」（風情集・一四

一）。
【所載】頼基集・五

一五三五　つの国のいくたのかはのいくたびか君を恋しとわれおもふらん

【異同】ナシ
【現代語訳】津の国にある生田の川、いったい幾たびあなたを恋しいと私は思うことだろうか。
【語句】○つの国のいくたのかは　摂津の国にある生田川。「生田川」は神戸市中央区を流れる川。初・二句は、同音で「いくたび」を導く序詞。○いくたびか　何度か。幾度か。「つの国の生田の池のいくたびかつらき心を我に見すらん」（拾遺集・八八四）。
【所載】ナシ

〔以上五首担当　三浦〕

一五三六　いまさらにさらしながはのながれてもうきかげみせんものならなくに

【異同】ナシ
【現代語訳】今さら長らえても、つらい姿を誰に見せようというものでもないのに。
【語句】○いまさらに　今となっては。「さらしながは」を導く措辞か。○さらしながは　更級川。更級は信濃国の歌枕。長野県の千曲川流域の一帯で、姨捨山と共に詠まれることが多く、「更級川」と詠まれることは稀である。○ながれても　（川が）流れても。時が経過しても。川が流れる意に、長らえても、の意を添える。「行く水の泡ならばこそ消えかへり人の淵瀬をながれても見め」（拾遺集・八八二）。○うきかげみせん　つらい姿を見せようという。「うきかげ」に「浮き影（水面に映った姿）」と「憂き影」とを掛ける。「浮き」、「流れ」は「川」の縁語。
【所載】新勅撰集・雑四・一三〇九／夫木抄・一一二一一

一五三七　からころも○つたのかはのこるゑきけばいまはきぬともおもほゆるかな

【異同】ナシ
【現代語訳】竜田川の声をきくと、さあもういらっしゃった、と思われることですよ。
【語句】○からころも　唐衣。衣を裁つ、の続きで「たつ」にかかる枕詞。○たつたのかは　竜田川。大和国の歌枕。「裁つ」に「竜田の川」の「たつ」を掛ける。○こゑきけば　（川の）音を聞くと。○いまはきぬとも　今はもう来たと。「来ぬ」に「衣（きぬ）」を掛ける。「裁つ」「衣」は「唐衣」の縁語。歌意がとりにくいが、傍記「つまはきぬとも」ならば、「唐衣」の縁語の「褄（つま）」に「夫（つま）」を掛けて、あの人が来たと、という意味にとれ、歌意は通じる。
【所載】ナシ

一五三八　あさごとにいくみ（□ぬのイ）のかはのみをたえず恋しき人にあひみてしかな

【異同】ナシ　傍記ノ□ハ判読不明。
【現代語訳】毎朝毎朝行く、その「いく」の名を持つ「いくみの川」の水の流れが絶えないように、絶えず愛しいあの人に逢いたいものだ。
【語句】○あさごとに　朝毎に。毎朝。「朝毎に行く」と続き、「いくみ川」を導く。他に「あさごとに聞く」と続き「菊」を導く例「緒をよりてぬくよしもがな朝ごとにきくの上なる露の白玉」（貫之集・三九〇）がある。○いくみのかは　川の名。未詳。○みをたえず　水脈絶えず。水の流れが絶えることなく。水脈が絶えないことに、途絶えることなく逢いたいという意を掛ける。「たたなめていづみの川のみをたえずつかへまつらむ大宮所」（万葉集・三九三〇〈旧三九〇八〉）。
【所載】新勅撰集・雑四・一三二一／夫木抄・一〇九二三

一五三九　いもがかどいでいりのかはのせをはやみ我むまつまづくいもかふるかも（こまそイ）（いへイ）

【異同】いもかふるかも―いもこふるかも（御・大）、いもこふるかな（桂）
【現代語訳】いりの川の流れが速いので、私の乗る馬が躓いた。あの人が私を恋しく思ってくれているのだろう。
【語句】○いもがかどいでいりのかはの　いりの川の。「いりの川」の所在は未詳。「妹が門出で入り（出入りする）」という表現から「いりの川」を導くか。他にも「妹が門入り出づ」から「泉（いづみ）川」を導く例「妹

が門入りいづみ川のとこなめにみ雪残れりいまだ冬かも」（万葉集・一六九九〈旧一六九五〉）がある。○我むまつまづく　私の乗る馬が躓く。旅の間に馬がつまずくのは留守宅の家人が思ってくれているしるしだ、という俗信があった。「塩津山うち越え行けば我が乗れる馬ぞつまづく家恋ふらしも」（万葉集・三六八〈旧三六五〉）。○いもかふるかも　他本に従い「いもこふるかも」で解釈する。川の流れが速いために馬が躓いたのを、愛しい人が思っていてくれるからだろう、と解した詠歌か。

【所載】万葉集・一一九五（旧一一九一）妹門　出入乃河之　瀬速見　吾馬爪衝　家思良下　イモガカドイデイリノカハノセヲハヤミワガウマツマヅクイヘコフラシモ　いもがかどいでいりのかはのせをはやみあがうまつまづくいへおもふらしも／俊頼髄脳・二五三／奥儀抄・四三二

一五四〇　とねがはゝそこにはにごりてうはずみてありけるものをさねてくやしく

【異同】ナシ

【現代語訳】利根川は底が濁って表面が澄んでいたのに、（あの人の不誠実さに気づかず）共寝をしてしまい悔しいことよ。

【語句】○とねがはゝそこはにごりてうはずみて　利根川は、底は濁り表面が澄んで。利根川は関東平野を流れる川。利根川の表面は澄んでいても底は濁っているという表現に相手の男性の不誠実さを響かせた。○さねてくやしく　共寝をして悔しい。相手の不誠実さに気付いてもよさそうなものだったのに気付かず共寝をしてしまった、と後悔する気持ち。「明日香川した濁れるを知らずして背ななと二人さ寝て悔しも」（万葉集・三五六六〈旧三五四四〉）。

【所載】夫木抄・一〇九六二

〔以上五首担当　橋本智美・尾高〕

一五四一　むこ川のみをすみはやすあかごまのあしがきそゝきぬれにけるかな

【異同】ナシ

【現代語訳】武庫川の水が澄んで音をたてている。赤駒の足掻きで水がかかり、（私は）ぬれてしまったことだ。

【語句】○むこ川　武庫川。兵庫県の南東部を流れる川。河口付近には古代より港があった。○あかごま　あ

がこま（吾が駒）とも読めるが、ここでは、所載欄の万葉歌の表記「赤駒」に従って、赤駒と解しておく。赤駒は赤毛の馬。○すみはやす　「すむ」＋「はやす」。澄んで音をたてる、の意か。○あしがき　足掻き。馬が前足で字面をひっかく様子を言う。所載の万葉集で「足何久」（あがく）とあるのに従い、「あしがき」を足掻きの意で解す。「わがこまのあしがきはやき雲井にもかくれゆくとも待たんわぎもこ」（古今六帖・一四二八）。○そゝき　注ぐの意。江戸初期までは清音。

【所載】万葉集・一一四五（旧一一四一）武庫河　水尾急嘉　赤駒　足何久激　沾祁流鴨　ムコガハノミヅヲハヤミカアカゴマノアガクソソギニヌレニケルカモ　むこがはのみををはやみかあかごまのあがくたぎちにぬれにけるかも

一五四二　ふじがはのよにすむべくもおもほえずこひしき人のかげも見えねば

【異同】よにすむへくも―瀬にすむへくも（大）

【現代語訳】富士川は決して澄まない。そのような世に住もうとも思われない。恋しい人の姿も見えないので。

【語句】○ふじがは　富士川。山梨・長野県境から山梨県西部を通り、駿河湾に注ぐ川。日本三急流の一。「あはんとは思ひわたれどふじ川のつひにすまずは影も見えじを」（躬恒集Ⅰ・六四）のように濁った川として詠まれた。○よにすむ　絶対に住まない。「よに」は後に打消の語を伴って「絶対に」「断じて」の意となる。また、「すむ」は「住む」に「澄む」を掛ける。○おもほえず　考えられない。

【所載】夫木抄・一一一五八

一五四三　たまがはゝまさらばまされまこまのゝこまのゝとのゝふねならなくに

【異同】ナシ

【現代語訳】玉川は（水かさが）増さるなら増さればよい。まこまのの狛野の殿の舟であるわけでもないので。

【語句】○たまがは　井手（山城）・三島（摂津）・調布（武蔵）・野路（近江）・野田（陸奥）・高野（紀伊）の六つの玉川が考えられるが、下句「こまの」が狛野を指すと思われるので、ここは現在の木津川である井手の玉川と推定できる。○まこまのゝこまのゝとの　狛野の殿。「まこまゝ」は「こまの」を引き出す詞。「狛野」は現在の京都府相楽郡にあった地名。催馬楽の「山城」に、「山城の狛のわたりの瓜作り」と歌われた。また散

逸物語駒野の物語があったことが知られている。〇ならなくに　であるわけでもないのに。
【所載】古今六帖・第三帖「かは」一五七九

一五四四　よどがはのよどむと人は見るらめどながれてふかきこゝろある物を

【異同】ナシ
【現代語訳】淀川がよどんでいるように、私の心も滞っているとあなたはお思いでしょうが、淀川のように流れて深い思いを私は持っていますのに。
【語句】〇よどがは　淀川。八雲御抄などで山城国とするように、桂川・宇治川・木津川が合流してよどむあたりを淀川と呼んでいた。〇よどむ　水が滞ること。ここでは恋の思いが滞ること。
【所載】古今集・恋四・七二一

一五四五　ほりかはのせきの井ぐひのうちわたしあはでも人にこひらるゝかな

【異同】あはても人に（をイ）―あはても人を（大）
【現代語訳】堀川の堰に杭を打ち並べ、せき止められているように、ずっと逢えないけれど、あなたを恋しくて仕方のないことだ。
【語句】〇ほりかは　堀川。京都市内を流れる川で、鴨川に合流する。折々洪水を起こした。現在は堀川通の横を流れる川で、暗渠になっているところも多い。〇井ぐひのうちわたし　堰杭のうちわたし。杭を堰に長く連ねて打ち並べること。古事記歌謡・四四「水たまる　依網（よさみ）の池の　堰杙（ゐぐひ）打ちが　刺しける知らに……」が古い例。〇こひらるゝ　恋しく思われる。「らるる」は自発の助動詞。
【所載】夫木抄・一〇九五三

〔以上五首担当　杉本〕

一五四六　あさごとにきけばはるけしいづみがはあさこぎきつゝうたふ舟人

【異同】あさこききつゝ―あさくききつゝ（御・桂）、あさゝきゝつゝ（大）

【現代語訳】朝毎に聞くとはるかに聞こえる。いづみ川に朝漕ぎ来つつ歌う舟人よ。
【語句】○あさごとに　朝毎に。毎朝。所載欄の万葉集では「あさとこに」。○いづみがは　山城。木津川のこと。恭仁京に都を新しく定めると、みかの原や鹿背山とともに歌に詠まれることが多くなった。「都いでて今日みかのはらいづみがは川かぜ寒しころもかせやま」（古今集・四〇八）、「みかの原わきて流るるいづみがはいつみきとてか恋しかるらむ」（古今六帖・一五七二）。所載欄の万葉集では「いみづかは」。○あさこぎきつゝ　朝漕ぎ来つつ。所載欄の万葉集では「朝漕ぎしつつ」。
【所載】万葉集・四一七四（旧四一五〇）朝床尓　聞者遥之　射水河　朝己芸思都追　唱船人　アサトコニキケバハルケシイミヅカハアサコギシツツウタフフナビト　あさとこにきけばはるけしいみづかはあさこぎしつつうたふふなびと

一五四七　みだれつゝ人だによらぬいとはがはなみのさはぐ（ぎイ）はみづをよるとか

【異同】ナシ
【現代語訳】人さえ立ち寄らない、いとは川、波が騒ぐのは川の水を「よる（ゆり動かす）」からとか。
【語句】○みだれつゝ　乱れつゝ。第二句の「よらぬ」と文脈をつくり、糸が乱れて（縒れない）。○人だによらぬ　人さえ立ち寄らぬ。「寄る」に下の糸の縁語「縒る」をかけて、初二句は「いとは川」の「いと」を導く序か。○いとはがは　川の名だが、所在地未詳。後の作品だが、「波はみなこほりて結ぶいとは川岩を越ゆるはあられなりけり」（夫木抄・一〇九一五）という基家の歌がある。○みづをよるとか　句の意がよくわからない。この「よる」は水をゆらす、ゆり動かす、の意か。揺らすの用例としては「臣（おみ）の子の八符（やふ）の柴垣下とよみ地震（なゐ）がより来ば破れむ柴垣」（日本書紀・八八）がある。また、「富士川に渡りぬ。この川は河中によりて石を流す」（海道記）という例もある。
【所載】夫木抄・一〇九一六
【参考】初二句の「みだれ」「よらぬ」と第五句の「よる」は「糸」の縁語。第五句の「よる」はゆり動かすの意味に「縒る」を掛ける。

一五四八　わがそでをいまもかはかでゆふかはかまたかへりこんよろづよまでに（は川イ）

【異同】いまもかはかて―いまもかはかく（桂）
【現代語訳】［初二句意味不明。］ゆふ川にまた何回も帰ってこよう、万代までも。
【語句】○わがそでを　わが袖を。所載欄の万葉集では「わがひもを」。○いまもかはかで　「今も乾かで」か。所載欄の万葉集では「いもかてもちて（妹が手もちて）」。○ゆふかはか　傍記によると「ゆふは川」。「ゆふかは」という文字の連なりは、古今六帖のこの歌と「あくたよる夕川風に」「吹きのぼる夕川風に」の二例のみ。どちらも加納諸平の歌。歌枕地名索引では「木綿川」とする。所載欄の万葉集では「結八川」とあり、「ゆふはかは」の用例は「から衣たが下紐をゆふは河とけてねぬ夜の氷とくらん」（新千載集・一五四三）など少なくない。どちらも所在地不明。○またかへりこん　もう一度帰ってこよう。幾たびも帰ってこよう。「みよしののあきつの河の万代にたゆるときなくまたかへりこむ」（人麿集Ⅱ・二四四）、「岩代の浜松が枝を引き結びまさしくあらばまたかへりこむ」（奥儀抄・二七二）、「神風やいすず川波数知らずすむべき御代にまたかへりこん」（新古今集・一八七四）。○よろづよまでに　万代までに。永遠に。
【所載】万葉集・一一一八（旧一一一四）吾紐乎　妹手以而　結八川　又還見　万代左右荷　ワガヒモヲイモガテモチテユフハガハマタカヘリミムヨロヅヨマデニ　わがひもをいもがてもちてゆふやがはまたかへりみむよろづよまでに／夫木抄・一一二四二
【参考】所載欄の万葉集では、「私の紐を妹の手でもって結う」という文脈で、初二句は「ゆふ」を導く序である。それを参考にすると、当該歌の初二句は「ゆふ」を導く序の働きをするらしいが、意味は不明。

一五四九　つくばねのみねよりをつるみなのがは恋ぞたまりてふちとなりける
やうぜいゐんの御せいイ

【異同】底本ハ行間ニ作者名小字補入。　やうせいゐんの御せいイ―やうせいゐんのさせいイ（桂）　恋そたまりて―こひそつもりて（桂）
【現代語訳】筑波の嶺より流れ落ちるみなの川の淵は深く、私の恋はたまりたまって深い淵となっていたのです。
【語句】○つくばね　筑波嶺。常陸国。筑波山。男体山と女体山から成る。○みねよりをつる　みねよりおつる。嶺より落つる。○みなのがは　筑波山から流れ出る川。現在の水無乃川。男女川とも表記する。常陸国。○恋ぞたまりて　所載欄の後撰集では「恋ぞつもりて」。○ふちとなりける　「ふち」は川の流れの深いところをいう。反対語は、浅いところをいう「瀬」。所載欄の後撰集では「ふちとなりぬる」。

【所載】後撰集・恋三・七七六／百人秀歌・一二／百人一首・一三
【参考】作者名「やうぜいゐん」は陽成院で所載欄の文献に一致する。後撰集の詞書には「釣殿のみこにつかはしける」とある。

一五五〇　つねよりもはるきにければさくら川なみのはなこそまなくよすらめ　つらゆき

【異同】ナシ
【現代語訳】春がやって来たから、さくら川には、普段よりも波の花が絶えず寄せていることだろう。
【語句】○つねよりも　常よりも。第二句でなく、第五句にかかる。○さくら川　常陸国。現在、茨城県中央部を流れる桜川。那珂川の支流。○なみのはな　白い波を花に見立てる例もあるが、ここは桜の花びらを浮かべた川の波。所載欄の後撰集では「花の波」とある。○まなくよすらめ　「まなく」はひまなく、すきまなくの意。絶えず寄せているだろう。
【所載】後撰集・春下・一〇七／井蛙抄・四七四
【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。しかし現存の貫之集にはない。

〔以上五首担当　平野〕

一五五一　きみこふと人しれねばやきのくにのをとなしがはのをとだにもせぬ

【異同】をとたにもせぬ—をとにもせぬ（御）、をとにたにもせぬ（桂）
【現代語訳】私があなたのことを恋い慕っていると、あなたには知られていないので、音信さえも無いのであろうか。
【語句】○人しれねばや　人には知られていないので。「しれ」は他動詞下二段の未然形、「ね」は打消の助動詞「ず」の已然形、接続助詞「ば」は順接確定条件、係助詞「や」は疑問の意。「山川のいしまがくれにすむ千鳥人しれねばや声の聞こえぬ」（古今六帖・四四五八）。なお、当該歌の「人」は、「君」と同じ人。○きのくにのをとなしがはの　紀の国の音無（おとなし）川の。同音の「をと（おと。音）」（ここは音信の意）を導く。「きのくに」は紀伊国。現在の和歌山県と三重県南部の地。「音無川」の所在地については諸説あるが、ここは、「紀

の国の……」とあり、和歌初学抄・八雲御抄に紀伊とするのにあう例。
【所載】ナシ

一五五二　人しれずぬれにしそでのかはかぬはあぶくまがはのみづにや有らむ

【異同】ナシ
【現代語訳】人に知られずに濡れた袖、その袖が乾かないのは、阿武隈川の水で、あの人に逢って（別れの）涙で濡れたのであろうか。
【語句】○人しれず　人に知られないで、ひそかに。○そでのかはかぬは　袖のかわかぬは。袖が乾かないのは。「袖」で涙を暗示する。○あぶくまがはのみづにや有らむ　阿武隈川の水で濡れたのであろうか。「阿武隈川」は、福島県中部を流れて宮城県南部で太平洋にそそぐ川。「あぶくま川」に、男女が逢う意味の「あふ」を掛ける。阿武隈川の「水」で濡れたというのは、男女が逢瀬をもったことを意味する。「帰り来る袖も濡るるをたまさかにあぶくま川のみづにやあるらん」（元良親王集・八九）と下句が一致する。
【所載】ナシ

一五五三　身にちかきなをぞたのみしみちのくのころものかはと見てやわたらむ

【異同】ナシ
【現代語訳】身に近き「衣」という名前を持つので頼りにしてきたよ。あれがあなただ、と見て逢いにいこう。
【語句】○身にちかきな　肌に近いという名。「名」は、下の「衣の川」を指す。「ただぢとも頼まざらなむ身に近き衣の関もありといふなり」（後撰集・一一六〇）も、「身にちかき」に陸奥の歌枕「衣の関」を詠みこむ。○たのみし　頼りどころにしていた。○ころものかはと見て　衣川と見て。あの人よと見て。「川」に「彼は」を掛ける。「思へども人めづつみの高ければかはと見ながらえこそわたらね」（古今集・六五九）。「衣川」は陸奥の歌枕。古くは、中尊寺のある関山の裾をめぐり、高館の下を流れて北上川にそそいだ。多賀城以北で奥蝦夷の国との境界をなす点で、重要な意味を持っていた。○わたらむ　渡ろう。「わたる」は、川を渡る意に、男女が相逢う、契る意を掛ける。助動詞「む」は意志を表す。
【所載】ナシ

一五五四　いにしへのかしこきひとのあそびけんよしのゝかはゝみれどあかぬかも

【異同】ナシ
【現代語訳】古の賢人たちが遊んだという吉野の川は、いくら見ても飽きることがないなあ。
【語句】○いにしへのかしこきひとのあそびけん　昔の賢き人が遊んだという。「賢き人」とは、知徳にすぐれる人。過去推量の助動詞「けん」は、ここは伝聞の意。○よしのゝかは　吉野川。吉野の宮滝あたりを流れる川。聖なる川と意識されていた。○あかぬかも　飽き足りないことだなあ。「かも」は詠嘆の意。
【所載】万葉集・一七二九（旧一七二五）古之　賢人之　遊兼　吉野川原　雖見不飽鴨　イニシヘノカシコキヒトノアソビケムヨシノノカハラミレドアカヌカモ　いにしへのさかしきひとのあそびけむよしののかはらみれどあかぬかも／夫木抄・一一〇〇四
【参考】所載欄の万葉集左注によれば、柿本人麿集にある。
当該歌の上句について、万葉集注釈書を見ると、「吉野は神仙境と考えられていたから、それらの神仙を思い浮かべてのことであろう」（金井清一『万葉集全注　巻第九』）という説明や、新訓「さかしきひと」は、「神意を正しく理解できる人。ここは、吉野に集う天武朝の「よき人」（万葉集・二七）を意識するか」とし、「あそび」は、「祭りが「アソビ」の場であり、宴は祭に起源をもつから、「アソビ」もその目的となる」（多田一臣『万葉集全解3』）と神事にからめる説明が見える。
吉野には、古く斉明天皇のときに吉野宮が造営されている。壬申の乱で大海人皇子（天武天皇）が拠点とした地で、後に吉野宮滝あたりに離宮も作られ、持統天皇は三十回余も行幸したという。その行幸は、季節を問わず行われていること、吉野宮と水分山（青根ケ峰）との位置関係から、国土の風雨が順調で五穀豊穣を祈願する目的であったかという。なお、水銀の産地である吉野を神仙境とする意識が斉明天皇のころにおこり、持統
・文武天皇の頃には神仙境吉野に言及する作品が懐風藻に見えると指摘される（和田萃『日本古代の儀礼と祭祀
・信仰　下』塙書房、一九九五年）。

一五五五　きみこずはたれにかみせんしら川のせゞにうづまく滝のしらたま

【異同】たれにかみせん―たれにみせまし（桂）

【現代語訳】あなたが来ないのなら誰に見せようか。白川のあちこちの瀬に渦巻く激流の中の、真珠のような玉を。
【語句】○こずは　来ないのなら。連語「ずは」は順接の仮定条件を表す。もし……ないなら、……なくては。「君来ずはたれに見せましわが宿の垣根に咲けるあさがほの花」（拾遺集・一五五）。○しらかは　白川。山城国の歌枕。比叡山と如意ケ岳の間の東山山中に源を発し、現在の京都市左京区を流れる川。古くは、現在の白川の流れとは異なり、三条通の北を東から西に流れて鴨川に合流していたという（日本歴史地名大系27『京都市の地名』平凡社）。○せゞに　瀬々に。多くの瀬に。「瀬」は川の水の浅いところ。○滝　瀑布ではなく、急流をさす。古今六帖・三帖「たき」一六九九番歌参照。○しらたま　白玉。特に真珠を指す。浅瀬の急流で、はじけ、渦巻く水が泡状の水玉を作るのを真珠に喩えた。「たきつせに誰れ白玉をみだりけむ拾ふとせしに袖はひちにき」（後撰集・一二三五）。
【所載】夫木抄・一二三八四

〔以上五首担当　斎藤・加藤〕

一五五六　みちのくにありといふなるたまがはのたまさかにてもあひみてしかな

【異同】ナシ
【現代語訳】はるかな陸奥にあるという玉川、ときたまにでもよいから逢いたいものだ。
【語句】○みちのくにありといふなる　陸奥にあるというふうに聞く。「なる」は伝聞の助動詞。「陸奥にありといふなる名取川無き名取りては苦しかりけり」（古今集・六二八）。○たまがは　玉川。山城、近江、摂津、紀伊、武蔵、陸奥にある六玉川のうち、陸奥の玉川は、宮城県塩竈市玉川地区から多賀城市を流れる野田の玉川を指す。「夕されば潮風こして陸奥の野田の玉川千鳥鳴くなり」（新古今集・六四三）。上三句は、「たまさか」を起こす序。○たまさか　機会が少ないさま。ときたま。ここでは逢瀬が稀であるさま。「紀の国や由良のみなとに拾ふてふたまさかにだに逢ひ見てしがな」（新古今集・一〇七五）。
【所載】新勅撰集・雑四・一三一二

一五五七　ちどりなくゐなのかはらを見るときはやまとごとゝもおもほゆるかな

【異同】ナシ
【現代語訳】千鳥が鳴いている猪名の河原を見ると、懐かしい倭琴とも思われることだ。
【語句】○ゐな　猪名。摂津国の歌枕。野、川、山、湊が詠まれる。「猪名川」は兵庫県東南部を流れて神崎川に合流する川。伊丹市、尼崎市を流域とする。「しながどり猪名野を来れば有間山夕霧立ちぬ宿りはなくて」（万葉集・一一四四〈旧一一四〇〉）の歌は、旅人の実感詠として後代に大きな影響を及ぼしたが、当該歌も旅で故郷を思っている趣がある。当該歌は「猪名」に「千鳥」が詠み合わされる早い例で、後代では、「風寒み夜や深けぬらん息長鳥猪名の湊に千鳥しば鳴く」（堀河百首・九八六）がある。○やまとごと　「倭琴」か。「ゐなのかはらを見る」という視覚表現から何故「倭琴」が連想されるのか解しにくい。所載欄の夫木抄には第四句に「やましなもとが（山科のあたり、山科の居所）」とあって、意味が通りやすいが、「倭琴人にありせばいかばかりことなつかしきことちきかまし」（古今六帖・三三九〇）、「誰ぞこの声なつかしき倭琴ねざめわびしき人のきかくに」（古今六帖・三三九一）の如く、「倭琴」は懐かしさを感じさせる音色とされ、「倭琴」の別名「東琴」「あづま」「つまこと」は、「妻」を連想させる措辞とみることもできるため、本文通り「やまとごと」として訳した。
【所載】夫木抄・六八六八

一五五八　つくしなるおほかたがはのおほかたはわれひとりのみわたるうきせか

【異同】ナシ
【現代語訳】筑紫にあるおおかた川、だいたいのところ自分一人だけがつらい思いをして世を渡っていることだ。
【語句】○おほかたがは　おおかた川。所在不詳。用例はこの歌のみで、他に見られない。所載欄の夫木抄は「おほわたり川」とするが、古今六帖に拠るという記載がある。「つくしなるおほかたがはの」は「おほかた」を導く序。○おほかたは　副詞。総じて。だいたいのところは。「寝ても見ゆ寝でも見えけりおほかたは空蝉の世ぞ夢には有りける」（古今集・八三三）。○わたる　瀬を「渡る」に世の中を「渡る」を掛ける。○うきせか　憂き瀬か。つらい立場であることよ。「せ」は境遇、立場の「瀬」に川の「瀬」を掛ける。「瀬」「渡る」は「川」の縁語。「思ひ出でのうき瀬はいつかわたり川心やすくは渡り果つべき」（忠岑集・八六）。「か」は詠嘆の終助詞。

【所載】夫木抄・一一一一一

一五五九　ゆふだすきかけても人をたのまねどなみだはかものかはにこそたて

【異同】ナシ
【現代語訳】神官が木綿襷を掛ける、少しもあの人のことを頼みにしていないけれど、私の涙は波となって、賀茂の川面にこそ立っているよ。
【語句】○ゆふだすき　木綿（ゆふ）で作った襷。神事に奉仕する時に、袖をかかげるために掛けることから、「かけ（「かく」の連用形）」にかかる枕詞。「ちはやぶる賀茂の社の木綿襷一日も君をかけぬ日はなし」（古今集・四八七）、「はつかにも思ひかけてはゆふだすき賀茂の川浪立ちよらじやは」（順集Ⅰ・一六四）。○かけても　少しも、いささかも。あとに否定の表現を伴う場合は、まったく予想もしない気持ちを表す。ゆふだすきを掛ける「かけ（掛け）」に「かけても」の「かけ」を掛ける。○なみだはかものかはにこそたて　涙が波となって賀茂の川面に立っている。「たて」は「こそ」の結びで已然形。心中で流す見えない涙の代わりとして、賀茂川が、波立っている。涙の「なみ」に賀茂の川「なみ（波）」を掛ける。「涙が立つ」という表現はあまりみられないが、「先に立つ涙を道のしるべにて我こそゆきていはまほしけれ」（後拾遺集・六〇三）など、「先立つ」とした例があり、そうした連想から、隠れた涙が目に見えるような形ではっきり現れて波となったとする。「ゆふだすき」は「かも」の縁語。
【所載】古今六帖・第三帖「かは」一五九一

一五六〇　みよしのゝあきつの川のよろづよにたゆるときなくまたかへりみむ

【異同】ナシ
【現代語訳】吉野の秋津の川が万代に絶える時がないように、絶えずやって来てまたこの光景をみよう。
【語句】○あきつの川　秋津の川。秋津のあたりを流れる吉野川の異名。秋津は、奈良県吉野郡吉野町宮滝から、対岸の御園にかけての一帯で、記紀に雄略天皇の蜻蛉（あきつ）に因む地名起源説話が見られる。○かへりみむ　また戻ってきて見よう。「岩代の浜松が枝を引き結びま幸くあらばまたかへり見む」（万葉集・一四一〈旧一四一〉）、「巻向の穴師の川ゆ行く水の絶ゆることなくまたかへり見む」（万葉集・一一〇四〈旧一一〇〇〉）

など用例が多い。
【所載】万葉集・九一六（旧九一一）三芳野之　秋津乃川之　万世尓　断事無　又還将見　ミヨシノノアキヅノカハノヨロヅヨニタユルコトナクマタカヘリミム　みよしののあきづのかはのよろづよにたゆることなくまたかへりみむ／夫木抄・一一二〇八／人麿集Ⅱ・二四四／和歌初学抄・二二一
【参考】所載欄の万葉集には、養老七（七二三）年五月、元正上皇の吉野御幸の折に笠金村が作った歌の一首とある。

〔以上五首担当　中野〕

一五六一　もゝしきのおほみやちかきみゝと川ながれて君をきゝわたるかな

【異同】ナシ
【現代語訳】（ももしきの）内裏に近く、「耳ざとい」という名をもつ、みみと川の流れ。私はひとりでに泣かれて、あなたの噂を聞き続けることですよ。
【語句】○もゝしきの　内裏を表す語「大宮」にかかる枕詞。「ももしきの大宮ながらやそしまを見る心地する秋のよの月」（拾遺集・一一〇六）。○みゝと川　山城国の歌枕。和歌初学抄、八雲御抄に見える。拾芥抄には「朱雀門前、二条南」とあり、平安京の朱雀門の前を流れていたらしい。「みみと」はいち早く物事を聞きつける「耳敏し」の意がある。枕草子六十段「河は」にも「みみと川、又も何事を、さくじり聞きけんとをかし」とある。「みみと川きけとおぼしくおほぬさにかく言ふことを誰かたのまむ」（躬恒集・四三八）。○ながれて　上三句は「ながれて」を導く序詞。「ながれて」は、川が流れる意の「流れて」に、自然に涙が出てくる意の「泣かれて」を掛ける。「冬河の上はこほれる我なれや下にながれてこひわたるらむ」（古今集・五九一）。○きゝわたるかな　聞き続けることですよ。「わたる」は、その状態が長く継続するさまを表す。「郭公なつきそめてし甲斐もなく声をよそにもききわたるかな」（後撰集・九一二）。
【所載】夫木抄・一一二七五
【参考】歌枕名寄・六七二三番には「御言河　六帖」の題で「をばすての月をもめでじみこと河ながれて君が聞きわたるべく」とあり、新編国歌大観の解題では、当該歌と一五六三番歌が混合したものである可能性を指摘している。

一五六二　ミマホシミコシラシシルク吉ノ川音ノサヤケサミルニトモシク

【異同】底本、御所本、桂宮本、次ノ一五六三番歌トトモニ片仮名デ行間ニ補入シ、ソノ二首ノ下ニ「イ」ト記ス。　ミルニトモシク―見るにともして（大）

【現代語訳】［第二句は万葉集によって解した。］見たくて来た甲斐がある、吉野川の川音のさわやかなことよ。見るとますます心がひかれる。

【語句】○ミマホシミ　見まほしみ。見たくて、見たいと思って。「うつたへにまがきの姿見まほしみ行くとは妹を見にこそきつれ」（古今六帖・一三五三・まがき）。「み」は形容詞及び形容詞型活用の助動詞の語幹に付き、原因理由を表す。「……ので」「……であって」。万葉集の表記では「欲見」。「みまほしみ」の訓も見えるが、万葉代匠記以降は「みまくほり」の訓で解釈されている。古今六帖には当該歌を含めて七例「みまほしみ」の用例があり、そのうち五例が万葉集にも見える歌。○コシラシシルク　「来しらししるく」と考えられるが、不審。所載欄の万葉集では「こしくもしるく」で、「来た甲斐があって」の意。現代語訳は万葉集によった。「しるく」は、明瞭で、顕著に感じ取れるさまを表す。「梅の花にほふ春べはくらぶ山やみに越ゆれどしるくぞ有りける」（古今集・三九）。○吉ノ川　吉野川。大和国の歌枕。万葉時代の吉野は、山よりも川が圧倒的に多く詠まれた。○音ノサヤケサ　音のさやけさ。音のさわやかさ。「まがねふく吉備の中山おびにせる細谷河の音のさやけさ」（古今集・一〇八二）。○トモシク　ともしく。対象に心がひかれる、心が飽きない、の意。「……山見れば　見のともしく　川見れば　見のさやけく……」（万葉集・四三八四〈旧四三六〇〉）。

【所載】万葉集・一七二八（旧一七二四）欲見　来之久毛知久　吉野川　音清左　見二友敷　ミマクホリコシクモシルクヨシノガハオトノサヤケサミルニトモシキ　みまくほりこしくもしるくよしのがはおとのさやけさみるにともしく

一五六三　ヲバステノ月ヲシメデジミヽト川ソコヲノミコソ忍ビワタラメ

【異同】コノ歌、片仮名デ行間ニ補入。一五六二番歌参照。　ソコヲノミコソ―コヲノミコヲノミコソ（御）

【現代語訳】（心が慰められないから）姨捨山の月は鑑賞するまい。耳聡いという名を持つみみと川、そこをこっそり渡るばかりとしよう。（耳聡い人に知られないよう、あなたにこっそりと逢おう。）

【語句】○ヲバステノ　姨捨の。姨捨山は信濃国の歌枕。現在の長野県更級郡にある冠着山（かむりきやま）の

こと。「わが心なぐさめかねつ更級やをばすて山にてる月を見て」（古今集・八七八）で有名であり、「月」や「慰めかぬ」とともに詠まれた。大和物語一五六段や今昔物語集巻三十第九では、この歌を棄老伝説と結びつけている。〇ミヽト川　みみと川。一五六一番歌参照。〇ソコ　川の「底」と指示代名詞「そこ」の掛詞。「底」「渡る」は「川」の縁語。「涙川そこにも深き心あらばみなわたらんと思ふなるべし」（斎宮女御集・一〇七）。〇忍ビワタラメ　こっそり渡ろう。川は男女の逢瀬の障害を表し、渡ると恋しい人に逢えるということ。当該歌では「耳聡い」という意を持つ川なので、人に知られないようにこっそり渡るのである。

【所載】夫木抄・一〇九六五

【参考】姨捨山は信濃、みみと川は山城の歌枕。歌意の上で上句と下句に不整合がある。歌枕名寄六七二三番歌は、初・二句まで当該歌と一致する。一五六一番歌参考欄参照。

一五六四　をとにのみきかましものを音羽がはわたるとなしに見なれそめけむ　かねすけ

【異同】ナシ

【現代語訳】評判に聞くばかりであればよかったのになあ。音羽川を渡ったわけでもないのに、どうして水馴れ――見馴れ、つまりあなたと深い関係になりはじめてしまったのだろう。

【語句】〇をとにのみ　音（おと）にのみ。評判としてばかり。「音」は、噂、評判の意。「音にのみ声をきくかなあしひきの山下水にあらぬものから」（後撰集・八二三）。〇音羽がは　和歌に詠まれる「音羽川」は、山科と西坂本と清水寺境内の三ヶ所にあるが、当該歌は「音」と言いたいために詠みこまれたものか。噂に聞く意に掛けて詠まれる。「音羽川おとにのみこそ聞きわたれすむなる人のかげをだに見で」（九条右大臣集・四一）。〇みなれそめけむ　みなれ初めけむ。みなれ初めてしまったのだろうか。「みなれ」は、「水馴れ」と「見馴れ」の掛詞。「見馴れ」は幾度も会って親しくなること。「うち渡し世に許しなき関川をみなれそめけむ名こそ惜しけれ」（源氏物語・宿木巻）。

【所載】古今集・恋五・七四九／兼輔集Ⅲ・七七／兼輔集Ⅳ・七四

【参考】作者名「かねすけ」は、所載欄の文献に一致する。

一五六五　かりにてもわかるとおもへばかみな川せゞのちどりのみだれてぞなく

【異同】わかるとおもへは―わたるとおもへは（大）
【現代語訳】かりそめにでも別れると思うと、私は、かみな川の瀬々の千鳥のように乱れて泣くことです。
【語句】○かりにても　かりそめにでも。一時的にせよ。「忘草名をもゆゆしみかりにても生ふてふ宿はゆきてだに見じ」（後撰集・一〇五〇）。○わかるとおもへば　別れると思うと。「たへきれで別ると思へばむばたまの寝（い）こそ寝られねいとのよるよる」（千穎集・六五）。○かみな川　不明。所載欄の夫木抄や、歌枕名寄には「紙屋河」とある。紙屋川は山城国の歌枕。鷹峰の山中に発して、北野神社と平野神社の間を流れ、桂川に注ぐ。平安時代には川のほとりに紙屋院があったことに由来する。○ちどり　チドリ科の鳥の総称。多数群れる小型の鳥。鳴き声が和歌に詠まれた。鳴き乱れるさまを詠んだ歌に「いとどいとど物思ひをればかはちどり野にも山にも鳴き乱れたり」（古今六帖・四四六一・千どり）がある。
【所載】夫木抄・一〇九九〇

〔以上五首担当　犬養悦・諸井彩子〕

一五六六　こゝろにもあらでわかれしあひづ川うき名をみづにながしつる哉

【異同】ナシ
【現代語訳】不本意ながら仕方なく別れてきた逢瀬であったのに、つらい噂を世間に流してしまったなあ。
【語句】○こゝろにもあらで　わが心にもあらずして。自分の本意でなく仕方なしに。「で」は接続助詞、活用語の未然形に付いてこれを打消し、下の語へつづける。○あひづ川　八雲御抄は所在を陸奥としているが、不詳。ここは特定の川の名ではなく、「逢ひ」を言うための語であろう。「わかれしあひづ川」で、「逢ひ」のはずであったのに「別れ」た、と言ってみせたか。○うき名をみづにながしつる哉　恋のつらい評判を世間に立てられてしまったなあ。「みづ」「ながし」は「川」の縁語。
【所載】ナシ

一五六七　めなしがはみゝなしやまのみゝきかずありせば人をうらみざらまし

【異同】ナシ

【現代語訳】目無し川とか耳無し山とか言うけれど、それらの名のように、もしわたしの耳が聞こえず、あの人のことを聞くことがなかったら、（こんなに切ない思いをして）あの人を恨むこともなかったろうに。
【語句】○めなしがは　不詳。夫木抄はこの歌を例歌として所在を大和としているが、根拠不明。ここは「目無し」を言うための語であろう。「見ればこそ色にもふけれめなし川そこと教へよわれ渡りなん」（新撰和歌六帖・九九五）○みゝなしやま　耳成山。大和三山の一つ。奈良県橿原市に所在。ただしここは、初句の「目無し」と並べて「耳無し」を言うための語であろう。○みゝきかずありせば　もし耳が聞こえないのであったならば。「せば」は、末句の「まし」に呼応して事実に反することを仮想し、その結果を推測してみせる言い方。傍記に従って「みずきかずありせば」であった方が、初・二句の「めなし」「みゝなし」とはよく整合する。○人をうらみざらまし　あの人を恨むようなこともなかったろうに。「人」は恋の相手をさす。
【所載】夫木抄・一一二四八

一五六八　ふちせともなにかたのまんいもせ川こゝろはせにしよらむとおもへば

【異同】ナシ
【現代語訳】いもせ川の淵だとか瀬だとか、なんでそんなものを頼みにしようか。わたしの心は、もうあの人に寄ろうと思い定めているのだから。
【語句】○ふちせ　淵と瀬。第三句「いもせ川」の縁で言われた語。恋の思いの深い浅いの意もこめたか。○なにかたのまん　なんで頼みにしようか、しない。「か」は反語。○いもせ川　能因歌枕は所在を大和とする。「いもせ山」ならば大和と紀伊に、いずれも吉野川をはさんで両岸に相対してある。その「いもせ山」のあいだを流れる川をさして「いもせ川」と言ったものか。ただしこの歌では、男女の間柄を表わす「いもせ」を言うための措辞であろう。「身のならむ淵瀬も知らずいもせ川おりたちぬべきこころのみして」（小野篁集・五）。○こゝろはせにしよらむとおもへば　わたしの気持はもうあの人に寄ろうときめているのだから。「せ」は川の「瀬」にいもせの「せ（背）」を掛けた。いもせの「せ（背）」は、女性の側から夫あるいは恋人を親しんで言う語。「し」は強意。「ふちせ」「瀬」は「川」の縁語。
【所載】ナシ

一五六九　世中はなぞやまとなるみなれ（セイ）がはみなれそめずぞあるべかりける

【異同】ナシ
【現代語訳】この世の恋の道では、なぜあの大和にあるみなれ川の名のように、人を見馴れそめることになるのだろう。（こんなつらい思いをするのだったら）見馴れそめずにいるべきだったのに。
【語句】○世中　よのなか。ここは男女の仲のこと。○みなれがは　能因歌枕は大和と薩摩両方にこの川の名をあげ、夫木抄はこの歌を例歌として所在を大和としている。「みなれ」の語をくり返して第四句の「みなれ（見馴れ）」を導き出すための措辞。「見馴れ」は、見ることによって対象になじむこと。「見馴れ」に川の縁で「水馴れ」を掛けたか。「いそげども渡りやられずみなれ川みなれし人の影やとまると」（堀川百首・一三九二）。
【所載】新勅撰集・雑四・一二七三／夫木抄・一一二七一

一五七〇　いのりつゝたのみぞわたるはつせ河うれしきせにもながれあふやと

【異同】ナシ
【現代語訳】心に祈りつつ期待して初瀬川を渡ることだ。もしや、うれしい逢瀬があるのではないかと。
【語句】○たのみぞわたる　「たのみわたる」は、期待しつづけるの意の複合動詞。その「わたる」に、川を「渡る」を掛けた。○はつせ河　初瀬川。大和国の川。現奈良県桜井市初瀬町、長谷寺のある初瀬谷を流れ下って末は大和川に注ぐ。○うれしきせ　思う人に逢える嬉しい機会。川の「瀬」に機会の意の「せ」を掛ける。○ながれあふやと　もしかしたら逢うことができるのではないかと。川が流れ「合ふ」ことに恋の「逢ふ」を掛ける。「わたる」「せ」「ながれ」は「河」の縁語。
【所載】夫木抄・一〇九三四
【参考】後撰集巻十恋二の部には、「こころみになほおりたたむ涙河うれしきせにも流れあふやと」（六一三）という歌があり、下句がこの歌と同じである。

〔以上五首担当　山下〕

一五七一　よの中をいとななげ（おもひイ）きそあすか川あすかのかはゝふち瀬（あイ）なりけり

【異同】ナシ

【現代語訳】世の中をひどく嘆きなさるな。あすか川は昨日の淵が今日は瀬となるほど速い変わりようだが、世の中だってその通り無常なのだから。悪いときもあれば良いときもありますよ。
【語句】○よの中　世間。男女の仲。○いとななげきそ　ひどく嘆きなさるな。「な＋動詞連用形＋そ」はその動作の禁止の意をあらわす。○あすか川　大和国の歌枕。奈良県高市郡竜門山地の高取山付近に源を発して北流、奈良盆地のほぼ中央で大和川に注ぐ。平安時代は淵瀬の定まらない川として、人の世の変わりやすさの喩えに用いられた。「世の中は何か常なるあすか川昨日の淵ぞけふは瀬になる」（古今集・九三三）。「あすか川あすかのかはゝ」は「あすか」の繰り返しで、調子を整えたもの。○ふち瀬なりけり　昨日淵だった所が今日は瀬となるほど、変わりやすいものだったのだなあ。「けり」は過去に実現していたことに気がついた驚きや、詠嘆の気持ちを表す。
【所載】ナシ

一五七二　みかのはらわきてながるゝいづみがはいつみきとてか恋しかるらむ

【異同】ナシ
【現代語訳】みかの原から湧き出して、いつしか草原を分け流れるいづみ川。その「いづみ川」の名のように、いつあの人を見たというのでこのように恋しいのだろうか。
【語句】○みかのはら　山城国の歌枕。現在の京都府木津川市、恭仁（くに）京跡のある地区。木津川峡谷部の西端に近い木津川北岸の台地。○わきてながるゝ　湧き出して、みかの原を分けながれる。「湧き」に「分き」を掛けた。○いづみがは　山城国の歌枕。京都府木津川市加茂から木津にかけて流れる木津川の古称。○いつみきとてか　「いづみ」に「いつ見き」を掛けた。上三句は「いつ見き」を言い出すための序詞。同音の繰り返しで、調子をよくしている。
【所載】新古今集・恋一・九九六／俊成三十六人歌合・三九／時代不同歌合・九五／百人秀歌・三六／百人一首・二七／和歌初学抄・二三一／詠歌一体・四七／三五記・二二七

一五七三　たび人のまきながすといふにふかはのことはかよへどふねぞかよはぬ

【異同】ナシ

【現代語訳】飛騨人が真木を伐って流すというにふ川は、言葉は往来するけれど、舟は通って来ないなあ。
【語句】○たび人　旅人が真木を流すというのは不審。異同はないが、所載欄の文献ではすべて「ひた人」であるので「ひだ人（飛騨人）」として訳す。○まき　真木。杉・檜などの良質の木。特に檜の異名。○にふかは　「飛騨人」であれば岐阜県大野郡丹生川村の小八賀川か。大和国吉野郡という説もある。○ことはかよへど　言葉は往来するけれど。
【所載】新千載集・恋二・一一八九／万葉集・一一七七（旧一一七三）斐太人之　真木流云　尓布乃河　事者雖通　船曽不通　ヒダヒトノマキナガステフニフノカハコトハカヨヘドフネゾカヨハヌ　ひだひとのまきながすといふにふのかはことはかよへどふねぞかよはぬ／夫木抄・一〇九四七／古来風体抄・七九

一五七四　はりまがたうみにいでたるしかま川たえん日にこそわがこひやまめ

【異同】ナシ
【現代語訳】播磨潟から海に流れ出ている飾磨川。その川の流れが絶えるとしたら、その日にこそ我が恋は止むことだろう。そんなことはありえないが……。
【語句】○はりまがた　播磨潟。播磨国の歌枕。現在の兵庫県の明石から西の海岸の総称。○しかま川　飾磨川。播磨国の歌枕。今の姫路市を流れる船場川の旧称。○たえん日にこそ　（流れが）絶えるような日があるとしたら、その日にこそ。「ん」は推量の助動詞「む」の連体形。ここではある事柄を仮に想定して推量をしている。○わがこひやまめ　私の恋は止むだろう。「め」は推量の助動詞「む」の已然形。「こそ」の係りを受けて結びの已然形になっている。
【所載】新千載集・恋二・一二〇四／万葉集・三六二七（旧三六〇五）和多都美乃　宇美尓伊弖多流　思可麻河伯　多延無日尓許曽　安我故非夜麻米　ワタツミノウミニイデタルシカマガハタエムヒニコソアガコヒヤマメ　わたつみのうみにいでたるしかまがはたえむひにこそあがこひやまめ／夫木抄・一一二九七、一一二九八／和歌初学抄・二三二

一五七五　みつかはのふちせもしらずさほさしてかりのころもでほす人もなし（ころもでしぼみイ）（なしにイ）

【異同】ナシ

【現代語訳】みつ川のどこが淵か瀬かも知らずやたらに棹をさして、狩衣の袖がびしょ濡れになってしまった。乾かしてくれる人もいない。
【語句】○みつかは　滋賀県大津市を流れる川か。「とにかくに身にしむものは神垣やひえの山風みつの川波」（拾玉集・一四八七）。○ふちせもしらず　どこが淵か瀬かも分からずに。○さほ　さを。棹。船を推し進める棒。○かりのころもで　狩衣（かりぎぬ）の袖。狩衣は旅や狩りをする時の衣服で、袖は後身だけ付け、前身は離れている。袖と袴には括り紐が付いている。
【所載】ナシ
【参考】類歌として「みつかはの淵瀬もおちずさでさすに衣手ぬれぬ干す児はなしに」（万葉集・一七二一〈旧一七一七〉）がある。

〔以上五首担当　林〕

一五七六　いもせ川なびくたまものみがくれてわれはこふとも人はしらじな

【異同】ナシ
【現代語訳】妹背川になびく玉藻が水に隠れて見えないように、秘かに私が恋い慕っているなんて、あの人は知らないでしょうよ。
【語句】○いもせ川　一五六八番歌参照。○たまも　美しい藻。○みがくれて　水中に隠れて。「水隠れて」の意だが、ここは「身隠れて」の意も掛けているのであろう。初・二句は「身隠れて」を導く序。
【所載】続後撰集・恋一・六三六

一五七七　すゞか川をとにきゝてやよをばへんとしふるごとになるゝよもなく

【異同】ナシ
【現代語訳】あなたのことを噂に聞きながら、私は生涯を送るのでしょうか。年月を過ごすにつれて親しくなるということも特になく。
【語句】○すゞか川　伊勢国の歌枕。近江国と伊勢国との境にある鈴鹿山脈に源を発し、伊勢湾に注ぐ。ここは「音に聞く」の枕詞的用法か。○としふる　「年経る」に「振る」を掛ける。○なるゝ　「慣るる」に「鳴る」

を掛ける。「音」「振る」「鳴る」は「鈴鹿川」の「鈴」の縁語。
【所載】ナシ

一五七八　いなばがはいなとしつゐにいひはてばながれてよにもすまじとぞ思

【異同】ナシ
【現代語訳】もしあなたがとうとう「否」と言い切ってしまったら、私は涙を流し、決してこの世に住むまい、生きてはいけないだろうと思います。
【語句】○いなばがは　夫木抄に「いなば河　因幡」とある。「いな」を導くための枕詞。○いなとしつゐにいひはてば　否とし遂（つひ）に言ひ果てば。もし、否と遂に言い切ってしまったら。「し」は強意の副助詞。「ば」は順接仮定条件を示す接続助詞。一般に副助詞「し」が用いられると、「し……ば」の形になることが多い。○ながれて　「流れて」に「泣かれて」を掛けている。「泣かれて」の「れ」は自発。○すまじとぞ　「澄まじ」に「住まじ」を掛ける。「流る」「澄む」は「川」の縁語。
【所載】夫木抄・一〇九二二

一五七九　タナカヾハマサラバマサレマコマノヽコマノヽ□○フネナラナクニ

【異同】底本ハ行間ニ歌本文小字補入。　タナカヽハ―玉川は（御・桂・大）　コマノヽ□○―コマノヽ殿ノ（御・桂）、こまのゝ原の（大）
【現代語訳】古今六帖・第三帖「かは」一五四三番既出。
【語句】○タナカヾハ　誤写であろう。和歌に「田中川」の用例はない。一五四三番歌では「たまがはゝ」。○コマノヽ□ノ　底本は□の部分、字形不明だが、あるいは「瓜」か。「山城の狛のわたりの瓜作り」（催馬楽・山城）。
【所載】古今六帖・第三帖「かは」一五四三番既出
【参考】同じ歌がすでに同じ「かは」の項に見える。補入の誤りか。

一五八〇　わすれがはよくみちなしときゝてこそいとふのかみもたちはよりけれ

【異同】ナシ
【現代語訳】忘れ川は避ける道がないと聞いて、「厭うの神」も立ち寄ったことだ。忘れることは避けられないので、そこに立ち寄ればいやなことも忘れられるはずだ。
【語句】○わすれがは　忘れ川。夫木抄に「わすれ河　甲斐」とある。「甲斐の国にまかりたりしほどに、頼みはべりし女、人に名立ち侍りけるを聞きて、帰りまうできて／忘れ川またや渡らぬうきことの忘られずのみ思ほゆるかな」（忠岑集・八三）。○よくみちなしと　避ける道がないと。「よく」は「避く」。四段活用、連体形。○いとふのかみ　未詳。厭うことにかかわりのある神の意か。
【所載】夫木抄・雑六・一〇九七九

〔以上五首担当　久保木〕

一五八一　ひろせがは袖つくばかりあさきをやこゝろふかめてわれはおもはむ

【異同】ナシ
【現代語訳】広瀬川は袖が水に漬くくらい浅い、そのように、あの人の心が浅いのを、私は心を深くして思っているのだろうか。
【語句】○ひろせがは　広瀬川。大和国の歌枕。広瀬神社（現在の奈良県北葛城郡河合町）の東方を流れる川。葛城川の下流、もしくはそれに広瀬神社の辺りで合流する曾我川などに比定される。○袖つくばかりあさき　袖が水に漬かって濡れるくらい浅い。歩いて渡れる浅さで、徒渉すると長く垂れ下がった袖が水面に漬く程度の水深しかないということ。「沢田川袖つくばかりや浅けれどはれ浅けれど恭仁の宮人や高橋わたす」（催馬楽）。「あさき」は川の水深が浅いことに、相手の情が浅いことを掛け、初・二句は、「あさき」を導く序。「安積香山影さへ見ゆる山の井の浅き心を我が思はなくに」（万葉集・三八二九〈旧三八〇七〉）。○こゝろふかめて　思いを深くして。深く思って。「深めて」は「浅き」とともに「川」の縁語。「……わたつみの　沖を深めて　思ひてし思ひは今は……」（古今集・一〇〇一）。
【所載】続古今集・恋二・一一二五／万葉集・一三八五（旧一三八一）広瀬川　袖衝許　浅乎也　心深目手　吾念有良武　ヒロセガハソデツクバカリアサキヲヤココロフカメテワガオモフラム　ひろせがはそでつくばかりあさきをやこころふかめてわがおもへるらむ／夫木抄・一一三〇六

【参考】「広瀬川袖つくばかりあさき」という措辞は、後世に、「広瀬川袖つくばかり浅きこそたえだえ結ぶ契りなりけれ」（秋篠月清集・一六三）などと用いられ、「広瀬川袖漬くばかり浅けれど我は深めて思ひ初めてき」（金槐和歌集・四六二）という影響歌もある。

一五八二　思ふともをとなしがはのをとなせそしたには水のたえぬ物から

【異同】ナシ
【現代語訳】たとえどんなに思っていても、音無川のように音を立てないでおくれ。心の底では、川の水が絶えることのないように、絶えず思い続けているけれど。
【語句】○をとなしがは　一五五一番歌参照。当該歌では、「をと（おと）なせそ」を導きだすための措辞。○をとなせそ　音（おと）を立てないでおくれ。「たきつ瀬はただけふばかり音なせそ聞く人はなに思ひもぞます」（寛平御時菊合・四）。ここでは、相手に対して言っているものとして、あなたから音信があると他人に知れてしまうから、もしくは、恋の物思いが増してしまうから、便りを寄越したりしないでくれ、と言ったものと見て解釈した。あるいは、我と我が心に対して、恋の思いが他人に知られることのないようにしてくれという意か。○したには水のたえぬ物から　音がしない音無川も底では水が絶えることなく流れているように、心の奥ではひそかに思い続けているけれど。
【所載】ナシ
【参考】「しのびて懸想し侍りける女のもとに遣はしける」という詞書のある「音無の川とぞつひに流れける言はで物思ふ人の涙は」（拾遺集・七五〇）のように、当該歌は、音無川に寄せて、忍ぶ恋の思いを詠んだ歌。

一五八三　つくりがはたゆることなくおもふにもひとひもきみをいみぞかねつる

【異同】ナシ
【現代語訳】つくり川の流れは絶えることがない、そのように絶えず思い続けているにつけても、一日もあなたを忌み嫌うことなどできないでいます。
【語句】○つくり川　未詳。絶えず新しくつくりだすという語感により、絶えることがないのを強調するか。「つくり川」も、傍記に見える「いつは川」も、用例が管見に入らない。所載欄の人麿集Ⅱには「つくも河」、人麿

集Ⅲには「つくはかは」、人麿集Ⅳには「へくり河」とある。いずれにしても、川の流れが絶えないということから「絶ゆることなく」を導いている。○いみぞかねつる　忌み嫌いかねている。忌み嫌ったり避けたりすることはできないでいる。「ぞ」は強意の係助詞。「独り寝のわびしきままに起きゐつつ月をあはれと忌みぞかねつる」（後撰集・六八四）。

【所載】人麿集Ⅱ・三七九／人麿集Ⅲ・四八五／人麿集Ⅳ・八〇

【参考】『校證古今歌六帖』は、参考歌として次の万葉歌を挙げる。「須磨の海人の塩焼き衣（きぬ）のなれなばか一日も君を忘れて思はむ」（九五二〈旧九四七〉）。

一五八四　ながれてもたえじとぞおもふおもひ川いづれかふかきこゝろなりける

【異同】ナシ

【現代語訳】泣かずにはいられなくても絶えることはあるまいと思う。私のこの思いは、流れ続けることはあっても絶えることはないと思う思川の水と較べて、いったいどちらが深い心だったのだろう。（思川の水よりも深く思う私の心だったんだなあ。）

【語句】○ながれても　流れても。「泣かれても」を掛ける。後者の「れ」は自発。「水の泡の消えてうき身と知りながらながれてもなほたのまるるかな」（友則集・五二）。○たえじ　絶えることはあるまい。絶えないだろう。川の流れが絶えないであろうことと、恋の思いや関係が絶えることはあるまいということを重ねて言う。○おもひ川　思川。恋などの思いを川に喩えた語。「思ひがは絶えずながるる水の泡のうたかた人にあはで消えめや」（後撰集・五一五／伊勢集・三〇四、四五六）。なお、福岡県や栃木県に地名として実在するが、それらは後世のものである。○いづれかふかき　いったいどちらが深いか。川の水とどちらが深いかと較べることによって、自分の思いの深さを表す。

【所載】ナシ

一五八五　トシフレド袖ヒツ川ノウヅマキニ恋しキ人ノカゲナカリケリ

【異同】底本、片仮名ニ平仮名・漢字マジリデ行間ニ小字補入シ、一行書キ。桂宮本ニハ、ナシ。

【現代語訳】長年の年月がたつけれど、涙で袖が濡れるばかりで、櫃川の渦巻には恋しい人の姿はなかったこと

だ（恋しい人には逢えなかったよ）。
【語句】○トシフレド　長年たつけれど。長い年月がすぎたけれど。○袖ヒツ川　「ひつ」は、袖が濡れる意の「袖ひつ」の「ひつ」と、「櫃川」の「櫃」とを掛ける。櫃川は、山城国の歌枕。京都市山科区の北東部に源を発し、宇治川に注ぐ山科川の古称。「都出でて伏見を越ゆる明け方はまづうち渡すひつ川の橋」（新勅撰集・一二六八）。○恋しキ人ノカゲナカリケリ　原文では「し」だけが平仮名になっている。恋しい人の姿はなかったことだよ。川の渦巻には人の姿が映らないということに寄せて、恋しい人に逢えないでいることを言う。
【所載】古今六帖・第三帖「かは」一五九四／夫木抄・一一三〇九

〔以上五首担当　長戸〕

一五八六　あはれとはおもひわたれどもがみがはふちをもせをもえこそさだめね

【異同】ナシ
【現代語訳】恋しく思い続けているけれども、最上川の淵瀬を定めることができないように、あの人との仲をはっきりさせることもできないことだ。
【語句】○あはれとは　あの人が恋しいとは。「あはれ」は恋しく思うことをいう。○おもひわたれど　思い続けているけれども。「わたれ」は「かは」の縁語。○もがみがは　最上川。出羽国を流れる川。現在の山形県の新庄盆地や庄内平野を経て、日本海に流入する。○ふちをもせをも　淵をも瀬をも。川の深い所も浅い所も。ここでは、定めないもの、はっきりしないものの喩えとして言っている。「もがみがはふちをもせをも」は「えこそさだめね」を導く序詞。○えこそさだめね　はっきりと定めることができない。
【所載】ナシ

一五八七　おほゐがはをろすいかだのいかなればながれてつねに恋しかるらむ

【異同】ナシ
【現代語訳】大堰川に下ろす筏がどうして流れているのか、同じように、どういうわけで自然と涙がこぼれて、常にあの人を恋しく思うのだろうか。
【語句】○おほゐがは　大堰川。桂川のうち、嵐山付近について言う。大きな堰が設けられていたことによる名。

紅葉の名所として知られる。○をろすいかだの　おろすいかだの。大堰川の筏は屏風歌の画題によく取り上げられた。「いかなれば」の「いか」を導く序詞。○ながれてつねに　「ながれて」は大堰川が「流れて」に「泣かれて」を掛け、泣かれて常に、の意をこめる。
【所載】新後拾遺集・恋一・九九五

一五八八　いはたきにいそさへとよむうぶがはのあかたうたひて我おもはなくに

【異同】うふかはの―こふ川の（大）　あかたうたひて―あかたうたれて（桂）
【現代語訳】［第四句が語意不明なため完全な訳が示せない］岩の上をほとばしる川の流れが激しいのに加えて、あたりの岩々にまで鳴り響くよ。うぶ川の「あかたうたひて」私は思っていないのに。
【語句】○いはたき　岩の上をほとばしる川。流れが激しい。ここでは普通名詞であるが、夫木抄では近江国の滝の名としている。○いそさへとよむ　磯さへ響む。磯でさえも音が鳴りひびく。「いそ」は水辺の、石や岩の多いところ。「磯の間ゆ激つ山川絶えずあらばまたも相見む秋かたまけて」（万葉集・三六四一〈旧三六一九〉）。○うぶがはの　「うぶがは」は川の名であろうが所在は未詳。滋賀県大津市内を流れる生川か。○あかたうたひて　語意不明。○我おもはなくに　わがおもはなくに。私は思っていないのに。
【所載】ナシ

一五八九　うつゝにはさらにもいはずはりまなるゆめさきがはのながれてあはむ

【異同】ゆめさきかはの―夢覚川の（大）　なかれてあはむ―なかれてもあはん（御・桂・大）
【現代語訳】現実に逢えるのでしたら何も言うことはありません。播磨国にある夢前川が流れるように、先々生き長らえて夢の中だけでも逢いたいものです。
【語句】○うつつには　現実に逢えるのだとしたら、の意。「うつつ」は「夢」の反対語として用いている。「うつつにはさらにもえ言はず夢にだに妹がたもとをまき寝とし見ば」（万葉集・七八七〈旧七八四〉）。○さらにもいはず　何も言うことはない。○ゆめさきがは　夢前川。兵庫県姫路市を流れる川。書写山の東麓を経由して播磨灘に注ぐ。「夢」に掛けて用いられる。「渡れどもぬるとはなしに我が見つるゆめさきがはをたれに語らむ」（忠見集・一四二）。○ながれて　「流れて」に「（生き）長らえ」を重ねる。「水の泡の消えでうき身と言ひながら

流れてなほもたのまるるかな」（古今集・七九二）。
【所載】万代集・一九八九

一五九〇　いはた川いそさへさはぐゆちかはのしたはくづれておもふころかな

【異同】ナシ
【現代語訳】岩田川が岩まで騒がしく音を立てて流れ「ゆち川」の下が崩れるように、心が乱れてあの人のことを思うこの頃であるよ。
【語句】○いはた川　和歌山県南西部を流れる富田川の中流付近の称。「いはた川わたる心の深ければ神もあはれと思はざらめや」（続拾遺集・一四五九）。○いそさへさはぐゆちかはの　岩々まで騒がしく音を立て流れていく「ゆち川」の。「いそ」は水辺の岩をいう。一五八八番歌参照。「ゆちかは」は川の名だが所在は未詳。寛文九年版本や山本明清『古今和歌六帖標注』では二・三句が「いはさへさわぎ行く水の」とある。その方が初句から同音反復で続き、歌意もとりやすい。○したはくづれて　下は崩れて。川の流れで水際が崩れるさまをいう。「あだ人は下くづれ行く岸なれや思ふといへどたのまれずして」（古今六帖・三〇〇九）。ここでは心が乱れるの意を重ねる。
【所載】ナシ

〔以上五首担当　青木〕

一五九一　ゆふだすきかけても人をたのまねばなみだはかものかはにこそたて

【異同】ナシ
【現代語訳】少しもあの人のことを頼みにしていないのに、涙は流れることよ。
【語句】○たのまねば　頼みにしていないのに。既出の一五五九番の第三句「たのまねど」に従い解釈した。
【所載】古今六帖・第三帖「かは」一五五九番既出
【参考】既出の一五五九番では第三句は「たのまねど」とする。

一五九二　秋かぜのふくたつ田川もみぢ葉のにしきを見つゝいかゞわたらん

【異同】ふくたつ田川―ふくたつかは（御）　いかゝわたらん―いかゝわたさん（大）
【現代語訳】秋風が吹く竜田川の紅葉が綾なす錦を見ながら、その一方で、どのように川を渡ろうか。美しい錦を裁つことになると渡るに忍びないことよ。
【語句】○たつ田川　竜田川。大和国の歌枕。「竜田川」の「たつ」に「裁つ」を掛ける。「裁つ」は「錦（にしき）」の縁語。○にしきを見つゝ　美しい錦を見ながらその一方で。竜田川の川面に散った紅葉を錦の織物とみる趣向。竜田川を渡ることで紅葉の錦が裁たれることを惜しんだ歌として、古今集に「竜田河もみぢ乱れて流るめり渡らば錦なかや絶えなむ」（二八三）がある。
【所載】ナシ

一五九三　よなつ川ふむせさだめぬよときけば我もふかく（ハ歟）たのまれぞする

【異同】我もふかく―我も深くは（大）
【現代語訳】よなつ川を渡るために踏む瀬をどこと決めることができない、以前は浅くとも深さが変わってしまう世、と聞いていますので、私もあなたのことを深く頼みにしてしまいます。
【語句】○よなつ川　未詳。○ふむせさだめぬよ　よなつ川を渡るための浅瀬を決めかねる世。「天の川去年の渡りでうつろへば河瀬を踏むに夜ぞふけにける」（万葉集・二〇二二〈旧二〇一八〉）を踏まえる。「世」に男女の仲の「世」を響かせる。
【所載】ナシ
【参考】以前は浅瀬として渡れたところが渡れないほど川の深さが変わるということを念頭に置いて、相手の気持ちも変わって深くなっているに違いない、と詠んだ歌か。

一五九四　ねぶれとぞ袖ひつかはのうへきまに恋しき人のかげなかりけり

【異同】ナシ
【現代語訳】［意味不明の語があるので、完全な訳が示せない。］眠れよと袖がぬれる櫃川の「うへきまに」、恋しいあの人の姿はうつらないものだなあ。

【語句】○ねぶれとぞ袖ひつかはの　「ねぶれ」は「眠（ねぶ）る」（ラ行四段活用）の命令形ととれる。本文に従うと、「眠れ」と「袖がぬれる」櫃川の、となるが歌意不通。既出の一五八五番歌では「としふれど袖ひつ川の」とあり、その方が歌意は通りやすい。「ひつ」に（袖が）濡れる意の「ひつ」と「櫃川（ひつかは）」の「ひつ」とを掛ける。櫃川は山城国の山科川の古名。○うへきまに　未詳。誤字があるらしい。一五八五番では「うつまきに」。
【所載】古今六帖・第三帖「かは」一五八五番既出／夫木抄・一一三〇九
【参考】所載欄の既出歌の上句は「トシフレド袖ヒツ川ノウヅマキニ」とあり、こちらの方が歌意は通じる。

一五九五　くだら川かはせをはやみあかごまのあしのそゝきにぬれにけるかな

【異同】ナシ
【現代語訳】百済川の川瀬の流れが速いので、赤駒の足の水しぶきに濡れてしまったよ。
【語句】○くだら川　百済川。百済川については未詳だが、百済野（奈良県北葛城郡広陵町百済付近とする説と橿原市高殿町付近とする説がある）を流れる川か。○かはせをはやみ　川瀬を速み。川瀬の流れが速いので。「……を……み」は、「……が……ので」と原因や理由を表す語法。○あかごまの　赤駒の。赤駒は栗毛の馬。万葉集に例が多い。「武庫河の水脈をはやみか赤駒のあがくたぎちに濡れにけるかも」（万葉集・一一四五〈旧一一四一〉）。○あしのそゝきにぬれにけるかな　（赤駒の）足の水しぶきにぬれてしまったことよ。「そそき」は水が飛び散ってかかる滴。
【所載】夫木抄・一一二二四／人麿集Ⅱ・二三六／人麿集Ⅲ・六九三／人麿集Ⅳ・三六
【参考】類歌に既出の一五四一番歌がある。

〔以上五首担当　犬養廉・尾高〕

一五九六　みよしのゝいはもとさらずなくかはづむべもなくらんかはのせきよみ

【異同】ナシ
【現代語訳】吉野川の岩の根元を離れずに鳴くかじかは、なるほど、それで鳴くのだろうよ。川の浅瀬の流れが

清らかだから。
【語句】◎かはづ　上代では「かじか」をさすと考えられる場合が多いが、蛙（かえる）とみるべき例もある。「かはづ」を「かへる」の歌語とする説もある。万葉集巻十には「蝦（かはづ）を詠む」の題で五首（二一六五〈旧二一六一〉～二一六九〈旧二一六五〉）並んでいる。「井出の山吹」と共に詠まれることも多く、「かはづなく井手の山吹散りにけり花の盛りにあはましものを」（古今集・一二五）に見られるように、名所と景物の取り合わせの典型的な例であった。平安初期頃から蛙と混同された。○みよしの　み吉野。「み」は美称の接頭語。吉野川のかじかは特に有名だった。「かはづなく吉野の川の滝の上の馬酔木の花そ端に置くなゆめ」（万葉集・一八七二〈旧一八六八〉）。○いはもと　岩の根元。○さらず　……を離れずに。○むべもなくらん　なるほど、鳴いているのだろう。「むべ」はなるほどと納得し肯定することば。「らん」は現在見聞きしている事柄について、その原因・理由などを推量する意。○かはのせきよみ　川の瀬清み。川瀬の流れが清らかなので。
【所載】玉葉集・春下・二六五／万葉集・二一六五（旧二一六一）三吉野乃　石本不避　鳴川津　諾文鳴来　河乎浄　ミヨシノノイハモトサラズナクカハヅウベモナキケリカハヲサヤケシ　みよしののいはもとさらずなくかはづうべもなきけりかはをさやけみ／六百番陳状・七四／古来風体抄・一〇七

一五九七　小やま田のふかたのかはづ何ゆへにこひぢにぬれてなくならなくに

【異同】ナシ
【現代語訳】山の泥深い田の蛙は、どうして泥にまみれて鳴いているのか、恋の物思いで涙に濡れて泣くのでもないのに。
【語句】○小やま田　山の田。「を」は名詞に付いて小さいもの、細かいもの、の意を表す接頭語。○ふかた　深田。泥深い田。春冬のころ、水の深くたまった田。○かはづ　蛙（かえる）と考えられる。○何ゆへに　何ゆゑに。どうして。○こひぢ　「泥土」に「恋路」をかける。「五月雨に苗ひき植うる田子よりも人をこひぢに我ぞ濡れぬる」（古今六帖・八八）。○なくならなくに　鳴くのでないのに。「なくに」は打消の助動詞「ず」のク語法「なく」と助詞「に」の複合で、「……でないのに」の意。
【所載】ナシ

一五九八　わがやどにあひやどりしてすむかはづよるになればやものはかなしき

【異同】ナシ
【現代語訳】私の家に同居して住む蛙は、夜になると、（私と同じように）一人で悲しくなるのだろうか。（それで鳴くのかしら。）
【語句】○あひやどりしてすむかはづ　「あひやどり」は同居。同居して住む蛙だから、この「かはづ」はカジカガエル以外の蛙と考えられる。同居している故に、「私」と同様に、一人で夜は物悲しくなるのである。「秋の野の尾花かりふく庵には月ばかりこそあひやどりすれ」（頼政集・二三三）。○よるになればやものはかなしき　夜になると悲しくなるのだろうか。一人寝の侘びしさを嘆いているのだろうか、ということ。
【所載】後撰集・雑四・一二五〇／六百番陳状・六九

一五九九　山ぶきの花かげみゆるさはみづにいまぞかはづの声きこゆなる

【異同】ナシ
【現代語訳】山吹の花影が映って見える沢辺の水に、今かじかの鳴く声が聞こえますよ。
【語句】○山ぶきの花かげ　水に映った山吹の花の姿。山吹の花は多く水辺に咲くので、「かはづ」とは類型的な組み合わせとなる。「かはづなく井手の山吹散りにけり花の盛りにあはましものを」（古今集・一一二五）により、井手の山吹が「かはづ」とともに詠まれることが多い。沢の山吹と「かはづ」を詠んだ歌には「山吹の花のみぎはにゝほへばや沢にかはづの声聞こゆらん」（忠見集・七八）、「沢水にかはづ鳴くなり山吹のうつろふ色やそこに見ゆらむ」（亭子院歌合・二七）などがある。○さはみづ　沢を流れる水。
【所載】ナシ

一六〇〇　せをはやみおちたぎつらししら浪にかはづなくなりあさゆふごとに

【異同】おちたきつらし―をきたきつうし（御）、をきたちつらし（桂）、をきたきつらし（大）
【現代語訳】川の浅瀬の流れが速いので、激しく流れ落ちるらしい。白波に、かじかが鳴いているのが聞こえるよ。朝毎に、宵毎に。
【語句】○せをはやみ　瀬を速み。川瀬の流れが速いので。「を……み」の語法については、一五九五番参照。

○おちたぎつらし　激しく流れ落ちるらしい。「おちたぎつ」は水が高いところから低いところへしぶきをあげて激しく流れ落ちる意。○あさゆふごとに　朝毎に、宵毎に。万葉集ではアサヨヒの仮名書き例はあるが、アサユフの仮名書き例は一例もないことから（アシタユフへの例はある）、各注釈書はアサヨヒと訓む。ヨヒは、夜を中心にした時間の言い方で、ユフへのつぎに位置する時間帯。日が暮れて暗くなってからをいう。

【所載】万葉集・二一六八（旧二一六四）瀬呼速見　落当知足　白浪尓　川津鳴奈里　朝夕毎　セヲハヤミオチタギチタルシラナミニカハヅナクナリアサヨヒゴトニ　せをはやみおちたぎちたるしらなみにかはづなくなりあさよひごとに／人麿集Ⅰ・一一九／人麿集Ⅳ・二一六八／六百番陳状・七七

〔以上五首担当　三浦〕

一六〇一　草まくらたびにものおもふわがきくにゆふかたかけてなくかはづかも

【異同】ナシ

【現代語訳】旅にあって物思いをしている私が聞いていると、夕方になって鳴くかじかの声よ。

【語句】○草まくら　草枕。旅に掛かる枕詞。○ゆふかたかけて　夕方かけて。夕方になって。○かはづ　蛙。カジカガエルを指す。初夏から秋にかけて、夕方から夜に鳴く。

【所載】万葉集・二一六七（旧二一六三）草枕　客尓物念　吾聞者　夕片設而　鳴川津可聞　クサマクラタビニモノオモフワガキケバユフカタマケテナクカハヅカモ　くさまくらたびにものおもひわがきけばゆふかたまけてなくかはづかも／夫木抄・一九三五／綺語抄・二九二

一六〇二　たま川のひとをもよきずなくかはづこのゆふかげはおしくやはあらぬ

【異同】ナシ

【現代語訳】玉川で人をも避けずに鳴いているかじかよ。この夕方の情景は惜しくないのかね。

【語句】○たま川　六玉川（井手・野路・野田・玉川の里・調布・高野）のどれとも考えられるが、「かはづなく井手の山吹散りにけり花の盛りに逢はましものを」（古今集・一二五）などにも見られる井手の玉川か。井手の玉川は京都府綴喜郡井手町。木津川にそそぐ川。「かはづ」と「山吹」の名所として歌に詠まれた。○ひとをもよきずなくかはづ　人をも避けずに鳴いているかじか（かわず）。「かはづ」は一五九六番歌参照。○ゆふかげ

夕影。夕方の風情・情景。「春の野に霞たなびきうら悲しこの夕かげに鶯鳴くも」（万葉集・四三一四〈旧四二九〇〉）。○おしくやはあらぬ　をしくやはあらぬ。惜しくやはあらぬ。惜しくないのだろうか、の意。「やは」は疑問。「ぬ」は打消の助動詞「ず」の連体形。この歌は、夕景を作者が惜しく思っていて、情趣を解さないかじかが構わず鳴いているさまを詠む。

【所載】夫木抄・一九一一

一六〇三　秋かぜにかはづつまよぶゆふされば　ころもでさむしまくらせんとか

【異同】ナシ

【現代語訳】秋風に吹かれてかじかが妻を呼んで鳴いている。夕方になって、袖のあたりが寒くなったので手枕をしよう、というのか。

【語句】○かはづつまよぶ　かじか（かわず）は妻を呼んで鳴く。「……下方には　かはづつま呼ぶ……」（万葉集・九二五〈旧九二〇〉）。○ゆふされば　夕方になると。○ころもで　衣手。袖や衣全体を指す。○まくらせんとか　枕せんとか。手枕をしようというのか。

【所載】万葉集・二一六九（旧二一六五）上瀬尓　河津妻呼　暮去者　衣手寒三　妻将枕跡香　カミツセニカハヅツマヨブユフサレバコロモデサムミツママカムトカ　かみつせにかはづつまよぶゆふされば　ころもでさむみつままかむとか

一六〇四　さはみづにかはづなくなりやまぶきのうつろふかげやそこにみゆらん

【異同】ナシ

【現代語訳】沢水に、かじかの鳴く声が聞こえる。山吹の散ってしまうさまが水底に映って見えるのだろうか。

【語句】○さはみづ　沢水。低地の湿地帯にある水。○やまぶき　山吹とかわずはよく詠まれる取り合わせ。一五九九番歌参照。○うつろふ　「移ろふ」に「映ろふ」を掛ける。「移ろふ」は、変化し盛りが過ぎることを言う。「映ろふ」は、水に影が映ること。

【所載】拾遺抄・春・四八／拾遺集・春・七一／新撰朗詠集・一二九／亭子院歌合・二七

一六〇五　をとばかりをつるしらかはしらねどもかはづがこゑをとめてきにけり

【異同】ナシ
【現代語訳】音高く流れ落ちる白川はよく知らないけれども、かじかの声を求めてやってきましたよ。（噂でばかり聞くあなたのことはよく知らないけれど、あなたの声を求めて――お会いしたくて――やってきましたよ。）
【語句】○をとばかり　音ばかり。以下「しらかは」までが、同音「しら」により「しらねども」を導く序詞。この歌は表面上は「音高く流れ落ちる白川」はよく知らないけれど、とするが、裏に「噂に高いあなたのこと」をよく知らないけれど、の意を持たせる。○しらかは　白川。山城国の歌枕。比叡山を源とし、現在の京都市左京区岡崎あたりを流れ鴨川に入る。その流域の地名にもなっている。○とめて　求めて。
【所載】夫木抄・一一三〇〇

〔以上五首担当　杉本〕

一六〇六　ゆふさしてかはづなくなるみわがはのきよきせのをとをきゝしはよしも

【異同】ゆふさして―ゆふさらて（大）
【現代語訳】夕方を目ざして、蛙が鳴いている三輪川の、清い浅瀬の音を聞いたのはよいものだ。
【語句】○ゆふさして　夕方を目ざして、の意か。他に用例を見ない語だが、「旅にあれば夜中をさして照る月の高嶋山に隠らく惜しも」（万葉集・一六九五〈旧一六九一〉）という例がある。○なくなる　鳴いている。「なり」は物が見えなくても音が聞こえることをいう。○みわがは　三輪川。大和川の上流、奈良県桜井市三輪山の麓あたりの部分の呼び名。○きよきせのをと　きよきせのおと。清らかな瀬の音。○よしも　よいものだ。形容詞終止形＋終助詞「も」。
【所載】万葉集・二二二六（旧二二二二）暮不去　河蝦鳴成　三和河之　清瀬音乎　聞師吉毛　ユフサラズカハヅナクナリミワガハノキヨキセノオトヲキクハシヨシモ　ゆふさらずかはづなくなるみわがはのきよきせのおとをきかくしよしも

一六〇七　かづらきのわたるくめぢのつぎはしのこゝろもしらずいざかへりなん

【異同】ナシ
【現代語訳】葛城にわたしてある久米路の継橋の本意もしらずに、さあ帰ってしまおう。
【語句】◎はし　橋。川や湖沼、谷などの上を横切って造られる構造物の総称。長柄橋（現大阪市北区）などが有名。また人と人をつなぐものとして恋の歌に用いられることが多い。「渡す」「渡る」を多く縁語として用いる。○かづらきのわたるくめぢ　葛城に渡している久米路の橋。役行者が、葛城の神である一言主に命じて葛城山と吉野の金峰山の間に岩橋を造らせようとしたが、容貌の醜さを恥じた一言主神は夜しか働かず、工事は中途になったという伝説による。中途になること、人の仲が途絶えることに用いる。○つぎはし　継橋。所々に柱を立て、上に板をつぎ渡した橋。○こゝろ　本意。この歌では中絶えを防ごうとする気持ち。女が積極的で、通う男が興ざめであることを意味するか。
【所載】夫木抄・九四五五／袖中抄・二六〇

一六〇八　いそのかみふるのたかはしたか〳〵にいもがまつらんよぞふけにける

【異同】ナシ
【現代語訳】石上の布留川の高橋のように、高く高く背伸びして、まだかまだかとあの人が待っているに違いない。なのに夜は更けてしまった。
【語句】○ふるのたかはし　布留の高橋。石上神宮近辺を流れる布留川（現在の天理市を横断し、初瀬川に流れ込む）に架けられていた、橋脚の長い橋。初・二句は同音で「たかたかに」を導く序詞。○たか〳〵に　まだかまだかと。背伸びして人を待つ様子から、来訪を待ち望む気持ちを表す。「白雲のたなびく山の高々にわが思ふ妹を見むよしもがな」（万葉集・七六一〈旧七五八〉）。
【所載】万葉集・三〇一〇（旧二九九七）石上　振之高橋　高高尓　妹之将待　夜曽深去家留　イソノカミフルノタカハシタカタカニイモガマツラムヨゾフケニケル　いそのかみふるのたかはしたかたかにいもがまつらむよぞふけにける／夫木抄・九四七二

一六〇九　〽さほがはに（或本氷ニ在之）こほりわたれるうぐひすのうすきこゝろを我おもはなくに

【異同】コノ歌ナシ（大）
【現代語訳】佐保川の一面に氷が張った。その氷のように薄い鶯の思いで私は思っている訳ではないのに。
【語句】○さほがは　佐保川。大和国の歌枕。奈良市大和郡山市を流れ、大和川に注ぐ川。万葉集以来の歌枕。桜、紅葉、千鳥などと取り合わされることが多い。○うぐひすの　鶯の。所載欄の古今六帖重出歌や万葉集では「うすらびの（薄氷の）」となっており、その方が歌意はよく通る。また、上二句とのつながりは不明。○我おもはなくに　わが思はなくに。私はそのように思ってはいないのに。
【所載】古今六帖・第三帖「ひ」一六二一／万葉集・四五〇二（旧四四七八）佐保河波尓　許保里和多礼流　宇須良婢乃　宇須伎許己呂乎　和我於毛波奈久尓　サホガハニコホリワタレルウスラビノウスキココロヲワガオモハナクニ　さほがはにこほりわたれるうすらびのうすきこころをわがおもはなくに／夫木抄・七一〇三／綺語抄・一九九／袖中抄・七八八
【参考】底本に「或本氷ニ在之」と傍記があり、所載欄に示したとおり重出歌である。大久保本ではこの歌を欠く。「橋」が詠まれていないのにこの歌がここにあるのは、混入であろう。

一六一〇　恋しくははまなのはしをいでゝ見よした行みづにかげやみゆると

【異同】ナシ
【現代語訳】恋しかったら、浜名の橋を通って出てきてごらんなさい。下を行く水に私の姿が影となって、映って見えるかと。
【語句】○恋しくは　恋しかったら。○はまなのはし　浜名の橋。遠江国の歌枕。往古、浜名湖は外海とつながっていた。浜名の橋は、その浜名湖から外海へ流れ出る浜名川に架かっていた橋。損壊と修復を繰り返したらしい。「潮みてるほどに行きかふ旅人や浜なの橋と名づけそめけん」（拾遺集・三四二）と詠まれたごとく、満潮の時には浜が無くなる所として知られていたらしい。
【所載】新勅撰集・雑四・一二九四／夫木抄・九三九九

〔以上五首担当　杉本〕

一六一一　つのくにのなにはのうらのひとつばし君をおもへばあからめもせず

【異同】君をおもへは―君をしもへよ（大）
【現代語訳】津の国の難波の浦のひとつ橋、（渡るのにわき見もしない）、あなたを切に思うので、わき見もしない。
【語句】○ひとつばし　ひとつ橋。一本だけ丸木などを渡した橋。危ういので、注意をそらさず渡らなくてはならない。「ひとつばしあやうがりて帰り来たりけん物のやうにわびしくおぼゆ」（源氏物語　手習巻）。○あからめもせず　「あからめ」はふと目をほかへそらすこと、わき見をすること。わき見もしないで。ほかの相手に心を移すこともしないで。「物かきふるひ往にし男なむ、しかながら運び返して、もとのごとく、あからめもせで添ひ居にける」（大和物語・一五七段）。
【所載】夫木抄・九三九一

一六一二一　なかぞらにきみもなりなむかさゝぎのゆきあひのはしにあからめなせそ　伊勢ィ

【異同】底本ハ行間ニ作者名小字補入。
【現代語訳】（空では織姫と牽牛が、行き来するという）かささぎの橋、上の空にあなたもなってしまうでしょう、わき見をなさらないで。
【語句】○なかぞらにきみもなりなむ　上の空に君もなってしまうだろう。「なかぞらになる」はここでは落ち着かなくなる、上の空になる、の意。「なむ」は完了の意味の助動詞「ぬ」の未然形に、推量の助動詞「む」のついた形。○かさゝぎのゆきあひのはし　かささぎの行きあひの橋。「ゆきあひ」は行き会うこと、出会い。七夕の夜、牽牛と織女の二星が行き会うのは、かささぎが翼を並べて天の川に渡すという橋を通ってであると考えられた。それをいう。「天の川扇の風に霧晴れて空澄み渡るかささぎの橋」（拾遺集・一〇八九）。○あからめなせそ　わき見をするな。「な……そ」は禁止を表す。「あからめす」は動詞。一六一一番歌参照。「大井川岩波高しいかだ士よ岸の紅葉にあからめなせそ」（金葉集・二四五）。
【所載】袖中抄・八七九
【参考】作者名「伊勢」と他本にある、というのが「伊勢ィ」の注記だが、その根拠は不明。

一六一三　人わたすことだになきをなにゝかもながらのはしと身のなりぬらん

【異同】ナシ
【現代語訳】人を済度するはたらきもないのに、私はなぜ、古いものの代表とされる長柄の橋となってしまったのかしら。
【語句】○人わたす　衆生を救い彼岸に渡す。生死の苦海から悟りの境地に導く。「わたす」は「橋」の縁語。○なにゝかも　何にかも。「なにしかも」の誤写と見る。いったいどうして。「し」は強意の助詞。○ながらのはし　長柄の橋。摂津国の歌枕。現大阪市淀川区。長柄川に架けられていた橋。弘仁三（八一二）年六月三日に、使者を派遣し橋を造らせたという記事が『日本後紀』に見え、何度も架け替えられたらしい。拾遺集に「天暦の御時、御屏風の絵に長柄の橋柱わづかに残れる形ありけるを」という詞書で「葦間より見ゆる長柄の橋柱昔のあとのしるべなりけり」（四六八）という歌があり、朽ちた景色が特色であった。古いもののたとえに引かれる。
【所載】後撰集・雑一・一一一七／伊勢集Ⅰ・三一二／伊勢集Ⅱ・三一一／伊勢集Ⅲ・三一二
【参考】所載欄の文献では、宇多法皇の剃髪の折に、七条后の詠んだ歌。

一六一四　なにはなるながらのはしもつくるなりいまはわが身をなにゝたとへむ

已上二首　伊勢

【異同】ナシ
【現代語訳】難波にある長柄の橋も（朽ちて今は新しく）造るそうだ。古いものに例えてきた長柄の橋のない今、年老いた我が身を何にたとえようか。
【語句】○なにはなる　摂津の難波にある。○ながらのはし　一六一三番歌参照。○つくるなり　造るなり。「なり」は伝聞の助動詞、活用語の終止形に接続する。一方、別に「尽くる」とする解釈もある。「なり」を断定の助動詞と解すと、それは連体形に接続するから、その場合は「尽くる」すなわち動詞「尽く」すなわち朽ちるの意となる。前者ととる。
【所載】古今集・誹諧歌・一〇五一／伊勢集Ⅰ・四五二／伊勢集Ⅱ・四七四／伊勢集Ⅲ・一五四／三十六人撰・四〇／新撰髄脳・二／奥儀抄・五八六、六四〇／古来風体抄・二九七
【参考】「已上二首　伊勢」を作者とすれば、当該歌については所載欄の文献に一致するが、前歌一六一三については一致しない。

一六一五　しら雲のたなびきわたるあしひきのやまのたなはしわれもわたらむ

【異同】ナシ
【現代語訳】白雲のたなびき渡る山の棚橋、渡るのは雲だけでなく、私も渡ろう。
【語句】○たなびきわたる　雲のかかる様を「たなびきわたる」といった。この場合「渡る」は空間的に広い範囲を意味に加え、動詞「たなびく」と結合して複合動詞をつくる。第五句の橋を渡る意の動詞「渡る」と呼応させる。○たなはし　棚橋。板を渡しただけの橋。欄干がない。「待てと言はば寝ても行かなむ強（し）ひて行く駒の脚折れ前の棚橋」（古今集・七三九）。
【所載】新古今集・羇旅・九〇六／貫之集Ⅰ・三一九
【参考】所載欄の貫之集では、屏風歌の歌群にある。

〔以上五首担当　平野〕

一六一六　さしながらのはしらつゆにぬれにけりあきてふことをくれなゐにして

さねきィ

已上二首　貫之

【異同】底本ハ行間ニ作者名小字補入。
【現代語訳】野はさながら一面白露で濡れたことだなあ。今が秋であるということを紅色に染め上げて。
【語句】○さしながら　「然（さ）しながら」で、副詞。そのままますべて、すっかり、の意。「さしながら人の心をみくまのの浦の浜木綿いくへなるらむ」（拾遺集・八九〇）。次の句にかかって、「さしながらのはしらつゆに」のところに「長柄の橋」が隠し詠み込まれている。物名歌。○のはしらつゆに　野は白露に。○あきてふことを　「秋」という季節を。「てふ」は「といふ」の縮まった表現。○くれなゐにして。紅色にして。紅色に染めて。草木に置いた白露が野を紅葉させて紅にする。また、「白」「紅」で色の対比を詠みこむ。「白露と名には負へどもくれなゐに山の木の葉の色は見えけり」（家持集・二二四）。
【所載】ナシ
【参考】「已上二首　貫之」とあるが、一六一五番歌は貫之集Ⅰに見えるものの、一六一六番歌については作者

名を他文献で確認できなかった。小字「さねき」は、後撰集・一一一六番の詞書や大和物語・一一九段に見える藤原真興を指すか。

一六一七　せの山にたゞにむかへるいもせやまことときこゆやもうちはしわたす

【異同】うちはしわたす―うちはし渡る（大）
【現代語訳】背の山にまっすぐに向きあっている妹の山は、背の山の愛の言葉が聞こえるのかなあ。打橋を渡している。
【語句】○せの山　背の山。ここは紀伊国の歌枕。現在の和歌山県伊都郡かつらぎ町にあり、紀ノ川の北岸に位置する。「これやこの大和にしてはあが恋ふる紀路にありといふ名に負ふ勢能山（せのやま）」（万葉集・三五）。○たゞにむかへるいもせやま　「妹背山」では、「背山に……向かへる」の意味がなさないので、所載欄の全文献にあるように、「いも（妹）の山」として解す。「たゞに」は、まっすぐにの意。遮るものなく向き合うさまをいう。紀伊の妹山は紀ノ川を挟んで背山とすぐに向かいあっている。○ことときこゆやも　言聞こゆやも。（愛の）言葉が聞こえるのかなあ。二つの山を男女関係に見たてて表現。「やも」は、疑問の係助詞に詠嘆の意の助詞「も」がついたかたち。○うちはしわたす　打橋渡す。「うちはし」は、板や材木を渡しただけの、掛け外しができる橋。「渡す」は橋を架け渡すこと。「……いづみの川の　上つ瀬に　打橋わたし　淀瀬には　浮橋わたし……」（万葉集・三九二九〈旧三九〇七〉）。
【所載】万葉集・一一九七（旧一一九三）勢能山尓　直向　妹之山　事聴屋毛　打橋渡　セノヤマニタダニムカヘルイモノヤマコトユルスヤモウチハシワタス　せのやまにただにむかへるいものやまことゆるせやもうちはしわたす／夫木抄・八一三五、九三九三／和歌童蒙抄・一六八／和歌初学抄・一五七／袖中抄・六三一

一六一八　まのゝうらのよどのつぎはしこゝろにもおもふかいもがゆめに見えつる

【異同】ゆめに見えつる―ゆめにみえつゝ（桂）
【現代語訳】真野の浦の淀の継ぎ橋のように、絶えずずっと彼女の心にも私を思っていてくれるのか、彼女が夢に現れたのは。
【語句】○まのゝうらのよどのつぎはし　真野の浦の淀の継ぎ橋。「真野の浦」は摂津国の歌枕。現在の神戸市

長田区に「真野町」の名が残り、海にほど近い。「よど」は普通名詞で流れが淀んでいる深い所、「つぎはし」は、川の中に橋をわたすため柱を立てて橋板を継いで渡した橋。一六〇七番歌参照。初・二句は序詞で、「つぎはし」から、次々に、ひき続いて、の意味を導く。「知るらめや淀の継ぎ橋世とともにつれなき人を恋ひわたるとは」（金葉集・三七四）。〇いも　男性から女性を親しみをもっていう。ここは妻か恋人を指す。〇ゆめに見えつる　夢に見えたことだ。相手を深く思うとその人の夢に現れるという俗信を踏まえる。

【所載】万葉集・四九三（旧四九〇）真野之浦乃　与騰乃継橋　情由毛　思哉妹之　伊目尓之所見　マノノウラノヨドノツギハシココロユモオモフヤイモガイメニシミユル　まののうらのよどのつぎはしこころゆもおもへやいもがいめにしみゆる／夫木抄・九四二九／和歌童蒙抄・三八二／井蛙抄・三四三、三七八

一六一九　をばたゞのいたゞのはしのこほれなばけたよりゆかむこふなわぎもこ

【異同】ナシ

【現代語訳】をばただの板田の橋がもし壊れてしまったなら、橋桁を通ってでもいこう。恋しがるな、私のいとしい人よ。

【語句】〇をばたゞのいたゞのはし　をばただの板田の橋。「をばただ」（「をはただ」ともいう）は、「小墾田（をはりだ。開墾した田、の意）」で、所載欄の万葉集誤読より生じた歌語。「小墾田」は、推古天皇の皇居があった地で、現在の奈良県高市郡明日香村の雷丘東方あたり。なお、当該歌は後世よく享受されるが、所在国は摂津、尾張、河内など諸説見える。〇こほれなば　もし壊れてしまったならば。「こほる（壊れる、破損する）」は、類聚名義抄では、「壊コボル」（自動詞）「壊コホツ」（他動詞）と諸本により清濁に相違がある。清音の方が古いものとされる。「なば」は、完了の助動詞「ぬ」の未然形に順接仮定条件の接続助詞「ば」が付いたかたち。〇けたよりゆかむ　桁より行かむ。橋桁を通って行こう。「けた」は橋桁のこと。橋脚の上に渡して橋板を支える材木。〇こふなわぎもこ　恋ふな我妹子。恋しがって心配するな、私のいとしい人よ。「わぎもこ（我妹子）」は、「わぎも（我妹）」に同じで、男性が妻や恋人をいとしんで呼ぶ語。なお、所載欄の続後拾遺集は「こふな我がせこ」、俊頼髄脳は「かへれわがせこ」等、「背子」とあって、女性が夫か恋人に向って詠んだ歌になっている。

【所載】続後拾遺集・恋三・八五四／万葉集・二六五二（旧二六四四）小墾田之　板田乃橋之　壊者　従桁将去　莫恋吾妹　ヲハリダノイタダノハシノコホレナバケタヨリユカムナコヒソワギモ（コフナワガイモ）　をはりだのいただのはしのこほれなばけたよりゆかむなこひそわぎも／夫木抄・九三九四／人麿集Ⅱ・四七五／人麿集

Ⅳ・一五〇／俊頼髄脳・一三二／和歌童蒙抄・三八三／古来風体抄・一三〇

一六二〇　ふるゝ身はなみだのかはにみゆればやながらのはしにあやまたるらむ（いせィ）

【異同】底本ハ行間ニ作者名小字補入。
【現代語訳】古びたわが身は、あふれる涙の川中に見えたので、長柄の橋とまちがえてしまわれたのでしょうか。
【語句】○ふるゝ身　古びている身。年をとった我が身。「ふるゝ」は、上二段「古る」の連体形。○なみだのかはにみゆればや　涙が川のようにあふれ出て、そこに我が身が映って見えるので。「や」は疑問の意。○ながらのはし　長柄の橋。摂津国の歌枕。一六一三番歌参照。○あやまたるらむ　まちがえられたのでしょうか。「る」は自発の意の助動詞。「らむ」は、「長柄の橋」に見誤る事態の原因・理由を推量する助動詞。
【所載】後撰集・雑一・一一一八／伊勢集Ⅰ・三一三／伊勢集Ⅱ・三一二／伊勢集Ⅲ・三一三
【参考】所載欄の後撰集や伊勢集によれば、当該歌は、宇多上皇が出家したころ、七条后温子が詠んだ歌（一六一三番歌参照）に、女房として仕える伊勢が女主人を慰める体で歌を返したもの。

〔以上五首担当　斎藤・加藤〕

一六二一　さほがはにこほりわたれるうすらひのうすき心をわがおもはなくに（ひ）

【異同】ナシ
【現代語訳】佐保川一面に張った薄氷のように、薄い気持ちで私が思っているわけではないのに。
【語句】◎ひ　樋。水を送るために掛け渡した長い管。「氷（ひ）」とも考えられるが、「氷（こほり）」題は第一帖にあり、これは「はし」と「井せき」の間にあるので「樋（ひ）」題とみる。ただし、「ひ」題の歌二首のうち、一六二一番歌は「氷」、次の一六二二番歌は「樋」を詠んだ歌であり、御所本の極小の貼紙は題と歌の内容の齟齬を示したしるしか。○うすらひの　薄氷の。「うすらひ」は薄く張った氷で、上代は「うすらび」と濁音で読んだ。上三句は「うすき」を起こす序。参考欄参照。
【所載】古今六帖・第三帖「はし」一六〇九番既出

【参考】既出の一六〇九番歌は第三句が「鶯の」となっているが、万葉集四五〇二（旧四四七八）の第三句は「うすらひの」とあり当該歌と同じである。

一六二二　みづとりのかものすむいけのしたひなくいぶかしきいもをけふみつるかな

【異同】ナシ
【現代語訳】水鳥である鴨の住む池の下樋がない、（そのために通うことができず）気がかりでたまらなかったあなたにやっと今日逢えたことだ。
【語句】○みづとりの　水鳥の。「鴨」に掛かる枕詞で、万葉集に三例見られる。「水鳥の鴨の羽色の春山のおぼつかなくも思ほゆるかも」（万葉集・一四五五〈旧一四五一〉）など。○したひなく　下樋無く。上三句は「いぶかしき」を起こす序。当時の池は人工的貯水をいうから、「下樋」は、排水などのためにその地下に埋めた通水路のこと。○いぶかしき　物事が不分明ではっきりしないため事情が知りたい、様子がよくわからないから知りたい、見たい、という気持ちを言う形容詞「いぶかし」の連体形。「住吉の岸いぶかしく思ほえて波のよるこそ立ちぬ待たるれ」（一条摂政御集・五九）。
【所載】古今六帖・第五帖「雑思」二五八一／万葉集・二七二九（旧二七二〇）水鳥乃　鴨之住池之　下樋無鬱悒君　今日見鶴鴨　ミヅトリノカモノスムイケノシタビナミユカシキ（イフカシキ）キミヲケフミツルカモ
みづとりのかものすむいけのしたびなみいぶせききみをけふみつるかも／夫木抄・一五七三六／和歌童蒙抄・二四二／袖中抄・三八二／和歌色葉・一〇二
【参考】所載欄の万葉集の第四句「したひなみ」については、下樋がなければ水が貯まって排水されないから、感情のはけ口がないことの譬喩とする注釈書が多い。万葉集の現代訓「いぶせき（鬱屈した思いを表す）」を導く語として妥当な解であるが、当該歌の第四句「いぶかしき（様子がよくわからないから知りたい、見たい）」とはうまく呼応しない。新潮日本古典集成『万葉集』だけが、「下樋」は妻問いに通う意を暗示しているかという別解をあげており、それを生かして「したひなく」を、妻問い通う道がない、通うことができないと解して訳した。

一六二三　おほ井河ゐせきにこえて行水のたえずも物をおもふころかな

【異同】ナシ
【現代語訳】大井河の井堰を越えて流れてゆく水のように、絶えることなく物思いをするこの頃であるよ。
【語句】◎ゐせき　井堰。水を田に引くために土や木で柵や石垣を作り、川を堰き止めたもの。井手。堰。○おほ井河　大井川。山城国の歌枕。鞍馬山の北に発し、嵯峨、松尾辺りを流れ、桂川となり、淀川と合流する。堰を設けて流れを調整したので、「大堰河（川）」と記されることもある。「とどむれどととどめかねつも大井河井堰をこえてゆく水のごと」（躬恒集・一二〇）。○行水の　行く水の。上三句は「たえず」を起こす序。「たえ（絶え）」は「行水」の縁語。○物をおもふころかな　物思いをするこの頃であるなあ。「秋の野に乱れて咲ける花の色のちくさに物を思ふころかな」（古今集・五八三）。
【所載】続古今集・恋一・一〇四五

一六二四　大井河せきのふるくひとしふともわれわすられんとやはおもひし

【異同】ナシ
【現代語訳】大井河の堰にある古びた杭のように年月を経たとしても、私が忘れてしまうなどと思ったろうか、思いはしなかった。
【語句】○大井河　一六二三番歌参照。○せき　堰。井堰に同じ。「井堰」は一六二三番歌参照。○ふるくひ　古杭。堰に打たれた古い杭。「大井河波うつ堰の古杭はくつろぎながら抜くる世もなし」（夫木抄・一一〇九六）。初・二句は、「としふとも」を起こす序。○としふともわれわすられんとやはおもひし　年経ともわれ忘られんとやは思ひし。歳月を経たとしても、自分が自然に忘れてしまうなどと思ったろうか、思いはしなかった。「わすられん」は、四段「忘る」の未然形、自発の助動詞「る」の未然形、推量の助動詞「ん（む）」の終止形。「る」を受身と考えることもできるが、所載欄の二八六六番歌、夫木抄いずれも男が忘れまいと思う歌であるため自発とみる。歳月がたっても決して忘れないというのは、万葉時代に好まれた愛の誓いを表す表現で、「秋山に霜降り覆ひ木の葉散り年は行くとも我忘れめや」（万葉集・二二四七〈旧二二四三〉）、「紀の国の飽等（あくら）の浜の忘れ貝我は忘れじ年は経ぬとも」（万葉集・二八〇五〈旧二七九五〉）など例が多い。「やは」は反語。
【所載】古今六帖・第五帖「雑思」二八六六／夫木抄・一一〇九八

一六二五　たびとあらばのちのなぐさめあるべきをなみだのゐせきみづやこえなん

【異同】ナシ
【現代語訳】旅であるなら後の慰めがあるはずだが、そんなものはなく、涙河の井堰を水（涙）が溢れて越えたろうか。
【語句】○のちのなぐさめあるべきを　後で慰めとなるようなことがあるはずだが。「のちのなぐさめ」は、「見ぬ人によそへて見つる梅の花散りなん後のなぐさめぞなき」（新古今集・四八）の如く、花の散った後のなぐさめという例はあるが、旅の後の慰めという例はない。旅の後では恋しい人に逢えるというような慰めがあるはずだが、今は旅に出ているわけではないのでそれもない、という意か。○なみだのゐせきみづやこえなん　涙の井堰水や越えなん。「恋ひわびておさふる袖や流れ出づる涙の河の井堰なるらん」（金葉集・三七五）のごとく、袖が涙の河の井堰となるとした例はあるが、涙自体が井堰であるとする例はないため解しにくい。一応、「涙」を「涙河」を約めたと解し、涙河にある井堰を越えるほど水（涙）が溢れるつらい状態にあることを喩えたと見る。「なみだ」の「なみ」に、「有る」の反対語の「無み」を響かせるか。「や」は疑問。
【所載】ナシ
【参考】詳しい詠歌事情がわからないため、今一つ解しにくい歌である。

〔以上五首担当　中野〕

一六二六　おほゐがはゐせきのゐぐゐうちわたしこひしとのみや思ひわたらむ

【異同】ゐせきのゐくゐ—ゐせきの井橛の（大）
【現代語訳】大堰川の井堰に杭が長々とうち渡してある。ずっと私は恋しいとばかり思い続けて過ごすのであろうか。
【語句】○おほゐがはゐせきのゐぐゐ　「大堰川」「井堰（ゐせき）」については、一六二三番歌参照。「ゐぐゐ」は、堰杙（ゐぐひ）で、水をせきとめるために井堰に並べて打つ杭（くい）。初・二句は、「うちわたし」を導く序詞。○うちわたし　堰杙を長くつらねて。「打ち渡す」ことに、長い間ずっとの意の「うちわたし」を掛ける。一五四五番歌参照。○こひしとのみや思ひわたらむ　恋しいとばかり思い続けてゆくのだろうか。「や」は疑問の係助詞。なお、この下句は、恋歌における常套的な表現。

【所載】夫木抄・一一〇九七

一六二七　ゐせきにもさはらざりけりもみちつゝ（ばゝ）をちくるみづのいろに見（はイ）えつゝ

【異同】ナシ
【現代語訳】井堰にも妨げられなかったよ、もみじ葉は。流れ落ちてくる水の色に美しく見えていて。
【語句】〇ゐせきにもさはらざりけり　「さはる（障る）」は、障害となる、妨げる、意。井堰が紅葉をせきとめると思ったが、そうではなかったよと、「けり」で気づきを表現する。〇をちくるみづのいろに見えつゝ　落（お）ちくる水の色に見えつつ。「落ち来る水」は、井堰から落下し流れる川の水。「色に見えつつ」は、川の水がもみじ葉に美しく色づいて見えて、と「つつ」止めで感動的に表現。
【所載】ナシ

一六二八　あさごとにゐでこすなみのたやすくもあはぬいもゆへたきもとゞろに

【異同】たきもとゝろに―瀧もとゝろく（大）
【現代語訳】毎朝、波は井堤をたやすく越す、そんなふうに簡単には逢ってくれないあの子であるのに、二人の仲の噂は滝のように音高くとどろいて。
【語句】〇あさごとにゐでこすなみの　朝ごとに井手超す波の。「ゐで」（井手）は、川の流れを堰き止めてある所、「ゐせき」（井堰）に同じ。初・二句は、「たやすくも」を導く序詞。〇たやすくも　波がたやすく越す意に、妹は簡単には逢ってくれない、の意を掛ける。〇あはぬいもゆへ　逢はぬ妹ゆゑ。逢ってくれない君であるにもかかわらず。「妹」は男性が女性に対して親しみをこめていう語。「ゆゑ」は、ここでは逆接。〇たきもとゞろに　滝がとどろくように噂が音高くなっていて。「いくばくも降らぬ雨ゆゑわが背子が御名（みな）のここだく滝もとどろに」（万葉集・二八五一〈旧二八四〇〉）。
【所載】万葉集・二七二六（旧二七一七）朝東風尓　井堤越浪之　世蝶似裳　不相鬼故　滝毛響動二　アサゴチニヰデコスナミノセテフニモアハヌモノユヱタキモトドロニ　あさごちにゐでこすなみのよそめにもあはぬものゆゑたきもとどろに／夫木抄・七七四五／和歌童蒙抄・三七／八雲御抄・一九二

一六二九　わぎもこにわがこふらくはみづならばしがらみこえていぬべくおもほゆ

【異同】いぬへくおもほゆ―いゝぬへくおもほゆ（大）
【現代語訳】我妹子に私が恋慕っていることは、たとえば川の水ならば、どんな柵（しがらみ）があってもそれを越えて流れ出ていってしまうはず、そのように、どんな障害があっても、それをのり越えてあの子のところに行くにちがいない、と思われる。
【語句】◎しがらみ　流れを堰き止めるための物で、杙を打ち並べて木の枝や竹などをからみつけて横に渡す。堰き止めるものとして、恋の障害を喩えたり、落花・紅葉・別れをとどめてほしいとも詠む。「井手のしがらみ」や、「袖のしがらみ」「雲のしがらみ」など見立ての表現もある。○わぎもこ　我妹子。男性が妻や恋人などを強い親しみをこめて言う語。○わがこふらくは　私の恋い慕っているその気持は。「恋ふらく」は、「恋ふ」のク語法。○みづならば　たとえば水であるとしたならば。初・二句の心の様を、三句以下で水に喩えて具体的に表現する。○いぬべくおもほゆ　行ってしまうにちがいないと思われる。「いぬ」は往ぬ。「べく」は確信のある推量。
【所載】万葉集・二七一八（旧二七〇九）吾妹子　吾恋楽者　水有者　之賀良三越而　応逝衣思　ワギモコニワガコフラクハミヅナラバシガラミコエテユクベクゾオモフ　わぎもこにあがこふらくはみづならばしがらみこしてゆくべくおもほゆ

一六三〇　たまもかるゐでのしがらみうすきかもこひのよどめるわがこゝろかも

【異同】ナシ
【現代語訳】井手の柵（しがらみ）が薄いのかなあ。恋をせきとめる障害が弱いのかなあ。恋の思いが停滞しているよ。それとも自分の心からなのかなあ。
【語句】○たまもかるゐで　玉藻刈る井手（ゐで）。「玉藻刈る」は、「ゐで」に掛かる枕詞。「ゐで」は水をせき止める堰のこと、一六二八番歌参照。○しがらみうすきかも　しがらみ薄きかも。「しがらみ」は井手にある柵。柵が薄いというのは、水を堰き止めることなく流す状態。「かも」は、疑問の係助詞「か」と感動の係助詞「も」の語構成。○こひのよどめる　恋が淀んでいる。「よどめる」の「る」は、存続の助動詞「り」の連体形で、「か」の結び。○わがこゝろかも　自分の心のせいかなあ。「かも」は、「……うすきかも」の「かも」に同じ。

【所載】万葉集・二七三〇（旧二七二一）玉藻苅　井堤乃四賀良美　薄可毛　恋乃余杼女留　吾情可聞　タマモカルヰデノシガラミウスキカモコヒノヨドメルワガココロカモ　たまもかるゐでのしがらみうすみかもこひのよどめるあがこころかも／古来風体抄・一三四

〔以上五首担当　犬養悦・加藤〕

一六三一　あすかゝらはせゞにたまもはおほかれどしがらみあればなびきてもあはず

【異同】あすかゝは―あすからは（御・桂）

【現代語訳】飛鳥川の瀬々に美しい藻はたくさんあるのだが、川にしがらみがかけられているので、なびき合うことがない。（美しい女性たちはたくさんいるのだが、なにかと妨げがあるものだから、なかなかこちらへなびいて逢ってくれない。）

【語句】○あすかゞは　飛鳥川。大和国の歌枕。現奈良県高市郡明日香村を南から北へ貫流する川。末は大和川に注ぐ。○たまも　玉藻。玉は美称。川藻のこと。ここでは女性の比喩。○しがらみ　一六二九番歌参照。ここでは恋を妨げるものの比喩。○なびきてもあはず　川の流れによって藻が「なびき合ふ」ことに、恋の場面で相手がこちらに「なびき逢ふ」ことを掛けた言い方。「しがらみ」があるために「なびき逢ふ」ことをしない、ということ。

【所載】万葉集・一三八四（旧一三八〇）明日香川　湍瀬尓玉藻者　雖生有　四賀良美有者　靡不相　アスカガハセゼニタマモハオヒタレドシガラミアレバナビキモアハズ　あすかがはせぜにたまもはおひたれどしがらみあればなびきあはなくに

一六三二　なみだ川そこのみなかみはやければせきぞかねつるそでのしがらみ　貫之

【異同】ナシ

【現代語訳】涙の川は、底のみなかみの流れが激しいから、せき止めかねるよ、袖のしがらみでは。

【語句】○なみだ川　あふれ出る涙を誇張して川にたとえた言い方。恋歌の常套句。○そこのみなかみ　「そこ」は、「底」かあるいは「其処」（相手をさす）か判然としないが、ここでは仮に前者と見て「表面に見えない川底

の流れの上流」と解しておく。傍記に拠って「いづるみなかみ」とした方が、歌意はわかりやすい。○はやければ　勢いが激しいから。「はやし」は、ものの勢いが強く激しいこと。○そでのしがらみ　涙を押さえる袖を「なみだ川」の縁で「しがらみ」と言った。「しがらみ」は一六二九番歌参照。
【所載】拾遺抄・恋下・三一二／拾遺集・恋四・八七六／貫之集Ｉ・五四七
【参考】作者名「貫之」は、所載欄の文献に一致する。

一六三三　秋はぎのはなのながるゝ河せにはしがらみかくるしかの音もせず

【異同】ナシ
【現代語訳】秋萩の花の流れる川の瀬には、（秋萩の花をとどめるべく）しがらみをかける鹿の声もしないなあ。
【語句】○河せ　川の瀬。瀬は流れの浅いところ。○しがらみかくるしかの音もせず　流れゆく秋萩の花をとどめるべく鹿がしがらみをかけそうなものなのに、その鹿の声もしない。「音（ね）」は、鹿のなく声のこと。鹿と萩の関係は、「……萩の枝を　しがらみ散らし　さをしかは　つま呼びとよむ……」（万葉集・一〇五一〈旧一〇四七〉）や、「秋萩をしがらみ伏せてなく鹿の目には見えずて音のさやけさ」（古今集・二一七）などのように、鹿は萩を「しがらむ」（からみつける、の意）ものとして歌に詠まれてきた。ここではその「しがらむ」の連用形を、体言化した「しがらみ」（流れをせきとめる柵、の意）として用い、「川瀬にはしがらみをかける鹿の声もしない」と詠んだ。「しがらみ」は、一六二九番歌参照。
【所載】夫木抄・四一四〇／本院左大臣家歌合・一二

一六三四　おほゐがは心しがらみかみしもにちどりしばなくよぞふけにける

【異同】ナシ
【現代語訳】心が鬱屈していると、大堰川では、上流でも下流でも千鳥がたびたび鳴く。夜が更けたのだなあ。
【語句】○おほゐがは　山城国の大堰川か。大堰川は、京都西郊を流れる桂川の、嵐山の下あたりを言う。○心しがらみ　心が結ぼほれて鬱屈して。ここの「しがらみ」は、動詞「しがらむ」の連用形。「大堰川」の縁で用いた。○かみしもに　川の上流下流に。○しばなく　しばしば鳴く。たびたび鳴く。
【所載】夫木抄・六七七四／和歌童蒙抄・二三八

一六三五　人しれぬなかはしがらみかけたれやこひしきせにもあふよしのなき

【異同】ナシ
【現代語訳】人知れず思い合う仲は、（たとえて言えば）あいだにしがらみをかけたようなものか。恋しく思うときにも逢うすべがないことよ。
【語句】○人しれぬなか　他人に知られないように秘している恋仲。○しがらみかけたれや　しがらみをかけているのであろうか。しがらみをかけたようなものだろうか。「たれや」で言い切る形には、「まるでしがらみをかけたようなものだ」と、その比喩を肯定する気持ちがある。「しがらみ」は一六二九番歌参照。ここでは恋を堰くものの比喩として言われている。○こひしきせ　恋しき瀬。恋しく思う時。川の「瀬」に、機会・場面の意の「せ」を掛けた。「瀬」は「しがらみ」の縁語。
【所載】ナシ

〔以上五首担当　山下〕

春みちのつらきィ

一六三六　山風川にかぜのかけたるしがらみはながれもあへぬもみぢなりけり

【異同】底本ハ行間ニ作者名小字補入。　なかれもあへぬ―なかれもあへす（大）
【現代語訳】山の中を流れる川に、風がかけたしがらみは、流れようとしても流れきれずに留まっている、もみじの葉であったのだなあ。
【語句】○山川　やまがは。山の中を流れる川。「そこひなき淵やはさわぐ山河の浅き瀬にこそあだ波はたて」（古今集・七二二）。当該歌は所載欄古今集の詞書によれば「志賀の山越えにてよめる」とある。○しがらみ　流れをせき止めるため、杭を打ち渡して、木の枝や竹などをからませたもの。ここでは滞っているもみじ葉をしがらみと見立てた。しがらみをかけて紅葉を見る例として「竜田川しがらみかけてかみなびの三室の山のもみぢをぞみる」（金葉集・二六六）がある。○ながれもあへぬ　流れきれないで滞っている。○もみぢなりけり　もみじ葉であったのだなあ。「なりけり」は今まで気付かなかった眼前の事実にはじめてはっと気付いた驚きや詠嘆の気持ちを表す。

【所載】古今集・秋下・三〇三／新撰和歌・九〇／百人秀歌・三二／百人一首・三二／袖中抄・八二六／詠歌大概・五三
【参考】作者名「春みちのつらき」は所載欄の文献に一致する。

一六三七　みづもせにうきぬるときのしがらみはうちのとのとも見えずぞ有ける

【異同】ナシ
【現代語訳】水面も狭くなるほどいっぱいにもみじ葉が浮いて、しがらみとなっている時は、もみじ葉がしがらみの内側にあるものか外側にあるものかも、見わけがつかない有様だなあ。
【語句】○みづもせに　水も狭に。水面いっぱいに。○うきぬるときのしがらみは　もみじ葉が水面に浮いてしがらみを作っている時は。○しがらみ　一六三六番歌参照。○うちのとのとも　内の外のとも。しがらみの内側にあるものか外側にあるものかも。「内の外の」に「宇治の殿」を隠し詠みこんだ物名歌。所載欄後撰集の詞書に「宇治殿といふ所を」とある。○見えずぞ有ける　見わけがつかない有様だなあ。
【所載】後撰集・羈旅・一三五九／伊勢集Ⅰ・二五三／伊勢集Ⅱ・二五四／伊勢集Ⅲ・二五五／奥儀抄・二八八／和歌色葉・三一八
【参考】作者名「いせ」は所載欄の文献に一致する。

一六三八　せをせけばふちとなりてもよどみけりわかれをとむるしがらみぞなき

【異同】底本ハ行間ニ作者名小字補入。　よとみけり―淀みより（大）
【現代語訳】早瀬を堰き止めると、淵となっても水の流れは淀むのだ。それなのに死の別れを止めるしがらみは、ないものなのだなあ。
【語句】○せをせけば　瀬を堰き止めると。瀬は川の浅いところ。○ふち　淵。川の深い所。○よどみけり　流れる水が滞って流れないことだ。○わかれをとむるしがらみ　ここでは死別を堰き止めるしがらみ。所載欄古今集の詞書には、「姉の身まかりにける時によめる」とある。「しがらみ」は一六三六番歌参照。

【所載】古今集・哀傷・八三六／忠岑集Ⅰ・二四／忠岑集Ⅱ・六五／忠岑集Ⅲ・七八／忠岑集Ⅳ・一七三／古来風体抄・二八三
【参考】作者名「たゞみね」は所載欄の文献に一致する。

よかは　つらゆき

一六三九　かゞりびのかげとなる身のわびしきはながれてしたにもゆるなりけり

【異同】ナシ
【現代語訳】篝火が水に映る光、そのように水に映る我が身を見て悲しいのは、篝火が流れながら水の下で燃えているように、泣きながら心ひそかに情熱の火を燃やしているばかりだからなのだなあ。
【語句】◎よかは　夜川。歌では鵜飼いの篝火が川に映ったさまを言う場合が多い。「篝火のかげしるければうばたまの夜川の底は水も燃えけり」（貫之集Ⅰ・一〇）。○かゞりび　篝火。鵜飼いなどをするために船の上で燃やす火。○かげ　篝火が水に映る光に、水に映る自分の姿を掛ける。○ながれて　「流れて」に「泣かれて」を掛ける。○したにもゆる　篝火が水に映ることに、密かに情熱の火を燃やしていることを掛ける。
【所載】古今集・恋一・五三〇
【参考】作者名「つらゆき」とあるが、所載欄古今集は「よみ人知らず」である。

一六四〇　おほゐ河うかぶうぶねのかゞり火に小ぐらのやまのなのみなりけり　なりひら

【異同】小くらのやまの―小倉の山も（大）
【現代語訳】大井川に浮かぶ鵜船の篝火によって、あたり一面が明るくなり、小暗いという名の小倉山も、名前だけなのだなあ。
【語句】○おほゐ河　大井川。桂川の上流、京都市右京区嵯峨あたりの呼び名。河の両岸は桜、紅葉の名所。○うぶねのかゞり火　鮎を捕るため鵜船でたく火。○小ぐらのやま　小倉山。山城国の歌枕。大井川を隔てて嵐山と対峙する山。歌では「小暗し」の意で詠まれることが多い。「もみぢ葉をけふはなほ見む暮れぬとも小倉の山

の名にはさはらじ」（拾遺集・一九五）。○なのみなりけり　小倉山という呼び名も名前だけなのだなあ。「なりけり」は一六三六番歌参照。
【所載】後撰集・雑三・一二三一／業平集Ⅰ・六四／業平集Ⅱ・七六／業平集Ⅲ・七六／業平集Ⅳ・二九／和歌初学抄・一七七
【参考】作者名「なりひら」は所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当　林〕

一六四一　おほぞらにあらぬものからかはかみにほしかとみゆるかゞり火のかげ（つらゆき）

【異同】ナシ
【現代語訳】大空ではないのに、川上には、まるで大空の星かと思われるように見える、鵜舟によるかがり火の光だ。
【語句】○あらぬものから　そうではないものの。違うものなのに。「ものから」は逆接の接続助詞。
【所載】夫木抄・三一七九／貫之集Ⅰ・一五一
【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

一六四二　かゞりびにあらぬものから（おもひのイ）なぞもかくなみだのかはにうきてみゆらん（も）

【異同】ナシ
【現代語訳】かがり火ではないのに、どうしてこのようにかがり火と同じく、わが身は川に浮いて見えるのだろうか。つらい思いをし、私も涙の川に浮かんでいるようです。
【語句】○あらぬものから　一六四一番歌参照。○なみだのかは　流す涙を川に見立てたオーバーな表現。○うきて　「浮きて」に「憂き」を掛ける。
【所載】古今集・恋一・五二九／後撰集・恋四・八六九

一六四三　かゞり火のかげしうつればむば玉のよかはの水はそこも見えけり

【異同】かゝり火の―篝火に（大）
【現代語訳】かがり火の光が映るので、暗い夜河の水は明るく、底も見えることだ。
【語句】○むば玉の　「黒」「夜」「宵」などの枕詞。「ぬばたまの」とも。○よかは　夜の川の意だが、特に夜、かがり火を焚いて鵜飼いをする川をいう。一六三九番歌参照。
【所載】玉葉集・夏・三七七／貫之集Ⅰ・一〇／貫之集Ⅱ・八／和歌童蒙抄・四四一／袖中抄・四四八

一六四四　かつらがはよるかひのぼるかゞり火のかゝりけりともいまこそはしれ

【異同】ナシ
【現代語訳】桂川を、夜、鵜を飼いながらさかのぼる舟のかがり火のように、かかりけり、こうだった、と今はじめて知ったことだ。
【語句】○かつらがは　山城国の歌枕。大堰川の下流で、今の京都市西京区桂のあたりをいう。さらに下ると淀川に合流する。○かひのぼる　鵜飼いをしながら川をのぼる。「かひのぼる鵜舟のなはの繁ければ瀬伏しの鮎の行くかたやなき」（永久百首・一八八）。○かゝりけり　「かくありけり」の約。こうだったのだ。上三句は同音による序で、「かゞり火の」から「かかりけり」を導く。
【所載】和歌童蒙抄・四四二
【参考】この歌は、何らかの状況のもとで詠まれたいわば褻の歌かと思われるが、くわしい状況がわからないため、「かかりけり」の具体的な内容は不明。

あじろ

人まろ

一六四五　ものゝふのやそうぢがはのあじろ木にいさよふなみのよるべしらずも

【異同】ナシ
【現代語訳】宇治川の網代木のところに、ためらい滞っている波の、拠り所もわからず漂っていることだ。
【語句】◎あじろ　川に杭を並べて打ち、狭くなった端に竹や木で細かく編んだ簀（す）をおいて、魚をとる仕

掛け。宇治川のものが有名だが、初冬の景物として、紅葉、氷魚（ひお）などとともに詠まれることが多い。○ものゝふの　「八十（やそ）」にかかる枕詞。「もののふ」は朝廷に仕える文武百官で、多くの部族に分かれているところから「八十」あるいは「八十氏（やそうぢ）」にかかるという。○やそうぢがは　八十宇治川。宇治川の異称。山城国の歌枕。○あじろ木　あじろに用いる杭。○いさよふ　動かずに停滞すること。たゆとう。ためらう。○よるべ　身を寄せるところ。拠り所。

【所載】新古今集・雑中・一六五〇／万葉集・二六六（旧二六四）物乃部能　八十氏河乃　阿白木尓　不知代経浪乃　去辺白不母　モノノフノヤソウヂカハノアジロキニイサヨフナミノユクヘシラズモ　もののふのやそうぢかはのあじろきにいさよふなみのゆくへしらずも／新撰和歌・三〇一／夫木抄・冬一・六六九二／人麿集Ⅰ・二一／人麿集Ⅱ・二一四／人麿集Ⅲ・二〇六／三十六人撰・一〇／和歌童蒙抄・四四三／奥儀抄・三六七／袋草紙・八一九／柿本人麻呂勘文・四八／袖中抄・九三八、九五八／古来風体抄・三七／和歌色葉・一三六／西行上人談抄・四五

【参考】作者名「人まろ」は、所載欄の作者名表記のある文献すべてに一致する。

〔以上五首担当　久保木〕

一六四六　かはかみにしぐれのみふるあじろぎにもみぢ葉さへぞおちまさりける　みつね

【異同】おちまさりける―おちまさりけり（大）

【現代語訳】川上でただただ時雨が降ることだ。網代木に、紅葉の葉までがいっそう多く落ちかかっていくことだなあ。

【語句】○しぐれ　時雨。晩秋から初冬にかけて降るにわか雨。木の葉を紅葉させ、さらに紅葉を散らすものとして詠まれた。○あじろぎ　一六四五番歌参照。○もみぢ葉さへぞおちまさりける　水だけではなく、紅葉の葉までがいっそう多く落ちかかっていくことだなあ。「さへ」は、添加を表す副助詞。川上で降る時雨のため、網代に流れ落ちる水量が増すばかりでなく、時雨に打たれて紅葉の葉までも散る数が増して網代に落ちてかかっていくことを表す。

【所載】新拾遺集・冬・五八九／躬恒集Ⅰ・二二三／躬恒集Ⅱ・二九六／躬恒集Ⅲ・一四五／躬恒集Ⅳ・七／躬恒集Ⅴ・一〇七／元輔集Ⅰ・二四七

【参考】作者名「みつね」は、所載欄の元輔集Ⅰ以外の文献と一致する。元輔集Ⅰでも、他人詠による屏風歌の歌群中にある。

一六四七　おちつもるもみぢば見ればもゝとせのあきのとまりはあじろなりけり　つらゆきイ

【異同】底本ハ行間ニ作者名小字補入。　あきのとまりは―あきのとなりは（御・桂・大）
【現代語訳】落ち積もる紅葉の葉を見ると、百年たっても変わらない、秋が最後に行き着く港は網代だったんだなあ。
【語句】○おちつもるもみぢば　川に落ちて網代に留められ、そこに積もっている紅葉の葉。「山川をとめきてみれば落ちつもる紅葉のための網代なりけり」（貫之集・四〇七）。○もゝとせの　百年続く。百年経っても変わらない。多くの年の。○秋のとまり　二〇四番歌参照。「とまり」は、港の意の「泊まり」と、終着点、最後に落ち着く所の意の「留（止）まり」とを掛ける。
【所載】新拾遺集・冬・五九〇／貫之集Ⅰ・一六九
【参考】作者名「つらゆき」は、所載欄の文献と一致する。なお、新編国歌大観第六巻所収の金葉集初度本にも「落ちとまるもみぢを見ればももとせに秋のとまりはあらしなりけり」（三九三）という、小異のある歌が見える。

一六四八　もみぢばのながれてとまるあじろにはしらなみもまたよらぬひぞなき　つらゆきイ

【異同】ナシ
【現代語訳】紅葉の葉が流れ寄ってきて留まる網代には、白波もまた寄らない日はないことだ。
【語句】○もみぢばのながれてとまる　紅葉の葉が流れてきて、そこに留まるような。「もみぢ葉の流れてとまるみなとには紅深き浪や立つらむ」（古今集・一九三）。○しらなみもまたよらぬひぞなき　紅葉の葉だけではなく、白波もまた、寄せてこない日はない。網代に寄るものとして紅葉と白波の両方を取り合わせ、白波の白と紅葉の紅とを色彩的に対照させた歌。

【所載】貫之集Ⅰ・四四四
【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献と一致する。貫之集Ⅰによると、天慶二（九三九）年、宰相中将藤原敦忠の為の屏風歌。

一六四九　みよしのゝよし野ゝ川のあじろにはたきのみなわぞおちまさりける

【異同】ナシ
【現代語訳】み吉野の吉野の川の網代には、その激流を流れ落ちてきた水の泡がいっそう多く落ちかかっていくことよ。
【語句】○みよしのゝ　み吉野の。「み」は美称の接頭語。二句「よし野の」に枕詞風に冠して「よしのの」という音を繰り返す。○よし野ゝ川　吉野の川。吉野川のこと。地理的解説については、一五五四番歌参照。大和国の歌枕。○たき　滝。当該歌では、急流、激流の意。○みなわ　水泡。水の泡。○おちまさりける　激流に泡がたつ吉野川では、いっそう多くの水の泡が流れ落ちて行くのだった。
【所載】夫木抄・六六九四　／貫之集Ⅰ・五〇六／和歌童蒙抄・四四四
【参考】古今六帖に作者名はないが、所載欄の貫之集Ⅰ及び夫木抄によると作者は貫之。貫之集Ⅰによると、天慶五（九四二）年、亭子院の屏風の為の歌。

一六五〇　宇治がはのなかにながれてきみまさばわれもあじろによりぬべきかな

つらゆき

【異同】ナシ
【現代語訳】もしも宇治川の中に流れてあなたがいらっしゃるなら、氷魚が寄るように、私も網代に寄りつきそうになりました。
【語句】○宇治がは　宇治川。山城国の歌枕。琵琶湖より流れて宇治を経、末は淀川に入る。網代や、そこに掛かる氷魚が景物として詠まれた。○なかにながれてきみまさば　中に流れて君まさば。中に流れてあなたがいらっしゃったならば。所載欄の後撰集一一三六番歌では「浪にみなれし君ませば」とあり、その方が歌意はわかりやすい。

【所載】後撰集・雑二・一一三六
【参考】古今六帖は作者名を「つらゆき」とするが、所載欄の後撰集によると作者は大江興俊で、一致しない。「宇治の網代に知れる人の侍りければまかりて」という詞書が後撰集にはあり、訪問の挨拶の歌。
〔以上五首担当　長戸〕

一六五一　うぢがはのなみのよる〳〵ねをぞなくあじろもるてふひとのつらさに

【異同】ナシ
【現代語訳】宇治川の波がくり返し寄せて来るように、夜ごとに声を立てて泣いていますよ。網代の番をしているという人のつらさを思って。
【語句】○うぢがは　宇治川。一五二四、一六五〇番歌参照。○なみのよる〳〵　波が「寄る」に「夜」を掛ける。○あじろもるてふひとのつらさに　網代守るてふ人のつらさに。網代の番人の仕事のつらさを思って。「つらさに」に相手の薄情さゆえに、の意を響かせるか。
【所載】ナシ

一六五二　やな見れば河かぜさむくふくときぞなみのはなさへおちまさりける

【異同】ナシ
【現代語訳】梁を見ると、川風が寒く吹くときこそ、魚だけでなく、波の花までもがよりいっそう落ちかかっていることだ。
【語句】◎やな　梁。川に杭を打ち斜めに張った簀で魚を捕らえる仕掛け。屏風歌の素材にしばし見られる。○なみのはなさへ　「波の花」は波頭を花に見立てた言い方。ここでは風が吹き、梁の上に見え隠れする波を白い花に見立てている。「さへ」は、梁にかかる魚だけではなく「波の花」までも、の意。
【所載】拾遺集・雑春・一〇六一／貫之集Ⅰ・一一九

一六五三　あだ人のやなうちわたすせをはやみこゝろにはおもへどたゞにあらぬかも（あはぬイ）

【異同】たゝにあらぬかも―たゝにはあらぬかも（御・桂・大）
【現代語訳】安太人が梁を掛け渡す所の瀬が速くて渡れないように、あなたの所にも行けずに、心には思っているのだけれども、直接逢うことはできないことだよ。
【語句】○あだ人　所載欄の万葉集では「安太人」。吉野川沿いの、現在の奈良県五條市阿田の地で鮎漁をしていた人々。○せをはやみ　瀬が速いので。逢瀬の妨げとなるものの喩え。○たゞにあらぬかも　万葉集や傍記を参考に「ただにあはぬかも」として解す。直接逢うことはできないことだなあ、の意。
【所載】万葉集・二七〇九（旧二六九九）安太人之　八名打度　瀬速　意者雖念　直不相鴨　アダヒトノヤナウチワタスセヲハヤミココロハオモヘドタダニアハヌカモ　あだひとのやなうちわたすせをはやみこころはおもへどただにあはぬかも／人麿集Ⅳ・一七〇

一六五四　いり江こぐたなゝし小ぶねこぎかへりおなじ人のみおもほゆるかな（にや恋わたるらんイ）

【異同】おもほゆるかな―おもほるかな（桂）
【現代語訳】入り江を漕いでいる棚無し小舟が、漕いでは帰るのを繰り返すように、私もあの人のことばかり繰り返し思われることだ。
【語句】◎え　江。海や湖などで、陸地に入り組んだところ。入り江。○たなゝし小ぶね　棚無し小舟（をぶね）。船棚の無い舟。丸木舟のたぐい。○こぎかへり　漕ぎ帰り。漕ぎ出た舟が元のところに漕ぎ戻ること。
【所載】古今集・恋四・七三二
【参考】所載欄の古今集では「ほり江こぐたななしを舟こぎかへりおなじ人にやこひわたりなむ」という形で伝わるが、当該歌と同じ本文を伝えるものもある。

一六五五　玉（つ）○しまいり江のこまつ人ならばいくよかへしととはまし物を（とふべきイ）

【異同】ナシ
【現代語訳】玉津島の入り江の小松がもし人だったならば、いったい幾代を経たのか、と尋ねてみたいのになあ。

【語句】○玉つしま　玉津島。和歌山市和歌浦の、玉津島神社のある辺り。和歌浦を眺望できる地。○いくよかへし　幾代か経し。どのくらいの歳月を経たのか。○とはまし物を　尋ねてみたいのになあ。松を人に見立てた。
【所載】ナシ
【参考】古今集に「住吉の岸のひめ松人ならばいく世かへしととはましものを」（九〇六）という類歌がある。

〔以上五首担当　青木〕

一六五六　みちのくのたまつくり江にこぐ舟のをとにはたてず君こふる身は（にイ）

【異同】たまつくり江に―たまつくりえは（桂）
【現代語訳】陸奥の玉造江に漕ぐ舟の音、その音ではないけれど、音を立てないよう密かに、人に知られないようにしています。あなたを恋い慕っている我が身は。
【語句】○みちのく　陸奥。現在の福島・宮城・岩手・青森の諸県。○たまつくりえ　玉造江。陸奥国及び摂津国の歌枕。当該歌は初句により陸奥国の歌枕。現在の宮城県北西部にかつて玉造郡があり、そこを貫流する荒尾川が古くは玉造川と呼ばれた。○をとにはたてず　音（おと）には立てず。音を立てないように、人知れず密かに。上三句は、「音」を導く序。
【所載】新勅撰集・恋五・六五一
【参考】小町集に、「忘れやしにしと、ある君達ののたまへるに」という詞書とともに「みちのくの玉つくり江に漕ぐ舟のほにこそいでね君を恋ふれど」（三七）という類歌がある。

つらゆき

一六五七　津の国のながらへゆかばわすられ（れなイ）でなをぞみぐまのほり江成らん（またもイ）

【異同】なをそみくまの（またもイ）―なをもみくまの（桂）、猶そみまくの（大）
【現代語訳】津の国の長柄へ行くならば、何と言ってもやはり忘れられないで見たいのは、水隈の堀江だろう。生きながらえたら、あの人のことが忘れられなくて、ずっと逢いたいと思い続けるだろう。
【語句】○津の国の　「津の国」は摂津国の古名で、現在の大阪府北部から兵庫県南東部にかけての、淀川西側一帯の地。「津の国の」は、「長柄」などの地名や、それと同音の「ながらふ」などの語に続けて、よく用いられ

た。○ながらへゆかば　「長柄へ行かば」に「永らへ行かば」を掛ける。「しばしこそ思ひもいでめ津の国のながらへゆかばいま忘れなむ」（後拾遺集・九五八）。「長柄」は摂津国の歌枕。現在の大阪市北区の地名。○わすられで　忘れられないで。「忘られて」とも解せるが、所載欄の文献に「忘れなく」と見えるのを勘案して「忘られで」と解釈した。○みぐまのほり江　底本のままで解すると、「水隈の堀江」か。「水隈」は、水流が曲がりくねった所の意。「み吉野の水隈（水具麻）が菅を編まなくに苅りのみ苅りて乱りてむとや」（万葉集・二八四八〈旧二八三七〉）。「み」に「見」る意を込めるか。所載欄の歌合本文と大久保本には「みまくのほり江」とあり、これによると、見たい、逢いたいという意の「見まくの欲り」の「欲り」に、「堀江」の「堀」を掛けた歌になる。「ほり江」は、初句に「津の国の」とあるので、摂津の国の歌枕である難波の堀江であろう。津の国の地名「長柄」「堀江」を詠み込んだ歌。

【所載】左兵衛佐定文歌合・三五

【参考】作者名「つらゆき」とあるが、所載欄の左兵衛佐定文歌合では作者名がなく、貫之集にも見えない。

一六五八　わかれてはのちぞかなしきにごり江のそこともしらぬありかと思へば

【異同】ナシ

【現代語訳】恋しい人と別れるとその後が切なく悲しいことだ。濁り江の底が見えなくてわからないように、あの人が居るのはどこかも知らない所と思うので。

【語句】○にごり江　濁り江。水が濁っている入り江。○そこともしらぬ　どこかも知らない。どこともわからない。「そこ」は、「底」に「其処」を掛ける。

【所載】続後拾遺集・恋四・八八三／躬恒集Ⅰ・六七／躬恒集Ⅱ・二八五／躬恒集Ⅲ・一七〇／躬恒集Ⅴ・一〇／左兵衛佐定文歌合・三〇

一六五九　こゝろにもあらでうき世にすみのえのきしとはなみにぬるゝ袖かな

【異同】ナシ

【現代語訳】心ならずもこの憂き世に住んでいて、住の江の岸ではないのに、涙で袖が濡れることだよ。

【語句】○すみのえ　地名の「住の江」の「住」に、「心にもあらで憂き世に住み」の「住み」を掛ける。「心に

もあらでうき世に住の江の年ふる松ぞ見ぬは苦しき」（信明集・一一二）。住の江は住吉とも書き、摂津国の歌枕。現在の大阪市住吉区一帯で、もとは大阪湾に臨む海岸であった。○きしとはなみに　（波で袖が濡れる）岸ではないのに。「なみに」は、「波に」に「無みに」を掛ける。「寄る潮のみち来るそらも思ほえず逢ふこと波に帰ると思へば」（後撰集・九六五）。「岸」「波」は「江」の縁語。

【所載】ナシ

一六六〇　みなといりはなみさはがしみあしまよふえにこそ人をおもふべらなれ

【異同】みなといりは―みなといては（御・桂・大）

【現代語訳】舟が港に入るところは、波が立って騒がしいので、生い茂った葦が入り乱れて紛れる入り江であの人を思うべきだよ。

【語句】○みなといり　舟が港に入ること。○あしまよふえに　葦が乱れる入り江に。生い茂った葦が入り乱れて見分けがつかなくなり紛れる入江に。「濁りゆく水には影の見えばこそ葦迷ふ江をとどめても見め」（後撰集・一〇二三）。「みなと」「波」「葦」は、「江」の縁語。○おもふべらなれ　思うべきだよ。思うべきだろうよ。「べらなれ」は「べらなり」の已然形で強意の係助詞「こそ」の結び。「べらなり」は、助動詞「べし」の語幹「べ」に、客体化の接尾語「ら」、断定の助動詞「なり」からなり、表現を心情的に実体化させようとする強調の意をもった確定推量であることを、中野方子が指摘している（中野方子『『古今集』における「べらなり」―喩に承接される助動詞―』『国文』平成九年一月）。

【所載】ナシ

【参考】人の集まるところ（みなといり）は人目があって噂になりやすいから、「葦まよふ江」のような人目につかないところであの人を思うべきだと詠んだ歌か。

〔以上五首担当　長戸〕

一六六一　いせのうみのおのゝみなとのながれえのながれても見む人のこゝろを

【異同】ナシ

【現代語訳】伊勢の海の小野の湊の流れ江の、流れても、時が流れ、生きながらえても見たいものだ、あの人の

心を。
【語句】〇おのゝみなと　尾野湊。三重県多気郡明和町大淀にある大淀海岸の古名で、伊勢神宮に参入する際、斎宮が禊をした場所。〇ながれえの　流れ江の。「流れ江」は水が停滞することなく流れ動く入江。初句からここまでが「ながれても」を導く序詞。〇ながれても　流れても。水の「流れても」に「ながらへても」をかける。生きながらえても。
【所載】続後撰集・恋一・七三九／万代集・一八五五／夫木抄・一一八九六

一六六二　あはれてふこゝろひとつにつくまえのこひわたるとはしらずや有らむ

【異同】ナシ
【現代語訳】ああ愛しいというたった一つの思いに悩み、私が筑摩江のように深く恋い慕い続けているとは、あの人は御存知ないのでしょうよ。
【語句】〇あはれてふ　かわいい、愛しいという。「立ちかへりあはれとぞ思ふよそにても人に心をおきつ白浪」（古今集・四七四）。〇こゝろひとつ　たった一つの思い。「女郎花秋の野風にうちなびき心ひとつをたれに寄すらむ」（古今集・二三〇）。〇つくまえ　筑摩江。近江国の枕詞。琵琶湖の東北端。「こゝろひとつにつく」の「つく」に「つくまえ」を掛ける。「筑摩江の底の深さをよそながらひける菖蒲の根にて知るかな」（後拾遺集・二一一）のように、深いことがよく詠まれた。〇こひわたる　恋い慕って年月を経る。「わたる」は「え（江）」の縁語。
【所載】ナシ

一六六三　すみのえのめにちかゝらばきしにゐてなみのかずをもよむべきものを

伊勢ィ

【異同】底本ハ行間ニ作者名小字補入。
【現代語訳】住の江が目近にあるならば、岸に座って、寄せてくる波の数をも数えることができましょうに。
【語句】〇すみのえ　住の江。住吉とも。摂津国の枕詞。現在の大阪市住吉区の一帯。一六五九番歌参照。〇めにちかゝらば　目に見えることができるほど近くにならば。〇きしにゐて　岸に座って。〇なみのかず　寄せて

くる波の数。「わが恋を知らんと思はば田子の浦に立つらん浪の数を数へよ」（後撰集・六三〇）。「江」「岸」「波」と「海」に因んだ語を連ねる。○よむべきものを　数えることができるのになあ。「よむ」は「数を数える」意。「ものを」は詠嘆の意を表す終助詞。

【所載】古今六帖・第三帖「なみ」一九五七／後撰集・恋四・八一九／伊勢集Ⅰ・二六一／伊勢集Ⅱ・二六〇／伊勢集Ⅲ・二六二

【参考】作者名「伊勢」は所載欄の文献に一致する。後撰集では贈答歌の返歌となっており、贈歌は「女のもとにつかはしける」という詞書に「住吉の岸にきよするおきつ浪まなくかけてもおもほゆるかな」と、男が「波が絶えないように、絶え間なくあなたを思っています。」と呼びかけたのに対して、女は「近ければ波の数を数えられるのに。」と男の言葉を疑って答えている。「なみのかず」は、諸注釈書が「男の思いの数」「男の立ち寄る数」などと解釈するのに対し、片桐洋一校注『後撰和歌集』（新日本古典文学大系）は「波」に「無み」を掛けて「逢うことが無い数」とするが、当該歌では人事の意味を含めずに訳した。

一六六四　アキカゼノチエノウラホノコトツミナルコヽロハヨリヌノチハシラネドィ

【異同】底本ハ行間ニ片仮名デ小字補入。　コトツミナル―コトワミナル（御）　ノチハシラネトィ―のちはしらねと（大）

【現代語訳】［所載欄の万葉集により、第三句の「ウラホ」を「浦廻」、第四句の「コトツミ」を「こつみ」として解した。］秋風の吹く千江の浦廻に寄せる木屑である私の心は、あの人に寄ってしまった。後々のことは知らないけれど。

【語句】○アキカゼノ　涼しい秋風が吹いている意で、「ちえのうらほ」の枕詞的措辞。○チエノウラホ　「千江」は地名。所在不明。所載欄の万葉集では「ちえのうらみ」、夫木抄では「ちえのうらわ」。「うらほ」では意味不明なので、所載欄の万葉集により「浦廻」（うらみ・うらわ。深く湾曲した入江。）で解する。○コトツミナル　意味不明。所載欄の万葉集では「こつみなす」、夫木抄では「こつみなる」。所載欄の文献により「ことつみ」を「こつみ」に改め解釈することとする。「こつみ」は水辺に打ち寄せられたごみ、木の屑。

【所載】万葉集・二七三三（旧二七二四）冷風之　千江之浦廻乃　木積成　心者依　後者雖不知　アキカゼノチエノウラワノコツミナス（ナル）ココロハヨリヌノチハシラネド　あきかぜのちえのうらみのこつみなすこころはよりぬのちはしらねど／夫木抄・一一四二六

一六六五　わがせこがおゆるがをしさゝだのいけ（いけ）のたまもにもがなかりあげはやさん（にもがもやイ）

【異同】ナシ
【現代語訳】愛しいあの方が年をとっていくのが口惜しいことですよ。蹉陀池の玉藻だったらいいのに。あの方の時間を刈り上げてまた新しい芽を生やしたい。
【語句】◎いけ　池。土地のくぼみに水が溜まったところ。自然にできたものと稲作のために人工的に作ったものがある。歌では固有の池が詠まれることが多い。○おゆるが　老ゆるが。年とっていくのが。「おゆ」は「老ゆ」。○をしさ　口惜しいことよ。接尾語「さ」は「……の（が）……さ」の形で詠嘆を表す。○ゝ（さ）だのいけ　蹉陀池。大阪府枚方市中振の南西部にある池か。「さだ」は時機、あるいは盛りの時、という意味の語だが、ここでは、時、時間、の意に用いたか。「沖つ波辺波（へなみ）の来寄る佐多の浦のこのさだ過ぎて後恋ひむかも」（万葉集・二七四一〈旧二七三二〉）。○たまもにもがな　玉藻だったらなあ。玉藻は美しい藻。「もがな」は願望の意を表す。○かりあげはやさん　刈り上げて生やしたい。年老いた夫を蘇らせようというものか。「かりあげ」は「たまも」の縁語。
【所載】古今六帖・第六帖「こも」三八〇九／夫木抄・一〇八二五、一〇八三〇

〔以上五首担当　三浦〕

一六六六　あめふるとふくまつかぜはきこゆれどいけのみぎはゝまさらざりけり（つらゆき）

【異同】ナシ
【現代語訳】古今六帖・第一帖「夏のかぜ」三九九番既出。

一六六七　さるさはのいけのつらしなわぎもこがたまもかづかばみづもひなまし

【異同】いけのつらしな―いけもつらしな（御・桂・大）

【現代語訳】猿沢の池が恨めしいことだなあ。愛しいあの娘が藻の下になったら水も乾いてしまえばよかったのに。

【語句】○さるさはのいけ　奈良市興福寺の傍にある池。ただし、所載欄の万葉集・夫木抄では、「みみなしの池」となっている。○つらしな　恨めしいことだなあ。形容詞「つらし」（薄情だ、思いやりがない意）に詠嘆の終助詞「な」がついた形。○わぎもこ　男性が親しい女性をいう語。○たまもかづかば　水中で藻を頭にいただいたら。即ち、（投身して）藻の下になったら。玉藻は藻の美称。○みづもひなまし　水も乾いてしまえばよかったのに。「まし」は反実仮想の助動詞。

【所載】万葉集・三八一〇（旧三七八八）無耳之　池羊蹄恨之　吾妹兒之　来乍潜者　水波将涸　ミミナシノイケシウラメシワギモコガキツツカクレバミヅハカレナム　みみなしのいけしうらめしわぎもこがきつつかづかばみづはかれなむ／夫木抄・一〇八二八／袋草紙・二二／万葉集時代難事・三七／柿本人麻呂勘文・二五／大和物語・二五三（百五十段）

【参考】所載欄の大和物語では猿沢の池に身投げした采女を悼んで人麻呂が「吾妹子がねくたれ髪を猿沢の池の玉藻と見るぞかなしき」と詠み、それに続けて奈良帝が詠んだ歌となっている。

一六六八　恋をのみますだのいけぬうきぬなはくるにぞものゝみだれとはなる

【異同】ますたのいけぬ―益田の池の（大）

【現代語訳】［第二句「ますだのいけぬ」は「ますだのいけの」で解した。］恋しい思いばかりを増す益田の池に浮いている蓴菜（じゅんさい）を手繰る、その「くる」ということばのように、あなたがやって来ると心の乱れとなることです。

【語句】○ますだのいけぬ　「ますだのいけ」は益田の池。大和国の歌枕。現在の橿原市にあった池。「益田の池」に「恋が増す」の意を掛けた。「ねぬなはのくるしかるらん人よりも我ぞます田のいけるかひなき」（拾遺集・九四）。所載欄の古今六帖・二八三二番歌の「ますだのいけの」で解釈する。○うきぬなは　浮き蓴菜。浮き蓴（ぬなは）。「ぬなは」は蓴菜の古名。スイレン科の多年生水草。楕円形の葉は楯状で水面に浮かぶ。池に浮き漂う様を心の揺れるたとえに使った。「あが心ゆたにたゆたに浮きぬなは辺にも沖にも寄りかつましじ」（万葉集・一三五六〈旧一三五二〉）。○くる　細長いものを手繰るの「繰る」に、「来る」を掛ける。

【所載】古今六帖・第六帖「ねぬなは」三八三二／万代集・二一七四

一六六九　いひしらで人めつゝみにせかれにし池のみづともゆかぬこゝろか

【異同】人めつゝみに―人目つつみの（大）
【現代語訳】ことばに出して言いようがなく人目をはばかる気持ちにさえぎられて、堤に堰き止められた池の水が流れず滞るように、晴れゆかぬ私の心でありますよ。
【語釈】○いひしらで　言ひ知らで。何とも言いようがなく。「いひ」は「言ひ」に樋（池の水を流すのに用いる地中に埋めた板の箱）を掛ける。○人めつゝみ　人目をはばかる意の「人目つつみ」に「堤」を掛ける。「たぎつせのはやき心をなにしかも人めつつみのせきとどむらむ」（古今集・六六〇）。○せかれにし　堰かれにし。せき止められた。「せく」は（水を）「堰く」に、さえぎって人に会わせない恋の仲を「塞く」意を掛ける。○みづ　「水」に「見つ」（会った意）を掛ける。○ゆかぬこゝろ　晴れゆかぬ心。晴れ晴れとしない心。「ゆく」は水が流れ「ゆく」ことに心が晴れる意の「ゆく」を掛ける。「いひ（樋）」「つゝみ（堤）」「せかれ」は「池」の縁語。
【所載】和歌初学抄・二〇

一六七〇　あだなりとなにはいはれのいけなれば人にねぬなはたつにざりける

【異同】ナシ
【現代語訳】「浮気だ」と噂に言われているので、寝てもいないのにあの人と寝たという評判が立ったのであったよ。
【語句】○あだ　誠意のないこと。浮気なさま。○なにはいはれのいけなれば　名には磐余の池なれば。噂に言われているので。「な（名）」は噂、評判の意。「いはれのいけ」は磐余の池。奈良県桜井市池之内付近にあった。「磐余」に「言はれ」を掛けた。「なき事をいはれの池の浮きぬなはくるしき物は世にこそ有りけれ」（拾遺集・七〇一）。○ねぬなは　根蓴菜（根ぬなは）。「ぬなは」は一六六八番歌参照。蓴菜の根が長いことからつけられた名で、「寝ぬ名（寝てもいないのに寝たという評判）」を掛ける。「隠れ沼の下より生ふるねぬなはの寝ぬ名はたてじくるないとひそ」（古今集・一〇三六）。○たつにざりける　たつのですよ。「たつ」は評判になる。「ざり」は「ぞあり」の約。「ぞ」は係助詞。

【所載】夫木抄・一〇七三六

〔以上五首担当　三浦〕

一六七一　おもへども人めをつゝむなみだこそあさつのいけとなりぬべらなれ

【異同】あさつのいけと―あまつのいけと（大）
【現代語訳】深くあなたを思いはするけれど、人目をはばかって流す涙こそが浅いという名のあさつの池となったようであるよ。
【語句】○つゝむ　包む。表に出ないように隠すの意。○あさつのいけ　所在地不明。「あさ」に「浅」（い）を掛ける。恋歌の場合、「浅い」のは相手の心で、自分の思いは深く、涙で深い池になるとするのが常套であるが、ここでは人目をはばかって浅い池となるのだと詠む。「あさつの池」の部分は、大久保本では「あまつのいけ」、所載欄の夫木抄は「おさへの池」、歌枕名寄では「朝露池」とあるが、どれも所在は不明。いずれも上三句との続き方が悪い。この中では、「あさつの池」が適当だと思われる。
【所載】夫木抄・一〇八〇三

一六七二　いつまたのいけにすむてふこひ〳〵てまれにもよそにみるぞかなしき

【異同】みるそかなしき―みゆそかなしき（桂）
【現代語訳】かつまたの池にすむという鯉、その鯉ではないがひたすら恋い続けて、まれに余所ながら見るのが悲しいことであるよ。
【語句】○かつまたの池　勝間田の池。万葉集では大和国の歌枕。現在の奈良市西の京にあったとされる。ただし平安時代以降になると、美作国、下野国、下総国など、その所在地についての説が分れた。○こひ〳〵て　ひたすらに恋い続けて。「恋」に「鯉」を掛ける。初・二句は「こひ〳〵て」を導く序。鯉はあまり歌に詠まれることはないが、古今六帖には一五一四・一五一五番に「鯉」題がある。
【所載】ナシ
【参考】夫木抄・一〇七七三に「勝間田の池にありてふこひこひてまれにはよそに人を見るかな」と似た歌がある。

一六七三　はらのいけに生ふる玉ものかりそめにきみをわが思ふものならなくに

【異同】ナシ
【現代語訳】原の池に生えている玉藻を刈り始める、そんなかりそめのことであなたを思っているのではないのですから。
【語句】○はらのいけ　未詳。和歌初学抄では摂津国の歌枕とする。枕草子「池は」段にも見える。○かりそめに　仮初めに。一時的に、の意。「かりそめに思ふ」とは一時的に心がひかれること。「刈り初め」に「仮初め」を掛けた。初・二句が「かりそめに」を導く序。
【所載】夫木抄・一〇七四七

一六七四　あふことはならし（くイ）（なイ）のいけの水なれやたえみたえずみ年のへぬらん

【異同】たえみたえすみ―たえみたえすは（桂）、絶す絶すみ（大）
【現代語訳】あなたと逢うことは、馴れるという名をもつならしの池の水なのだろうか。仲が絶えたり絶えなかったりで、年を経てしまったようだ。
【語句】○あふことは　逢瀬を指す。○ならしのいけ　所在不明。「無（な）」を響かせる。下句の「たえみたえずみ」につながる。傍記の「なくしの池」「ななしの池」も管見の範囲では見あたらない。夫木抄では「あらしの池」とするがこちらもわからない。ただし、万葉集に「古郷之奈良思乃岳能（フルサトノナラシノヲカノ）」（一五一〇〈旧一五〇六〉）とする「ならしの岡」は大和国にある。ここと関連するか。「馴らし」を掛けて解釈した。○たえみたえずみ　絶えみ絶えずみ。絶えたり絶えなかったり。「絶ゆ」は男女の関係が途切れること。
【所載】夫木抄・一〇八一九

一六七五　にほどりのさはがすかたの池みればみなととのみぞたつべかりける

【異同】ナシ

【現代語訳】鳰鳥が羽ばたいて水を騒がせる方を見ると、ここすがたの池をすっかり水門だと思い込んで飛び立つようだ。
【語句】○さはがすかたの池　「騒がす方の池」に「すがたの池」を隠し詠み込む。「すがたの池」は相如集に「大和なるすがたの池」（二八）とあり、大和郡山市筒井にあった池、菅田の池。○みなと　水門。川や海の水の出入りする所、水や舟や人の集る所の意。○たつ　鳥が飛び立つ。鳰鳥の縁語。鳰鳥は水門だと思っているので、舟が発つように飛び立っている。舟が「発つ」を掛ける。○べかりける　べきであるようだ。「べし」は当然の表現。「けり」は事態の確認の表現。
【所載】夫木抄・一〇八六〇

〔以上五首担当　杉本〕

一六七六　みづどりのうきて心のまどふかな宮ぢのいけにとしはへぬれど

【異同】ナシ
【現代語訳】心が落ち着かず惑乱しているよ、何年も経つのだけれど。
【語句】○みづどりの　水鳥が池に浮く、という続きで二句「浮きて心の」を導く。○うきて心のまどふ　恋をしている時の「心ここにあらず」の状態をいう。「まどふ」は惑乱する、の意。○宮ぢのいけ　宮地の池。所在不詳。「宮地」という地名は、美作、筑前、肥後、肥前、美濃、三河、甲斐など諸所にあり、特定できない。○としはへぬれど　年は経ぬれど。年は経ったけれど。
【所載】夫木抄・一〇八四一
【参考】初句「みづどりの」は第四句「宮ぢの池」と響き合うが、「宮ぢのいけに」と「年は経ぬれど」の続きが不明。宮地の池に長年定着していることが作者の感慨か。「浮きて心のまどふ」と対比されるか。

一六七七　なにごともいはでこしたの池にたつかくいひしらぬものはおもはず

【異同】ナシ
【現代語訳】何事も言わないで今まできた、このように言葉に尽くせぬ物思いはこれまでしたことがない。
【語句】○なにごともいはでこしたの池　「こしたの池」は地名。それに「来し」を掛ける。「何事も言はで来

し」という続き。固有名詞「こしたの池」の所在は不明。○かく　このように。○いひしらぬ　言ひ知らぬ。言うことができない。何といってよいかわからない。「物思ふと何いにしへを歎きけんかくいひしらぬをりもありけり」（風葉集・八三三）。「言ひ」に「樋（いひ）」をかける。「樋」は池や用水の堤など水を引く所に設ける水門。板で作った箱状のものを土中に埋め戸を開閉して水勢を調節する。「池」の縁語。○ものはおもはず　「かにかくにものはおもはず飛騨人の打つ墨縄のただ一筋に」（万葉集・二六五六〈旧二六四八〉）のように「……のような物思いはしない」の意。

【所載】ナシ

【参考】第二句「こしたの池にたつ」から「かくいひしらぬ」の続きが不分明であるが、第二句は「樋（いひ）」を導くか。作る、設けるの意味の「たつ」として、「樋（いひ）」に続くと見るのである。

一六七八　おなじくはきみとならびのいけにこそ身をなげつとも人にかたらめ（きかせイ）

【異同】ナシ

【現代語訳】同じことならば、あなたと二人（仲よく）並んで池に身を投げたと、人に語りたいものです。

【語句】○おなじくは　所載欄の後撰集によれば、「死ねかし」と言われた男の返歌。同じことなら、あなたと一緒に、と言う。○ならびのいけ　固有名詞。山城国。「ならびの池」の名に「君と並び」をかける。双が丘の下にあった池。「人はいさ我は昔のわすられぬ心ならびの池までぞ訪（と）ふ」（能宣集Ⅰ・二〇五）の詞書に「もの言ひ侍る人の、年頃隔てあり、ところも知り侍らぬが、ならびの池のほとりなる寺にまかりあひて」とある。増田繁夫『能宣集注釈』（私家集注釈叢刊７　平成七年）によれば、双が丘の東南にあり、そのほとりの右大臣清原夏野の山荘を寺にした天安寺は双丘寺とも呼ばれた。

【所載】後撰集・恋四・八五四

【参考】後撰集の詞書には「まだ逢はず侍りける女のもとに、「死ぬべし」といへりければ、返事に「はや死ねかし」といへりければ、またつかはしける」とある。恋のつらさを「もう死にそうだ」と訴えた男に「さっさと死になさい」と女は返事した。それへ返した男の歌。

一六七九　あしがものすだくいけみづまさるともゐせきのかたに我こひめやは

【異同】ナシ
【現代語訳】葦鴨の群れ居る池水の水かさが増してあふれても、（越えずに）堰きとめられたままの恋に我慢する私だろうか。
【語句】○あしがもの　葦鴨の。葦の生える池にいる鴨のこと。○すだくいけみづ　すだく池水。「すだく」は群れる、多く集まる。○ゐせきのかたに我こひめやは　「ゐせき」の方に恋する私であろうか、決して。「ゐせき」は水を堰きとめる所。「我こひめやは」の「恋ひめ」は、「恋ふ」に意志の助動詞「む」の已然形の接続したかたち。「やは」は反語。「ゐせきのかたに恋する私ではない」という強い意志。塞き止めるものを越えるという意。
【所載】万葉集・二八四四（旧二八三三）葦鴨之　多集池水　雖溢　儲溝方尓　吾将越八方　アシガモノスダクイケミヅマサルトモマケミゾカタニワレコエメヤモ　あしがものすだくいけみづはふるともまけみぞのへにわれこえめやも／綺語抄・五八九／和歌童蒙抄・七六〇
【参考】所載欄の万葉集では「まけみぞかたに我こえめやも」とあり、「まけみぞかたに」はかねて用意された溝の方へ、の意と解されるが、当該歌の「ゐせきのかたに」は堰きとめられた側に、の意に解した。

一六八〇　いにしへのふるきつゝみはとしふかみ池のなぎさにみくさ生にけり　あか人

【異同】ふるきつゝみは―ふるきつゝみの（大）
【現代語訳】古い池の堤は、年を経て、渚には水草が生い茂っているのだった。
【語句】○いにしへの　所載欄の万葉集では「昔者之」とあり、その部分を「むかしべの」とする玉葉集などがある。○ふるきつゝみ　古き堤。所載欄の万葉集の詞書には「故太政大臣の藤原家の山池（シマ）を赤人が詠んだ」と記している。これによれば、藤原不比等（養老四〈七二〇〉年没、六二歳）の邸の池の堤。○としふかみ　年深み。年数を経たので。「み」は「を……み」というかたちと同様、原因を表す。○みくさ生にけり　水草生ひにけり。水草が生えているのであった。
【所載】玉葉集・雑三・二二五〇／万葉集・三八一（旧三七八）昔者之　舊堤者　年深　池之澂尓　水草生家里　イニシヘノフルキツツミハトシフカキイケノナギサニミクサオヒニケリ　いにしへのふるきつつみはとしふかみいけのなぎさにみくさおひにけり／綺語抄・一〇二

【参考】作者名「あか人」は所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当　平野〕

一六八一　おく山のいはがきぬまのみごもりにこひやわたらんあふよしをなみ

【異同】ナシ
【現代語訳】想いを心に秘めたまま恋い続けるのだろうか。逢う方法もないので。
【語句】◎ぬま　水が流れずに、自然に深くたまっている所。「ぬまとは、ながれぬ水のふかくたまれるをいふ」（能因歌枕）。池が人工のものを中心とするのに対し、沼は自然にできたものをいうことが多い。「唐韻云、沼奴」（和名抄）とあるように、「ぬ」ともいうが、「ぬ」は、「こもりぬ」「隠れぬ」など、ほとんどが複合語中に用いられる。○おく山のいはがきぬまの　奥山の岩垣沼の。「みごもり」を導く序。「岩垣沼」は岩に囲まれた沼。○みごもりにこひやわたらん　「みごもり」はもともと水中に潜む意であるが、転じて和歌では恋心を秘めて外に表さないさまの比喩に用いられた。「恋ひやわたらん」は「恋い続けるのだろうか」の意。「人づてに知らせてしかな隠れ沼（ぬ）のみごもりにのみ恋ひやわたらん」（朝忠集・四四）。○あふよしをなみ　逢う方法がないので。「よし」は、方法や手段の意。「なみ」は形容詞「なし」の語幹に接尾語「み」がついた形。ないので、の意。「秋の野のをばなにまじり咲く花の色にや恋ひむ逢ふよしをなみ」（古今集・四九七）。
【所載】拾遺集・恋一・六六一／万葉集・二七一六（旧二七〇七）青山之　石垣沼間乃　水隠尓　恋哉将渡　相縁乎無　アヲヤマノイハカキヌマノミゴモリニコヒヤワタラムアフヨシヲナミ　あをやまのいはかきぬまのみごもりにこひやわたらむあふよしをなみ／夫木抄・八六八二／人麿集Ⅱ・二九九／秀歌大体・九二／綺語抄・一五六、二〇四／和歌童蒙抄・二四三／古来風体抄・三七六／和歌色葉・一〇四

一六八二　みくさおひてありとも見えぬ沼水にしたのこゝろをしる人ぞなき（のイ）

【異同】みくさおひて―水草の生て（大）　沼水に―ぬまみつの（御・大）
【現代語訳】［第三句は、御所本・大久保本によって解した。］水草が生い茂って、あるとも見えない沼の水のように、私の秘めた心を汲んでくれる人などいないのだ。

【語句】○みくさおひて　水草生ひて。「みくさ」は水中や水辺に生える草。水草。「わが門のいたゐの清水さと遠み人し汲まねばみくさおひにけり」（古今集・一〇七九）。○沼水に　「沼水によって」「沼水で」の意となるが、御所本・大久保本は、比喩を表す格助詞「の」を用いて「沼水の」となっており、こちらで解した。沼水に喩えて自分の心を詠む例に「夏草の上はしげれるぬま水の行く方のなきわが心かな」（古今集・四六二）などがある。○したのこゝろ　内々の心。心に秘めて表に出さない思い。「葉を若みほにこそ出でね花すすき下の心にむすばざらめや」（後撰集・六〇四）。

【所載】続古今集・恋一・一〇一〇

一六八三　くれなゐのいろにはいでじかくれぬのしたにかよひて恋はしぬとも

【異同】ナシ

【現代語訳】自分の思いをはっきりとは出すまい。想いを秘めて恋い死にをするようなことがあっても。

【語句】○くれなゐのいろにはいでじ　想いを外には見せまい。「紅の」は「色に出づ」にかかる枕詞。「言ふことのかしこき国ぞ紅の色にな出でそおもひ死すとも」（万葉集・六八六〈旧六八三〉）。○かくれぬの　隠れ沼（ぬ）の。「下」「底」「みごもり」にかかる枕詞。「隠れ沼」は「隠沼（こもりぬ）」の誤読による歌語で、草などに覆われて上からは見えない、隠れた沼の意。○したにかよひて　下に通ひて。水が人目につかない伏流となる意から転じて、密かに思うこと。「言にいでて言はぬばかりぞみなせ河したに通ひてこひしきものを」（古今集・六〇七）。○恋はしぬとも　恋ひは死ぬとも。恋に悶えて死ぬことがあっても。「恋ひは死ぬ」は、「恋ひ死ぬ」に係助詞「は」が入ったもの。「山高み下行く水の下にのみ流れて恋ひむ恋はしぬとも」（古今集・四九四）。

【所載】古今六帖・第五帖「くれなゐ」三四九八／古今集・恋三・六六一／新撰万葉集・一九九／友則集・三五／寛平御時后宮歌合・一六二

一六八四　いつとてかわがこひざらんみちのくのあさかのぬまはけぶりたゆとも

【異同】ナシ

【現代語訳】いつといって、私が恋しく思わないことがあろうか、いやあるまい。たとえ陸奥の安積の沼の煙が絶えたとしても。

【語句】○いつとてか　いつといって。「時しらぬ山は富士の嶺いつとてか鹿の子まだらに雪のふるらむ」（業平集・六六）。○あさかのぬま　安積の沼。陸奥国の歌枕。安積郡にあったといわれる。「陸奥のあさかの沼の花かつみかつ見る人に恋ひやわたらむ」（古今集・六七七）と詠まれたように、花かつみが有名。煙との関係はないが、所載欄の文献では「あさまのたけ」あるいは「あさまのやま」とあり、浅間の煙と混乱が生じたものか。ただし当該歌の影響を受けたかと思われる歌もある。参考欄参照。
【所載】拾遺集・恋一・六五六／続古今集・恋二・一〇七六／貫之集Ⅰ・六五六
【参考】当該歌をふまえた屏風歌に、「みちのくにのあさかの沼のみちの辺に、京より来る人たちとまれり」の詞書を持つ「音に聞くあさかの沼のあさぼらけ絶えぬけぶりは名のみなりけり」（元真集・三一）がある。

一六八五　かくれなくあはずなりなばみちのくのいかほのぬまのわれいかにせん

【異同】あはすなりなは―あすはなりなは（大）
【現代語訳】はっきりと、あの人と逢うことがなくなってしまったら、私はどうしたらいいのでしょう。
【語句】○かくれなく　隠れたところなくはっきりと。「……沢水に　なく鶴の音は　久方の　雲の上まで　かくれなく　たかく聞えて……」（順集・一一八）。○みちのくのいかほのぬまの　伊香保の沼は、上野国の歌枕、現在の榛名湖。同音で「いか」を導く序として用いられる。「伊香保のや伊香保の沼のいかにして恋しき人を今ひとめ見む」（拾遺集・八五九）。陸奥国の歌枕ではないが、あるいは広い範囲を指して「みちのくの」といったか。
【所載】ナシ

〔以上五首担当　斎藤・諸井〕

一六八六　かくれぬのしたゆくみづのおもほえばいかにせよとかわがねそめけむ

【異同】ナシ
【現代語訳】隠れ沼の下をゆく水の面、思えばこの先どうせよというので私はあの人と共寝し始めたのだったろうか。
【語句】○かくれぬの　「かくれぬ」は隠れ沼。草などに覆われて見えない沼。一六八三番歌参照。「下」にか

かる枕詞。「紅の色には出でじ隠れ沼の下にかよひて恋は死ぬとも」（古今集・六六一）。○おもほえば　思えば。上二句は「おもほえば」を導く序。水の「おも（面）」に「おもほえば」の「おも（思）」を掛ける。「おもほえば」は動詞「思ほゆ」の未然形＋接続助詞「ば」、未来の自分の気持ちを推し量る仮定条件を表し、本来ならば「思えるなら」「思えたなら」という現代語訳が妥当である。万葉集には「かくばかり面影にのみ思ほえばいかにかもせむ人目繁くて」（七五五〈旧七五二〉）、「今のごと恋しく君が思ほえばいかにかもせむするすべのなさ」（三九五〇〈旧三九二八〉）といった例があり、仮定条件の内実が示されるため、「思えるなら」「思えたなら」と訳すことができるが、当該歌は、「おもほへば」を導く初句、二句が序となっているため、単純接続の意とみた。○いかにせよとかわがねそめけむ　いったいこの先どうせよというので、私は寝初めたのだったろうか。「そき板もち葺ける板目のあはざらばいかにせむとか我が寝そめけむ」（万葉集・二六五八〈旧二六五〇〉）と似た構造をもつ。

【所載】ナシ

一六八七　かくれぬのしたにこふれどあきだらず（かなくにイ）人にかたりついむてふものを（ればイ）

【異同】したにこふれと―したにこふれは（御・桂・大）　あきたらす―あきたゝす（御）

【現代語訳】隠れ沼のように心の底で恋焦がれているけれど、飽き足らず人に話してしまった。口にしてはならぬ、ということなのになあ。

【語句】○かくれぬの　「下」にかかる枕詞。「かくれぬ」は一六八三番歌参照。○あきだらず　飽き足らない。「あきたる」は日葡辞書によると濁音、多く下に打ち消しを伴う。○いむてふものを　忌むことだというのになあ。「忌む」は神仏などが禁じていること、一般にしてはいけないことを慎んで避ける意。「ものを」は逆接的詠嘆を表す終助詞。「隠り沼の下ゆ恋ふればすべをなみ妹が名告りつ忌むべきものを」（万葉集・二四四五〈旧二四四一〉）の如く、恋の相手を他人に洩らすことは禁忌とされていた。

【所載】万葉集・二七二八（旧二七一九）隠沼乃　下尓恋者　飽不足　人尓語都　可忌物乎　カクレヌノシタニコフレバアキダラズヒトニカタリツイムベキモノヲ　こもりぬのしたにこふればあきだらずひとにかたりついむべきものを／和歌童蒙抄・二四四／和歌色葉・一〇三

うき

一六八八　あしねはふうきはうへこそつれなけれしたはえならずおもふこゝろを

【異同】ナシ
【現代語訳】芦の根が這い広がる泥地は表面は何も見えない、うわべこそ何気なくしているが、心の中は並一通りではない思いであるものを。
【語句】◎うき　泥土。湼。泥深い土地。沼地。「憂き」と掛詞になる場合（一六八九番歌、一六九〇番歌参照）と、根が泥の上に浮いていることから「浮き」と掛詞になる場合がある。古今六帖に「うき」題の歌は三首あるが、いずれも「芦」に寄せたもの。○あしねはふうきは　芦の根が這っている泥土は。「あしねはふ」は、「えならずおもふこゝろを」の比喩で、泥土の下では芦の根が一面に這い広がっているように心の中では思い乱れている意。○うへこそつれなけれ　上こそつれなけれ。表面では何げない様子である意。湼（うき）の表面が「何も見えないこと」と「さりげない、恋心を表面に表さないこと」の両義がある。芦の根は、「芦の根の　上はつれなき　にごりえの　……」（忠岑集・八七）のごとく、上はつれないもの、さりげなく生えているものとして詠まれる。○えならず　並一通りではなく。ただならず。「え」に「江」を掛ける。「うき」「え」は「あし（芦）」の縁語。
【所載】拾遺抄・恋下・三三一／拾遺集・恋四・八九三

一六八九　なにごともいはれざりけり身のうきはおひたるあしのねのみなかれて

【異同】ナシ
【現代語訳】どんな言葉でも言い表せないことだ、我が身の辛さは。泥沼に生えている芦が、根ばかり流されるように、泣き声をたてるばかりで。
【語句】○なにごとも　どんな言葉も。○うき　「憂き」に「湼」を掛ける。「湼」は一六八八番歌参照。「あし（芦）」の縁語。○おひたるあしの　生ひたる芦の。「ね」を導く序。○ねのみなかれて　芦の根は泥土に浮いているので流されやすい。芦の根のみが流される意の「根のみ流れて」と、声に出して泣く意の「音のみ泣かれて」を掛ける。「うきに生ふる芦の根にのみながれつついきて世にふる心ちこそせね」（九条右大臣集・一三）。
【所載】ナシ

一六九〇　あしの根のよはきこゝろはうきことにまづおれふして音ぞなかれける

【異同】ナシ
【現代語訳】芦の根のように弱い心は、つらいことがあるとまっ先にくじけてしまって、折れ伏した芦の根が流されるように、声をあげて泣いてしまうのだ。
【語句】○あしの根のよはきこゝろは　芦の根の弱き心は。芦の根のように弱い心は。芦の根の「よ（節）」（節と節の間の短い部分）に、「弱き心」の「よ」を掛ける。以下「弱き心」という心象表現が主想となり、「芦の根」の縁語となる物象表現が副想となる。○うきこと　つらいこと。「うきこと」の「憂き」に「浮（うき）」を掛ける。一六八九番歌参照。○まづおれふして　まづ折れ伏して。芦の根が「折れ伏して」に心が「折れ伏して」を掛ける。心が「折れる」（気がくじける、負ける）という表現は、「夜もすがら口説き奉りければ、理に折れて仰せられけるは」といった中世の軍記物語から現れるが、和歌では当該歌が初出とみられる。○音ぞなかれける　芦の根が水に流される意の「根ぞ流れける」に、声に出して泣く「音ぞ泣かれける」を掛ける。一六八九番歌参照。「よ（節）」「うき（浮）」「折れ伏し」「根」は「あし（芦）」の縁語。
【所載】ナシ

〔以上五首担当　中野〕

たき

一六九一　春くればたきのしらいといかなれやむすべどもなをあはにみゆらん　つらゆき

【異同】ナシ
【現代語訳】春が来ると、滝の水はいったいどうして、すくってもなおその水が泡のように見えるのだろう。（春が来ると、滝の白糸はいったいどうして、きつく結んでもよりいっそう緩くほどけて見えるのだろう。）
【語句】◎たき　滝。川の水が高所から低所へ垂直に流れ落ちる所。また、急流や激流。○春くれば　春が来れば。「来る」に「繰る」を掛ける。○たきのしらいと　滝の水の白い筋を白糸にたとえる。○むすべども　両手ですくいあげる意の「掬ぶ」に「結ぶ」を掛ける。○あは　「あわ（泡）」。これに、糸や紐などの縒り方や結び方がゆるく解けやすい様を表わす「あは（淡）」を掛ける。「山高み落ちくる滝の白糸はあはに縒りてぞ乱れそめ

ける」（重之集・三七）。「繰る」「結ぶ」「あは」は「糸」の縁語。
【所載】拾遺集・雑春・一〇〇四／貫之集Ⅰ・四四
【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。拾遺集や貫之集Ⅰに拠れば、当該歌は延喜十五（九一五）年の斎院恭子内親王屏風歌。貫之集Ⅰ詞書に拠れば、屏風には、女性たちが滝のほとりで水に手をひたして遊ぶ様が描かれていた。

一六九二　ながれくるたきのいとこそよはからしぬけどみだれて落る白たま（白糸イ）

【異同】ナシ
【現代語訳】流れてくる滝の水の糸こそは弱いものであるらしい。その糸で貫いてもこぼれ落ちてしまう水の白玉であるよ。
【語句】○ながれくる　「来る」に「繰る」を掛ける。○よはからし　弱からし。弱いものであるらしい。「弱かるらし」の縮まった形。○ぬけど　貫（ぬ）けど。糸を穴に突き通しても。○みだれて　乱れて。「乱る」は、整然としていたものが外からの力が加わることによりバラバラになること。「繰る」「貫（ぬ）く」「乱る」は「糸」の縁語。○白たま　白珠。滝のしぶきをたとえる。
【所載】拾遺集・雑上・四四八／新撰和歌・三一一／貫之集Ⅰ・六三
【参考】所載欄の文献に拠れば、当該歌は斎院に奉じられた屏風歌。作者については一六九八番歌参照。

一六九三　いとゝさへ見えてながるゝ滝なればたゆべくもあらずぬける白玉（みだイ）

【異同】ナシ
【現代語訳】糸と見まごうまでに（絶え間なく）流れ落ちる滝であるので、途切れることなくいつまでも貫かれ続ける滝のしぶきの白玉であるよ。
【語句】○いとゝさへ　糸とさへ。糸と見えるまで。○たゆべくもあらず　絶ゆべくもあらず。途絶えるはずもなく。長寿を滝の水になぞらえて祝意を込める。参考欄参照。○ぬける　貫いている。「貫（ぬ）く」「絶ゆ」は「糸」の縁語。
【所載】貫之集Ⅰ・一七八

【参考】所載欄の文献に拠れば、当該歌は延長四（九二六）年の民部卿藤原清貫の六十賀の屏風歌。作者については一六九八番歌参照。

一六九四　おもふことたきにもあらなんながれてもつきせぬものとやすくたのまん

【異同】ナシ
【現代語訳】あなたの気持ちが滝のようであってほしい。滝の水がどんなに流れても尽きることがないように、この先どんなに生きながらえても、あなたの思いが尽きることはないと安心してあてにできましょう。
【語句】○おもふこと　恋い慕うこと。ここでは相手が自分に対して思慕の情を抱くこと。○たきにもあらなん　滝であってほしい。「なん」は願望を表わす終助詞。○ながれても　流れても。「ながらへても」を掛ける。「ながれての世をも頼まず水の上の泡に消えぬるうき身と思へば」（後撰集・一一一五）。○つきせぬ　尽きせぬ。終わることがない。「つきす」は、「尽く」の連用形に動詞「為（す）」が付いたもの。下に打消の語を伴って用いられる。○たのまん　頼まむ。「頼む」は、信頼して身をまかせる意。
【所載】貫之集Ⅰ・一九二
【参考】所載欄の文献に拠れば、当該歌は延長四（九二六）年九月の宇多法皇の六十賀の屏風歌。作者については一六九八番歌参照。

一六九五　山たかみ木ずゑをわけてながれくるたきにたぐへておつる紅葉ゞ

【異同】おつる紅葉ゝ―おつるもみちか（御・桂・大）
【現代語訳】山が高いので、梢の間をかき分けて滝が流れてくる。その滝の流れに寄り添わせて落ちるもみじの葉であることだ。
【語句】○山たかみ　山高み。山が高いので。「み」は形容詞の語幹につく接尾語で原因・理由を表わす。○たぐへて　「たぐふ」は他動詞。寄り添わせる、伴わせるの意。「花のかを風のたよりにたぐへてぞ鶯さそふしるべにはやる」（古今集・一三）。所載欄の貫之集Ⅰでは「たぐひて」と自動詞。○おつる紅葉ゞ　落つるもみぢ葉。落ちてくるもみじ葉よ。
【所載】新拾遺集・冬・五八五／貫之集Ⅰ・二一五

【参考】所載欄の文献に拠れば、当該歌は三条右大臣藤原定方屏風の歌。作者については一六九八番歌参照。

〔以上五首担当　犬養悦・市東奈々〕

一六九六　春たちて風や吹とくけふみればたきのみおよりたまぞちりける

【異同】ナシ

【現代語訳】春が立って、春風が滝の流れを吹き解くのだろうか。立春の今日見れば、滝の水緒からしぶきの玉が散っているよ。

【語句】○春たちて風や吹とく　立春となって、春の風がこれまで凍っていた滝の流れを吹き解くのだろうか。「孟春之月　東風解凍」（礼記・月令）をふまえる。「や」は疑問。○けふみれば　春立った今日見れば。「けふ」は、暦制上の立春の日の今日、ということ。○たきのみお　たきのみを。滝の水緒。滝の流れを、糸をより合わせた「緒」と見立てた。「いかにして数を知らまし落ちたぎつ滝の水緒よりぬくる白玉」（貫之集・三三）。○たまぞちりける　玉が散っているよ。流れ落ちる滝の飛沫を「たま」と見立てた。

【所載】新拾遺集・春上・一八／夫木抄・一〇五／貫之集Ⅰ・二七九

【参考】作者については一六九八番歌参照。

一六九七　しら雲やみだるゝとのみ見えつるはおちくるたきのつねにぞ有ける

【異同】しら雲や―白雲の（大）

【現代語訳】白雲が乱れているのか、とばかりに見えたのは、流れ落ちてくる滝の常の姿なのであったよ。

【語句】○みだるゝとのみ見えつるは　まるで乱れている、とばかりに見えたのは。「のみ」は強調の副助詞。○たきのつねにぞ有ける　それが滝というものの常のありさまだったのだ。「有ける」は、そのことに気がついた、という言い方。

【所載】貫之集Ⅰ・三四五

【参考】作者については一六九八番歌参照。

一六九八　山わけておちくるたきをしら雲のたなびくとのみをどろかれつゝ

已上八首　　つらゆき

【異同】ナシ
【現代語訳】山を分けるようにして流れ落ちてくる滝を見ると、まるで白雲がたなびくさまそのものだと、おどろいてしまうなあ。
【語句】○たなびくとのみ　たなびいている、とばかりに。「のみ」は前歌参照。○をどろかれつゝ　おどろかれつつ。自然におどろいてしまう。「れ」は自発の助動詞「る」の連用形。「つゝ」は、歌の末にあるときは、余情を残す言い方。
【所載】陽明文庫本貫之集・三五七
【参考】「已上八首　つらゆき」とあるが、一六九一番歌から一六九八番歌までの八首ともすべて、貫之集に収載されている。

一六九九　もゝくさのはなのかげまでうつしつゝをともかはらぬしら河の滝

【異同】ナシ
【現代語訳】さまざまの花の姿までも水面に映しながら、むかしながらに音も変らぬ白川の滝よ。
【語句】○もゝくさ　百種。多くの種類。○はなのかげまで　花の姿まで。「かげ」は、ここでは、水に映った（花の）姿のこと。「まで」によって、水に映っているのが花だけでなく、あたりの風景全体であることを暗示している。○をともかはらぬ　おともかはらぬ。音も変りのない。○しら河の滝　白川は山城国の川。比叡山中に源を発し、現京都市左京区を流れて末は鴨川に注ぐ。原流域より白く美しい花崗岩を産し、川底の砂礫が白かったのでその名がある。鴨川以東、東山のふもとあたりまで、この川の周辺一帯も白川と呼ばれ、平安中期以降、貴族の邸宅や私寺が多く営まれる地域であった。ただし、白川には「しら河の滝」と呼ばれる滝は存在せず、おそらくこれは、このときの忠平邸白河殿の庭園に引かれた遣り水の早瀬を「滝」と形容したものであろう。参考欄参照。
【所載】夫木抄・一一三〇三／貫之集Ⅰ・六九五
【参考】貫之集Ⅰでは、「延長八年土佐の国にくだりて、承平五年に京にのぼりて、左大臣殿白河殿におはします御供にまうでたるに、歌つかうまつれとあればよめる」との詞書が付されている。「左大臣殿」とは藤原忠平、

「白河殿」とは当時白川の地にあった忠平の別邸である。貫之が土佐から帰京した時、貫之の旧主であった中納言兼輔はすでに歿しており、その後の貫之は忠平やその子息たちへの接近を強める。これは、そうした時期の貫之の作である。

一七〇〇　いまさらにわれはかへらじたきつなみよべどきかずとよばゝこたへよ

【異同】ナシ
【現代語訳】私はいまさら俗世には帰りますまい。「山中で滝を見ながら修行していて、いくら呼びかけても聞き入れなかった。」と、もし私のことを呼ぶ人があったならば、そう答えてください。
【語句】○かへらじ　帰るまい。帰るつもりはない。助動詞「じ」は、一人称に関して言われるとき、意志的な否定を表す。○よべどきかず　どんなに呼びかけても聞き入れなかった。○よばゝこたへよ　呼ばば答へよ。もしたれかが私のことを呼んだならば、そう答えなさい。後撰集や遍昭集では「問はば答へよ」となっており、その方が歌意は明瞭である。
【所載】後撰集・雑三・一二三八／遍昭集Ⅰ・一二／遍昭集Ⅱ・一二、四八
【参考】作者名「へむぜう」は、所載欄の文献に一致する。後撰集の詞書には「山ぶみしはじめけるとき」とあり、遍昭が出家してまもないころの作と見られる。

〔以上五首担当　山下〕

伊勢

一七〇一　みなかみとむべもいひけりくもゐよりおちくるごとも見ゆるたき哉

【異同】ナシ
【現代語訳】滝の上流をみなかみとは、なるほどうまく言ったものだなあ。雲のいる高い空から落ちてくるようにも見える滝だよ。
【語句】○みなかみ　川上。上流。○むべもいひけり　なるほどうまく言ったものだなあ。「むべ」はいかにも、なるほどの意を表す副詞。「けり」は意識しなかった事実にはじめて気がついて感動する意を表す助動詞。「には

かにも風の涼しくなりぬるか秋立つ日とはむべもいひけり」（後撰集・二一七）。○くもゐ　雲居。空。○おちくるごとも　落ちてくるようにも。「も」はやわらげる意を表す助詞。
【所載】伊勢集Ⅰ・六七／伊勢集Ⅱ・六九／伊勢集Ⅲ・六七
【参考】作者名「伊勢」は所載欄の文献に一致する。

一七〇二　きよたきのせゞのしらいとくりためて山わけごろもをりてきましを　しむたい法師（セイ）

【異同】くりためて―くりかため（桂）
【現代語訳】清滝のあちこちの瀬を流れる白糸のような急流、それをたぐり寄せ集めて、山分け衣を織って着たいものだなあ。
【語句】○きよたき　京都市高尾の清滝川。一説に吉野の清流とも。○せゞ　瀬々。沢山の瀬。○しらいと　白糸。滝、急流を白糸に見立てた語。「春くれば滝の白糸いかなれやむすべどもなほあはに見ゆらん」（古今六帖・一六九一）。○くりためて　白糸をたぐって巻きとり集めて。○山わけごろも　山野に分け入る僧や旅人が着る衣服。多く白色である。○をりてきましを　織りて着ましを。できることなら織って着たいものだよ。「を」は詠嘆の間投助詞。「繰り」「衣」「織り」「着」は「白糸」の縁語。
【所載】古今集・雑上・九二五
【参考】作者名「しむたい（神退）法師」は所載欄の文献に一致する。

一七〇三　みづとのみおもひしものをながれくるたきはおほくのいとにざりける　つらゆき

【異同】いとにさりける―糸になりける（大）
【現代語訳】水だとばかり思っていたのに、流れ落ちてくる滝は、実は沢山の糸であったのだなあ。
【語句】○みづとのみおもひしものを　滝は水だとばかり思っていたのに。「ものを」は逆接の接続助詞。○ながれくる　流れ来る。「来る」に「繰る」を掛ける。「繰る」は「糸」の縁語。○おほくのいとにざりける　沢山の糸であったのだなあ。「ざりける」は「にぞありける」の変化した形。……であったのだなあ。

【所載】玉葉集・雑二・二〇六四／貫之集Ⅰ・五二
【参考】作者名「つらゆき」は所載欄貫之集Ⅰ・五二に一致する。しかし玉葉集での作者名は「僧正遍昭」である。

一七〇四　石間より落くるたきのなみ間にも人をわするゝわがこゝろかは

【異同】ナシ
【現代語訳】石の間から落ち来る滝、その波間のほんのちょっとの間も、あなたを忘れるような私の心でしょうか。いいえ片時も忘れることはありません。
【語句】○石間　いしま。石と石との間。「いしま行く水の白波立ち返りかくこそは見めあかずもあるかな」（古今集・六八二）。○なみ間　波間。落ちた滝が波をうって流れてゆくその波間。○人　君。あなた。○わがこゝろかは　私の心でしょうか。いや、そうではない。「かは」は反語。
【所載】古今六帖・第五帖「忘れず」二八七四／万代集・二二六八

つらゆき

一七〇五　いかにしてかずをしらましおちたぎつたきのみをよりおつるしらたま

【異同】ナシ
【現代語訳】どうやって数を数えようか。激しく飛び散る滝の水緒から落ちる白玉を。
【語句】○いかにしてかずをしらまし　どうやって数を数えようか。「かずをしる」は、数を数えるということ。「まし」は「いかにして」の疑問語と共に用いて、迷う気持を表す。○おちたぎつ　激しく落ちて飛び散る。○たきのみを　滝の水緒。滝を撚った糸と見立てた表現。一六九六番歌参照。○おつるしらたま　落ちてくる飛沫。滝の飛沫を白玉と見立てた。「しらたま」は真珠。一六九二番歌、一六九三番歌参照。
【所載】貫之集Ⅰ・三三
【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当　林〕

一七〇六　うちたえておつるなみだになるたきのたぎれておつる（人を）見ぬがわびしさ

【異同】見ぬかわひしさ―みぬか侘しき（大）
【現代語訳】あの人の訪れが絶えて、落ちる涙になり、鳴滝の流れのように思いがあふれ、それでいて逢えないのがつらいことだ。
【語句】○うちたえて　打ち消しを伴う副詞と考え、「見ぬ」にかかると解することも可能なように思われるが、ここは「おつるなみだ」と関連させ、動詞として解した。○なるたきの　「鳴滝」は山城国の歌枕。現在の京都市右京区鳴滝の地。歌では動詞「なる」と掛けられることが多い。「身ひとつのかくなるたきを尋ぬればさらにかへらぬ水もすみけり」（蜻蛉日記・一七四）。○たぎれて　滾れて。「たぎる」は、川の水などが勢いよく流れる意。そこから感情が激しくたかぶる意などにも用いられる。一般には四段に活用するが、ここは下二段活用。下二段活用の用例は他に見当たらない。
【所載】ナシ

一七〇七　たきつせのはやき心を何しかも人めつゝみのせきとゞむらん

【異同】ナシ
【現代語訳】激流のようにはやりたつ恋の心を、どうして、水を堰き止める堤のように、人目という障害が邪魔をしているのかしら。
【語句】○たきつせの　「たきつせ」は、滝つ瀬。もと「滾（たぎ）つ瀬」で、水の激しく流れる瀬。わきかえって激しく流れる浅瀬のように。○はやき心　激しい心。はやりたつ心。○何しかも　どうしてまあ……なのか。○人めつゝみの　「つゝみ」には、「人目をはばかる」意に、「堤」を掛ける。なお「はやき」「堤」「せきとゞむ」は、「たきつせ」の縁語。
【所載】古今集・恋三・六六〇

一七〇八　ゆくみづのわが心にしかなはねば人まつたきと成やしぬらん

【異同】ナシ

【現代語訳】流れて行く水が自分の思い通りにならないので、それで、人を待つという、「まつ滝」となってしまっているのであろうか。
【語句】○人まつたきと　「まつ滝」という歌枕があるか。人を「待つ」と掛けているのであろう。「よそにのみかくながらふる袖よりも人まつ滝の落ちぬ日ぞなき」（宇津保物語・六〇八）。
【所載】ナシ

かさのかなむら

一七〇九　としごとにかくもみてしかみよし野のきよきかはうちの滝のしら浪

【異同】きよきかはうちの―きよきかうちの（御・桂）、清き河内の（大）
【現代語訳】毎年来て、こうして見たいものだ。み吉野の、美しい河内の滝の白浪を。
【語句】○みてしか　見たい。「てしか」は願望の終助詞。○きよきかはうち　清らかな河内。「かはうち」については、山の中を流れる川、源流付近、川を内に持った地域、曲折する川に囲まれている地域、谷あいの平地など、諸説がある。
【所載】万葉集・九一三（旧九〇八）毎年　如是裳見壮鹿　三吉野乃　清河内之　多芸津白浪　トシノハニカクモミテシカミヨシノノキヨキカフチノタギツシラナミ　としのはにかくもみてしかみよしののきよきかふちのたぎつしらなみ
【参考】作者名「かさのかなむら（笠金村）」は、所載欄の文献に一致する。

一七一〇　山たかみしらゆふばなにおちたぎつたきのかふちは見れどあかぬかも

【異同】ナシ
【現代語訳】山が高くて、白木綿花のように白く落ちたぎっている滝、その滝のほとばしっている河内はいくら見ても飽きないことだ。
【語句】○しらゆふばなに　「しらゆふばな」は、「ゆふ（木綿）」の白く美しいさまを花にたとえたもの。一般に「に」を伴い、白く美しいものを形容する場合に用いられる。「相坂をうち出で見れば淡海の海白木綿花に浪立ちわたる」（万葉集・三二五一〈旧三二三八〉）。なお「ゆふ」は、楮（こうぞ）の樹皮をはぎ、その繊維をさ

らしたもの。○おちたぎつ　高いところから低いところへ激しく流れ落ちること。ここは連体形で「たき」にかかる。○たきのかふち　激しい水の流れの河内。「かふち」については一七〇九番「かはうち」の項参照。
【所載】万葉集・九一四（旧九〇九）山高三　白木綿花　落多芸迫　滝之河内者　雖見不飽香聞　ヤマタカミシラユフバナニオチタギツタキノカフチハミレドアカヌカモ　やまたかみしらゆふばなにおちたぎつたきのかふちはみれどあかぬかも／人麿集Ⅳ・二六九／綺語抄・二二七／和歌童蒙抄・二四〇
【参考】一七〇九番と当該歌は、万葉集でも九一三（旧九〇八）番、九一四（旧九〇九）番と歌が並んでいる。こうしたいわゆる連番歌は古今和歌六帖全体で四〇組ほどあり、古今和歌六帖における万葉歌のすべてではないにしろ、万葉集から直接採歌したこともあったのではないかとする例として注目される。
　なお、「山たかみしらゆふ花におちたぎつなつみのかはと見れどあかぬかも」のように、第四句のみ異なっていて類歌と思われる歌が、万葉集・一七四〇（旧一七三六）、夫木抄・一一〇四二、綺語抄・二二六などに見える。

〔以上五首担当　久保木〕

一七一一　ぬきみだる人こそあるらししら玉のまなくもふるか袖のせばきに

【異同】まなくもふるか（ちイ）—まなくもちるか（大）
【現代語訳】緒に貫いてあった白玉を、抜いて乱れ散らせている人があるらしい。白玉が、なんとまあ絶え間なく降ることよ。それを受け止めようとしても、袖は狭いのに。
【語句】○ぬきみだる　緒（紐）に貫いて繋ぎとめてあった玉を、抜いて散乱させる。「みだる」は、乱す意の他動詞。○しら玉　白い玉。特に真珠を指していう。当該歌では、滝の飛沫を白玉に見立てた。「こき散らす滝の白玉拾ひおきて世の憂き時の涙にぞ借る」（古今集・九二二）。○袖のせばきに　袖が狭いのに。上から乱れ落ちてくる「滝の白玉」を袖に受け止めて包もうとしても、狭いので包みきれない。それくらい沢山飛び散っているということを表す。玉に見立てた水沫を袖に包むという発想は、「浪の打つ瀬見れば玉ぞ乱れける拾はば袖にはかなからむや」（古今集・四二四）などと詠まれている。
【所載】古今六帖・第五帖「たま」三一九二／古今集・雑上・九二三／新撰和歌・二一一／業平集Ⅰ・五九／業平集Ⅱ・二九／業平集Ⅲ・三四／業平集Ⅳ・三五／伊勢物語・一五九
【参考】古今六帖に作者名はないが、所載欄の古今集や業平集によると、作者は、在原業平。当該歌は「たき」

の項目にありながら「たき」という語は詠まれていないが、所載欄の文献によると摂津国の歌枕である布引の滝を詠んだ歌である。

一七一二　あし曳のやまぢしらねどまどはれずをとはのたきのこゑ（をとイ）のしるさに

【異同】ナシ
【現代語訳】この山の道は知らないけれど、迷うことはない。音羽の滝の水音がはっきり聞こえるので。
【語句】○あし曳の　「山」にかかる枕詞。○まどはれず　迷うことは、自ずと、ない。「れ」は、自発の助動詞「る」の未然形。○をとはのたき　音羽（おとは）の滝。山城国の歌枕。山科、比叡山麓の西坂本、清水寺の三カ所にあり、前二者が歌枕。ここは、そのうちのどの滝かは分からない。
【所載】ナシ

一七一三　しら川のたきのしらいと見まほしみよるをぞ人はまつといふなる

【異同】ナシ
【現代語訳】白川の滝の白糸、その「いと」という言葉のように「いと」（とても）逢いたいので、恋しい人に逢える夜をこそ、人は待つということですよ。
【語句】○しら川　白川（河）。比叡山を源とし、現在の京都市左京区を南流して疎水に注ぐ川。昔は、更に南下して鴨川に注いだ。また、流域の、鴨川以東、東山までの一帯の地名ともなっていた。詳しくは、一六九九番歌参照。○しらいと　水の流れを白糸に見立てた語。当該歌では、「糸」に副詞の「いと」を掛け、「しら川のたきのしらいと」は、「いと見まほしみ」以下を導く序。○よるをぞ人はまつといふなる　恋しい人に逢える夜をこそ人は待つということですよ。「よる」は、逢瀬の時である「夜」に、糸の縁語の「撚る」を掛けた。「ぞ」は強意の係助詞。「なる」は、伝聞の助動詞「なり」の連体形。
【所載】後撰集・雑一・一〇八七
【参考】古今六帖に作者名はないが、後撰集によると、中務が、白川の藤原忠平邸へ行った際の贈答歌で、次の一七一四番歌が中務の贈歌、一七一三番歌が忠平の返歌。古今六帖では、二首の順序が逆になっており、なおかつ一七一三番歌は、後撰集では二・三句の本文が「たきのいとなみ乱れつつ」とあって異なる。

一七一四　しらかはのたきのいとみまほしけれどみだりに人はよせじものをや

【異同】ナシ
【現代語訳】白川の滝の糸の「いと」という言葉のように「いと」（とても）逢いたいけれど、むやみに人は寄せ付けないでしょうからねえ。
【語句】○しらかはのたきのいと　白川の滝の糸。「滝の糸」の「糸」に副詞の「いと」を掛け、ここまでは、「いと見まほしけれど」以下を導く序。一七一三番歌参照。○みだりに　妄りに。「妄り」に、糸の縁語の「乱り」を掛ける。
【所載】後撰集・雑一・一〇八六
【参考】一七一三番歌参考欄参照。

一七一五　いつのまにふりつみにけんみよし野ゝやまのかひよりくづれおつる雪　みなもとののぼる

【異同】くつれおつる雪―くつれをつるたき（御・桂・大）
【現代語訳】いつのまに降り積もったのだろうか。み吉野の山の峡から崩れ落ちる雪は。
【語句】○みよし野　み吉野。「吉野」の美称。○やまのかひ　山の峡。山と山との間の狭い所。○くづれおつる雪　滝（激つ瀬）の激流を、積雪が崩れ落ちるのに見立てた。但し、諸本は「雪」ではなく「たき」となっている。
【所載】後撰集・雑三・一二三六／寛平御時中宮歌合・二一
【参考】作者名「みなもとののぼる」（源昇）は、所載欄の後撰集と一致する。「滝」題の下に収められた当該歌に「たき」という語は見えないが、所載欄の後撰集の詞書には「法皇吉野のたき御覧じける御ともにて」とある。『扶桑略記』に拠れば、昌泰元（八九八）年十月二十五日、宇多法皇の宮滝御幸に随行した際に詠んだ歌である。中村佳文「『宮滝御幸記』の叙述と和歌表現」（『日記文学研究誌』九、二〇〇七年三月）に詳しい言及がある。他に、蔵中スミ「『宮滝御幸記』考」（『帝塚山学院短大研究年報』二七、一九七九年十二月）、竹居明男「菅原道真作『宮滝御幸記』考―『扶桑略記』所収節略逸文略注―」（『菅原道真論集』勉誠出版、二〇〇三年）。

〔以上五首担当　長戸〕

一七一六　みやのたきむべもなにほひて聞えけりおつるしらあはのたまとひゞけば（見ゆれイ）

ほうわうの御歌

【異同】みやのたき―宮の滝の（大）　おつるしらあはの―おつる白泡（大）
【現代語訳】「宮の滝」とはなるほどそのような名を持っている理由がわかったよ。落ちてくる白泡が珠となって響き、その評判が聞こえてくるので。
【語句】○ほうわうの御歌　ここでは宇多法皇をさす。○みやのたき　宮滝。吉野の地名。吉野離宮跡とも。昌泰元（八九八）年十月に宇多法皇が侍臣とともに御幸し、君臣ともに歌を詠んだ地。○むべ　なるほど。道理で。「吹くからに秋の草木のしをるればむべ山風をあらしといふらむ」（古今集・二四九）。○なにほひて　御所本では「なにをいて」、桂宮本では「なにおひて」と表記する。名に負ひて。「名に負ふ」は、名を持っている、の意。ここでは、滝が「宮」という名を持っていることをいう。○聞えけり　「聞こゆ」は、わかるの意。○しらあはのたまとひゞけば　白泡の珠と響けば。白泡を珠に見立てると同時に、「珠と響けば」で眼前の水音を美化する。「ひゞけ」は滝の落ちる音が響くの意と、評判となるの意を重ねる。
【所載】後撰集・雑三・一二三七
【参考】作者名「ほうわう」は所載欄の文献に一致する。一七一五番歌と同じ場での歌。

一七一七　風ふけどこゝろもしらぬしらたまはよをへておつるたきにざりける（さイ）（くもイ）　みつね

【異同】たきにさりける―たきに也けり（大）
【現代語訳】風が吹いても、その意を汲むことのない白玉は、長い間ずっと落ち続けている滝だったのだよ。
【語句】○こゝろもしらぬ　心も知らぬ。風が吹いても、その意を汲むことのない。○しらたま　滝のしぶきを白玉に見立てる。○よをへて　世を経て。長い間ずっと。○たきにざりける　滝だったのだよ。
【所載】古今集・雑上・九二九／躬恒集Ⅰ・二七四／躬恒集Ⅱ・一七二／躬恒集Ⅲ・二九八
【参考】作者名「みつね」は所載欄の文献に一致する。古今集では音羽の滝を詠んだ歌。

一七一八　おちたぎつたきのみなかみとしつもりおひにけらしもくろきすぢなし　たゞみね

【異同】おひにけらしも―老にけらしな（大）
【現代語訳】激しく流れ落ちる滝のみなもとも年が積って老いてしまったようだなあ。黒い筋がないことだよ（私の髪の毛と同じように白いものばかりであるよ）。
【語句】○おちたぎつ　激しく流れ落ちる。○みなかみ　水上。ここでは滝のみなもと。○おひにけらしな　老いにけらしな。老いてしまったようだなあ。滝の様子から我が白髪へ思いを馳せる。○くろきすぢなし　黒き筋無し。水脈も頭髪も白であることをいう。
【所載】古今集・雑上・九二八／忠岑集Ⅰ・二六／忠岑集Ⅱ・五四／忠岑集Ⅲ・九〇／忠岑集Ⅳ・八〇／井蛙抄・三二一
【参考】作者名「たゞみね」は所載欄の文献に一致する。古今集では一七一七番歌と同じく音羽の滝を詠んだ歌。

一七一九　おもひせくこゝろのうちの滝なれやおつとはみれどをとのきこえぬ

【異同】をとのきこえぬ―をとにきこえぬ（御・桂・大）
【現代語訳】これは、思いをせき止めてこらえている心の中の滝なのかしら。落ちていると目には見えるけど、音が聞こえないことだよ。
【語句】○おもひせく　思いをせき止める。表に出したい気持ちを抑える。「思ひせく胸のほむらはつれなくて涙をわかす物にざりける」（蜻蛉日記・一六〇）。○こゝろのうちの　心の中でこらえているの意。泣いていても声は聞こえないと言う。この点が、落ちているけど音が聞こえない滝と共通する。○滝なれや　滝なのかしら。「なれや」で区切る。○をとのきこえぬ　音の聞こえぬ。滝の音が聞こえないの意と、心の中の音（泣き声）が聞こえないの意を重ねる。所載欄古今集の詞書によれば、屏風に描かれた滝を見て詠んだ歌。
【所載】古今集・雑上・九三〇

にはたづみ

一七二〇　世の中はありてむなしきにはたづみをのがゆき〳〵わかれぬる身を

【異同】ナシ
【現代語訳】男女の仲というのは、一度は出来たけれどすぐになくなってしまう水たまりのようなものだよ。やがて別々の方向に流れていくように、それぞれ別々の方へ行き別れてしまったわが身を思うと。
【語句】◎にはたづみ　雨によって生じた水たまりや、そこから流れる水。○ありてむなしき　そこにあってもすぐになくなる。「にはたづみ」がやがて消えてしまうことに、男女の出会いと別れのさまを重ね合わせる。○をのがゆき〳〵　おのがゆき〳〵。水たまりがさまざまな方向へ流れるように、二人が別れ別れになる、の意。
【所載】ナシ

〔以上五首担当　青木〕

一七二一　にはたづみながるゝかたのなければやものおもふ人の袖にながるゝ

【異同】ナシ
【現代語訳】にわたずみは流れてゆくところがないので、もの思いをする人の袖に涙となって流れているのだろうか。
【語句】○にはたづみ　庭潦。行潦。雨が降って地上にたまった水のことだが、浅いので水かさが増すと流れ出すと詠む場合もある。一七二〇番歌参照。当該歌は、たまり水である庭潦が流れる状況を想定し、涙の見立てとする。「み立たしの島を見る時庭たづみ流るる涙止めぞかねつる」（万葉集・一七八〈旧一七八〉）。○ながるゝかたのなければや　流れてゆく場所がないので。「や」は下の「ながるゝ」にかかる疑問。
【所載】ナシ

一七二二　にはたづみこのしたがくれながれせばうたがたはなをありと見ましや

【異同】なかれせは―なかりせは（大）　うたかたはなを―うたかたは猶（大）
【現代語訳】もしにわたずみが木の下隠れに流れていたとしたら、そこに花があると思って見るだろうか、いや、決して見はしない。

【語句】○にはたづみ　一七二〇番歌、一七二一番歌参照。○ながれせば　もし、流れたとしたら。仮定の言い方。「せば」は第五句の「見ましや」と呼応して、反実仮想の表現となる。○うたがた　副詞。打消の語と呼応して、決して……しない、かりそめにも……しない、の意を表わす。ここでは「見ましや」の「や」（反語）に呼応する。
【所載】新千載集・春下・一五三／夫木抄・一二五一二／小町集Ⅰ・六九／小町集Ⅱ・六二／兼輔集Ⅰ・二二／兼輔集Ⅱ・二／兼輔集Ⅳ・六四／兼輔集Ⅴ・三五／小大君集Ⅰ・一四五／小大君集Ⅱ・一五一／綺語抄・二〇八／袖中抄・四五六
【参考】作者名はないが、新千載集では中納言兼輔の作、兼輔集にもみられるが、他の私家集にも入集する。

一七二三　はなはだもふらぬあめゆへにはたづみいたくなゆきそ人のしるべく

【異同】ナシ
【現代語訳】それほどひどくも降らない雨なのだから、庭潦よ、おおげさに流れていってくれるな、人が知ってしまうほどに。
【語句】○ふらぬあめゆへ　降らぬ雨ゆゑ。降らない雨であるので。○にはたづみ　一七二〇番歌、一七二一番歌参照。実際よりおおげさになってしまった恋の噂を喩える。○なゆきそ　ゆかないで下さい。「な……そ」は、間に挟まれた動詞の表す動作を禁止する。○人のしるべく　人がわかってしまうほどに。「べく」は助動詞「べし」の連用中止法。「片糸もち貫きたる玉の緒を弱み乱れやしなむ人の知るべく」（万葉集・二八〇一〈旧二七九一〉）。
【所載】万葉集・一三七四（旧一三七〇）甚多毛　不零雨故　庭立水　太莫逝　人之應知　ハナハダモフラヌアメユエニハタヅミイタクナユキソヒトノシルベク　はなはだもふらぬあめゆゑにはたづみいたくなゆきそひとのしるべく

うたかた　そせい

一七二四　うきことによにふるものをたきつせにまさにうたかたたえんものかは

【異同】たえんものかは―絶んものとは(大)
【現代語訳】つらい思いで世を過ごしているけれど、急な流れだからといってどうして水泡が絶えることがあろうか、絶えはしない。
【語句】◎うたかた　水面に浮かぶ泡。泡がすぐ消えることから、時間の短い意、はかないものの喩えとなり、仏教における無常観を背景に詠まれることもある。○うきこと　つらいこと。「憂き」に「浮き」を掛ける。○たきつせ　川の流れの急なところ。○たえんものかは　絶えるものであろうか、絶えはしない。「かは」は反語。「うき」「たえ」は「うたかた」の縁語。
【所載】袖中抄・四五三
【参考】作者名「そせい」とあるが、所載欄の袖中抄には作者名なし。

一七二五　うたかたのむまやは人のおもひつくにほひいろこくそめてしものを

【異同】おもひつく―おもひつゝ（大）
【現代語訳】うたかたの厩、今やあの人の思いが尽きてしまったのだろうか。（かつて）色深く思い初めてくれていたのに。
【語句】○うたかたのむまや　「むまや」は厩（宿駅）。所載欄の袖中抄に「公任卿云、昔のうたかたのむまやをよめると云々」とあるが、所在地未詳。「むまや」に「今や」を掛ける。「東路のむまやむまやと数へつつ近江の近くなるがうれしさ」（古今六帖「むまや」一一〇三）、「東路のまとの遠さもあらなくにむまやむまやと君をまつかな」（古今六帖「むまや」一一〇四）は、二首とも「むまや」に「今や」を掛ける。○おもひつく　思いが尽きる。「思ひ付く」とも解せるが、第五句が「そめてしものを」が過去を表す文脈なので、とらない。いずれにしても解釈が難しい歌である。○にほひ　色、つや、香りなどの好ましくすぐれていることをいう。○そめてしものを　そめていたのに。「初め」に「染め」を掛ける。「し」は過去の助動詞「き」の連体形。「染め」は「色」の縁語。「ものを」は逆接の意をこめた詠嘆の終助詞。……のだから。
【所載】袖中抄・四六二

〔以上五首担当　中野〕

一七二六　うたかたもおもへばかなし世の中をたれうきものとしらせそめけん

【異同】ナシ
【現代語訳】水の泡も思えばほんとうに悲しいものです。世の中を憂きものだと誰が初めて知らせたのでしょうか。
【語句】○うたかたも　「うたかた」は水の泡。はかなく消えやすいものをたとえる例が多い。ここでは、副詞「うたがたも」を掛けた。この「うたがたも」は、ほんとうにの意。所載欄の古今六帖・三〇一四では初句「うたがふも」。○かなし　痛切である。何とも切ない。ここでは「うたかた」のはかなさを言う。○世の中　世間。男女の仲。○うきもの　「憂き」に「うたかた」の縁語「浮き」を掛ける。
【所載】古今六帖・第五帖「思ひわづらふ」三〇一四／袖中抄・四六一
【参考】「世の中」を「世間」の意と解せば無常観を詠んだ歌、「男女の仲」ととれば恋愛の歌と解することができる。

一七二七　ふりやめばあとだに見えぬうたかたのきえてはかなきよをたのむ哉

【異同】ナシ
【現代語訳】雨が降り止むとその跡さえ見えなくなる水の泡のような、消えてはかないあなたとの仲を頼みにしていることですよ。
【語句】○ふりやめばあとだに見えぬうたかたの　「きえてはかなき」の序詞。○きえてはかなき　消えてはかなき。消えてしまって、あとかたもなくはかない。○よをたのむ哉　世を頼むかな。所載欄の後撰集の詞書には、「男のつらうなりゆく頃、雨の降りければつかはしける」とあるので、ここの「よ」は「男女の仲」と解した。「たのむ」は、頼みにする、あてにする意。
【所載】後撰集・恋五・九〇四／能因歌枕・一三／綺語抄・二一二／袖中抄・四五一

伊勢

一七二八　おもひ河たえずながるゝ水のあはのうたかた人にあはできえめや

【異同】ナシ

【現代語訳】思い川、絶えず流れる川の水のような思いに絶えず泣いていて、水の泡のようにはかない私ですが、あなたに逢わずに消えましょうか、決してそんなことはありませんよ。
【語句】○おもひ河　思ひ川。恋の思いを川にたとえたもの。「ながれても絶えじとぞ思ふおもひ川いづれか深き心なりける」（古今六帖・一五八四）。○ながるゝ　「流るる」に「泣かるる」を掛ける。川の水が流れることと、恋の物思いで泣いていることを言ったもの。○うたかた　「うたかた（水泡）」に副詞「うたがた」を掛ける。副詞「うたがた」は、打ち消しや推量と呼応して、決して、の意を表す。初句から第三句までは「うたかた」の序詞。○あはできえめや　逢わずに消えたりするだろうか、いやそんなことはない、の意。「や」は反語。「あは」と「きえ」は「うたかた」の縁語。
【所載】古今六帖・第五帖「としへていふ」二五五一／後撰集・恋一・五一五／伊勢集Ⅰ・三〇四、四五六／伊勢集Ⅱ・三〇二／伊勢集Ⅲ・三〇四／俊成三十六人歌合・一二／時代不同歌合・五九／定家十体・四／綺語抄・二一一／奥儀抄・五〇九／袖中抄・四五五／近代秀歌・七六／詠歌大概・八八／三五記・二／桐火桶・二一一
【参考】作者名「伊勢」は所載欄の文献に一致する。

さは

一七二九　君がためやまだのさはにゑぐつむとぬれにし袖はほせどかはかず

【異同】ぬれにし袖は―ぬれこしそては（御）
【現代語訳】あなたのために山田の沢でえぐを摘もうとして濡れてしまった袖は、（涙のために）干しても乾きません。
【語句】◎さは　水がたまり草の茂った低湿地。渓流、谷川を指す場合もある。水中や水辺の動植物と詠まれ、古今六帖では「ゑぐ」と「真菰」の例が見える。○やまだのさは　山田の沢。山間の田のほとりの沢。「もろともに若菜もつまん妹背山やまだのさはの水はぬるくて」（長能集・二二）。○ゑぐ　浅い水中に生える食用の植物を言う。クロクワイ、セリの類、節会の供物の意など諸説ある。古今六帖では第六帖に「ゑぐ」の題がある。○ほせどかはかず　干しても乾かない。「袖」は涙で濡れて乾かない、ということ。
【所載】後撰集・春上・三七
【参考】類似した歌に、「君がため山田のさはにゑぐつむとゆきげの水に裳の裾ぬれぬ」（万葉集・一八四三〈旧一八三九〉／赤人集・一三八／家持集・六一）、「あしひきの山田のさはにゑぐつむとゆきげの水に裳の裾ぬらす」

（古今六帖・三九二三）がある。

一七三〇　まこもかるよどのさはみづあめふればつねよりことにまさるわがこひ
つらゆき

【異同】ナシ
【現代語訳】（真菰を刈る）淀の沢水が、雨が降ると常よりも一段と水かさが増すように、いつもより格段とつのる私の恋心ですよ。
【語句】○まこもかる　「淀」にかかる枕詞。「ま」は美称の接頭語。「こも」は沼や沢に生えるイネ科の多年草。○よどのさはみづ　淀の沢水。淀の湿地の水。「淀」は、流れる水が滞る意で、今の京都市伏見区にある地名。○ことに　普通と違って。格別に。
【所載】古今集・恋二・五八七／貫之集Ⅰ・五六〇
【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。表現の類似した歌に、「津の国のみつの堀江に雨ふればみぎはも見えずまさる我恋」（伊勢集・三九三）がある。

〔以上五首担当　三浦・原山絵美子〕

一七三一　ながれますよどのさはみづ雨やまばいかにならなんとおぼゝゆるかな

【異同】おほゝゆるかな―おもほゆる哉（大）
【現代語訳】流れの増す淀の沢水、「雨降れば常よりことにまさる我が恋」というが、雨が止んだらどうなってほしいと思われることよ。
【語句】○ながれますよどのさはみづ雨やまば　一七三〇番歌「まこもかる淀のさは水雨降れば常よりことに勝る我が恋」を念頭においた句。雨が降っている間は恋心もまさる一方だが、雨が止めば。○いかにならなん　どのようになってほしい。「いかにならなん」という表現は当該歌以外にない。「いかになりなん」であれば、どうなってしまうのだろう、と解釈でき、歌意も通じるが、諸本異同がないので、そのまま現代語訳した。○おぼゝゆるかな　思われることよ。
【所載】ナシ

一七三二一　おぼろけのふちやはさはぐ山川のあさきせにこそうはなみはたて

【異同】ナシ
【現代語訳】並の、通り一遍の淵が波を立てて騒ぎましょうか。山川の浅い瀬の表面にこそ波は立つのです。
【語句】◎ふち　淵。川などの深い所。「瀬」の対義語。和歌では瀬と共に詠まれることが多く、「淵」で「（相手を）深く思う心」を暗示する。○おぼろけのふちやはさはぐ　通り一遍の淵が波を立てて騒ぐでしょうか、騒ぎますまい。「やは」は反語。「おぼろけの」は打消や反語を伴って、並の、通り一遍の、という意味を表す。「おぼろけの海人やは潜く伊勢の海の波高き浦におふるみるめは」（後撰集・八九二）。初句は所載欄にあげた古今集や新撰和歌では「そこひなき」、素性集では「そこひなき」か「限りなき」。「限りなく深い淵」と詠まれる所載欄歌と比較し、並一通りの淵が音を立てましょうか、という当該歌の詠み方は、並一通りではない淵ならば音を立てるかのようで不審であるが、本文通りに現代語訳した。○うはなみはたて　「うはなみ」は川の表面に立つ波。波は川の深い淵ではなく、浅い瀬にこそ目に見えて立つ。「たて」は「立つ」の已然形で「こそ」の結び。
【所載】古今集・恋四・七二二／新撰和歌・二五二／素性集Ⅰ・三一、五八／素性集Ⅱ・二一、五二／素性集Ⅲ・一四
【参考】こちらから音沙汰がないのは深く思っているからなのだ、と恋人に贈った歌か。

一七三三　おもひわびふちにもせにもをちいりなば人のこゝろのあさきとやいはん

【異同】ナシ
【現代語訳】苦しさに思い悩んで淵であろうと瀬であろうとはまってしまったならば、その人の愛情を浅い、薄情だと言おうか。
【語句】○おもひわび　思い悩んで。○ふちにもせにもをちいりなば　ふちにもせにもおちいりなば。ふつうは「淵」に身がはまり溺れるものではあるが、悩むあまり浅い「瀬」にまでも身がはまってしまったならば。赤染衛門集に、深くもない川にはまってしまった侍に詠んだ歌、「深からぬ水の底にや沈むべき浅しや人もいかに見つらん」（二四一）がある。○人のこゝろのあさきとやいはん　人の心を薄情だと言おうか。「人の心」は、当該

歌の場合は、瀬に陥ってしまった人の心。「瀬」は「浅き心」をイメージさせるが、瀬にも陥る人の心を「浅き（薄情）」と言っていいのだろうか、と問いかけた歌か。
【所載】ナシ

一七三四　いかにしてにはかにふちにをちいりにしうきにしにせぬわが身かくしに

【異同】わか身かくしに―我身かくしそ（大）
【現代語訳】どのようにして急に淵に陥ってしまったのか。つらくても死ねないこの身をこの世からかくすために。
【語句】○いかにして　いったいどのようにして。○うきにしにせぬ　いくら辛くても死ねない。「うき」は辛いこと。「浮き」を掛ける。「落ち」「浮き」は「淵」の縁語。「しにせぬ」の「しにす」は、「死ぬ」の連用形にサ変動詞「す」が付いたもの。死ぬ。「河岸のをどりおるべき所あらばうきに死にせぬ身は投げてまし」（拾遺集・四〇一）。○わが身かくしに　我が身を隠すために。
【所載】ナシ

一七三五　ちはやぶる神もしるらむよど川のよどめるふちのふかきこゝろは

【異同】ナシ
【現代語訳】神もご存じでしょう。淀川の淀んでいる淵のように深い私の思いは。
【語句】○ちはやぶる　「神」にかかる枕詞。○神もしるらむ　神様もご存じでしょう。「ちはやぶる神も知るらむ春日野の若紫にたれか手ふれむ」（京極御息所歌合・四二）。○よど川の　「淀川」は山城国の歌枕。京都盆地の巨椋池に三河川が合流して水が流れず淀んで見えるさまに由来している。同音で「よどめる」を導く。○よどめるふちのふかきこゝろは　淀める淵の深き心は。水が淀んでいる淵の深い心は。「淀川の淀める淵の」は「深き」を導く序詞。「深き」は、淵が深いことと思う心が深いこととをかける。
【所載】ナシ

〔以上五首担当　橋本・尾高〕

一七三六　山たかみみつといはめやたまきはるいはかきふち（ぬまイ）のかくれたるつま（ふちイ）

【異同】ナシ
【現代語訳】（山が高いので）会ったなんて言おうか、決して言わない。岩垣淵のように、隠れているあなたを。
【語句】○山たかみ　山が高いので。なお、所載欄の万葉集や古今六帖の重出歌などでは「ますかがみ」とあり、その方が歌意はとりやすい。○たまきはる　かかり方不詳の枕詞。「たまきはる命にむかふ」（万葉集・一〇四七〈旧一四〇三〉）と「命（いのち）」にかかる例があるので、ここでは「いはかきふち」の「い」の音にかかるか。○いはかきふち　岩が垣のようにめぐっている淵。特定の地名ではない。「たまきはるいはかきふち」は「かくれ（隠れ）」の序詞。○かくれたるつま　「かくれづま」とは人に知られないようにしている（恋の）相手（妻）をいう。
【所載】古今六帖・第五帖「かくれづま」三一〇九／万葉集・二五一四（旧二五〇九）真祖鏡　雖見言哉　玉限石垣淵乃　隠而在嬾　マソカガミミトモ（ミツト）イハメヤタマキハルイハカキフチノカクレタルツマ　まそかがみみともいはめやたまかぎるいはかきふちのこもりてあるつま／俊頼髄脳・二四二／袖中抄・四一一

一七三七　かみなびをうちまふさきのいはふちのかくれてのみやわがこひをせん

【異同】ナシ
【現代語訳】神奈備をぐるりとめぐる先にある岩淵のように、ただひたすら人目を忍んで恋をするのだろうか。
【語句】○かみなび　神奈備。神のいますところ、を意味する普通名詞。○うちまふさき　湾曲した崎。「うち」は語調を整える接頭語。「まふ」は回ること。○いはふち　岩垣淵と同じとする万葉集注釈書が多い。上三句は「かくれて」を導く序詞。
【所載】古今六帖・第五帖「かくれづま」三一一三／万葉集・二七二四（旧二七一五）神名火　打廻前乃　石淵隠而耳八　吾恋居　カミナビヲウチマフサキノイハブチニカクレテノミヤワガコヒヲラム　かむなびのうちみのさきのいはぶちのこもりてのみやあがこひをらむ／夫木抄・一一三四〇

一七三八　みづまさるときはふちなる山川のたきならねばやをとの絶せぬ

【異同】ナシ
【現代語訳】水がまさる時は淵になる山川は、たぎつ瀬ではないから、音が絶えないのであろうか。
【語句】○みづまさるときはふちなる　水が増えると淵になるの意。
【所載】古今六帖・第二帖「山川」九六一番既出
【参考】所載欄の「山川」では、二句を「ときはふちなみ」とする。

せ

一七三九　もみぢ葉のながるゝかはのしら浪のたえぬ(たイ)せにこそなりぬ(いせイ)べらなれ

【異同】底本ハ題ノ下ニ作者名小字補入。　たえぬ(たイ)せにこそ―たえぬせとこそ（御・桂・大）
【現代語訳】もみじ葉の流れる川が、白波の絶えない瀬になったようであるよ。
【語句】◎せ　瀬。川の浅いところや川の水の浅い流れを指す。また「逢瀬」のように「瀬」は「機会」やその「場所」を表すことも多い。○しら浪のたえぬせ　白浪が絶えずおこる瀬。傍記の「しら浪のたたぬせ」であれば波立つことのない瀬となる。川が紅葉で色付き、白波の立たない瀬になるという意味でこの方が解しやすい。参考欄参照。○べらなれ　助動詞「べらなり」の已然形。
【所載】ナシ
【参考】作者欄に「いせイ」とあるが、伊勢の作とは確認できない。なお、貫之ノ歌に「紅葉ばのながるる時は白波の立ちにし名こそかはるべらなれ」（貫之集・二六五）があり、白波の立つ川が紅葉で染まる様子を詠む。この歌が参考になるか。

一七四〇　かはのせのみなぎ(になみイ)るあはのながれても人のうきせはきえでうらみむ

【異同】ナシ
【現代語訳】川の瀬に満ちている泡は（たとえすぐに消えるのが当たり前の泡であろうと壊れずに）流れていっても、それと同じように私が生きながらえたとしても、あなたへのつらい物思いは消えないで、私は恨めしく思い続けるでしょう。

【語句】○みなぎる　水が満ちあふれること。「かはのせのみなぎるあはの」が「ながれても」を導き出す序。○ながれても　流れても。泡が壊れず流れるように、生きながらえたとしても、の意。○人のうきせ　「うきせ」は憂き瀬。つらい境遇を指す。「人のうきせ」は、蜻蛉日記天徳二年七月、道綱母の長歌に「……人のうきせにただよひてつらき心は水の泡の消えば消えなんと思へども……」とあるように、特に男女間の憂い、つらい状況を言う。

【所載】ナシ

〔以上五首担当　杉本〕

やかもち

一七四一　ちどりなくさほのかはらのせをひろみこまうちわたしいつかかよはん

【異同】さほのかはらの―さほのかはせの（御・桂・大）　せをひろみ―瀬を清み（大）

【現代語訳】千鳥鳴く佐保川の河原の川瀬は広いから、馬に乗って、（あなたのもとへ）通うのはいつの日のことだろうか。

【語句】○ちどりなくさほのかはら　千鳥鳴く佐保の川原。底本以外の三本は「さほのかはせ」とある。所載欄の万葉集には「さほのかはと」とある。佐保川は奈良市佐保を流れる川。大和国の歌枕。千鳥とともに詠まれる。「千鳥なく佐保の川瀬のさざれなみやむときもなし吾（あ）が恋ふらくは」（万葉集・五二九〈旧五二六〉）。○せをひろみ　瀬を広み。「を……み」は原因をあらわす。瀬は流れの浅いところ。「ちどりなく佐保の川門（かはと）の瀬を広み打ち橋渡す汝が来と思へば」（万葉集・五三一〈旧五二八〉）は瀬が広いので、あなたが来ると思うと打ち橋を渡すという女性の側の歌。○こまうちわたし　駒打ち渡し。乗った馬を歩かせて川を渡る。○いつかかよはん　いつか通はん。いつ通うことになるのだろうか。「いつか」は待ち望む時の「いつになったら……か」という場合もあるが、ここは反語ないしは疑問を表す。参考欄参照。

【所載】新勅撰集・雑四・一二七四／万葉集・七一八（旧七一五）千鳥鳴　佐保乃河門之　清瀬乎　馬打和多思　何時将通　チドリナクサホノカハトノキヨキセヲウマウチワタシイツカカヨハム　ちどりなくさほのかはとのきよきせをうまうちわたしいつかかよはむ／綺語抄・二二一、二二二

【参考】作者名「やかもち」は所載欄の万葉集に一致する。七首ある家持の歌は、どれも恋人に会えない嘆きを歌うものである。

清原ふかやぶ

一七四二　このかはゝわたるせもなしもみぢばのながれてふかきいろをみすれば

【異同】ナシ
【現代語訳】この川は渡る浅瀬もないことよ。（一面に）紅葉が流れ、紅の深い色をみせているから、（深くて）。
【語句】○ながれてふかき　流れて深き。川の水深の「深き」と、紅色の「深き」の両方を言う。「淀川の淀むと人は見るらめど流れてふかき心あるものを」（古今集・九二一）では、川の水深の「深き」と、自分の恋の思いの「深き」の両方を言う。○いろをみすれば　色を見すれば。色を見せているから。所載欄の新千載集では「色に見えつつ」。
【所載】新千載集・冬・六二四／深養父集・解題（枡色紙による補充の一二）
【参考】作者名「清原ふかやぶ」は所載欄の文献に一致する。

おほとものやすみ

一七四三　ひとつせになみさへさはり行みづののちもあひなんいまならずとも

【異同】のちもあひなん―のちもあひみん（桂）
【現代語訳】一つの瀬に、波さえ（岩や石に）妨げられながら行く水が（いったんは別れてもまた一つになるのだから）、どんな困難があってもきっと将来会うことができる、今でなくても。
【語句】○ひとつせになみさへさはり行みづの　一つ瀬に波さへさはり行く水の。一つの瀬に波さえ（岩や石に）さえぎられて行く水の。「一つ瀬」も「波さへ」もよくわからない。所載欄の万葉集の四文字の訓読の相違らしく見える。○のちもあひなん　後も逢ひなん。○いまならずとも　今でなくとも。現世に対して来世には かなう、という例として「この世には人言しげし来む世にもあはむわがせこいまならずとも」（万葉集・五四四〈旧五四一〉）がある。
【所載】古今六帖・第五帖「ちぎる」二九三七／万葉集・七〇二（旧六九九）一瀬二波　千遍障良比　逝水之後毛将相　今尓不有十方　ヒトセニハ（ヒトツセニナミ）チタビサハラヒ（チヘサラヒ）ユクミヅノノチモアハナム（アヒナム）　ひとせにはちたびさはらひゆくみづののちにもあはむいまにあらずとも

【参考】作者名「おほとものやすみ」は、所載欄の重出の古今六帖二九三七番では「おほとものかたみ」とある。当該歌の万葉集における位置は、七〇二一（旧六九九）であるが、実は「大伴宿祢（すくね）像見（かたみ）の歌三首」とあるうちの第三首目にあたる。

一七四四　秋風にやまぶきのせのひゞくさへそらなるくものさはぎあへるかも

【異同】ナシ
【現代語訳】秋風に山吹の瀬の音が（一段と）響く、（それにあわせるように）空にある雲の騒ぐことよ。
【語句】○やまぶきのせ　山吹の瀬。具体的にどこを指すのか不明。所載欄の万葉集の歌を引いて、五代集歌枕・一四一六に「山城」と記す。また、歌枕名寄・三九八も同じ。○ひゞくさへ　響くさへ。瀬音が響くのさえ。しかし所載欄の万葉集の本文は「響苗」とあり、それを「なるなへに」（鳴るにつれて）と訓読する。その本文で訳した。○そらなるくも　空にある雲。○さはぎあへる　「さはぎあふ」は一面に騒がしい様子をいうが、その已然形に、完了の助動詞「り」の接続したかたち。
【所載】万葉集・一七〇四（旧一七〇〇）金風　山吹瀬乃　響苗　天雲翔　鴈相鴨　アキカゼノヤマブキノセノナルナヘニアマクモカケルカリニアヘルカモ　あきかぜにやまぶきのせのなるなへにあまくもかけるかりにあへるかも
【参考】万葉集広瀬本は「アキカセノヤマフクセヽノヒヽクナヘアマクモカケルカリニアヘルカモ」という本文である。

一七四五　はつせ河いくせかわたるわぎもこがおきてしくればやせこそわたれ

【異同】ナシ
【現代語訳】初瀬川、いったいいくつ瀬をわたるのか。いとしいあの子をおいて（やむなく）来たから、やせわたるよ。八瀬わたるよ。
【語句】○はつせ河　初瀬川。大和国の歌枕。長谷川。奈良の長谷寺のあたりを「はつせ」と呼んだ。表記はこのほかに「泊瀬」もある。○いくせかわたる　いくつの瀬を渡るのか。問いかけのかたち。その下に応える部分をもつ。○わぎもこがおきてしくれば　いとしい恋人を置いてきたから。「わぎもこ」は我妹子。我が妹。

歌において、恋人や妻を指す。「おきてしくる」の「し」は強め。置いてきたので。○やせこそわたれ　「八瀬こそ渡れ」に「痩せこそわたれ」を掛けた。瀬の数を聞かれた答え「八瀬渡る」に「恋しくて日に日に痩せてきた」の意味の「やせわたる」を掛ける。
【所載】ナシ
【参考】やせたのは「わぎもこ」という解釈もあるか。

〔以上五首担当　平野〕

一七四六　なとりがはいくせかわたるなゝせともやせともしらずよるしわたれば

【異同】いくせかわたる―幾瀬はわたる（大）
【現代語訳】名取川の瀬をいくつ渡ったのか。七瀬とも八瀬ともその数は知らない。夜に渡ったので。
【語句】○なとりがは　名取川。陸奥国の歌枕。一二七〇番歌参照。和歌においては「名を取る（噂を立てられる）」に掛けて読まれることが多い。○いくせかわたる　一七四五番歌参照。○なゝせともやせともしらず　七瀬とも八瀬とも知らず。「七瀬」も「八瀬」も多くの瀬を表す。ここでは多くの恋の噂を立てられた意を表す。○よるしわたれば　夜に渡ったので。「夜」には、逢瀬の意がこめられていよう。
【所載】夫木抄・一一〇五一
【参考】具体的な詠歌事情は不明であるが、評判が立ってしまったことに対して「夜だったから何回なのかわからない」と、とぼける、あるいは居直るようなおもしろみをもつ歌。

一七四七　あすかゞはせゞのうきあはにながれてもやすきいをぬるわれとやはしる

【異同】ナシ
【現代語訳】飛鳥川の瀬々に浮く泡が流れ――（あなたのことを思って）自然と泣かれてしまっても、安らかな眠りにつく私とお思いですか。
【語句】○あすかゞは　飛鳥川。大和国の歌枕。奈良県高市郡の山中に源を発し、大和川に注ぐ。「世の中は何か常なるあすか川昨日の淵ぞ今日は瀬になる」（古今集・九三三）のように、人の世の変わりやすさを喩える例が多い。○うきあはに　浮き泡に。浮き泡は水に浮く泡。上二句は「ながれても」を導く序。○ながれても　川

が流れる意の「流れ」に、自然と涙が出る意の「泣かれ」を掛ける。「泣かれても」の「れ」は自発の助動詞「る」の連用形。「水のあわの消えてうき身と知りながら流れて猶もたのまるるかな」（古今集・七九二）。○やすきいをぬる　安き寝（い）を寝（ぬ）る。安眠する。「寝（い）」は寝る意の名詞。「うちはへて安きいもねずきりぎりす秋の夜な夜ななきわたるらむ」（躬恒集・六六）。○われとやはしる　……である私とお思いですか。ここでの「やは」は、「とこの海に清き渚は年経れどみるめもよせむものとやは知る」（安法法師集・五七）のように、疑問を表す。

【所載】ナシ

一七四八　おもはしみあはゆきみゆへいたづらにこのかはの瀬にたまもぬらしつ

【異同】ナシ

【現代語訳】愛おしくて、逢うことのない貴方のせいで、むなしくこの川の瀬に（立って）、美しい裳を濡らしてしまった。

【語句】○おもはしみ　シク活用形容詞「思はし」に接尾語「み」がついたものか。愛おしくて。所載欄の万葉集では「はしきやし」、綺語抄では「おしるやし」。「草枕たびゆく君を思はしみそひてこまほしこがの浜辺に」（古今六帖・二四〇六）の例があるが、こちらも万葉集では「うるはしみ」である。○あはぬきみゆへ　逢はぬ君故。逢うことのない貴方が原因で。「……草枕　旅寝かもする　逢はぬ君故」（万葉集・一九四）。○いたづらに　むなしく。何のかいもなく。○たまも　玉裳。美しい裳。「たま」は美称。

【所載】万葉集・二七一四（旧二七〇五）愛八師　不相君故　徒尓　此川瀬尓　玉裳沾津　ヨシヱヤシアハヌキミユヱイタヅラニコノカハノセニタマモヌラシツ　はしきやしあはぬきみゆゑいたづらにこのかはのせにたまもぬらしつ／綺語抄・三〇八

【参考】万葉集に、「はしきやし逢はぬ子ゆゑにいたづらに宇治川の瀬に裳裾ぬらしつ」（一四三三〈旧一四二九〉）という類歌がある。

一七四九　伊勢のうみの浪間にくだすつりのをのうちはへひとり恋わたるかな

【異同】ナシ
【現代語訳】伊勢の海の波間に垂らす釣り糸が長く延ばされるように、長い間一人で恋し続けていることよ。
【語句】◎うみ　地球上の陸地でない部分で、全体が一続きになって塩水をたたえる海洋。古くは湖や沼も「うみ」と呼んだ。和歌においては、中古以降、実景としての海よりも観念としての海が多く詠まれ、古今六帖の「海」題には恋の歌が多く収められている。○伊勢の海　伊勢国の面する海を指す歌枕。○つりのを　釣りの緒。釣り糸。「浦凪につりのを垂れて繰る我ぞいたくな立ちそ沖つ白波」（兼盛集・一四五）。○うちはへ　糸のように細いものを長く延ばす意と、ずっと長く続ける意の掛詞。「伊勢の海のあまのつりなは打ちはへて苦しとのみや思ひ渡らむ」（古今集・五一〇）。
【所載】続古今集・恋一・一〇四七

一七五〇　をしなべてよはみなうみとなりなゝんおなじなぎさになみやよすると

【異同】なみやよすると―なみやよすらん（桂）
【現代語訳】全て一様に、世の中は皆海となってしまってほしい。そうしたら、あなたがいるのと同じ渚に波が寄せて、逢えるのではないでしょうか。
【語句】○をしなべて　おしなべて。全て一様に、皆等しく。「おしなべて雪のふれればわが宿の杉をたづねて問ふ人もなし」（後撰集・四八九）。○なりなゝん　なってしまってほしい。動詞「なる」連用形＋完了の助動詞「ぬ」未然形＋あつらえ望む意の終助詞「なん」。「おしなべて峰も平らになりななん山の端なくは月もかくれじ」（後撰集・一二四九）。
【所載】拾遺抄・恋下・三六八／拾遺集・恋五・九二五
【参考】拾遺抄によれば、善祐法師が二条后藤原高子との密通事件により伊豆国に流罪になった際、ある女が詠んだ歌。拾遺集は善祐法師の母が詠んだ歌とする。

〔以上五首担当　斎藤・諸井〕

一七五一　わたのそこかづきてしらむ人しれずおもふこゝろのふかさくらべに

これのり

【異同】ナシ
【現代語訳】海の底に潜って確かめましょう。人知れずあなたを思う私の心の深さと比べるために。
【語句】○わたのそこ　海の底。「わた」は「海」。○かづきてしらむ　潜って確認することにしましょう。「む」は意志。「かづく（潜く）」は水に潜る。○ふかさくらべ　自分の愛情と海の底との深さを比べること。「人言はしましぞ我妹綱手引く海ゆまさりて深くしぞ思ふ」（万葉集・二四四二〈旧二四三八〉）のごとき、自分の思いが海よりも深いと相手に訴える万葉集歌が、平安期には「君を思ふ深さくらべに津の国の堀江見にゆく我にやはあらぬ」（後撰集・五五四）、「伊勢の海の海人とならばや君恋ふる心の深さかづき比べん」（貫之集・五八九）といった、深さを比べるという表現となる。
【所載】後撰集・恋三・七四五／続後撰集・異本歌・一三七七／是則集・二六／和歌初学抄・一二四
【参考】作者名「これのり」は後撰集に一致し、是則集に見える。続後撰集（異本歌）はよみ人知らず、和歌初学抄は作者記載なし。

一七五二　かづきいでぬなみたかいそのあはびゆへうみてふうみはかづきつくしつ（うらみイ）

【異同】ナシ
【現代語訳】簡単に潜って取ることができない、波の高い磯の鮑のような、なかなか手に入らぬ女性のせいで、海という海は全て潜り尽くしてしまったことだ。
【語句】○かづきいでぬ　潜って採ってくることができない。第三句の「あはび」にかかる。「ぬ」は完了の助動詞の終止形とみることもできるが、所載欄の是則集に「かづきえぬ（潜き得ぬ）」とあるのに従い、打消の助動詞として解した。○なみたかいそ　波の高い磯。「おぼろけの海人やは潜く伊勢の海の波高磯におふるみるめは」（伊勢集・四六一）。○あはびゆへ　鮑ゆゑ。鮑のために。鮑のせいで。○うみてふうみはかづきつくしつ　海てふ海は潜き尽しつ。「沖つ島い行き渡りて潜くちふ鮑玉もが包みて遣らむ」（万葉集・四一二七〈四一〇三〉）のような「鮑玉（真珠）」を抱いた鮑を、なかなか手に入らぬ女性の比喩とし、そのような特別な鮑を求めてあらゆる海を潜りつくしてしまったという意。
【所載】夫木抄・一二〇五一／是則集・三三

一七五三　きみ恋ふるなみだのそこに海はあれど人をみるめは生ひずぞ有ける

【異同】ナシ
【現代語訳】あなたを思って流す涙の底には海があるけれど、海松布は生えていない、お目にかかる機会はないことですね。
【語句】○きみ恋ふるなみだのそこに　あなたを思って流すたくさんの涙がたまってできる底に。「涙の底」は、解しにくい表現で、「恋ひわぶる心は空に浮きぬれど涙の底に身は沈むかな」（千載集・九四七）、「昔思ふ涙のそこに宿してぞ月をば袖の物と知りぬる」（新勅撰集・一〇七五）といった例はあるが、後代のものである。本来は、「君恋ふる涙の床に満ちぬればみをつくしとぞ我はなりける」（古今集・五六七）のように「涙の床」であったかとも考えられるが、ここでは本文通りに解した。○みるめ　男女の逢瀬の機会をいう「見る目」に海藻の「海松布（みるめ）」を掛ける。「海松布」は、水中の岩に生える緑色の海藻で、枝が分岐して房状をなす。「早き瀬にみるめおひせばわが袖の涙の河に植ゑましものを」（古今集・五三一）。「みるめ」「底」は「海」の縁語。
【所載】ナシ
【参考】語句欄にあげた、古今集五六七番歌の初・二句「君恋ふる涙の床に」と、古今集五九五番歌「しきたへの枕の下に海はあれど人を見るめは生ひずぞ有りける」の第三句以下を接合させて作ったような歌である。

一七五四　うみとのみまとひのなかはなりなゝんそながらあはぬかげのみゆれば

いせ

【異同】ナシ
【現代語訳】円居のなかは涙の海ばかりとなってほしい。昔のようでありながら、すっかり変わってしまったお姿がみえるので。
【語句】○まとひ　まとゐ（円居）。円になって座り、親しい仲間と団欒の時を過ごすこと。「思ふどちまとゐせる夜は唐錦たたまく惜しきものにぞありける」（古今集・八六四）。○なりなゝん　なって欲しい。「なん」は願望の終助詞。所載欄の後撰集、伊勢集は全て傍記と同じ「なりぬめり」となっており、その方が歌意が通る。○そながらあはぬ　そのようでありながら、一致しない。所載欄の後撰集、伊勢集によれば、宇多天皇が剃髪して僧衣姿であることをいう。参考欄参照。なお後撰集、伊勢集は全て「そながらあらぬ」とあり、その

本文によって訳した。○かげ　人の姿。
【所載】後撰集・雑一・一〇九八／伊勢集Ⅰ・二五／伊勢集Ⅱ・二七／伊勢集Ⅲ・二四
【参考】作者名「いせ」は、所載欄の文献に一致する。後撰集の詞書によれば、譲位落髪後、仏道修行の山歩きをしていた宇多法皇が、三年後、后、女御、更衣たちが住む院に帰り、昔のように一同が集まり、食事のお下がりを賜った。その折、七条后温子が「言の葉にたえせぬ露は置くらんや昔おぼゆるまとゐしたれば」と詠んだのに、伊勢が答えた歌、とある。宇多法皇の変わり果てた姿に、話す言葉につけても絶えることなく涙の露が置くとした温子の歌に、伊勢は、露どころかいっそ海というべきだと応じて、その悲しみに深く共鳴している。

一七五五　さをさせどそこゐもしらぬわたつうみのふかきこゝろを君はしらなん（にみるかなイ）

【異同】ナシ
【現代語訳】棹をさしても底が知れぬ海のように深い心をあなたに知って頂きたいのです。
【語句】○そこゐ　底ひ。果て。奥底。「そこひなき淵やはさはぐ山河の浅き瀬にこそあだ波はたて」（古今集・七二二）。○わたつうみのふかきこゝろを　自分の心の深さを底しれぬ海の深さに喩える。一七五一番歌参照。○君はしらなん　あなたは知って欲しい。「なん」はあつらえ望む意の終助詞。傍記「君にみるかな」は、所載欄の土佐日記と同じである。土佐日記では帰京する貫之を鹿児の崎まで見送った、館の人々が浜辺で歌った「惜しと思ふ人やとまると葦鴨のうち群れてこそ我は来にけれ」に対する返歌で、人々の厚情を謝する意となっている。
【所載】土佐日記・六
【参考】萩谷朴『土佐日記全注釈』（角川書店・一九六七年）は、離別の情を海の底の深さに喩えるこの歌に、李白の詩「桃花潭の水深きこと千尺　汪倫が我を送る情に及ばず」（「贈汪倫」）の影響をみる。
〔以上五首担当　中野〕

一七五六　おもひやるこゝろはうみにわたれどもふみしなければしらずや有らん（をイ　らねイ）

已上二首　つらゆき

【異同】しらすや有らん―しらすやは有らん(大)
【現代語訳】あちらに思いをはせる心は海を渡って行くが、踏み渡るわけでもなく文なんてないので、私の心など知らないでいることであろうか。
【語句】○おもひやるこゝろ　思いを遠くにはせる私の心。「思ひやる」は、遠くにいて思いを及ばせる意。「思ひやる心にたぐふ身なりせば一日(ひとひ)に千度(ちたび)君は見てまし」(後撰集・六七八)。○うみにわたれども　海を渡っているけれども。傍記や所載欄の土佐日記「海を渡れども」の方が自然なのでそちらで解した。○ふみしなければ　文しなければ。文(手紙)がないので。「文」に、「踏み」を掛ける。「渡れ」は「踏み」の縁語。「し」は強意を表す副助詞。
【所載】土佐日記・一一
【参考】「已上二首　つらゆき」とあるが、一七五五番歌も当該歌も土佐日記に見える歌である。当該歌は、日記の正月九日条、任地の人々と最終的に別れた場面に見える。乗った船は大湊を漕ぎ離れ海上に出て、船から見送りの人々の姿もすっかり見えなくなり、陸からも船の人達が見えなくなった。「岸にも言ふことあるべし、船にも思ふことあれど、かひなし。かかれど、この歌を独り言にてやみぬ」とあって、詠まれている。

一七五七　いせのうみのちひろのそこもかぎりあればふかき心をなにゝたとへん

【異同】ナシ
【現代語訳】伊勢の海にだって深さ千尋に海底があって限りがあるものなので、この私の限りない深い思いをいったい何に喩えればよいのだろうか。
【語句】○いせのうみのちひろのそこ　伊勢の海の千尋の底。「ひろ(尋)」は水深や長さ・距離などを測る単位。両手を広げた長さで、一・五メートルほど。「千尋」ははかりしれない深さをいう。「そこ」は海底。○かぎりあれば　海の底という限りがあるので。○ふかき心　相手を思う気持ち。○なにゝたとへん　何にたとえたらよいのだろうか。自分の愛は喩えるものがないほど深いということ。
【所載】続後撰集・恋一・六九五

一七五八　ワタノソコオキヲフカメテワガ思君ニハアハン年ハヘヌレド

【異同】底本ハ片仮名デ行間ニ小字補入。　君ニハアハン―キミハアハン（桂）　年ハヘヌレト―トシハヘヌトモ（御・桂・大）

【現代語訳】[結句「としはへぬとも」の本文で訳した。]心の底から深く私が思っているあなたにお逢いしたい、たとえどんなに年が経過するとしても。

【語句】○ワタノソコ　海の底。「そこ」は極まる所の意、海の極まる所の意から「おき」に掛かる枕詞。例を見ると、水平方向の「沖」にも、垂直方向の「奥（おき。海底）」にも掛かるが、ここは後者の「おき（奥）」。○オキヲフカメテ　「おき」は「奥」の意。心の奥深く。「わたのそこおきを深めて生ふる藻のもとも今こそ恋はすべなみ」（万葉集・二七九一〈旧二七八一〉）。○ワガ思　わが思ふ。初句から三句までが、「君」に掛かる。○年ハヘヌレド　底本の本文ではなく、他の三本の「トシハヘヌトモ」を採り、現代語訳した。どんなに年を経ても。

【所載】万葉集・六七九（旧六七六）海底　奥乎深目手　吾念有　君二波将相　年者経十方　ワタツミノオキヲフカメテワガオモヘルキミニハアハムトシハヘヌトモ　わたのそこおきをふかめてあがおもへるきみにはあはむとしはへぬとも

【参考】所載欄の万葉集は、中臣郎女が大伴家持に贈った歌五首の一つ。

一七五九　ながれゆく身をしおもへばおほかたのうみをみるにもうらみたえせず

【異同】ナシ

【現代語訳】流されてゆく我が身のことを思いますと、普通の海を見るにつけて、恨みに思う気持ちは絶えません。

【語句】○ながれゆく身を　流されてゆく我が身。『古今和歌六帖標注』に「契沖云、流罪の人のうたなるべし」とある。「身を」に、「水脈」を掛ける。「水脈」は、川や海の流れをなす水路をいう。○おほかたのうみ　「大方の海」と「大潟の海」との掛詞か。「大潟」は広い湾をいうが、『平安和歌歌枕地名索引』に「おほかた」で立項する「船人も待つとも知らでやほとときすおほかたにのみなきわたるらん」（浄照房集・四〇）や、「よさの海は霞へだてていづかたか千舟よるてふおほかたの浦」（林葉集・二七）など、それと指示する湾の名であったか。現在における所在地は不明。○うらみたえせず　恨みは絶えない。「うらみ」は、「恨み」に「浦廻」（入り江の周囲）を掛ける。「流れ」「水脈」「大潟」「浦廻」は、「海」の縁語。

【所載】ナシ

一七六〇　千ゞのかはながれてつどふわたつうみのみなそこふかくおもふころかな

【異同】ナシ
【現代語訳】たくさんの川が流れて集まってくる海の水底は深い、心中深く深くあなたを思う頃ですよ。
【語句】○千ゞのかは　千々の川。たくさんの川。○みなそこふかくおもふころかな　水底深く思ふころかな。初句から「水底」までが序詞で、「深く」を導く。「ふかく」は、「水底深く」と「深く思ふ」とを掛ける。「大き海の水底深く思ひつつ裳引きならしし菅原の里」（万葉集・四五一五〈旧四四九一〉）。
【所載】ナシ

〔以上五首担当　犬養悦・加藤〕

一七六一　すまのうらにしほやくほのほ夕さればゆきすぎがてにやまにたなびく

【異同】ナシ
【現代語訳】須磨の浦で塩を焼くほのおは、夕方になると行き過ぎにくくて、山の方へたなびくよ。
【語句】○すまのうら　須磨の浦。摂津国の歌枕。現在の神戸市須磨区の海岸一帯。「塩焼き」「海人」などが詠まれる。○しほやくほのほ　塩を焼くほのお。製塩の火。塩焼きには「けぶり」と詠まれるのが常。所載欄の万葉集の歌でも「けぶり」だが、古今六帖底本では三重出の歌すべてが「ほのほ」となっている。○ゆきすぎがてにやまにたなびく　通り過ぎることができにくくて山の方にたなびく。「ゆきすぎがてに」しているのは「しほやくほのほ」である。擬人的な表現。
【所載】古今六帖・第三帖「しほ」一七八一、一七九四／万葉集・三五七（旧三五四）縄乃浦尓　塩焼火気　夕去者　行過不得而　山尓棚引　ナハノウラニシホヤクケブリユフサレバユキスギカネテヤマニタナビク　なはのうらにしはやくけぶりゆふさればゆきすぎかねてやまにたなびく／夫木抄・七九八一、一一五二八

一七六二　おほうみにしまもあらなくにうなばらのたゆたふなみにたてるしら雲

【異同】おほうみに―大海の（大）
【現代語訳】大海に島もないのに、海原のたゆたい揺れる波のあなたに立っている白雲よ。
【語句】○しまもあらなくに　島もないのに。「なくに」は、打消の助動詞「ず」のク語法「なく」に、助詞「に」がついたもの。○たゆたふ　ゆらゆらと揺れて定まるところがないさま。
【所載】続古今集・雑中・一六五四／万葉集・一〇九三（旧一〇八九）大海尓　嶋毛不在尓　海原　絶塔浪尓　立有白雲　オホウミニシマモアラナクニウナハラノタユタフナミニタタルシラクモ　おほうみにしまもあらなくにうなはらのたゆたふなみにたてるしらくも／夫木抄・一〇二七九／和歌童蒙抄・四五

一七六三　うらごとにさきちるなみの花みればうみには春もくれぬなりけり　つらゆき

【異同】ナシ
【現代語訳】浦ごとに、咲いたり散ったりする花のように波がうち寄せているのを見れば、海には、春も暮れるということがないのだなあ。
【語句】○さきちるなみの花　咲き散る波の花。浦に波が白くうち寄せているさまを、花が咲き散っているものと見立てた。○春もくれぬなりけり　春という季節も暮れることがないのだなあ。いつも春なのだ、ということ。「ぬ」は打消の助動詞「ず」の連体形。
【所載】貫之集Ⅰ・二〇五
【参考】作者名「つらゆき」は、所載欄の文献に一致する。

一七六四　わたつうみのおきのひろせにながれても人のよるせもありてふものを

【異同】わたつうみの―わたつみの（大）　人のよるせも―人のよるせは（大）
【現代語訳】大海原の沖の広い瀬に流れ出てしまっても、結局寄るべき瀬もある、というものなのに。（よるべなき状態になって泣けてしまっても、ついには寄るべき所もある、というものなのに。）
【語句】○ひろせ　広瀬。広い瀬。もと川に関して言われることばで、平安中期ごろまでには海にかかわっての例歌を見出せないが、夫木抄には「舟人の沖のひろせに漕ぎかけてしほの迎への来るを待つらし」（一一三四五）

と詠んだ藤原光俊の歌がある。○ながれても　「流れても」に「泣かれても」を掛ける。○よるせ　寄る瀬。ここは寄るべき場所、あるいは寄るべき人、の意であろう。「ひろせ」に韻を合わせて「よるせ」としたか。○ありてふものを　あるものだというのに。実際にはそれがないのを嘆く気持がこめられている。

【所載】古今六帖・第三帖「しほ」一七九五

一七六五　なごのうみのあさけのなごりいまもかもいそのうらあはにみだれてあらん

【異同】ナシ

【現代語訳】奈呉の海の朝明けの潮のなごりの海藻などは、ちょうどいまごろ、あの磯の浦の湾入したあたりに乱れ残っていることだろうか。

【語句】○なごのうみ　奈呉の海。八雲御抄は「越中」としているが、万葉集では越中と摂津双方に詠まれている。この歌は、万葉集では巻七雑歌の「摂津作」二十一首の中にあるから、摂津の奈呉である。現在の大阪市住吉区あたりの海辺。○あさけ　「アサアケ」の約。夜の明けるころ。○なごり　波の退いたあとの渚に残っている海水や海藻などのこと。○いそのうらあは　底本の本文では意がとれない。所載欄万葉集の歌により「いそのうらわ」として解す。「うらわ」は万葉集の「浦廻（うらみ）」の誤読より生じた語で、海岸が湾曲して入りこんだ形になっているところ。

【所載】万葉集・一一五九（旧一一五五）奈呉乃海之　朝開之奈凝　今日毛鴨　礒之浦廻尓　乱而将有　ナゴノウミノアサケノナゴリケフモカモイソノウラワニミダレテアラム　なごのうみのあさけのなごりけふもかもいそのうらみにみだれてあらむ／夫木抄・一〇三三二／井蛙抄・四二〇

〔以上五首担当　山下〕

一七六六　あびきするあまをとめごが袖とほりぬれにしころもほせどかはかず

【異同】ナシ

【現代語訳】網を引く海女乙女の袖は、裏までびっしょり濡れてしまったが、干しても一向に乾かない。ありもしない浮き名は、打ち消しても一向に晴らせない。

【語句】◎あま　海人・海女・蜑。海で魚を捕ったり、潜って貝や海藻を採ることを業とする人。○あびき　網引き。魚を捕るために網を引くこと。○あまをとめご　乙女の海女。海女を親しんで言う語。○袖とほり　袖の表から裏へぬけるほどひどく濡れたさま。○ぬれにしころも　濡れてしまった着物。ここでは根も葉もない浮き名を言う。上三句は「ぬれにしころも」を導く序詞。「あまのぬれぎぬ」を浮き名とした例として「君によりあまの濡れぎぬわれ着たり思ひにほせど干るよしもなし」（古今六帖・三三一八）がある。○ほせどかはかず　干せど乾かず。浮名を打ち消しても晴らせない。

【所載】古今六帖・第五帖「あさごろも」三三一三／万葉集・一一九〇（旧一一八六）朝入為流　海未通女等之袖通　沾西衣　雖干跡不乾　アサリスルアマヲトメラガソデトホリヌレニシコロモホセドカワカズ　あさりするあまをとめらがそでとほりぬれにしころもほせどかわかず／夫木抄・一六六五〇／綺語抄・五二一

一七六七　あびきするあまとやみらんあきの浦のきよきあらいそをみにこしわれを

【異同】ナシ

【現代語訳】網を引く海人だと人は見るだろうか。あきの浦の清い荒磯を見に来た私を。

【語句】○あびき　一七六六番歌参照。○あまとやみらん　海人と人は見るだろうか。上代においては、終止形接続の推量の助動詞「らん」は、上一段活用の「見る」に付く場合、連用形にあたる「み」に付くことがある。○あきの浦　未詳。所載欄の万葉集一一九一（旧一一八七）番歌では「飽浦」。岡山市飽浦や、和歌山県海草郡加太町の説がある。○あらいそ　荒磯。岩がけわしく露出している海岸。

【所載】万葉集・一一九一（旧一一八七）網引為　海子哉見　飽浦　清荒磯　見来吾　アビキスルアマトヤミラムアキノウラノキヨキアライソヲミニコシワレヲ　あびきするあまとかみらむあくのうらのきよきありそをみにこしわれを／夫木抄・一一六〇七／綺語抄・二五〇

一七六八　わたつうみはつらき心やふかゝらむあまてふあまのうらみつゝふる

【異同】ナシ

【現代語訳】海の神は薄情な心が強いのだろうか。それで海人という海人は浦を見ては恨みながら日を送っているのだな。

【語句】○わたつうみ　海。海神、その地方の海、雨、雲、水をつかさどると言われた。○つらき心やふかゝらむ　薄情な心が強いのだろうか。海の縁で「深い」と言った。○あまてふあまの　海人という海人はみんな。○うらみつゝふる　恨みながら日を送っている。「浦見」（うらみ）に「恨み」を掛ける。「わたつみのわが身こす浪立ち返りあまのすむてふうらみつるかな」（古今集・八一六）。「わたつうみ」「深し」「浦見」は「海人」の縁語。

【所載】ナシ

一七六九　伊勢のうみのあまのしわざのあこやたまとりてののちも恋のしげゝむ

【異同】ナシ

【現代語訳】伊勢の海の海人の仕事だというアコヤ貝の真珠。その真珠を得た後も、恋の思いは繁くあることだろう。

【語句】○あこやたま　アコヤ貝から出る珠。真珠。所載欄の万葉集一三二六（旧一三二二）番歌は「鰒玉」（あはびたま）。今日の真珠はほとんどがアコヤ貝真珠であるが、上代はアワビ貝真珠が主であった。○とりてののち　「あこやたま」を採ってののち。恋人を得てのち、という寓意があるか。上三句は「とりて」に掛かる序詞。○恋のしげゝむ　恋の思いが繁くあることだろう。

【所載】万葉集・一三二六（旧一三二二）伊勢海之　白水郎之嶋津我　鰒玉　取而後毛可　恋之将繁　イセノウミノアマノシマツガアハビタマトリテノチモカコヒノシゲケム　いせのうみのあまのしまつがあはびたまとりてのちもかこひのしげけむ

一七七〇　うらごとにあさりするあまのもとめても恋しき人にあはんとぞ思

【異同】あさりするあまの―いさりする海士の（大）

【現代語訳】浦ごとに漁をする海人が魚や貝を探し求めるように、尋ね探してでも、恋しい人に会おうと思う。

【語句】○うらごとに　浦毎に。それぞれの浦で。○あさりするあま　海岸で魚や貝を捕ろうとする海人。○もとめても　探し求めてでも。「も」は強めの助詞。初・二句は「もとめても」に掛かる序詞。

【所載】ナシ

〔以上五首担当　林〕

一七七一　あまをとめいざりたく火のをぼゝして見てし人して恋わたるらん

【異同】をほゝして―をほゝしく（御・大）
【現代語訳】あまをとめが焚くいさり火がほのかなように、ほのかに見てしまった人によって、どうしてこんなにずっと恋しく思われるのだろう。
【語句】○あまをとめ　海で働く少女。少女の漁人。○いざりたく火　夜、漁をする時に魚を集めるため焚く火。初・二句は「おぼほし」を導く序詞。○をぼゝして　御所本や大久保本、あるいは上句が一致する万葉集・三九一八（旧三八九九）番歌（参考欄参照）では「おぼほしく」とあり、その本文で訳した。「おぼほし」は、ぼんやりしてはっきりしない、ぼんやりして不安だ、の意。「おほほし」とも。万葉集では「於煩保之」とする表記のほか、「於保保之」「大欲」もある。○見てし人して恋わたるらん　「して」は格助詞であろうが、わかりにくい。見てしまった人でもって、の意であろうか。「恋わたる」は、ずっと恋いつづける。「らん」は疑問詞を伴わずに、「どうして」と、物事の原因や理由を推量する意。「ひさかたの光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ」（古今集・八四）。
【所載】ナシ
【参考】表現の類似した歌に、「あまをとめいざりたく火のおぼほしくつのの松原おもほゆるかも」（万葉集・三九一八〈旧三八九九〉）や「山ざくら霞の間よりほのかにも見てし人こそ恋しかりけれ」（古今集・恋一・四七九）などがある。

一七七二　あさな〳〵あまのさほさす浦ふかみをよばぬ恋もわれはするかな

【異同】ナシ
【現代語訳】毎朝毎朝、漁師が棹をさす浦は深いので、とても底までは届かない、その届かぬ恋を私はしていることだ。
【語句】○あさな〳〵　朝ごと。毎朝。上三句は「をよばぬ（およばぬ）」を導く序詞。○さほ　さを（棹）。
【所載】新勅撰集・恋一・六三四／夫木抄・一六六五一

【参考】類歌「音に聞く天の橋立たててたてて及ばぬ恋も我はするかな」（伊勢集・四〇六）。

一七七三　こゝろしてたまもはかれどそでごとにひかり見えぬはあまにざりける　伊勢

【異同】ひかり見えぬは―ひかりみえぬる（大）　あまにさりける―海人にそ有ける（大）
【現代語訳】注意して玉藻は刈るけれど、その玉の光が袖ごとに見えないのは、漁師だったのだ。
【語句】○たまも　藻の美称。「たま」に「珠玉」の意を持たせ、「ひかり」と関連させる。参考欄参照。○あまにざりける　「あまにぞありける」の約。
【所載】伊勢集Ⅰ・七〇／伊勢集Ⅱ・七二／伊勢集Ⅲ・六九
【参考】作者名「伊勢」は、所載欄の文献に一致する。なお、関根慶子・山下道代『伊勢集全釈』は、仏教的な寓意とは直接関係ないものの、この歌の表現に、法華経・五百弟子受記品に見える「衣裏宝珠」の話が意識されていると説く。酒に酔った男が袂に縫いつけられた宝珠に気づかなかったという話で、たとえば同じ伊勢集・一一四番「しらたまを包む袖のみながるるは春は涙のさえぬなるべし」や、古今集五五六番、五五七番の贈答歌「包めども袖にたまらぬ白玉は人を見ぬめの涙なりけり」「おろかなる涙ぞ袖に玉はなすわれはせきあへずたぎつ瀬なれば」など、例は多い。

一七七四　おほみやのうちまできこゆあびきすとかことゝのへるあまのよびごゑ　ながのいきまろ

【異同】かことゝのへる―あことゝのふる（大）
【現代語訳】大宮の中まで聞こえてくることだ。網を引くとて、船乗りたちを指揮している漁師の掛け声が。
【語句】○あびきすと　「あびき」は「網引き」の意で、魚をとるために網を引くこと。○かこ　「楫子」の意。船を漕ぐ者。水夫。船乗り。○とゝのへる　「ととのへ」は、ここは四段活用。他動詞。揃える、指揮し率いる意。「る」は、存続の助動詞「り」の連体形。
【所載】万葉集・二三九（旧二三八）大宮之　内二手所聞　網引為跡　網子調流　海人之呼声　オホミヤノウチマデキコユアビキストアゴトトノフルアマノヨビコエ　おほみやのうちまできこゆあびきすとあごととのふるあ

まのよびこゑ／夫木抄・一五九二〇
【参考】作者の「ながのいきまろ」は、万葉集では「長忌寸意吉麿（ながのいみきおきまろ）」とする。伝未詳。

一七七五　しほがまのうらこぎつらむ舟のをとはきしがごとくにきくはかなしな

【異同】きくはかなしな―聞は悲しき（大）
【現代語訳】塩竈の浦を漕いでいるであろう舟の音は、かねて聞いていたとおりに聞くのは切なく、心にしみることです。
【語句】○しほがまのうら　陸奥の歌枕。現在の宮城県塩竈市。「みちのくはいづくはあれどしほがまの浦こぐ舟のつなでかなしも」（古今集・一〇八八）。○舟のをとは　舟を漕ぐ音は。「をと（おと）」に、噂、評判の意もある。○きしがごとくに　古今六帖の重出歌や他文献によって、「きゝしがごとく」として解した。
【所載】古今六帖・第三帖「しほがま」一八〇二／伊勢集Ⅰ・二一〇／伊勢集Ⅱ・二一四／伊勢集Ⅲ・二一三／袖中抄・三三六
【参考】作者名については無表記だが、伊勢集によれば、陸奥介の妻として下向する人との別れに際して詠んだ伊勢の歌とされている。歌の中に「あま」の語はないが、「しほがまのうらこぎつらむ舟のをとは」と詠まれているので、古今六帖では「あま」題の下に収められているのであろう。

〔以上五首担当　久保木〕

一七七六　なにはがたをふる玉もをかりそめのあまとぞわれはなりぬべらなる

【異同】ナシ
【現代語訳】難波潟に生えている玉藻を刈り初める、仮初めの海人と私はなってしまいそうだ。
【語句】○なにはがた　難波潟。大阪付近の海の古称で、摂津国の歌枕。○をふる玉もを　生（お）ふる玉藻を。生えている玉藻を。「玉藻」の「玉」は美称の接頭語。○かりそめの　「かりそめ」は、玉藻を「刈り初め」の意に「仮初めの海人」の「仮初め」を掛けた。初・二句は第三句を導く序。「朝露のおくての山田かりそめに憂き世の中を思ひぬるかな」（古今集・八四二／古今六帖・九七二）。○あま　海人。漁師。○なりぬべらなる　なってしまいそうだ。「べらなる」は、「べらなり」の連体形で強意の係助詞「ぞ」の結び。「べらなり」につい

ては一六六〇番歌語句欄参照。
【所載】古今六帖・第三帖「うら」一八八〇／古今集・雑上・九一六／新撰和歌・二七七／貫之集Ⅰ・七七五
【参考】古今六帖に作者名はないが、所載欄の文献によると、貫之が難波に行った時に詠んだ歌。

一七七七　なか〳〵に君にこひずはひこのうらのあまならましをたまもかりつゝ

【異同】ナシ
【現代語訳】なまじっかあなたに恋していなければ、ひこの浦の海人となっていたでしょうに。玉藻を刈りながら。
【語句】○ひこのうら　未詳。古今六帖の本文で解釈すれば、「肥後の国の浦」もしくは「備後の国の浦」の意か。所載欄の万葉集二七五二番歌では「ひらのうら（枚浦）」となっており、近江の国の比良の浦（比良山東麓の琵琶湖西岸一帯）とされる。
【所載】万葉集・二七五二（旧二七四三）中中二　君二不恋者　枚浦乃　白水郎有申尾　玉藻苅管　ナカナカニキミニコヒズハヒラノ（マキノ）ウラノアマナラマシヲタマモカリツツ　なかなかにきみにこひずはひらのうらのあまにあらましをたまもかりつつ、二七五三　或本歌曰　中中尓　君尓不恋波　留鳥浦之　海部尓有益男　珠藻苅苅　ナカナカニキミニコヒズハアミノウラノアマニアラマシヲタマモカルカル　なかなかにきみにこひずはなはのうらのあまならましをたまもかるかる／夫木抄・一一五七七／人麿集Ⅱ・五四四／人麿集Ⅳ・一七七
【参考】万葉集に、「おくれ居て恋ひつつあらずは田子の浦の海人ならましを玉藻刈る刈る」（三二一九〈旧三二〇五〉）という類歌がある。所載欄の万葉集二七五三番歌については、新編国歌大観では旧番号はない。

一七七八　たくなは　たくなはのながきいのちのおしけくはたえでも人をみまほしみなり

【異同】たくなは―たてなは（御）　おしけくは―おしけれは（大）
【現代語訳】栲縄のように長い命が、そんなに長くてもやはり惜しいのは、いつまでも絶えることもなく、あの人に逢っていたいからです。
【語句】◎たくなは　栲縄。海人が海に入る際の命綱などとして用いた丈夫で長い綱。「たくなはの」は、「長き」

「千尋」「繰り返し」に掛かる枕詞。○たえでも　所載欄の万葉集や古今六帖の傍記によると「たえずて」とあることを勘案し、「絶えでも」、即ち、「絶えないで」の意を「も」で強めたものと解釈した。○みまほしみなり　見まほしみなり。逢っていたいからです。「ほしみ」の「み」は、原因・理由を表す接尾語。
【所載】万葉集・七〇七(旧七〇四)栲縄之　永命乎　欲苦波　不絶而人乎　欲見社　タクナハノナガキイノチヲホシケクハタエズテヒトヲミマクホリコソ　たくづなのながきいのちをほりしくはたえずてひとをみまくほりこそ

一七七九　いせのうみのあまのたくなはくりしあへば人にゆづらんとわがおもはなくに

【異同】ナシ
【現代語訳】伊勢の海の海人の栲縄をたぐり寄せるようにしてようやく恋しい人に逢ったのだから、(この恋を)他人に譲ろうとは、私は思わないのに。
【語句】○あまのたくなは　海人の栲縄。一七七八番歌語句欄参照。○くりしあへば　繰りしあへば。たぐり寄せるようにしてようやく逢ったのだから。「繰り」は「栲縄」の縁語。「し」は強意。「合へば」に「逢へば」を掛け、「いせのうみのあまのたくなはくりし」までは、「逢へば」を導く序。○人にゆづらんと　この恋を他人に譲ろうとは。
【所載】ナシ

一七八〇　伊勢のうみの千ひろのたくなはくりかへしみてこそやまめ人のこゝろを

【異同】ナシ
【現代語訳】深い伊勢の海に投じた千尋の栲縄を繰り返したぐるように、繰り返し何度も見て確かめて、それでも見込みがないならば諦めよう。あの人の心を。
【語句】○千ひろたくなはくりかへし　千尋栲縄繰り返し。「千尋」は、非常に長いこと、または海などの水深が非常に深いこと。「栲縄」については、一七七八番歌語句欄参照。「繰り返し」は、上からの続きでは、千尋の栲縄を何度も繰り返したぐる意。下へは、繰り返し何度も見る意で続き、初・二句は「くりかへし」を導く序。「夏引きの手引きの糸を繰り返し言繁くとも絶えむと思ふな」(古今集・七〇三)。○みてこそやまめ人の心を

人の心を、見て判断して、その上でやめよう。
【所載】和歌童蒙抄・四四八
【参考】表現・発想の類似した歌に、「あらを田をあら鋤き返しかへしても人の心を見てこそやまめ」（古今集・八一七）、「あらき田をあら鋤き返しかへしても見てこそやまめ人の心を」（古今六帖・第二帖「春のた」一一〇六）がある。

〔以上五首担当　長戸〕

しほ
一七八一　なはのうらにしほやくほのほ夕されば ゆきすぎがてに山にたなびく

【異同】ナシ
【現代語訳】縄の浦で塩を焼くほのおは、夕方になると行き過ぎにくくて、山の方へたなびくよ。
【語句】◎しほ　潮。うしお。海の水。塩分を含有しており、製塩の原料である。日月殊に月の引力との関係において、干満の現象をくり返す。古今六帖当題の下には、潮を焼く煙や潮騒の音、潮の干満などを詠んだ歌を収めるが、その大部分が潮に寄せた比喩歌である。○なはのうら　縄の浦。現兵庫県相生市那波の海岸、相生湾の最深部という。「なはの浦ゆそがひに見ゆる沖つ島漕ぎみる舟は釣しすらしも」（万葉集・三六〇〈旧三五七〉）。
【所載】古今六帖・第三帖「うみ」一七六一番既出、「しほ」一七九四
【参考】古今六帖には三重出する歌であるが、一七六一番歌の初句は「すまのうらに」、一七九四番歌の初句は「すまもうらに」となっている。

やまぐちの女わう
一七八二　あしまよりみちくるしほのいやましにおもひはませどあはぬ君かな

【異同】ナシ
【現代語訳】葦間から満ちてくる潮のように、いよいよ思いは募るのに、逢うことのないあなたですね。
【語句】○あしま　葦間。葦の茂みのあいだ。○いやましに　いよいよますます。初・二句は「いやましに」

を導く序詞。〇おもひはませど　思ひは増せど。恋しく思う気持は募るのに。
【所載】新古今集・恋五・一三七八／万葉集・六二〇（旧六一七）従蘆辺　満来塩乃　弥益荷　念歟君之　忘金鶴　アシベヨリミチクルシホノイヤマシニオモフカキミガワスレカネツル　あしべよりみちくるしほのいやましにおもへかきみがわすれかねつる／新撰万葉集・四九二
【参考】作者名「やまぐちの女わう」は、所載欄の万葉集に一致する。山口女王は出自・伝不詳。万葉集に大伴家持へ贈った恋歌五首があり、これはその中の一首である。なお、伊勢物語三三段には、「蘆辺より満ちくる潮のいやましに君に心を思ひ増すかな」（六六）という類似した歌がある。

一七八三　いせのあまのしほやくけぶり風をいたみおもはぬかたにたなびきにけり

【異同】いせのあまの―すまのあまの（大）
【現代語訳】古今六帖・第一帖「けぶり」七八九番既出。

一七八四　うしまどのなみのしほさゐしまつゞき恋しき君にあはずもあらん

【異同】ナシ
【現代語訳】「歌意が通りにくいが、本文のままで訳した。」牛窓の波の潮騒が島伝いにつづいてゆく、そのように、ずっと恋しく思ってきたあなたに、私は逢わないでいるのだろう。
【語句】〇うしまど　現岡山県瀬戸内市の南部、旧邑久郡牛窓町。牛窓津は、古くから西海航路の港で、中世・近世を通して瀬戸内海交通の要衝であった。〇しほさゐ　潮騒。潮が満ちてくるとき海が波立ってざわめき鳴ること。〇しまつづき　島続き。潮騒が島伝いにつづいてゆくさまか。傍記に拠れば「しまひゞき」で、潮騒の音が島にひびいての意となる。上三句は、ずっと思いを寄せつづけていることの比喩として言われたもので、「恋しき」に掛かる序詞。〇あはずもあらん　逢はずもあらん。逢わないでいるのだろう。このままでは意が通じにくいが、本文のままに訳した。傍記に拠り「あはであるかも」とした方が、歌意はよく通る。
【所載】万葉集・二七四〇（旧二七三一）牛窓之　波乃塩左猪　嶋響　所依之君尓　不相鴨将有　ウシマドノナミノシホサヰシマヒビキヨラレシ（コヒシキ）キミニアハズカモアラム　うしまどのなみのしほさゐしまとよみよそりしきみはあはずかもあらむ／夫木抄・一〇五〇六

一七八五　すまのうらに玉もかりほすあまごろもそでみつしほのひる時やなき

【異同】ナシ
【現代語訳】須磨の浦で藻を刈り干す漁師の着る海人衣。その袖に満ちあふれる潮の乾く時はないのだろうか。（涙で濡れわたったわたしの袖の、乾く時はないのだろうか。）
【語句】○すまのうら　須磨の浦。摂津国の歌枕。現兵庫県神戸市須磨区の海岸。○あまごろも　海人衣。漁師の着る衣。○そでみつしほ　袖満つ潮。海で働く漁師の衣の袖が潮で濡れ通っているさまの形容。ここでは袖を濡らす涙の比喩。○ひる時やなき　乾く時はないのだろうか。乾く時があってほしい、という願望がこめられている。
【所載】続古今集・恋一・一〇四八／夫木抄・一五五七一

〔以上五首担当　青木・山下〕

一七八六　なにはがたしほひしほみちつねなればおもひおもはず見えぬるものを

【異同】ナシ
【現代語訳】難波潟では潮が引いたり満ちたりするのが常のことなので、（人の思いが潮の干満のように見えるならば）あの人が私を思っているのかいないのか見えたのになあ。
【語句】○なにはがた　難波潟。大阪市淀川河口付近の海の古称。○しほひしほみち　潮干（ひ）潮満ち。潮水が引いたり満ちたりすること。「荒津の海しほひしほみち時はあれどいづれの時かあが恋ひざらむ」（万葉集・三九一三〈旧三八九一〉）。○おもひおもはず　思ひ思はず。相手が自分を思っているか思っていないのか。これを相手に問うことや知ること、見えるようにすることは難しいが、聞きたい、知りたいものと詠まれる。「かずかずに思ひ思はず問ひがたみ身をしる雨はふりぞまされる」（伊勢物語・一八五）。○見えぬるものを　見えたのになあ。「ものを」は詠嘆の意を表す終助詞。
【所載】ナシ

一七八七　けぶりにもなれやしぬらんとしふればしほやくあまにとひもしてまし

【異同】底本、「とひもしてまし」ノ「して」ハ、別ノ二文字ノ上カラ書ク。
【現代語訳】煙にも慣れてしまったのであろうか、年月が経ったので。塩を焼く海人に聞いてみたいものです。
【語句】○けぶり　煙。当該歌では、塩を焼く煙。○とひもしてしか　聞いてみたいものです。「しか」は願望を表す終助詞。
【所載】ナシ

一七八八　あらしほのうつし心もわれはなしよるひる人を恋しわたれば

【異同】よるひる人を―よるひる人に（大）
【現代語訳】［初句「あらしほの」は、「あらしをの」で解した。］たくましい男の理性さえ私にはありません。夜昼ずっとあの人を恋い続けているので。
【語句】○あらしほの　「あらしほ（荒潮）」は激しい潮流。所載欄の文献では、たくましい勇敢な男を意味する「ますらを（勇士）」。「しほ（潮）」題から外れ、不審だが、ここは「あらしを（荒し男）」か。○うつし心　現し心。気持ちが確かで、理性ある正気の心。「うつせみのうつし心も我は無し妹を相見ずて年の経ぬれば」（万葉集・二九七二〈旧二九六〇〉）。○よるひる人を　夜も昼もずっとあの人を。
【所載】古今六帖・第四帖「こひ」一九九八／風雅集・恋五・一三三九／万葉集・二三八〇（旧二三七六）健男
現心　吾無　夜昼不云　恋渡　マスラオノウツシゴコロモワレハナショルヒルイハズコヒシワタレバ　ますらをのうつしごころもわれはなしよるひるといはずこひしわたれば／夫木抄・一六七二六／人麿集Ⅰ・一八八／人麿集Ⅳ・一一九／綺語抄・三三九

一七八九　なにはがたあさな〳〵にみつしほのみちにこそみてかはくよもなし（そイ　きイ）

【異同】ナシ
【現代語訳】難波潟に毎朝毎朝満ちる潮が満ちに満ちてしまう。乾く間もありません。私の袖も、涙があふれにあふれて乾く間もありません。
【語句】○あさな〳〵　毎朝。○みちにこそみて　満ちに満ちてしまう。「みて」は、係助詞「こそ」（強意）の

係結びによる已然形。「満つ」という動作の繰り返し。○かはくよもなし　かわくよもなし。乾く間も無い。袖が涙で常に濡れている意を含むか。「君まさぬ宿に住むらん人よりもよその袂は乾くよもなし」(栄花物語・七五)。
【所載】ナシ

一七九〇　あゆちがたしほひにけらしちかのうらにあさこぐ舟のおきによるみゆ

【異同】ナシ
【現代語訳】〔第三句は「ちたのうら」で解した。〕年魚市潟では潮が引いているらしい。ちたの浦に朝漕いでいた舟が沖に寄るのが見えます。
【語釈】○あゆちがた　年魚市潟。愛知県名古屋市南区周辺にあった海岸。現在は埋め立て地となっている。「桜田へ鶴鳴き渡るあゆちがた潮干にけらし鶴鳴き渡る」(万葉集・二七三〈旧二七一〉)。○ちかのうら　所載欄の文献の「ちたのうら」に従う。「ちたのうら」は愛知県知多半島北西部にあった入海。ここは初句の「あゆちがた」とも近い。なお、「ちか」と付く地には、宮城県塩竈市の「みちのくのちかのうら」、長崎県五島列島の「ちかのしま」などがあるが、いずれもこの歌との関係は認めがたい。○あさこぐ舟の　朝漕ぐ舟の。
【所載】万葉集・一一六七(旧一一六三)年魚市方　塩干家良思　知多乃浦尓　朝榜舟毛　奥尓依所見　アユチガタシホヒニケラシチタノウラニアサコグフネモオキニヨルミユ　あゆちがたしほひにけらしちたのうらにあさこぐふねもおきによるみゆ／夫木抄・一一九四三／綺語抄・五六三／和歌初学抄・二四八
〔以上五首担当　三浦・原山〕

一七九一　わたつうみのおきつしほあひにうかぶあはのたえぬものからよるかたもなし

【異同】ナシ
【現代語訳】大海原の沖の潮が合流するところに浮かぶ泡は絶えることはないが寄る辺もない。わたしも命が絶えることはないが、身を寄せるところもない。
【語句】○しほあひ　潮合ひ。潮が合流する所。上三句は「たえ」を導く序。○あは　泡。「泡」に寄せて寄る辺ない我が身を慨嘆する。○たえぬものから　絶えないものの。泡が「絶えぬ」ことに、命が「絶えぬ」ことを掛ける。所載欄の古今集では「消えぬものから」とあるように、「泡」は「消ゆ」と結びつくのが常套であり、

「絶ゆ」と結びつくのは珍しい。「ものから」は逆接の接続助詞。
【所載】古今集・雑上・九一〇／新撰和歌・二五一

一七九二　をしてるやなにはのうらにやくしほのからくもわれは老にけるかな

【異同】ナシ
【現代語訳】難波の浦で焼く塩は辛い、つらいことに私は年をとってしまったよ。
【語句】○をしてるや　おし照るや。「難波」にかかる枕詞。難波の海に日の光が一面に照ることから、難波を賛美する意。「おし照るや難波の津ゆり舟装ひ我は漕ぎぬと妹に告ぎこそ」（万葉集・四三八九〈旧四三六五〉）。○なには　難波。摂津国の歌枕。現在の大阪市およびその一帯の淀川河口付近を指す古称。仁徳天皇、孝徳天皇など古代の天皇の皇居が定められた地。「難波江」「難波潟」「難波津」という形で海浜の景を詠じた歌が多く、「葦」「澪標」と取り合わされる。○やくしほの　焼く塩の。「焼く塩」とは、海水をかけた海藻を焼く製塩法によることば。一七六一番歌、一七八一番歌参照。上三句は「からくも」を導く序。○からくも　辛くも。つらいことに。「塩辛い」に、「つらい」の意の「からし」を掛ける。「も」は意味を強め感情をこめて表現する意の係助詞。
【所載】古今集・雑上・八九四／暮春尚歯会和歌・一九／俊頼髄脳・七五／袖中抄・一四八／井蛙抄・四一〇／宝物集・一九／古今著聞集・一六八
【参考】所載欄の古今集の左注には、初句、二句が「おほとものみつのはまべに」という異文があるとする。

一七九三　わくらばにとふ人あらばすまのうらにもしほたれつゝわぶとこたへよ　ゆきひら

【異同】ナシ
【現代語訳】もしたまさかにでも私の消息を尋ねる人があったなら、須磨の浦で、藻塩にかけた潮が垂れるように、涙を流しつつわびしく過ごしていると答えて下さい。
【語句】○わくらばに　邂逅に。たまたま。まれに。「人となる　ことは難きを　わくらばに　なれる我が身は　死にも生きも……」（万葉集・一七八九〈旧一七八五〉）。○すまのうら　摂津国の歌枕。現在の神戸市須磨

区の海岸付近。○もしほたれつゝ　涙を流しながら。製塩のために海水をかけた藻から潮水が滴る「藻塩垂れ」に、涙を流す意の「塩垂れ」を掛ける。「藻塩」は海藻に潮水を注ぎかけ、焼いて水に溶かし、上澄みを煮詰める製塩法で作られた塩。須磨の一帯で行われたことからそれを詠み込む。○わぶ　侘ぶ。心細い思いでわびしく過ごす。

【所載】古今集・雑下・九六二／新撰和歌・三一五／業平集Ⅱ・八〇／業平集Ⅲ・五五／信明集Ⅱ・四三／時代不同歌合・二七／定家十体・一七／奥儀抄・五六九／万葉集時代難事・六五／和歌色葉・四五五／近代秀歌・六四／詠歌大概・七四／桐火桶・一四〇

【参考】作者名「ゆきひら」は、所載欄の古今集、定家十体、万葉集時代難事、桐火桶の作者記載に一致する。古今集の詞書には、「田村の御時に、事にあたりて津の国の須磨といふところにこもり侍りけるに、宮のうちに侍りける人につかはしける」とあり、文徳天皇の時代、事件に関わって、須磨の浦に籠居している時に宮中に仕えている人に贈った歌。

一七九四　すまもうらにしほやくほのを夕されば　ゆきすぎがてに山にたなびく

【異同】すまもうらに―すまのうらに（桂・大）

【現代語訳】須磨の浦で塩を焼く炎は、夕方になるとゆき過ぎることができなくて、山に向かってたなびいているよ。

【語句】○すまもうらに　桂宮本、大久保本により「すまのうらに」として解した。須磨の浦に。

【所載】古今六帖・第三帖「うみ」一七六一番、「しほ」一七八一番既出

【参考】古今六帖・一七六一番歌の初句は「すまのうらに」、一七八一番歌の初句は「なはのうらに」となっている。なお、第一帖「けぶり」七九七番にも「須磨の浦のしほやく煙風をいたみ立ちはのぼらで山にたなびく」という類歌がみられる。

一七九五　わたつうみのおきのしほせにながれてもひとのよるせはありてふものを

【異同】ナシ

【現代語訳】大海原の沖の潮流に流されたとしても、人が寄るべき瀬はあるものだというのに。

【語句】○しほせ　塩水の流れ。潮流。○ひとのよるせは　人が寄るべき瀬は。「よるせ」は寄るべき所、寄るべき人。
【所載】古今六帖・第三帖「うみ」一七六四番既出
【参考】古今六帖・一七六四番の第二句は「おきのひろせに」、第四句は「人のよるせも」となっている。

〔以上五首担当　中野〕

しほがま

一七九六　塩がまのまつにうきたるうきしまのうきておもひのある世なりけり　山ぐちの女わう

【異同】山くちの女わう―山くちの女らう（桂）　まつにうきたる―まへにうきたる（御・桂・大）
【現代語訳】［第二句は、諸本によって「まへにうきたる」と解した。］塩竈の浦の前に浮いている浮島のように、（あなたとは）心ここにあらずという物思いをする仲だったのですね。
【語句】◎しほがま　塩竈。海水を入れ煮詰めて製塩するための竈。また、古くから製塩が行われていたことに由来する名の陸奥国の歌枕。現在の塩竈湾一帯をいう。その景観は、源融が河原院に塩竈の浦を模した池水を造ったことで有名。○まつにうきたる　諸本「まへにうきたる」とあるのによって「前に浮きたる」と解した。前に浮いている。○うきしまの　浮島は陸奥国の歌枕。枕草子「島は」の段にも見え、屏風絵の画題として好まれた。安法法師集や恵慶集によれば、河原院にも浮島が造られていた。現在、多賀城市の浮島神社周辺に浮島という地名が残るが、塩竈湾に浮島という島は存在せず、所在は確定していない。「の」は比喩を表す格助詞。浮島のように。「程遠く聞きのみ渡る浮島のうきたる程に頼むなるかな」（清慎公集・一八）。上三句は「うきて」を導く序詞。○うきておもひのある世なりけり　心ここにあらずという物思いをする仲だったのですね。「うきて」は、気持ちが落ち着かない、不安定である意。「思ひ」の「ひ」に「火」を掛ける。「火」は「塩竈」の縁語。「世」は、ここでは男女の仲の意。「あさなあさな立つ河霧のそらにのみうきて思ひのある世なりけり」（古今集・五一三）。
【所載】新古今集・恋五・一三七九／袖中抄・三四〇
【参考】作者名「山ぐちの女わう」（山口女王）は、所載欄の新古今集に一致する。山口女王は伝未詳。万葉集に家持に贈った歌が六首見える。ただし当該歌はその中にない。

一七九七　わが思ふ心もしるくみちのくのちかのしほがまちかづきにけり

【異同】ナシ
【現代語訳】私が思ってきた甲斐があって、陸奥の千賀の塩竈――（あなたとの距離が）近づいてきたことだなあ。
【語句】○心もしるく　効果が著しい、甲斐がある、の意。「みがきける心もしるく鏡山くもりなきよにあふがたのしさ」（拾遺集・六〇六）。○みちのくのちかのしほがま　陸奥の千賀の塩竈。「ちかづき」を導く序詞。千賀の塩竈は、千賀の浦のことで、陸奥国の歌枕。現在の宮城県塩竈市、塩竈湾一帯をいう。
【所載】続後撰集・恋三・八一二

一七九八　あま舟のかよひこしよりしほがまのほのをいたまずおもひつきにき（いせ）（なりイ）

【異同】ナシ
【現代語訳】（浦を通う）海人舟のように、あなたが通ってきたときから、塩竈の炎が弱ることなく火が点くように、激しく心惹かれてしまった。
【語句】○あま舟　海人舟。漁師の乗る舟。製塩に従事する者も海人という。「須磨の海人の塩焼く煙風をいたみおもはぬ方にたなびきにけり」（古今集・七〇八）。○ほのをいたまず　ほのほいたまず。他に用例のない語であるが、諸本異同なく、所載欄の伊勢集Ⅰ・Ⅲも「いたます」とある。「炎傷まず」の意か。なお、伊勢集Ⅱは「いてます」、袖中抄は「いでそふ」。○おもひつきにき　「思ひつく」は、心が身に付く、つまり心惹かれること。「人づてにいふ言の葉の中よりぞ思ひつくばの山は見えける」（後撰集・六八六）。「思ひ」の「ひ」に「火」を、「つき」に「点（つ）き」を掛ける。「海人」「炎」「火」「点く」は「塩竈」の縁語。
【所載】伊勢集Ⅰ・三八五／伊勢集Ⅱ・三八九／伊勢集Ⅲ・四三三／袖中抄・三三七
【参考】作者名「いせ」とあるが、伊勢集巻末の作者不明歌群のうちの一首。

一七九九　みちのくのちかのしほがまちかながらはるけくのみもおもほゆるかな（かにイ）

【異同】ナシ
【現代語訳】陸奥の千賀の塩竈――近くにいながら、（あなたとの仲は）遥か遠くとばかり思われることだ。
【語句】○みちのくのちかのしほがま　一七九七番歌参照。「ちかながら」を導く序詞。○ちかながら　間近にありながら。近いにもかかわらず。「郭公きゐるかきねはちかながらまちどほにのみ声のきこえぬ」（後撰集・一四九）。○はるけくのみも　遥か遠くとばかり。「遥けし」は、空間的・時間的・心理的に遠く隔たっていること。「逢ふことは唐撫子のはるけくて思ひわづらふ常夏の花」（馬内侍集・七〇）。当該歌では、物理的には近距離であっても、何らかの事情で逢えない、あるいは音信不通である状態を表したものであろう。
【所載】ナシ
【参考】上三句が同じ歌に「陸奥の知賀の塩竈ちかながらからきは人にあはぬなりけり」（続後撰集・七三八）がある。

一八〇〇　わがせこをみやこへやりてしほがまのまがきのしまをまつはくるしも

【異同】まかきのしまを―笹の嶋の（大）
【現代語訳】私の夫を都へ送り出して、塩竈の籬の島の松――待つのは苦しいことだ。
【語句】○しほがまのまがきのしまを　底本「しまを」とあるが、意が通りにくいので、傍記と大久保本によって「しまの」で解した。「まつ」を導く序詞。籬の島は陸奥国の歌枕。塩竈湾内の島の一つで、海岸線の最も近くにある。安法法師集によれば、源融の河原院には籬の島もあった。「卯の花のさけるかきねは陸奥の籬の島の浪かとぞ見る」（拾遺集・九〇）。○まつはくるしも　待つのは苦しいことだ。「まつ」は「松」と「待つ」の掛詞。「も」は、上代に多く使われた詠嘆を表す終助詞。「郭公いたくな鳴きそ一人ゐて寝（い）の寝られぬに聞けばくるしも」（拾遺集・一二〇・大伴坂上郎女）。
【所載】古今集・東歌・一〇八九

〔以上五首担当　杉本・諸井〕

一八〇一　みちのくのいづこもあれど塩がまのまがきのしまのつなでかなしも

【異同】みちのくの―みちのくは（御・桂・大）　いつこもあれと―いつくはあれと（桂）、いつくもあれと（大）
まかきのしまの―浦漕舟の（大）
【現代語訳】陸奥のどこもそうなのだが、塩竈の籬の島（をゆく舟）の、この引き綱には、しみじみと心打たれることだ。
【語句】○みちのくの　陸奥の。他本および所載欄の文献は全て初句を「みちのくは」とする。○いづこもあれど　どこもそうだが。ここでは「いづこもかなしくあれど」の意。○塩がまの　塩竈の。一七九六番歌参照。○まがきのしまの　籬の島の。「籬の島」は一八〇〇番歌参照。所載欄の文献は全て傍記と同じ「うらこぐ舟の」。こちらの方がわかりやすい。○つなで　綱手。船につないで引く綱。○かなしも　しみじみと心打たれることだ。「かなし」は、対象への心情が胸に迫って激しく心が揺さぶられる様子を表す。「も」は、上代に多く使われた詠嘆を表す終助詞。「さざなみの志賀の手児らがまかりにし河瀬の道を見ればかなしも」（拾遺集・一三一五・人まろ）。
【所載】古今集・東歌・一〇八八／伊勢集Ⅱ・三九四／奥儀抄・五九六／袖中抄・三三五

一八〇二　しほがまのうらこぎつらん舟のをとはきゝしがごとくきくはかなしな

【異同】ナシ
【現代語訳】古今六帖・第三帖「あま」一七七五番既出。
【語句】○きゝしがごとく　前から聞いていたように。古今集にも収載されている、前の一八〇一番歌を踏まえた表現。

一八〇三　おほぶねのおもひたえにしきみゆけば我はこひしなたゞにあふまで

【異同】たゝにあふまて―たゝにあふまてに（御）
【現代語訳】［第二句は、所載欄の万葉集「おもひたのみし」によって解した。］頼みに思ってきたあなたが行ってしまうと、私は恋しく思うことだよ。じかにお会いするまで。

【語句】◎ふね　水上を行く乗り物。陸路が整備されていない時代にあっては、人の移動や物流の上で大きな役割を果していた。和歌では、旅愁を託す、あるいは無常・定めなき身の比喩、として詠まれる。○おほぶねの　大船は、大勢の水夫（かこ）が櫂を押して進める頑丈な船。そこから「大船の」は、さまざまな言葉を導く枕詞となっている。当該歌では、安全性の高い船であることから「思ひたのむ」を導く枕詞。「大舟の思ひたのめる君ゆゑに尽くす心は惜しけくもなし」（万葉集・三二六五〈旧三二五一〉）。○おもひたえにし　「思ひ絶えにし」では歌の意にそぐわない。傍記の「おもふたのみし」も不審。所載欄の万葉集「おもひたのみし」によって解した。頼みに思ってきた。○こひしな　恋しな。恋しく思うことだよ。「な」は詠嘆の終助詞。○たゞにあふまで　直に逢ふまで。「直に」は、「じかに」の意。じかに会うまで。「吾妹子が結ひてし紐を解かめやも絶えば絶ゆとも直に逢ふまでに」（万葉集・一七九三〈旧一七八九〉）。

【所載】万葉集・五五三（旧五五〇）大船之　念憑師　君之去者　吾者将恋名　直相左右二　オホブネノオモヒタノミシキミガイナバワレハコヒムナタダニアフマデニ　おほぶねのおもひたのみしきみがいなばあれはこひむなただにあふまでに

一八〇四　いでわれを人なとがめそおほぶねのゆたのたゆたに物思ふ比ぞ

【異同】物思ふ比そ―もの思ころを（御・桂・大）

【現代語訳】いやもう、私のことを咎めないでおくれ。心が落ち着いたり揺れ動いたり、思い煩う今日この頃なのだ。

【語句】○いで　その事態を否定する気持ちを表す語。いや、いやもう。「いで人は事のみぞよき月草のうつし心は色ことにして」（古今集・七一一）。○おほぶねの　「おほぶね」は一八〇三番歌参照。当該歌では、大船が波に揺れることから「ゆたに」にかかる枕詞。「海原の路に乗りてや吾が恋ひをらむ大舟のゆたにあるらむ人の子ゆゑに」（万葉集・二三七一〈旧二三六七〉）。○ゆたのたゆたに　「ゆた」はゆったりと安定したさま、「たゆた」は動揺するさま。「吾が心ゆたにたゆたに浮きぬなは辺にも沖にも寄りかつましじ」（万葉集・一三五六〈旧一三五二〉）の「ゆたにたゆたに」が変化したもの。当該歌が初例で、不安定で落ち着かない恋心の形容に用いられるようになる。

【所載】古今集・恋一・五〇八

一八〇五　みなぎ恋おきつこじまに風をいたみふねよりかねつこゝろは思へど　人まろある本

【異同】ナシ
【現代語訳】［初句「みなぎ恋」を所載欄の万葉集の新訓「みなぎらふ」で解した。］水しぶきが立っている沖の小島に、向かい風が強いので、舟が寄れないでいる。（寄りたいと）心では思うけれど。
【語句】○みなぎ恋　未詳。御所本は底本に同じ、桂宮本と大久保本は「みなきこひ」。所載欄の万葉集「みなぎらふ」で解した。「ら」と「こ」の誤写の可能性もあるか。「水霧らふ」は、水しぶきが立ち続けること。「ふ」は継続の助動詞。○風をいたみ　風が強いので。「いたみ」は、形容詞「いたし」の語幹に、原因や理由を表す接尾語「み」のついたもの。「風をいたみ沖つ白浪高からし海人の釣り舟浜にかへりぬ」（万葉集・二九七〈旧二九四〉）。○ふねよりかねつ　舟寄りかねつ。「かぬ」は「……することができない」という意の補助動詞。舟が寄ることができない。
【所載】万葉集・一四〇五（旧一四〇一）水霧相　奥津小嶋尓　風乎疾見　船縁金都　心者念杼　ミナキリアヒオキツヲシマニカゼヲイタミフネヨセカネツココロハオモヘド　みなぎらふおきつこしまにかぜをいたみふねよせかねつこころはおもへど
【参考】作者名表記「人まろある本」とあるが、所載欄の万葉集では作者名なく、譬喩歌の「寄船（ふねによする）」のうちの一首。妨害するものがあって、たやすく近寄れない女性への思いを詠んだものであろう。
〔以上五首担当　平野・諸井〕

一八〇六　むまやぢにひきふねわたしたゞのりにいもがこゝろにのりてくるかも

【異同】ナシ
【現代語訳】駅路に設けられた船着き場では、引き船に乗り、両岸に渡した綱をひたすら手繰って進む。まるであの娘が心に乗っているかのように、ひたすらあの娘のことが想われることだ。
【語句】○むまやぢ　駅路。早馬（はゆま）路。中央政府と大宰府・国府などを結ぶ交通路。約三十里（後世四里あるいは五里とも）ごとに駅（うまや）が設けられ、駅馬が飼われていた。ただし当該歌では、駅路に設けられた、河川を渡るための船着き場を指すとみられる。○ひきふねわたし　引き船渡し。「引き船」は、船に引き

綱をつけて引くこと、またその引かれる船。当該歌では両岸の間に張った綱を手繰ってゆくことをいうか。○ただのりに　ひたすら乗って。「ただ＋動詞連用形＋に」は、ひたすらその行為を推し進めるさまを表わす。「……大伴の　御津の浜びに　ただ泊てに　御船は泊てむ……」（万葉集・八九八〈旧八九四〉）。上三句は「のりて」を導く序。○いもがこゝろにのりてくるかも　あの娘が私の心に乗っているかのように、あの娘のことが想われることだ。「心に乗る」は、「ももしきの大宮人はさはにあれど心にのりて思ほゆる妹」（万葉集・六九四〈旧六九一〉）のように、相手が心に乗ったかのように念頭から離れないこと。「が」は連体格ではなく主格として解した。「くる」に綱を繰る意を響かせるか。

【所載】万葉集・二七五九（旧二七四九）駅路尓　引舟渡　直乗尓　妹情尓　乗来鴨　ハイマ（ウマヤ）ヂニヒキフネワタシタダノリニイモガココロニノリニケルカモ　はゆまぢにひきふねわたしただのりにいもはこころにのりにけるかも／夫木抄・九三二二／人麿集Ⅱ・五四六／人麿集Ⅳ・一八一

一八〇七　あま小ぶねほかのはなかとみるまでにとものうらはになみたてるみゆ

【異同】ナシ

【現代語訳】ほかの花が一面に咲いたかと思われるほどに、鞆の浦のほとりに白く波が立っているのが見える。

【語句】○あま小ぶね　海人の乗る船。漁船。ここでは船の「帆」の意から「ほか」の「ほ」にかかる枕詞。○とものうらは　鞆の浦のほとり。「うらは」は「うらわ（浦廻）」。「浦廻（うらみ）」の「廻（み）」の字を万葉集の旧訓が「わ」と誤読した結果生じた歌語。浦辺、浦のほとり。鞆の浦は備後国の歌枕。現在の広島県福山市鞆町の海岸。瀬戸内海の要港、景勝地として知られる。天平二（七三〇）年、大宰府から上京する途中、筑紫で失った妻を偲んで詠んだ大伴旅人の歌「我妹子が見し鞆の浦のむろの木は常世にあれど見し人ぞなき」（万葉集・四四九〈旧四四六〉）が有名。

【所載】万葉集・一一八六（旧一一八二）海人小船　帆毳張流登　見左右荷　鞆之浦廻二　浪立有所見　アマヲブネホカモハレルトミルマデニトモノウラワニナミタタルミユ　あまをぶねほかもはれるとみるまでにとものうらみになみたてりみゆ／夫木抄・一一四二〇

一八〇八　なには津にけふこそみつのうらごとにこれやこのよをうみわたるふね　なりひら

【異同】なには津に―難波津を（大）
【現代語訳】難波津に来て、今日まさに見た。御津の浦ごとに見える船、これこそが、この世の中をいとわしく思って過ごす、海を渡る船なのだ。
【語句】○なには津に　難波津は摂津国の歌枕。現在の大阪市中央区三津寺町付近に比定される。遣唐使の派遣や、外国からの使者の到来など、飛鳥時代から奈良時代にかけて最も重要視された港。所載欄の文献では全て「難波津を」であり、そちらの方が理解しやすい。○けふこそみつのうらごとに　「今日こそ見つ（れ）」に「御津の浦」を掛ける。「御津」は、難波津の官船の船着き場としての尊称。○うみわたる　「海渡る」に、いとわしいと思い続ける意の「倦みわたる」を掛ける。
【所載】後撰集・雑三・一二四四／業平集Ⅰ・七九／業平集Ⅱ・三一／和歌初学抄・二六四／井蛙抄・四一三／伊勢物語・一二三
【参考】作者名「なりひら」は、所載欄の文献に一致する。

たかふぢのわうじ

一八〇九　あしゝ（ある本ほあしとて）　とてこぎゆくふねはたか嶋のふし（あイ）をのみち（あさイ）につきにけるかな

【異同】あしゝとて（ある本ほあしとて）―あしくとて（としてイ）（桂）　たか嶋の―高砂の（大）
【現代語訳】「初句と第四句に不明の語があるため完全な訳が示せない。」「あしゝ」と、漕ぎ行く船は、高島の「ふしをのみち」に着いたことだよ。
【語句】○あしゝとて　語義不明。○たか嶋　高島は近江国の歌枕。現在の滋賀県高島郡。琵琶湖西岸の古くからの港で、湖上航路の拠点であった。○ふしをのみち　語義不明。
【所載】ナシ
【参考】夫木抄・一三四四四番には、古今六帖の第三帖の歌として「あしとみてこぎ行く舟はたましまのあしまの道につきにけんかも」を載せるが、当該歌とは語句にやや違いがある。また、万葉集・一七二二（旧一七一八）番に「あどもひて漕ぎ往にし船は高島の足速（あど）の港に泊てにけむかも」という高市連黒人の歌があり、こ

の歌は、夫木抄・一一八八三番にも「ありしがた漕ぎ行く船は高島の足速の港に泊めにけんかも」の形で載る。なお、古今六帖における次の一八一〇番歌は、万葉集でも右に挙げた歌の次の一七二三（旧一七一九）歌にあたる。作者名「たかふぢのわうじ」は不明。

一八一〇　てる月をくもなかくしそしまかげに我ふねよせんとまりしらずも

【異同】とまりしらすも―とまりしらす（桂）
【現代語訳】照る月を、雲よ隠さないでおくれ。島陰にわが船を寄せられるとしたら、その港もわからないことだ。
【語句】○しまかげ　島陰。島の、入り江になっていて風や波を避けて船を泊めるところ。○我ふねよせん　わが船寄せん。わが船を寄せるとしたら、その。「ん」は仮定の助動詞「む」の連体形。○しらずも　わからないことだ。「も」は、上代に多く使われた詠嘆を表す終助詞。「もののふの八十宇治川の網代木にいさよふ波の行方知らずも」（万葉集・二六六〈旧二六四〉）。
【所載】続千載集・羈旅・七七七／万葉集・一七二三（旧一七一九）照月遠　雲莫隠　嶋陰尓　吾船将極　留不知毛　テルツキヲクモナカクシソシマカゲニワガフネハテムトマリシラズモ　てるつきをくもなかくしそしまかげにわがふねはてむとまりしらずも／家持集Ⅰ・二五五／家持集Ⅱ・一六九

〔以上五首担当　斎藤・諸井〕

一八一一　わたつうみのいづれの神をいはゝばかゆくさむくさもふねのはやけん　ひとまろ

【異同】いはゝはか―いはしはる（大）
【現代語訳】大海原を支配する神のどの神様にお祈りすれば、行きも帰りも船が早く進むだろうか［第四句は所載欄の万葉集により「ゆくさもくさも」で解した］。
【語句】○わたつうみ　海。「わたつみ」には海神の意と海の意があるが、「わたつうみ」は海。○いづれの神を　どの神を。住吉、宗像など多くの海の神があり、その中のどの神を。○いはゝばか　祈るなら。「か」は下にかかる疑問。「いはふ」は「斎ふ」。幸福、安全が得られるように身をつつしむ。つつしみ祈る。所載欄の万

葉集には「入唐使に贈る歌一首」とあり、船旅の無事を祈った歌と考えられる。○ゆくさむくさも　未詳。「む」は「も」の誤写とみて、所載欄の万葉集により「ゆくさもくさも（行くさも来さも）」として解す。行く時も帰る時も。「くさ」は、カ変動詞「来」の終止形を連体形に代用させた複合名詞で、「さ」は時・折の意。「青海原風波靡き行くさ来さつつむことなく舟は早けむ」（万葉集・四五三八〈旧四五一四〉）。○はやけん　早いだろう。「はやけ」は「はやし」の未然形。

【所載】万葉集・一七八八（旧一七八四）海若之　何神乎　齊祈者歟　往方毛来方毛　舶之早兼　ワタツミノイヅレノカミヲタムケバカユクサムクサモフネノハヤケム　わたつみのいづれのかみをいのらばかゆくさもくさもふねのはやけむ

【参考】作者名「ひとまろ」とあるが、万葉集では作者未詳。

一八一二　あぢかまのしほつをさしてこぐ舟のなはいひてしをあはざらめやは

【異同】しほつをさして―しほやをさして（大）

【現代語訳】（味鎌の）塩津を指して漕ぐ舟につけられた名、名は告げたというのに、逢わないなどということがありましょうか。

【語句】○あぢかまの　味鎌の。「味鎌」は未詳。東国の地名とする説と「塩津」にかかる枕詞とみる説があり、「味鎌の潟に咲く波平瀬にも紐解くものか愛（かな）しけを置きて」（万葉集・三五七三〈旧三五五一〉）は地名、「朝な朝な浦風さむみ味鎌の塩津をさして千鳥鳴くなり」（夫木抄・六八一三）は枕詞の例。「塩津」は滋賀県の地名であるから、当該歌では枕詞とみる。○しほつ　滋賀県長浜市伊香群西浅井町にある琵琶湖最北端の港。越前敦賀に集められた塩などの物資をここまで運び、大津へと湖上運送したことに由来する地名。○こぐ舟の　漕ぐ舟の。上三句は「名」を起こす序。「舟」にそれぞれ名があったことは、「沖つ鳥鴨といふ船の帰り来ば也良の崎守早く告げこそ」（万葉集・三八八八〈旧三八六六〉）、「官船枯野と名づく」（日本書紀・応神紀三十一年）などによって知られる。○なはいひてしを　私の名前は告げたのに。「を」は逆接の詠嘆。女が名を告げたのは、男の求婚に応じたことを示す。○あはざらめやは　逢わないことがあるだろうか、いや、ない。「やは」は反語。

【所載】万葉集・二七五七（旧二七四七）味鎌之　塩津乎射而　水手船之　名者謂手師乎　不相将有八方　アジカマノシホツヲサシテコグフネノナハイヒテシヲアハザラメヤモ　あぢかまのしほつをさしてこぐふねのなは

のりてしをあはずあらめやも／夫木抄・一二〇二七

一八一三　風をいたみおきつしらなみたかゝらしあまのつり舟こぎかへるみゆ　つのまろ

【異同】ナシ
【現代語訳】風が激しいので、沖の白波が高く立っているらしい、海人の釣舟が漕ぎ帰ってくるのが見える。
【語句】○風をいたみ　風が激しいので。「いたみ」は、「程度が甚だしい、激しい」意の形容詞「いたし」の語幹に接尾語「み」がついたもの。多く「……を……み」の形で、原因・理由を表す。一八二四番歌参照。○たかゝらし　高くあるらしい。○こぎかへるみゆ　漕ぎ帰ってくるのが見える。
【所載】古今六帖・第三帖「つり」一八三四／玉葉集・雑二・二〇九八／万葉集・二九七（旧二九四）風乎疾奥津白波　高有之　海人釣船　濱眷奴　カゼヲイタミオキツシラナミタカカラシアマノツリブネハマニカヘリヌ　かぜをいたみおきつしらなみたかくあらしあまのつりぶねはまにかへりぬ／秋萩集・一一
【参考】作者名「つのまろ」は、万葉集の作者名と一致する。

一八一四　うはきよみおきへさしいづるあま舟のかぢとるまなくおもほゆるかも（にイ）（アマノツリ舟コギカヘリミムイ）

【異同】おもほゆるかも―おもほゆるかな（桂・大）
【現代語訳】海上が澄みきって波静かなので、沖へ漕ぎ出す海人が舟の楫を繰る絶え間がない、やすみなくあなたが思われることです。
【語句】○うはきよみ　「うは」は未詳。傍記の「には」に拠って解す。「庭」は、海上、海面の広がり。海面が波静かなので。「きよみ」は、明るく澄みきって波静かな様子を表す形容詞「きよし」の語幹に接尾語「み」がついたもの。原因・理由を表す。一八二四番歌参照。○さしいづる　目指して漕ぎ出す。○かぢとるまなくおもほゆるかも　「まなく」は楫を操る絶え間がないことと、少しの休みもなくあなたを思っていることを掛ける。「松浦舟騒く堀江の水脈早み楫取る間なく思ほゆるかも」（万葉集・三一八七〈旧三一七三〉）などに見られる類想表現。初句から「かぢとる」までが「まなく」を導く序。
【所載】万葉集・二七五六（旧二七四六）庭浄　奥方榜出　海舟乃　執梶間無　恋為鴨　ニハキヨミオキヘコ

ギイヅルアマブネノカヂトルマナキコヒモスルカモ　にはきよみおきへこぎいづるあまぶねのかぢとるまなきこひもするかも／人麿集Ⅳ・一八〇

一八一五　あふみのうみなみをそろしみかぜはやみとしはやつむるさすとはなしに

【異同】ナシ

【現代語訳】近江の海の波が恐ろしく、風が早いので、何もせぬまま年が早くも積み重なってしまうことだ、棹さすこともなしに。

【語句】○あふみのうみ　近江の海。滋賀県の琵琶湖。○をそろしみ　恐ろしいので。形容詞「おそろし」の語幹に接尾語「み」がついて、原因・理由を表す。一八二四番歌参照。○はやみ　早いので。当該歌語句欄「をそろしみ」の項参照。○としはやつむる　年が早くも積み重なってしまうことだ。「つむる」はマ行下二段「集む」の連体形か。○さすとはなしに　棹さすこともなくて。「さす」は「棹さす」。「棹さす」が結婚への方向に踏み出すことを意味するとみれば、「なみおそろしみ」は、反対する親や世間体をはばかる比喩となり、恋する女性に積極的な行動に出ることができない男が自らの心情を喩えた歌と考えられる。似たような状況で読まれた歌として、「島伝ふ足早の小舟風まもり年はや経なむ逢ふとはなしに」（万葉集・一四〇四〈旧一四〇〇〉）がある。

【所載】万葉集・一三九四（旧一三九〇）淡海之海　浪恐登　風守　年者也将經去　榜者無二　アフミノウミナミオソロシトカゼマモリトシハヤヘケムコグトハナシニ　あふみのうみなみかしこみとかぜまもりとしはやへなむこぐとはなしに

〔以上五首担当　中野〕

一八一六　こゝろからうきたるふねにのりそめてひとひもなみにぬれぬ日ぞなき

【異同】ナシ

【現代語訳】自ら望んで、水に漂う不安定な舟に乗り始めて、一日も波に濡れない日がありません。（つらく不安な日々を送り始めて、涙にくれない日はありません。）

【語句】○こゝろから　自分の心から。自ら望んで。「心から花のしづくにそほちつつうくひずとのみ鳥のなくらむ」（古今集・四二二）。○うきたるふね　水の上を漂う舟。不安な状態を表現する。「かきくもりゆふだつ波の荒ければうきたる舟ぞしづこころなき」（紫式部集・二二）。「うき」は「浮き」に「憂き」を掛け、涙にくれるつらい状況を表す。なお、所載欄の後撰集、小町集では、相手が心変わりした際の歌。
【所載】後撰集・恋三・七七九／新撰朗詠集・六七四／小町集Ⅰ・二／小町集Ⅱ・四七／住吉物語・二六
【参考】作者名「こまち」は、後撰集と一致し、小町集にも見える。新撰朗詠集の注や住吉物語では、遊女が口にする歌として挙げられている。

たかちのくろまろ

一八一七　よもやまをうちこえくればかさぬひのしまこぎかへるたなゝし小舟

【異同】ナシ
【現代語訳】四方の山々を越えてくると、笠縫の島に漕ぎ帰ってくる棚なし小舟が見える。
【語句】○よもやま　四方の山。「神な月ちかづきぬらし思はずになどよも山の色かはりゆく」（好忠集・五一二）。
所載欄の古今集・万葉集・夫木抄・和歌初学抄では「しはつやま（四極山）」。四極山は現在地未詳で、摂津の住吉、もしくは三河とする説が有力。○かさぬひのしま　所在地未詳。もともとは、職業集団の笠縫部が住み着いていた土地と考えられる。万葉集・古今集等の本文「四極山」から考えると、三河であれば渥美湾の島々、摂津国ならば、難波の菅（笠の材）の産地でもあった東生（ひがしなり）郡となる。○たなゝし小舟　棚板を設けない単材の丸木船のこと。「いづこにか船はてすらむ安礼の崎こぎたみゆきし棚無し小舟」（万葉集・五八・高市連黒人）。
【所載】古今集・大歌所御歌・一〇七三／万葉集・二七四（旧二七二）四極山　打越見者　笠縫之　嶋榜隠　棚無小船　シハツヤマウチコエミレバカサヌヒノシマコギカクルタナナシヲブネ　しはつやまうちこえみればかさぬひのしまこぎかくるたななしをぶね／夫木抄・八九〇二／綺語抄・五六一／和歌初学抄・一七〇
【参考】作者名「たかちのくろまろ」とあるが、所載欄の万葉集、夫木抄、綺語抄は「高市黒人」の歌とする。

人まろ

一八一八　ほの〳〵とあかしのうらのあさぎりにしまがくれゆく舟をしぞ思ふ

【異同】底本ハ行間ニ作者名小字補入。
【現代語訳】だんだん夜が明けていく明石の浦の朝霧の中、島の陰に姿を消してゆく舟を見てしみじみとした気持ちになることだ。
【語句】○ほの〴〵と　夜がかすかに明けていく様子。「夜のほのぼのと明くるに、泣く泣くかへりにけり。」（伊勢物語・四段）。○あかしのうら　「あかし」は地名の「明石」に「明かし」を掛ける。明石は、現在の兵庫県神戸市垂水から明石市までの海岸。風光明媚な場所として知られる。○しまがくれゆく　「しまがくれ」は島の陰にかくれて見えなくなっていくこと。「島がくれありそに通ふあしたづのふみおく跡は波もけたなん」（後撰集・一二一二）。○舟をしぞ思ふ　舟を見てしみじみとした気持ちになる。「し」は強意の副助詞。
【所載】古今集・序、羈旅・四〇九／新撰和歌・三四一／金玉集・四七／和漢朗詠集・六四七／人麿集Ⅰ・二一〇／人麿集Ⅱ・二一三／前十五番歌合・二九／秘蔵抄・一／三十人撰・七／三十六人撰・六／深窓秘抄・七五／九品和歌・二／定家十体・一四二／俊頼髄脳・九九／奥儀抄・八八／万葉集時代難事・三三／柿本人麻呂勘文・四四／袖中抄・五二一／古来風体抄・二六九／無名抄・四六／西行上人談抄・三九／詠歌一体・四二／竹園抄・一六／三五記・七九、二二三／井蛙抄・一〇〇／今昔物語集・一二八／古今著聞集・一二三
【参考】作者名「人まろ」とあり、所載欄の文献はほぼ人麻呂の歌としているが、今昔物語集では小野篁の詠としている。和歌九品ではこの歌を「上品上」の特に余情のある歌として評価している。

一八一九　みづのえのうら嶋がこがつりぶねもおなじうらにぞみとせこぐてふ　さみませい

【異同】うら嶋かこか―うらしまのこか（御・桂）　みとせこくてふ―みとせうくてふ（御）
【現代語訳】あの水の上の浦島の子の釣り船も、同じ浦で三年漕いでいたということだ。
【語句】○みづのえ　丹後国与謝郡本庄浜（京都府与謝郡伊根町）。また、竹野郡網野神社付近（京都府京丹後市網野町）とする説もある。水江浦島子の浦島伝説の舞台として有名。「あけてだに何にかは見むみづのえの浦島の子を思ひやりつつ」（後撰集・一一〇四）。○うら嶋がこ　浦島が子。浦島伝説の主人公。丹後国風土記（逸文）、日本書紀雄略天皇二十二年条では丹後国与謝郡筒川の人とし、万葉集一七四四（旧一七四〇）番歌は、「春の日の霞める時に墨吉の岸に出居て……」とあり、住吉の人とする。○みとせ　三年。浦島伝説では、主人公が

故郷を離れていた期間を三年とする。「嶼子、舊俗を遺れて仙都に遊ぶこと、既に三年になりぬ。」（丹後国風土記）、「……家ゆ出でて　三歳の間に　垣もなく……」（万葉集・一七四四〈旧一七四〇〉）。
【所載】夫木抄・一一六四八／和歌童蒙抄・四九三
【参考】作者名「さみませい」は、造筑紫観世音寺別当となり、万葉集に七首の歌を残す沙弥満誓であろう。ただし所載欄の夫木抄は「よみ人知らず」とし、和歌童蒙抄も作者名を記さない。

一八二〇　おほふねにほしほかりつみしみゝにもいもがこゝろにのりにけるかも

【異同】しみゝにも―しみ舟も（大）
【現代語訳】大船に刈って干した穂を積んでいっぱいになる――恋しいあの娘が私の心にいっぱい乗っているかのように、ひたすら想われることだ。
【語句】○ほしほかりつみ　「ほしほ」は干し穂か。他に用例は見えない。傍記は「葦を」。所載欄の万葉集では、「葦荷」。初・二句は、「しみゝに」を導く序。○しみゝに　量の多いこと。一杯に。「見まくほり吾が待ち恋ひし秋萩は枝もしみみに花さきにけり」（万葉集・二一二八〈旧二一二四〉）。○いもがこゝろにのりにけるかも　いとしいあの娘が私の心に乗ったかのように想われることだ。「心に乗る」は、相手が自分の心に乗ったかのように念頭から離れないこと。一八〇六番歌参照。
【所載】万葉集・二七五八（旧二七四八）大舟尓　葦荷刈積　四美見似裳　妹心尓　乗来鴨　オホブネニアシニ（ヲ）カリツミシミミニモイモガココロニノリニケルカモ　おほぶねにあしにかりつみしみにもいもはこころにのりにけるかも／綺語抄・五五九

〔以上五首担当　犬養悦・諸井〕

一八二一　よの中を何にたとへん朝ぼらけこぎゆくふねのあとのしらなみ

【異同】ナシ
【現代語訳】この世の中をいったいなににたとえようか。それはあたかも、夜の明け方に漕ぎ去ってゆく舟のあとの白波が消え去りやすいように、はかなく無常なものである。
【語句】○朝ぼらけ　夜が明けはじめて、物がほのかに見える時分。○あとのしらなみ　舟の航行するあとに

残る航跡の白波。
【所載】拾遺抄・雑下・五七六／拾遺集・哀傷・一三二七／万葉集・三五四（旧三五一）世間乎　何物尓将譬　旦開　榜去師船之　跡無如　ヨノナカヲナニニタトヘムアサビラキ（ボラケ）コギイニシフネノアトナキガゴトよのなかをなににたとへむあさびらきこぎいにしふねのあとなきがごと／金玉集・四九／和漢朗詠集・七九六／深窓秘抄・七六／新撰髄脳・四／奥儀抄・七九／古来風体抄・四四／井蛙抄・一／宝物集・五四九／沙石集・一一

一八二二　しらなみのうちこしこふるときにあはゞそこにしづめるふねもうきなん

【異同】ナシ
【現代語訳】白波が隔てをうち越えるように、ひたすらに恋しく思っているとき、もし（その人に）逢うならば、水底に沈んでいる舟でも、浮きあがることだろう。
【語句】○しらなみの　「うちこし」を導くための措辞か。○うちこしこふる　うち越し恋ふる。「うちこし」は、なにかの障碍があって、それを越えて、ということか。あるいは、時間的に長い月日にわたって、ということか。○あはば　逢はば。その人に逢ったならば。仮定の言い方。○そこにしづめるふねもうきなん　水底に沈んでいる舟でも浮きあがるであろう。あり得ないことの比喩として言ったもののようである。この比喩によって、逢うことが極めて困難であることを暗示し、もし逢うことができたならば、どんなにかうれしいことだろう、と言ったつもりであろうか。たしかな解が示しにくい。
【所載】ナシ

一八二三　いそにだにおきつをみればもかりぶねあまさへつらしかもかけるみゆ

【異同】ナシ
【現代語訳】［意味不明の語があるため、完全な訳が示しにくい。］磯にいてさえも、沖の方を見れば、藻刈舟の漁師までつらいことだ。鴨の飛ぶのが見えるよ。
【語句】○いそにだに　磯に居てさえも、か。所載欄万葉集の歌の「いそにたち」なら「磯に立ち」であって、意味明瞭。○おきつをみれば　沖つを見れば。「沖つ」は「辺つ」の対語。沖の方ということ。「つ」は連体助

詞であって、「沖つ鳥」「沖つ波」などの連語を作るが、この場合のように「沖つ」だけで体言として用いられることはない。所載欄万葉集の歌に徴して考えれば、「つ」は「へ」の誤写による転化ではなかろうか。○もかりぶね　藻刈舟。海藻を刈りとる漁師の舟。○あまさへつらし　海人さえつらいことだ。「あま」は海人、漁師のこと。「つらし」はたえがたいの意か。このままでは一首の中での意味が取りにくい。所載欄万葉集の歌の「あまこぎづらし」ならば「海人漕ぎ出らし」であって意味明瞭であるが、ここは本文のままで逐語的に訳した。○かもかけるみゆ　鴨翔る見ゆ。鴨の飛翔するのが見える。

【所載】万葉集・一二三一（旧一二二七）礒立　奥辺乎見者　海藻苅舟　海人榜出良之　鴨翔所見　イソニタチオキヘヲミレバモカリブネアマコギイヅラシカモカケルミユ　いそにたちおきへをみればめかりぶねあまこぎづらしかもかけるみゆ

一八二四　さしてゆくかた○みなとのなみたかみうら見てかへるあまのつり舟

【異同】ナシ

【現代語訳】棹さしてゆく潟は、水門（みなと）の波が高くて近づけないので、浦を見てむなしく帰る漁師の釣り舟でありますよ。（めざす人のあたりは、門〈かど〉の守りがきびしいものだから、逢えずに、恨みながら帰るわたしです。）

【語句】○さしてゆく　舟に棹さして行くの意の「さして」に、目標を目ざして行くの意の「指して」を掛ける。○かた　「方」に「潟」を掛ける。○みなと　水門。川口や入り江の口。ここは女の家の入口の暗喩。○なみたかみ　波高み。波が高いものだから。ここでは、女の家の守りがきびしいものだから、ということ。「み」は形容詞語幹に付いて、……だから、……なので、の意を表す接尾語。○うら見て　「浦見て」に「恨みて」を掛ける。○あまのつり舟　漁師の釣り舟。ここは作者自身の暗喩。「潟」「水門」「波」「浦」「舟」は「海人」の縁語。

【所載】新古今集・恋五・一四三五

一八二五　しらなみにあきの木の葉のうかべるをあまのながせるふねかとぞ思（みるイ）　ふかやぶ

【異同】ナシ
【現代語訳】白波に秋の木の葉が浮かんでいるのを、漁師が漂わせている舟かと思うことだ。
【語句】○うかべるを　浮かんでいる、それを。○あま　ここでは舟を操っている漁師。○ながせるふね　漂わせている舟。「ながす」は舟を操船せず、あるいは操船できず、水上に漂う状態にさせていること。暗に「よるべなく心細い」という気持がある。
【所載】古今集・秋下・三〇一／新撰万葉集・三四七／興風集Ⅰ・六、六五／興風集Ⅱ・一二／寛平御時后宮歌合・九七／和歌童蒙抄・三九八／奥儀抄・四七八
【参考】古今六帖における作者名は「ふかやぶ」であるが、所載欄の古今集・興風集・和歌童蒙抄では興風の作となっている。

〔以上五首担当　山下〕

一八二六　をひかぜの吹ぬるときはこぐふねのほにいでゝこそうれしかりけれ　つらゆき

【異同】ナシ
【現代語訳】追風が吹いている時は漕ぐ舟の帆がはらんでどんどん進むので、人目につくほどにうれしくなってしまうなあ。
【語句】○をひかぜ　おひかぜ。追ひ風。舟のうしろから吹く風。順風。○ほにいでゝ　はっきり目立って。「ほ」は「秀」（ほ）で、高く突出している部分のこと。その「秀」に舟の縁で「帆」を掛けた。ただし、「ほにいでゝこそうれしかりけれ」は、ここでは表現としてやや不自然。所載欄の土佐日記では「ほ手打ちてこそうれしがりけれ」となっており、その方が状況としては自然である。「追ひ風」「帆」は「舟」の縁語。
【所載】土佐日記・三二
【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

一八二七　しらなみのあとなきかたに行舟もかぜぞたよりのしるべ成ける　かちをん

【異同】ナシ
【現代語訳】航跡を残す白波の跡が、見えなくなる方向へ漕いでゆく舟も、風こそがたよりとなる道案内人なのだなあ。
【語句】○しらなみのあとなきかた　航跡としての白波の跡が見えなくなる方向。○たより　手づる。つて。○しるべ　手引き。案内人。
【所載】古今集・恋一・四七二／奥儀抄・四九三／和歌初学抄・一一〇
【参考】作者名「かちをん」（藤原勝臣）は所載欄の古今集に一致する。古今集では「題しらず」として恋の部に入る歌。わが身をよるべなき舟にたとえて、恋の寓意ある歌のようである。

一八二八　しほせこぐかたかけをぶねながるともいたくなわびそかぢとりゆかん

【異同】ナシ
【現代語訳】潮の流れる瀬を漕いでゆく、片帆を掛けた小舟よ、潮に流されてもひどく思い悩みなさるな、私が楫をとって、うまく舟を進めて行ってあげよう。
【語句】○しほせ　潮瀬。潮の流れる早瀬。「いはおろすかたこそなけれ伊勢の海の潮瀬にかかる海人の釣舟」（千載集・一〇四三）。○かたかけをぶね　横風を受けて進む時に、帆を斜めに片寄らせて張っている小舟。○ながるとも　潮に流されても。○いたくなわびそ　ひどく悩みなさるな。○かぢとりゆかん　楫とり行かん。うまく舟が進むように操ってあげよう。「かぢ」は舟を漕ぐ道具。櫓・櫂など。
【所載】夫木抄・一五八六一

一八二九　ひとみにはあまのつりぶねおきにいでゝつれもなぎさにこぎもよせ南

【異同】ナシ
【現代語訳】漁夫の釣り舟が、沖に出て漁をしているが、人の見る目にはさりげない様子で、私が待ち焦がれている渚に早く漕ぎ寄せてほしいなあ。
【語句】○ひとみ　人の見る目。よその人の見る目。○あまのつりぶね　漁夫が釣りをする舟。○つれもなぎさに　さりげない様子で。「つれもなき」は何事もない、さりげない、の意で、恋人が渚で待っているのを、周囲

の漁夫に悟られないようにということ。「つれもなき」に「なぎさ」を掛ける。○こぎもよせ南　漕ぎもよせなむ。漕ぎ寄せてほしい。「なむ」は、相手に……してほしいと誂え望む終助詞。
【所載】ナシ

一八三〇　みさごゐるすにをる舟のゆふしほをまつらんよりはわれこそまされ

【異同】まつらんよりは―まつらんよりに（桂）　すにをる舟の―すかにをる舟の（大）
【現代語訳】みさごのいる洲に乗りあげている舟は、夕潮がさしてくるのをじっと待っているのだろうが、あなたが来るのを待っている私の気持は、それよりもずっと勝って切ないのです。
【語句】○みさごゐる　みさご居る。「みさご」は鷲鷹目ミサゴ科の鳥。海岸や川・湖沼のほとりなどに棲息。空中から急降下して水中の魚を捕る。「みさごゐる」の句は、万葉集においては慣用的に「荒磯」「磯」「洲」「浜」「沖」などに掛けて用いられている。ここでは「洲」に掛かる。「みさごゐる荒磯に生ふるなのりそのよし名はのらせおやは知るとも」（万葉集・三〇九一〈旧三〇七七〉）。○すにをる舟　洲に居る舟。水上や海上ではなく洲の上に乗り上げている舟。水や潮がさしてくれば、浮かぶことができる。○ゆふしほ　夕方満ちてくる潮。○われこそまされ　私の方がずっとまさっています。
【所載】万葉集・二八四二（旧二八三一）水沙児居　渚座船之　夕塩乎　将待従者　吾社益　ミサゴヰルスニヲルフネノユフシホヲマツランヨリハワレコソマサメ（レ）　みさごゐるすにゐるふねのゆふしほをまつらむよりはわれこそまされ

〔以上五首担当　林〕

一八三一　ゆふさればかぢのをときこゆあま小舟おきつもかりにふなですらしも

【異同】ナシ
【現代語訳】夕方になると梶の音が聞こえることだ。漁師の乗る小舟が沖の藻を刈りに舟出をするらしい。
【語句】○ゆふされば　夕方になると。「されば」の「さる」は、おのずから移動する意。時や季節・色などの変化、移り変わりに用いられることが多い。○かぢ　櫓や櫂など、舟を漕ぐ時に用いる道具。○おきつも　沖の藻。沖に生えている海藻。○ふなですらしも　舟出をするらしい。「らし」は根拠のある推定。この場合は梶の

音が聞こえてくることを根拠にしている。
【所載】ナシ
【参考】類歌に「梶の音ぞほのかにすなるあまをとめ沖つ藻刈りに舟出すらしも」（万葉集・一一五六〈旧一一五二〉「一云、夕されば梶の音すなり」／玉葉集・二〇九九）や、「夕されば梶の音すなりかづきひめ沖つ藻刈りに出づるなるべし」（万代集・三二九一／夫木抄・一〇二四七）などがある。

一八三二　いせのうみのあまのつりなはうちはへてこひしとのみやおもひわたらん

【異同】ナシ
【現代語訳】伊勢の海の漁師が長く釣り縄を延ばしておくように、私もずっと長くあの人を恋しいとばかり思いつづけているのでしょうか。
【語句】◎つり　釣り。糸の先に針をつけて魚を捕ること。当然ながら「あま（漁師）」とともに詠まれることが多い。○いせのうみの　「伊勢の海」は歌枕。今の三重県北中部に面した海。○あまのつりなは　漁師が用いる道具で、魚をとるために釣り糸を長く延ばし、縄状にしたもの。○うちはへて　（空間的、あるいは時間的に）長く延ばして。ずっと。「はへ」は、長く引き延ばす、長く這わせるなどの意を示す下二段動詞「はふ」の連用形。初・二句は「うちはへて」を導くための序詞。
【所載】古今集・恋一・五一〇／袖中抄・六一五

一八三三　いせのうみにつりするあまのきぬよりもわれぞなみだに袖はひちぬる

【異同】きぬよりも―うけよりも（大）
【現代語訳】伊勢の海で釣りをする漁師の衣よりも、私の衣の方がずっとたくさん涙で袖が濡れてしまったことだ。
【語句】○いせのうみに　一八三二番歌参照。○つりするあまのきぬよりも　「きぬ」は衣服、着物。釣りをする漁師の着物は常に濡れていることが前提になっている表現。○袖はひちぬる　袖は濡れてしまった。「ひちぬる」の「ひつ」は、濡れる。「袖ひちてむすびし水のこほれるを春立つけふの風やとくらむ」（古今集・二）。

【所載】ナシ
【参考】初・二句が同じ歌に、「伊勢の海に釣りするあまのうけなれや心ひとつを定めかねつる」（古今集・五〇九）がある。

一八三四　かぜをいたみおきつしらなみたかゝらしあまのつり舟まかぢ（はまにイ）かへりぬ

【異同】ナシ
【現代語訳】風がはげしいので沖の白波が高いらしい。漁師の釣り舟が梶を操って帰って来ることだ。
【語句】○まかぢかへりぬ　「まかぢ」の「ま」は、美称の接頭語とも、片梶に対して左右両舷に揃った梶ともいう。「おほぶねに真梶しじぬきおほきみのみことかしこみいそみするかも」（万葉集・三七一〈旧三六八〉）。なお既出の一八一三番では「こぎかへりみゆ」。
【所載】古今六帖・第三帖「ふね」一八一三番既出

一八三五　いそなるゝあまのつりなはうちはへてくるしくもあるかいもにあはずて（いせのうみのイ）

【異同】ナシ
【現代語訳】いつも磯にいる漁師が釣り縄を長く延ばして繰るように、私も長くずっと苦しいままなのか、彼女に逢わないで。
【語句】○いそなるゝ　磯に馴れている。○うちはへて　一八三二番歌参照。初・二句は「うちはへて」の序詞。○くるしくもあるか　「苦しくも」に「繰る」を掛ける。「うちはへて」「繰る」は、「釣り縄」の縁語。○いもにあはずて　彼女に逢わないで。「いも」は妻や恋人など、男が女を親しんでいう語。「ずて」は打消の助動詞「ず」の終止形に接続助詞「て」のついた形。……ないで。……ずに。
【所載】ナシ

〔以上五首担当　久保木〕

一八三六　しかのあまのつりする小舟うけたえずこゝろにおもひいで（あへずイ）ゝきにけり（いそぎイ）

【異同】ナシ
【現代語訳】志珂の海人の釣する小舟の浮子（うけ）は絶えることなく海に浮いている。わたしもまた、絶えることなくあなたのことを心に思い、こうして出てきてしまったのだ。
【語句】○しかのあま　志珂の海人。志珂は筑前国、現福岡県粕屋郡志賀町。もとは志珂島と呼ばれた島であったが、今は海の中道によって陸つづきになっている。○うけ　浮け。浮子とも。漁具の一種で、釣り糸や網につけて波間に浮かせておく木片。○たえず　絶えず。所載欄の万葉集では、第三句は「不堪」と表記され、「タヘズシテ」「あへなくも」と訓まれているが、古今六帖底本では「たえず」と表記され、校合諸本もみな「たえず」であって異同がない。それゆえここでは、「絶えず」と見て解釈する。ただし、万葉集の本文のように「堪へず」（思いに堪えきれず、の意）であった方が、歌意の整合性は高い。「浮子絶えず」の「絶えず」に「たえずこゝろに」の「たえず」を掛けている。上三句は「こゝろにおもひ」を導き出すための序詞。
【所載】万葉集・一二四九（旧一二四五）四可能白水郎乃　釣船之綱　不堪　情念而　出而来家里　シカノアマノツリブネノツナタヘズシテココロニオモヒテイデテキニケリ　しかのあまのつりぶねのつなあへなくもこころにおもひていでてきにけり／夫木抄・一六六五三

一八三七　おほふねのたゆたふ海にいかりをろしいかにしてかもわがこひやまん

【異同】ナシ
【現代語訳】大きな船が、波の揺れ動く海に碇をおろして揺れを鎮めている。しかし、いったいいかにしたならば、わたしのこの揺れ動く恋の思いはやむのであろうか。
【語句】◎いかり　碇。船を水上あるいは海上の一定のところにとどめておくための重し。船から綱やくさりなどにつないで水底に沈めた。和歌では、「怒り」を掛けたり、「いかに」「いかなる」などの語を導き出すための序詞として用いられることが多い。○たゆたふ　ゆらゆらと揺れ動いて安定しないさま。○いかりをろしいかりおろし。船の揺れを鎮めるために碇をおろして。「いかり」の「いか」の音をくり返して、「いかにしてかも」を導き出す。すなわち、上三句は「いかにしてかも」を導き出すための序詞。初・二句で恋に揺れ動く心のさまを暗示し、「いかりを（お）ろし」でその鎮静化を図ろうとする気持を表した。○いかにしてかも　いったいどうしたら。「か」は疑問、「も」は強意。

【所載】万葉集・二七四七（旧二七三八）大船乃　絶多経海尓　重石下　何如為鴨　吾恋将止　オホブネノタユタフウミニイカリオロシイカニシテカモワガコヒヤマム　おほぶねのたゆたふうみにいかりおろしいかにせばかもあがこひやまむ／人麿集Ⅱ・五四一／人麿集Ⅲ・四三三／和歌童蒙抄・四〇〇
【参考】万葉集では寄物陳思の恋歌。すなわち「碇」に寄せた恋歌である。

一八三八　あふみのうみおきこぐふねのいかりをろししのびしきみがことまつわれを

【異同】ナシ
【現代語訳】近江の海の沖を漕ぐ船が碇をおろして停船しているような、人知れぬひそかな恋をして、そのひそかな恋の相手であるあなたからのことばを待っているわたしなのですよ。
【語句】○あふみのうみ　近江の海。琵琶湖のこと。○いかりをろし　いかりおろし。船の碇をおろして動かずに停船しているさま。ここは、恋のようすを外にあらわさず忍んでいることの暗喩。上三句は「しのびし」を導き出すための序詞。○しのびしきみ　ひそかな恋の相手であるあなた。○ことまつわれを　ことばを待っているわたしであるよ。「こと」は、ことば、音信の意。「を」は感動を表す間投助詞。
【所載】万葉集・二四四四（旧二四四〇）近江海　奥滂船　重下　蔵公之　事待吾序　アフミノウミオキコグフネニイカリオロシカクレテ（シノビテ）キミガコトマツワレゾ　あふみのうみおきこぐふねのいかりおろししのびてきみがことまつわれぞ／人麿集Ⅲ・四三四

一八三九　をひかぜに風はなほりてふきぬともあまのいかりにとゞまりやせん

【異同】あまのいかりに―あまりいかりに（御・桂・大）
【現代語訳】たとえ風は追い風に直って吹いたとしても、海人のおろした碇ゆえ船は動くことができず、そのままそこに留まるのではないでしょうか。（そちらの女の人の怒りゆえ、あなたは出て来られないのではありませんか。）
【語句】○をひかぜ　おひかぜ。追い風。背後から進行方向へ向かって吹く風。順風。○風はなほりて　風は直りて。風が順風となって。「なほり」は、正常でなかった状態がもとの正常さにもどること。○あまのいかり

「海人の碇」に「海女の怒り」を掛けた。参考欄参照。「碇」は「海人」の縁語。
【所載】夫木抄・一五七七一、一六六五二／伊勢集Ⅰ・一九六／伊勢集Ⅱ・二〇〇／伊勢集Ⅲ・一九八
【参考】作者名「いせ」は、所載欄の伊勢集に一致する。伊勢集では、十六首一連の男女間贈答歌群の中の一首。そこには伊勢に対してしきりに歌のやりとりをしたがる男がいて、両者の間でくり返し歌が往復しているのだが、この一首は、「波高み海べに寄らぬわれ舟はこちてふ風や吹くとこそ待て」（一九五）とあった男からの歌に返された歌。「海人の碇」に「海女の怒り」を掛けて、「そちらの人の怒りゆえあなたは出て来られないでしょう。」と応酬したもの、ということになっている。

あみ
一八四〇　いとへどもなをすみのえのうらにほすあみのめしげきこひもする哉

【異同】あみのめしけき―あみのめしうき（桂）
【現代語訳】（恋ゆえ繁きもの思いをすることを）厭わしく思うけれども、それでもやはり、住の江の浦に干す網の目が繁くあるような、さまざまにもの思いの多い恋もすることだなあ。
【語句】◎あみ　網。魚や鳥獣などを捕る道具。麻糸や縄などで編み目を粗く編んである。ただし、古今六帖の歌題としてここで言われている「あみ」は、漁業に使う漁網のこと。「あみ」題の下には四首の歌があるが、いずれも漁網に寄せた恋歌ばかりである。○いとへどもなを　いとへどもなほ。厭わしく思うのだがそれでもやはり。なにを「いとふ」のか歌の中に明示されてはいないが、下句とのつながりから考えて、おそらく、恋して心身を労することを「いとふ」ということであろう。「なを（ほ）」は、第五句の「こひもする哉」に掛かる。○すみのえのうらにほすあみのめ　住の江の浦に漁師が干す漁網の網の目。漁網の網の目が多いことから「しげき」を導き出す序詞。「すみのえのうら」は「住の江の浦」。現大阪市住吉区一帯で、現在は埋立地であるが、往古は海辺であった。○しげきこひもする哉　さまざまにもの思いの多い恋もすることだ。
【所載】新勅撰集・恋一・六五三／夫木抄・一五九一五

〔以上五首担当　長戸・山下〕

一八四一　すみよしのつもりのあびきのつりのをのうかびかゆかんこひつゝあらずは

【異同】つもりのあひきの―つもりのあひき（大）　うかひかゆかん―うかひもゆかん（桂）
【現代語訳】住吉の津守が網を引くときの釣網の緒のように、わたしもあてどなくさまよい出てゆこうか。こんなに恋しく思ってばかりいないで。
【語句】○すみよし　住吉。現大阪市住吉区の一帯。往古は海岸であった。○つもり　津守。津は船着き場、津守はその津を守る番人。○あびきのつりのを　網引の釣りの緒。網を引いて漁をするときの網の緒。上三句は、「あびきのつりのを」が海面に浮いていることから、第四句の「うかび」を導き出すための序詞。○うかびかゆかん　浮かびかゆかん。心のよりどころなくさまよい出てゆこうか。「浮かび」は、ものが水面や空中によりどころなく浮いているさま。ここでは、心によりどころがなくうわの空でさまよい出ることの形容。○こひつゝあらずは　こんなに恋しく思ってばかりいないで。
【所載】万葉集・二六五四（旧二六四六）住吉乃　津守網引之　浮笑緒乃　得干蚊将去　恋管不有者　スミノエ（ヨシ）ノツモリアビキノウケノヲノウカビカユカムコヒツツアラズハ　すみのえのつもりあびきのうけのをのうかれかゆかむこひつつあらずは／夫木抄・一五九一四／綺語抄・二四九／和歌童蒙抄・四四六／和歌初学抄・二八一

一八四二　あまぶねのへにくりつめるあみのめはつらきこゝろのかずみざりける

【異同】かすみさりける―かすにさりける（御・桂）、かすにさりぬる（大）
【現代語訳】漁師の舟の舳先に手繰り寄せて積んである漁網の目の多さは、まるでこのわたしの苦しい思いの数であるよ。
【語句】○あまぶねのへ　海人舟の舳。漁師が漁のために乗る舟の船首。「へ」はへさきのこと。○くりつめるあみのめ　繰り積める網の目。手繰り寄せて積んである漁網の目。その漁網の目の多さを「つらきこころのかず」の多さの比喩としている。○つらきこゝろ　相手の態度をたえがたく苦しく思う気持。○かずみざりける　底本の本文不審。御所本・桂宮本の「かずにざりける」に拠って解した。数であるよ。
【所載】夫木抄・一五八二九

一八四三　あふことのかたよせにするあみのめにいはけなきまでこひかゝりぬる

【異同】ナシ
【現代語訳】片寄せにした漁網の目に、わけがわからぬくらい鯉がかかったことだよ。（逢うことのむずかしい人に、まるで聞きわけのない子どものように恋の気持を持ってしまったよ。）
【語句】○あふことのかたよせにするあみのめ　「逢ふことの難（かた）」を「片寄せにする網の目」に言い掛けた。○いはけなきまで　わけがわからないくらいまでに。聞きわけがないくらいまでに。「いはけなき」は幼少の子どもの頼りないさま。ここでは、恋のために子どもみたいに分別を失っているさまを比喩的に言ったものか。○こひかゝりぬる　「鯉掛かりぬる」に「恋かかりぬる」を掛けた。「恋かかり」は相手に対して恋の気持を持つこと。「鯉」「かゝり」は「網」の縁語。
【所載】和歌童蒙抄・四四五

一八四四　あづさゆみひきつのへなるなのりそのいづれのうらのあまかかるらん
なのりそ

【異同】ナシ
【現代語訳】引津のあたりにあるなのりそを、いったいどこの浦の漁師が刈り取るだろうか。（引津のあたりのあの女性を、いったいどこの者がわがものにするだろうか。）
【語句】◎なのりそ　褐藻類ホンダワラの古称。食用にしたり肥料にしたりした。和歌では「な告りそ」を掛けたり「名乗り」を導く措辞として用いられたりする。○あづさゆみ　「ひき」にかかる枕詞。○ひきつのへ　引津の辺。引津のあたり。「引津」は現福岡県糸島市志摩町の入海。○かる　刈る。「なのりそを刈る」ことに、女性を自分のものにする、の意を重ねた。
【所載】ナシ
【参考】万葉集の「梓弓引津の辺なるなのりその花咲くまでに逢はぬ君かも」（一九三四〈旧一九三〇〉）の上句と、「あさりすと磯にわが見しなのりそをいづれの島の海人か刈りけむ」（一一七一〈旧一一六七〉）の下句とを結合して一首としたような歌である。

一八四五　みさごゐるあらいそにをふるなのりそのわがなつげせよをひはしぬとも
あか人

【異同】ナシ
【現代語訳】みさごの棲んでいる荒磯に生えているなのりそ。その名の「名乗り」のように、わたしの名を告げなさい。この恋を親が知ることになっても。
【語句】○みさごゐる　一八三〇番歌参照。ここでは「あらいそ（荒磯）」を導き出すための措辞。○をふる　おふる。生えている。○なのりその　海藻の「なのりそ」に「名乗り」を掛けた。上三句は「わが名告げせよ」を導くための序詞。○わがなつげせよ　わが名告げせよ。わたしの名を告げなさい。○をひはしぬとも　本文不審。傍記に拠り「をやはしるとも（親は知るとも）」として解した。所載欄の万葉集でも、三首とも第五句は「親は知るとも」である。わたしの名を告げることによって、隠してきたこの恋を親に知られることになってもかまわないから、と言った男の歌か。
【所載】万葉集・三六五（旧三六二）美沙居　石転尓生　名乗藻乃　名者告志五余　親者知友　ミサゴヰルイソワニオフルナノリソノナハツゲシコヨオヤハシルトモ　みさごゐるいそみにおふるなのりそのなはのらしてよおやはしるとも、三六六（旧三六三）美沙居　荒礒尓生　名乗藻乃　告名者告世　父母者知友　ミサゴヰルアライソニオフルナノリソノナノリハツゲヨオヤハシルトモ　みさごゐるありそにおふるなのりそのよしなはのらせおやはしるとも、三〇九一（旧三〇七七）三佐呉集　荒礒尓生流　勿謂藻乃　吉名者不告　父母者知鞆　ミサゴヰルアライソニオフルナノリソノヨキ（シ）ナハツゲジ（ノラジ）オヤハシルトモ　みさごゐるありそにおふるなのりそのよしなはのらじおやはしるとも／袖中抄・七〇四
【参考】作者名「あか人」は、所載欄万葉集の三六五（旧三六二）番歌・三六六（旧三六三）番歌に一致する。
〔以上五首担当　青木・山下〕

一八四六　むらさきのなだかのうらのなのりそのいそぎなびかむときまつ我は（ろにイ）

【異同】ナシ
【現代語訳】［第四句「いそぎなびかむ」は「いそになびかむ」で解釈した。］名高の浦のなのりそが磯の方になびくであろう時、あなたがなびくであろう時を待っていますよ、私は。
【語句】○むらさきの　「なだか」にかかる枕詞。一説に、紫が貴く名高い色であることからという。○なだかのうら　和歌山県海南市名高町の海岸。○なのりそ　海藻のホンダワラ。「名」を導く。「名高」とつなげたか。

○いそぎなびかむ　所載欄の万葉集の「磯（いそ）になびかむ」で解した。磯の方になびくであろう（時）。もしかして磯になびくかもしれない（その時）。「なびく」は、言い寄られて受け入れる意を含む。助動詞「む」の連体修飾の用法は、仮定を示す。○ときまつ我は　時を待っていますよ、私は。

【所載】万葉集・一四〇〇（旧一三九六）紫之　名高浦乃　名告藻之　於礒将靡　時待吾乎　ムラサキノナタカノウラノナノリソノイソニナビカムトキマツワレヲ　むらさきのなたかのうらのなのりそのいそになびかむときまつわれを／夫木抄・一一五一八／袖中抄・七〇五

一八四七　もかりぶねいまぞなぎさにきよすなるみぎはのたづの声さはぐ也

【異同】みきはのたつの―あしたのたつの（御・大）

【現代語訳】藻刈舟が、今まさに渚に寄せて来たらしい。水際の鶴の声が騒がしいことだよ。

【語句】◎も　藻。水生植物の総称。複合語として枕詞や序詞に詠み込まれ、恋の心情や状況の比喩に用いられることが多い。○もかりぶね　藻刈舟。海藻を刈りとり運ぶ小舟。「もかりぶね沖漕ぎくらし妹が島形見の浦にたづかける見ゆ」（万葉集・一二二八〈旧一一九九〉）。○いまぞなぎさにきよすなる　今まさに渚に寄せて来たらしい。「なる」は推定「なり」の連体形で、係助詞「ぞ」（強意）の結び。水際の鶴の鳴き騒ぐ声から舟の接近を推しはかる。

【所載】拾遺抄・雑下・五〇九／拾遺集・雑上・四六五／金玉集・五〇／深窓秘抄・七八／新撰髄脳・一一／俊頼髄脳・三二／奥儀抄・七四／和歌色葉・五二／簸河上・二／悦目抄・三五

一八四八　むらさきのなだかのうらのなびきものこゝろはいもによりにし物を

【異同】ナシ

【現代語訳】名高の浦の（波に流され片寄る）なびき藻のように、私の心はあの娘（の方）に寄ってしまったのに。

【語句】○むらさきのなだかのうらの　一八四六番歌参照。○なびきも　靡き藻。波に流され、倒れ伏すように片寄った藻のこと。「いも」に心惹かれる様をたとえた。「なびき（靡き）」と「寄り」は、「藻」の縁語。「わが

恋は名だかの浦のなびきもの心は寄れど逢ふよしもなし」（続拾遺集・八三七）。〇よりにし物を　寄ってしまったのに。上三句は、「寄り」を導く序詞。
【所載】新千載集・恋二・一二〇九／万葉集・二七九〇（旧二七八〇）紫乃　名高乃浦之　靡藻之　情者妹尓　因西鬼乎　ムラサキノナタカノウラノナビキモノココロハイモニヨリニシモノヲ　むらさきのなたかのうらのなびきものこころはいもによりにしものを／夫木抄・一一五一九／和歌童蒙抄・二五九、六四四／袖中抄・七〇七

一八四九　人しれぬこひのくるしさもかりぶねみなといりえにたづぞなくなる

【異同】ナシ
【現代語訳】人知れぬ恋の苦しさよ。藻刈舟が入るみなと入江で、鶴が鳴いているのが聞こえるよ（私も泣いていることだよ）。
【語句】〇もかりぶね　一八四七番歌参照。〇みなといりえ　「みなと」は、海などの水の出入口。「いりえ（入江）」は、海などが陸地に入り込んでいる所。「人しれぬこひ」をたとえるため、外海から隔てられて人目に付かない場所として詠んだか。舟の「みなと入り」に「入り江」を掛けた。「人知れずみなといりえのあやめ草満ち干る潮や今日はひくらん」（為忠家初度百首・一九〇）。〇たづぞなくなる　鶴ぞ鳴くなる。鶴が鳴いているのが聞こえる。「なる」は、係助詞「ぞ」（強意）の結びで、推定・伝聞「なり」の連体形。鶴が「鳴く」に私が「泣く」を掛ける。鶴の鳴声は、妻を恋しがっているものと聞きなされる。「みなと風寒く吹くらしなごの江に妻呼びかはし鶴さはに鳴く」（万葉集・四〇四二〈旧四〇一八〉）。
【所載】ナシ

一八五〇　いくよしもあらじわが身をなぞもかくあまのかるもにおもひみだるゝ

【異同】ナシ
【現代語訳】幾世も生きるはずのないわが身なのになあ。なぜこうも海人の刈る藻の（乱れる）ように思い乱れるのでしょうか。
【語句】〇いくよしも　幾世しも。副助詞「しも」は強調。「いくよしもあらじと思ふ世の中のえしも心にかなはぬぞ憂き」（好忠集・四五七）。〇あらじわが身を　生きるはずのない我が身なのになあ。「じ」は打消推量の

助動詞「じ」の連体形。「を」は詠嘆をあらわす間投助詞。○あまのかるもにおもひみだるゝ　海人の刈る藻のように思い乱れる。「あまのかるも」は、海人が刈った藻。乱れたもののたとえ。格助詞「に」は、動作の状況・状態を表す。「みだるゝ」には、藻の散乱と心の混乱の意を掛ける。「わが恋はあまのかるもに乱れつつ乾く時なき浪の下草」（千載集・七九三）。

【所載】古今集・雑下・九三四／新撰和歌・二二一／四条宮主殿集・六五／定家十体・二一七／井蛙抄・一九三

〔以上五首担当　三浦・原山〕

一八五一　たまもかるとしまを過て夏草ののしまがさきにいほりするわれ（すわれはイ）

【異同】のしまかさきに―こしまかさきに（御・桂）

【現代語訳】海人たちが玉藻を刈るとしまを過ぎて、野島が崎に仮の宿りをするわたしですよ。

【語句】○たまもかる　ここでは地名としての「としま」を導き出すための措辞。○としま　地名あるいは島の名と思われるが、所在不明。○夏草の　「野」に掛けて「野島」を導き出すための措辞。○のしまがさき　野島が崎。淡路島北端西部の崎。万葉集二五一（旧二五一）番歌に「淡路の野島の崎の浜風に妹が結びし紐吹き返す」と詠まれており、歌枕として奥儀抄・五代集歌枕・八雲御抄に登載されている。

【所載】新拾遺集・羈旅・七五九／万葉集・二五一（旧二五〇）珠藻苅　敏馬乎過　夏草之　野嶋之埼尓　舟近著奴　タマモカルヒヌメヲスギテナツクサノノシマガサキニフネチカヅキヌ　たまもかるみぬめをすぎてなつくさのしまのさきにふねちかづきぬ、三六二八（旧三六〇六）多麻藻可流　乎等女乎須疑弖　奈都久佐能　野嶋我左吉尓　伊保里須和礼波　タマモカルヲトメヲスギテナツクサノノシマガサキニイホリスワレハ　たまもかるをとめをすぎてなつくさのしまがさきにいほりすわれは／夫木抄・一二一四〇、一三四六五／人麿集Ⅲ・五九八／柿本人麿勘文・五一／六百番陳状・八九／井蛙抄・四七六

一八五二　しらなみのよせつる（くイ）たまもよの間にもきみをみずてはいもかねかねつも

【異同】ナシ

【現代語訳】（白波の寄せる玉藻の節〈よ〉の）夜のまにも、あなたを見ずしては、眠るに眠れない。

【語句】○しらなみのよせつるたまも　白波の寄せつる玉藻。「玉藻」の「節（よ）」によって「夜」を導き出す

ための序詞。○きみをみずては　あなたを見ずしては。○いもねかねつも　睡眠することができない。「い」は睡眠の意味の名詞、「ね」は下二段活用自動詞「寝（ぬ）」の連用形。
【所載】ナシ
【参考】万葉集四〇一八（旧三九九四）番歌の「白波の寄せくる玉藻夜のあひだもつぎて見に来む清き浜びを」と、初・二句の序詞の置き方が類似している。

一八五三　いせのうみにとしへてすみしあまなればいづれのもかはかづきのこせる　伊勢

【異同】かつきのこせる―かつきのこさん（桂）
【現代語訳】わたくしは、伊勢の海に年経て住む海人ですから、これまでどんな藻を潜き残してきたでしょうか、どんな藻だって潜き残すことなく取ってきました。
【語句】○いせのうみにとしへてすみしあま　伊勢の海に年経て住みし海人。作者伊勢が、わが女房名にことよせてみずからをさすことばとして言った語。○いづれのもかはかづきのこせる　どんな藻を潜き取り残したであろうか、いや、潜き取り残してはいない。どんな藻もみな、潜き取ってきている。「かづき」は、ここでは、海に潜って海藻を取る、の意。「かは」は反語。
【所載】後撰集・雑四・一二七九／夫木抄・一六六五九／伊勢集Ⅰ・二一九／伊勢集Ⅱ・二二四／伊勢集Ⅲ・二二一
【参考】作者名「伊勢」は、所載欄の文献に一致する。この歌の下句は、なにかの比喩として言われたものであろうが、詠歌の場の状況がわからないので、歌の真意が読み取りにくい。後撰集では、第三句以下が「海人なれどかかるみるめは潜かざりしを」となっており、亭子院にいたころ御ときのおろしを賜った際の歌、となっている。

一八五四　うみのそこをきをふかめておふるものいとゞいましもぞこひはすらしも

【異同】いとゝいましもそ―いとゝいましそ（大）
【現代語訳】海の底の奥深いところに生えている藻のように、いよいよ今こそ深い思いの恋はするようだ。

【語句】○うみのそこ　海の底。「おき」を導き出すための措辞。○をきをふかめて　おきをふかめて。「おき」は「奥」と同根の語、ここでは奥底のこと。奥深く思いを深めて。「わたの底おきを深めて吾が思へる君には逢はむ年は経ぬとも」（万葉集・六七九〈旧六七六〉）。○こひはすらしも　恋はすらしも。恋はするようだ。「らし」は客観的な事実に拠って推量する言い方だが、ここはわが内心のさまを客観的に見て言ったものか。傍記「すべなき」の方が歌意はよく通る。
【所載】万葉集・二七九一（旧二七八一）海底　奥乎深目手　生藻之　最今社　恋者為便無寸　ワタツミノオキヲフカメテオフルモノイトモイマコソコヒハスベナキ　わたのそこおきをふかめておふるものもともいまこそこひはすべなき

一八五五　いはみがたうらみぞふかきおきつなみうちよするもにうづもるゝ身は

【異同】ナシ
【現代語訳】心の中の思いを口に出して言えなくて、恨めしさは深いことだ。沖つ波の打ち寄せる藻によって埋もれるように、人にも知られず埋もれているこの身は。
【語句】○いはみがた　石見潟。石見国の海辺。石見国は現在の島根県西半分に相当する。石見潟は歌枕として八雲御抄に登載。和歌では「言はず」あるいは「言ひ難し」に掛けて詠まれることが多く、ここも「言は（み）」を掛けている。「つらけれど人には言はず石見潟うらみぞ深き心ひとつに」（拾遺集・九八〇）。○うらみぞふかき　恨みぞ深き。恨めしさが深い。「恨み」に石見潟の「浦廻（うらみ）」を掛けている。○うづもるゝ身　藻に埋もれることと、人に知られることなく世に埋もれていることとを重ねて言っている。
【所載】新勅撰集・恋一・六三二

〔以上五首担当　山下〕

一八五六　風はやみ（きイ）おきのたまものくりかへしなみのよるしもなにさはぎけん

【異同】ナシ
【現代語訳】沖の玉藻が、風が早いために繰り返し波が寄せて騒ぐように、夜になってどうして騒いだのだろうか。

【語句】○おきのたまもの　沖の玉藻の。「玉藻」は藻の美称。「の」は比喩を表す格助詞。沖の玉藻のように。藻が波によって乱れるさまを詠んだ「おきへにも寄らぬ玉藻の浪のうへにみだれてのみや恋ひわたりなむ」（古今集・五三二）などがあり、その動きを結句の「騒ぐ」という語で表現したか。○なみのよるしも　「よる」は、波が「寄る」と「夜」の掛詞。「しも」は副助詞「し」に係助詞「も」の重なったもので、強意を表す。○なにさはぎけん　何騒ぎけん。どうして騒いだのだろうか。「なに……けん」は、「どうして……したのだろうか」の意。「涙河何みなかみを尋ねけむ物思ふ時のわが身なりけり」（古今集・五一一）。「男の物いひけるをさわぎければ、かへりてあしたにつかはしける」の詞書で、言い寄る男を拒否したことを「騒ぐ」と表現した「白浪のうちさわがれて立ちしかば身をうしほにぞ袖はぬれにし」（後撰集・一一五八）という例があり、あるいは当該歌もそのような状況をふまえてのものか。

【所載】ナシ

一八五七　ゆふさればしほみちきなんすみのえのあかしのうらにたまもかりてん

ゆげのわうじ

【異同】ナシ

【現代語訳】夕方になると潮が満ちてくるにちがいない。住の江の明石の浦で玉藻を刈ってしまおう。

【語句】○ゆふされば　夕方になると。「夕されば佐保の河原の河霧に友まどはせる千鳥なくなり」（後撰集・二三八）。○すみのえ　摂津国の歌枕。現在の大阪府住吉区の一帯。○あかしのうら　明石の浦。播磨国の歌枕。現在の兵庫県神戸市垂水から明石市までの海岸。風光明媚なことで有名であるが、「住の江」とは場所が異なる。所載欄の文献は全て「あさかのうら」。浅香の浦は摂津国の歌枕。現在の大阪府堺市東部で、当該歌においては「住の江の浅香の浦」と詠む方がふさわしい。○たまもかりてん　玉藻を刈ってしまおう。「てん」は、強意の助動詞「つ」未然形に意志の助動詞「む」がついたもの。

【所載】万葉集・一二一（旧一二一）暮去者　塩満来奈武　住吉乃　浅鹿乃浦尓　玉藻苅手名　ユフサレバシホミチキナムスミノエノアサカノウラニタマモカリテナ　ゆふさらばしほみちきなむすみのえのあさかのうらにあまもかりてな／夫木抄・一一六一五／和歌初学抄・二四九／井蛙抄・四三四

【参考】作者名「ゆげのわうじ」（弓削皇子）は所載欄の文献に一致する。所載欄の万葉集によれば、弓削皇子が紀皇女を思って作った歌。「しほみちきなん」には邪魔が入ってしまうこと、「玉藻刈る」は女性をわがものと

する寓意を含んでいる。

一八五八　みなそこに生ふる玉ものうちなびきこゝろをよせてこふるこの比　人まろ

【異同】ナシ
【現代語訳】水の底に生えている美しい藻がなびくように、心を寄せて恋しく思う、今日この頃であるよ。
【語句】○玉ものうちなびき　玉藻がなびくように。「の」は比喩を表す格助詞。初・二句は「うちなびき」を導く序。心をひたすら寄せることを、藻が水の流れになびくさまで喩えた。「明日香川瀬々の玉藻のうちなびき心は妹によりにけるかも」（万葉集・三二八一〈旧三二六七〉）。
【所載】拾遺集・六四〇／万葉集・二四八六（旧二四八二）水底　生玉藻　打靡　心依　恋比日　ミナソコニオフルタマモノウチナビキココロヲヨセテコフルコノコロ　みなそこにおふるたまものうちなびきこころはよりてこふるこのころ／人麿集Ⅰ・一八二／人麿集Ⅱ・四一七／人麿集Ⅲ・三二六／人麿集Ⅳ・二〇一
【参考】作者名「人まろ」は、所載欄の拾遺集に一致し、人麿集にもあるが、万葉集では作者未詳の寄物陳思歌の一首。

一八五九　おきつかぜふかまくしらずあらのうみのあさけのふねに玉もかりかね

【異同】おきつかせ―をきにかせ（御）　あらのうみの―あらのうみの（御・桂）
【現代語訳】［結句は傍記「かりきね」で解した。］沖の風が吹くのかわからない。荒海の夜明け方の舟に乗って玉藻を刈って来てしまえ。
【語句】○おきつかぜ　沖つ風。沖を吹く風、あるいは沖の方から吹いてくる風。「和歌の浦に白浪立ちておきつ風寒きゆふべは大和し思ほゆ」（万葉集・一二〇九〈旧一二一九〉）。○ふかまくしらず　吹かまく知らず。「吹かまく」は「吹かむ」のク語法で、吹くようなこと、の意。「しらず」は、わからない、の意。○あさけ　「あさあけ（朝明）」の約。夜明け方。「この比の秋のあさけに霧がくれつまよぶ鹿の音のさびしさ」（古今六帖・九四〇）。○かりかね　「刈りかね」か。「……することができない」の意の補助動詞「かぬ」だとすると、未然形か連用形で言い切ることになり不審。傍記の「かりきね」で解した。「刈り来ね」は、刈って来てしまえ。「ね」

は完了の助動詞「ぬ」の命令形。なお、所載欄の文献は全て「たまもかりてな」で、刈ってしまおうよ、の意。
【所載】万葉集・一一六一（旧一一五七）時風　吹麻久不知　阿胡乃海之　朝明之塩尓　玉藻苅奈　トキツカゼフカマクシラズアゴノウミノアサケノシホニタマモカリテナ　ときつかぜふかまくしらずあごのうみのあさけのしほにたまもかりてな／夫木抄・七七四二、一〇三七二

一八六〇　あらいそのこすなみはをそろししかすがにうみのたまもはにくゝやはあらぬ

【異同】ナシ
【現代語訳】［結句は傍記「にくゝやはある」で解した。］荒磯を越す波は恐ろしい。そうはいうものの、海の玉藻は憎くあろうか、いや憎くはない。
【語句】○なみはをそろし　波は恐ろし。波は恐ろしい。○しかすがに　それはそうだがしかし。そうはいうものの。「かきくらし雪はふりつつしかすがにわが家の苑に鶯ぞなく」（後撰集・三三）。○にくゝやはあらぬ　憎くないだろうか、いや憎い。波の恐ろしさとは対立する表現でないと「しかすがに」と合わないので、傍記の「にくゝやはある」の方がふさわしい。こちらで解した。
【所載】万葉集・一四〇一（旧一三九七）荒礒超　浪者恐　然為蟹　海之玉藻之　憎者不有手　アライソコスナミハオソロシシカスガニウミノタマモノニククハアラズテ　ありそこすなみはかしこししかすがにうみのたまものにくくはあらずて
【参考】所載欄の万葉集では、藻に寄する恋歌の一首。「なみはをそろし」は女の親の警戒が強いこと、「玉藻」は相手の女性を喩えたもの。

〔以上五首担当　杉本・諸井〕

一八六一　けふもかもおきつ玉もはしら浪のやへをわかうへにみだれてをあらん

【異同】ナシ
【現代語訳】［第四句「やへをりかうへに」として訳した。］今日も、沖の玉藻は、白波が幾重にも折り重なって立つ上に乱れているのだろうな。
【語句】○けふもかも　今日もかも。今日も。「もかも」は係助詞「も」に係助詞「かも」が続いた形。ここで

は詠嘆を表す。〇やへをわかうへに　所載欄の万葉集西本願寺本の訓に拠り、「わ」と「り」の誤写とみて「やへをりかうへに」と解す。八重折りが上に。波が幾重にも折り重なって立つ上に。〇みだれてをあらん　乱れてをあらん。乱れているのだろうな。「を」は間投助詞。

【所載】万葉集・一一七二（旧一一六八）今日毛可母　奥津玉藻者　白浪之　八重折之於丹　乱而将有　ケフモカモオキツタマモハシラナミノヤヘヲリノウヘニミダレタルラム　けふもかもおきつたまもはしらなみのやへをるがうへにみだれてあるらむ／和歌童蒙抄・六四五

一八六二　あめはふるかりもはつくるいつの間にあまのしほひに玉もひろはん

【異同】ナシ

【現代語訳】雨は降る、仮庵は造る。そのような中でいつの暇に、海人が潮干潟で、玉藻を拾い集めるのだろうか。

【語句】〇かりもはつくる　このままでは意が通じにくい。傍記に拠り、「かりほはつくる」として解した。仮庵（かりほ）は造る。「かりほ」は「かりいほ」の縮まった形。簡易な小屋の意。〇あまのしほひ　あまの潮干。所載欄の万葉集では「吾児之塩干」などとあるが、所在地未詳。但し、ここでは地名ではなく、主語を表す格助詞「の」と考え、「海人が潮干潟で」と現代語訳をした。「しほひ」は潮の引くこと、また引いた後の海岸。〇玉もひろはん　玉藻拾はん。玉藻を拾い集めるのだろうか。所載欄の万葉集では、「玉は拾（ひり）はむ」であり、「藻」を詠んだ歌ではない。

【所載】万葉集・一一五八（旧一一五四）雨者零　借廬者作　何暇尓　吾児之塩干尓　玉者将拾　アメハフルカリホハツクルイツノマニナゴノシホヒニタマハヒロハム　あめはふるかりいほはつくるいつのまにあごのしほひにたまはひりはむ

一八六三　しらなみををりかけあまのこぐ舟のいのちにかふるみるめかりにか

【異同】ナシ

【現代語訳】白波を（幾重にも）折りかけて海人の漕ぐ舟は、海松布を刈りに行くのだろうか。命に代えても

よいという「見る目」（恋しい人に逢う機会）を得るために。
【語句】◎みるめ　海松布。海松に同じで、海藻の一種。「め」は食用にする海藻の総称。和歌では、恋しい人に逢う機会の意の「見る目」を掛けて用いられる。○しらなみををりかけ　白波を折り掛け。白波が幾重にも重なることを「折る」という。「白波の折り折りありてくる人はあまのかるてふめづらしきかな」（古今六帖・一八七一）。○みるめかり　海松布刈り。恋人に逢う機会を得る意の「見る目かり」を掛ける。「みるめ刈る渚やいづこあふごなみ立ち寄る方も知らぬ我が身は」（後撰集・六五〇・元方）。
【所載】続後拾遺集・雑・一一一五／夫木抄・一三六五九／興風集Ⅰ・二九／興風集Ⅱ・四一／和歌童蒙抄・六四六

一八六四　おほかたはわがなもみなとこぎいでなん人をみるめもおきにこそあ|れ（か）

【異同】わかなもみなと―わかすそみなと（御）、わかなそみなと（桂・大）
【現代語訳】いっそのこと、私の名も世間に広まっても構わない、水門を海へ漕ぎ出よう。海松布は沖でこそ刈るのだから。（そして）恋しい人に逢う機会というのは、（今いる場所ではなく）危険を承知の場所にこそあるのだから。
【語句】○おほかたは　大方は。総じて、大体のところは。細かいことはともかくも、の意を込める。竹岡正夫『古今和歌集全評釈』は、「今までは一つのことに拘泥して心をとらわれてきたが、今、大局的見地から思い返してみると」の意とする。「大潟」を響かせる。○わがなもみなとこぎいでなん　我が名も水門漕ぎ出でなん。我が名も（舟も）水門を漕ぎ出よう。舟が「出（づ）」と、名が「出（づ）」の意。「頼りなみなき名は沖に漕ぎ出でなん寄るべたもとにみるめだになし」（素性集Ⅱ・五三）。○みるめ　海藻の「海松布」に、恋しい人に逢う機会の「見る目」を掛ける。○おきにこそかれ　沖にこそ刈れ。沖でこそ刈るのだ。「沖」に出るという危険を冒してこそ愛しい人に逢える、の意か。
【所載】古今集・恋・六六九／奥儀抄・五二三／袖中抄・三六
【参考】所載欄諸集の下句はいずれも「世を海べたに見るめ少なし」とある。

一八六五　たきつせのうづまきごとにとゞむれどなをもとめつゝよをうきめ哉（そせい）（のイ）

【異同】ナシ
【現代語訳】［上句と下句の続き方が不審で意が通じにくいが、仮に、本文に従い現代語訳をした。］激しい水の流れの渦巻き一つ一つが（私を）引き止めるけれど、それでもやはり求め続けてしまう世を辛いと思う気持ちであるよ。
【語句】○たきつせ　滝つ瀬。元は「滾（たぎ）つ瀬」で、水の激しく流れる瀬。○うづまき　渦巻き。○とゞむれど　止むれど。眼前の激しい渦巻きが、その先に進もうとする私を躊躇させる、の意か。○なを　なほ（猶）。さらに、もっと。○うきめ　憂き目。辛い目、嫌な目の意。「憂き目」に、水の上に浮いた海藻の意の「浮き海藻（うきめ）」を掛けたか。「うきめ刈る伊勢をの海人を思ひやれ藻塩たるてふ須磨の浦にて」（源氏物語・須磨・一九四）。
【所載】後撰集・雑三・一二三九
【参考】作者名「そせい」とあるが、所載欄の後撰集ではよみ人知らず。所載欄の後撰集三句以下は「とめ来れど猶尋ねくる世のうきめかな」とあり、逃れようとしても俗世が追いかけてくる意。

〔以上五首担当　平野・吉田優子〕

一八六六　みつしほのながれひるまもあひがたみみるめのうらによるをこそまて　ふかやぶ（をイ）

【異同】あひかたみ―あひかたき（桂）
【現代語訳】昼間ももちろん逢いがたいので、あなたにお目にかかれるものと、夜をこそ待っています。
【語句】○みつしほのながれひるまも　満ちてくる潮が流れてきて干る間も。「干る間」に「昼間」を掛ける。「満つ潮の流れ干る間」といって「昼間」を導き出す。○あひがたみ　逢うことがむずかしいので。「み」は形容詞形活用語の語幹につき、原因理由を示す。○みるめのうらによるをこそまて　「みるめ」は「海松布」に「見る目」を掛ける。「みるめのうら」を地名とする考え方もあるが、「みるめの」は「浦に寄る」の主語で、「よる」を導き出す役割りを果たしているのであろう。「よる」は「寄る」に「夜」を掛ける。
【所載】古今集・恋三・六六五／深養父集Ⅰ・二六／深養父集Ⅱ・二一
【参考】作者名「ふかやぶ」は所載欄の文献に一致する。

一八六七　わたつうみのそこにあれたるみるめをばみふねこぎてぞあまはかるてふ

【異同】ナシ
【現代語訳】大海の底に生えている海松布を、舟を漕いでは、漁師は刈るということですよ。
【語句】○あれたる　「あれ」は「生（あ）れ」で、下二段活用動詞連用形。生ずる、出現する意。○みふねこぎてぞ　舟を漕いで。「み」は美称あるいは尊敬の意をあらわす接頭語。「天の川川門八十ありいづくにか君がみふねをわが待ちをらむ」（万葉集・二〇八六〈旧二〇八二〉）。ただしここは敬語を必要としない「あま（海士）」が主語なので、敢えて「み」を用いる必然性がない。所載欄の平中物語では「みとせこぎてぞ」とある。参考欄参照。○かるてふ　刈るという。「てふ」は「といふ」の約。
【所載】夫木抄・一三六六〇／平中物語・四段・二三
【参考】所載欄の平中物語には、「また、この同じ男、このふた年ばかりものいひすさぶる人ぞありける。いかでなほ対面せむといふ心ぞせちにありける。返りごとに、女、かくなむ」とあり、「ふた年ばかり」に対して、第四句で「みとせこぎてぞ」と言い、女の詠んだ恋のかけひきの歌となっている。「海松布」に「見る目」をも掛けている。

一八六八　おぼろけのあまやはかづくいせのうみのなみたかきうらにをふるみるめは

【異同】ナシ
【現代語訳】いい加減な漁師はとても潜って採ることができません。伊勢の海の波の高い浦に生えている海松布は。本気でないあなたにお目にかかることはむずかしいでしょう。
【語句】○おぼろけの　並大抵の。ありきたりの。○あまやはかづく　漁師は潜るか、とても潜ることはできない。「やは」は反語。「かづく」は、潜る、かぶるなど、頭をものの下にくぐらせる意。○をふるみるめは　おふるみるめは。生えている海松布は。「みるめ」は「海松布」に「見る目」を掛ける。
【所載】後撰集・恋五・八九二／業平集Ⅱ・八／伊勢集Ⅰ・四六一／伊勢集Ⅱ・四五六／伊勢集Ⅲ・三八七
【参考】所載欄の後撰集には、
　　題しらず　　在原業平朝臣

伊勢の海に遊ぶあまともなりにしか浪かきわけてみるめかづかむ
返し　伊勢
おぼろけのあまやはかづく伊勢の海の浪高き浦におふるみるめは

とあり、業平との贈答の形式になっている。他も作者名は明示していないが、同じ二首の贈答である。ただし伊勢の相手は「業平」ではなく、「仲平」の誤り。

一八六九　いせのうみ（あまイ）のあさなゆふなにかづくてふみるめに人をあくよしもがな

【異同】いせのうみ（あまイ）の―伊勢のあまの（大）　あくよしもかな―あくよしもなし（桂）
【現代語訳】伊勢の海の朝に晩に潜って採るという海松布、その見る目のように毎朝毎晩あの人にお目にかかって満足する方法はないものでしょうか。
【語句】○あさなゆふなに　朝に晩に。毎朝毎夕。明け暮れ。○かづくてふ　潜るという。○あくよしもがな「あく」は「飽く」で、満足する、十分だと思う。「もがな」は願望の終助詞。
【所載】古今集・恋四・六八三
【参考】万葉集・二八〇八（旧二七九八）番や新勅撰集・八七二番、古今六帖・二〇二五番その他に、次のような同じ上句の歌がある。「伊勢のあまの朝な夕なにかづくといふあはびの貝の片思ひにして」。

一八七〇　しらなみはたちさはぐともこりずまのうらのみるめはからむとぞおもふ

【異同】ナシ
【現代語訳】たとえ白波が立ち騒いでも、須磨の浦の海松布は刈ろうと思います。どんなに世間が噂を立てても、懲りずに、あなたにお目にかかる機会を得ようと思っています。
【語句】○こりずまのうらのみるめは　性こりもないさまをいう「懲りずま」に「須磨（の浦）」を掛ける。「須磨の浦」は摂津国の歌枕。「みるめ」は「海松布」に「見る目」を掛ける。○からむとぞおもふ　刈らむとぞ思ふ。「海松布（見る目）を刈る」とは、逢う機会を得ること。「む」は意志を表す。「わたつ海のそこの心は知らねども人をみるめは刈らむとぞ思ふ」（新撰和歌・一三四）。
【所載】新古今集・恋五・一四三四

〔以上五首担当　久保木〕

一八七一　しらなみのをり〳〵ありてくる人はあまのかるてふめづらしき哉

【異同】ナシ
【現代語訳】白波が折り返し打ち寄せるように、おり（機会）があってやってくる人は、海人の刈る「め（海藻）」のように、珍しいことだなあ。
【語句】○しらなみの　ここでは「をり」にかかる枕詞。○をり〳〵ありてくる人　なにかの機会があってやって来る人。「をり〳〵」は折々。時の節目、なにかの機会、の意。波などが幾重にも折り重なるの意の「折り」に掛けている。○あまのかるてふめづらしき哉　「あまのかるてふ」は、「め」を導き出すための措辞。「め」は「海藻」の意。その「め（海藻）」に言い掛けて「めづらし」を言った。珍しいことだなあ、ということ。
【所載】ナシ
【参考】詠歌事情は知られないが、なにかの機会に久しぶりにやって来た人を迎えて、たわむれた歌か。第五帖の「めづらし」の題の下には、「年を経ておとづれもせぬ伊勢の海のあまのかるてふめづらしきかな」（二九四三）という歌があり、当該歌と下句が同一である。

一八七二　うきめのみうきてみだるゝ浦なればかりにのみこそあまはよるらめ

【異同】ナシ
【現代語訳】ここは、浮きめ（海藻）ばかりが浮き乱れている浦だから、ただ海藻を刈るためにだけ、海人は立ち寄るのであろう。（私のところは、つらいことばかりで心憂く思い乱れているところだから、ほんのかりそめにだけ、あの人は立ち寄るのであろう。）
【語句】○うきめのみうきてみだるゝ浦なれば　浮き「め（海藻）」ばかりが浮き乱れている浦だから。「め」は一八七一番歌参照。初・二句では、「浮きめ（海藻）のみ浮きて乱るる」という景に「憂き目のみうきて乱るる」という人事を言い掛けている。また上三句では、「うきめ」「うきて」「うら」と語頭の音が揃っている。○かりにのみこそ　ほんのかりそめにだけ。「刈りにのみこそ」に「仮にのみこそ」を掛けている。「め（海藻）」「浦」は「あま」の縁語。

【所載】古今集・恋五・七五五

一八七三　おきつなみうちよするもにいほりしてゆくゑさだめぬわれからぞこは
われから

【異同】ナシ
【現代語訳】沖つ波が打ち寄せる藻にかりそめに宿って行方も定まらぬわれからのような、わが身の上。しかし、みずからが招いたことなのだ、これは。
【語句】◎われから　海藻に付着して生きる甲殻類の小動物。乾くと体が割れるので、この名がある。和歌では「我から」に掛けて、ほかの誰のせいでもなく自分からしたことだ、の意で用いられることが多い。○おきつなみうちよするも　沖つ波打ち寄する藻。沖からの波が岸に打ち寄せる海藻。○いほりしてゆくゑさだめぬ　いほりしてゆくへさだめぬ。仮の住まいとして住んで、身の行く末も定まらぬ。初句から第四句までは「われから」を導くための序詞。○われからぞこは　「こはわれからぞ」の倒置。自分が招いたことなのだ、これは。海藻に棲む「われから」に「我から」を掛けている。「こは」は「此は」。いまここにあるこの状態は、ということ。
【所載】ナシ

一八七四　きみはなをうらみられけりあまのかるもにすむゝしの名をわすれつゝ

【異同】ナシ
【現代語訳】それでもやはり、あなたのことは恨みに思われます。あの「あまのかる藻に棲む虫」と詠まれた「われから」の名を忘れながら。（なにごともみずから招いたことだということを忘れながら。）
【語句】○なをうらみられけり　なほうらみられけり。そうは言うものの、やはり恨めしく思われる。○あまのかるもにすむゝしの名　「われから」の名のこと。古今集八〇七番歌「あまの刈る藻にすむ虫のわれからと音をこそ泣かめ世をば恨みじ」（古今六帖・一八七五）に拠っている。○わすれつゝ　「われから」という虫の名を忘れる、ということに、「我から」招いた結果だということを忘れる、の意を重ねて言っている。「つゝ」は、その状況がくり返されているさまを表す。
【所載】拾遺抄・恋下・三三四／拾遺集・恋五・九八六／清慎公集・九八

【参考】作者名は表示されていないが、拾遺集では藤原実頼に贈った閑院大君の歌とされ、清慎公集では「女のもとにおくる」という実頼の歌となっている。

内侍のすけき○よいこ

一八七五　あまのかるもにすむ虫のわれからとねをこそなかめよをばうらみじ

【異同】ナシ
【現代語訳】海人が刈る藻に棲んでいる虫の「われから」。その名のように、すべては自分から招いたことだと、声に出して泣きましょう。二人の仲がこうなったことを、恨みますまい。
【語句】○あまのかるもにすむ虫の　「われから」を導き出すための序詞。○われから　海藻に棲む「われから」に、「我から」を掛ける。○ねをこそなかめ　声を立てて泣こう。「音を泣く」は、声に出して泣くこと。○よをばうらみじ　「よ」は世、ここでは男女の仲のこと。こうなってしまった仲を恨むまい。
【所載】古今集・恋五・八〇七／新撰和歌・三五一／俊頼髄脳・一四七／和歌色葉・三〇四／西行上人談抄・二三／兼載雑談・二八／伊勢物語・六五段・一二〇
【参考】作者名「内侍のすけきよいこ」とあるが、その根拠は不明、その人も不明。古今集では「典侍藤原直子朝臣」の作である。

〔以上五首担当　中野・山下〕

一八七六　わかのうらにわかめかりほすわれをみておきこぐ舟のすぎがてにする

【異同】ナシ
【現代語訳】和歌浦の海辺で若布を刈り干す私を見て、沖を漕ぐ舟が通り過ぎかねているよ。
【語句】◎うら　浦。海・湖の湾曲して陸地に入り込んでいる所。湾。入り江。海辺をも指す。この小題では、地名が冠せられて「……の浦」と歌枕となっている例が多い。また「恨む」との掛詞も見える。○わかのうら　和歌山市和歌浦の玉津島神社のあるあたり。今は多くが陸続きとなっている。○わかめ　海藻のわかめ(若布)。「わかめ」は、万葉集に、「角島(つのしま)の瀬戸のわかめは人のむた荒かりしかど我とは和布(にきめ。私に

とってはやわらかいわかめだ、の意)」(三八九三〈旧三八七一〉)などと詠まれる。古今集以後、「みるめ(海松布)」に比べて、「わかめ」の詠草例は少ない。当該歌では、「わかの浦」「わかめ」「われをみて」と「わ」音が繰り返される。○おきこぐ舟の　沖を漕いでいる舟が。一八三八番歌参照。○すぎがてにする　過ぎかねていることだ。自分(女性)を見つめて沖漕ぐ舟がなかなか進まないというもの。

【所載】夫木抄・一一四四三

一八七七　君なくてあしかりけりとおもふにはいとゞなにはのうらぞすみうき

【異同】ナシ

【現代語訳】あなたが居なくなって暮らしが悪くなった、葦を刈るこんな身になってしまったと思うにつけては、ますます難波の浦は住みにくいものとなってしまった。

【語句】○あしかりけり　「悪しかりけり」(暮らしが不如意になった)に、「葦刈りけり」(葦を刈り商いにしてきた)を掛ける。○なにはのうら　難波の浦。摂津国の歌枕。難波の低湿地に葦が生い茂っていた様は、「津の国のなにはの葦のめもはるにしげきわが恋人知るらめや」(古今集・六〇四)などに見える。○おもふには　思うにつけては。

【所載】拾遺抄・雑下・五三〇／拾遺集・雑下・五四〇／源平盛衰記・一八三／今昔物語集・一六四／宝物集・三二八／大和物語・一四八段・二四九

【参考】いわゆる芦刈説話の歌。大和物語・一四八段に見えるが、諸本により、また所載欄の文献により、話の内容や贈答歌の有無など異なっている。

一八七八　みくまのゝうらのまつばらみがくれてねはひとつにやをひそはるらん

【異同】ナシ

【現代語訳】三熊野の浦の松原は水に隠れて、見えないところで一つの松の根に自然に次々と松が生育して増えていくのであろうか。

【語句】○みくまのゝうら　三熊野の浦。紀伊国の歌枕。三熊野の浦は、三重県から和歌山県にかけての熊野灘に面する海浜。浜木綿の名所として詠まれることが多い。○みがくれて　水隠れて。水に隠れて根の辺りが見え

ない様。○をひそはるらん　生(お) ひ添はるらん。松が自ずから次々に生育していくのであろうか。語構成は、「生ひ添ふ」＋自発の意の助動詞「る」＋現在推量「らん」。「らん」は、松原の光景から、水に隠れている根の様を思い推量する。「み吉野に千代の春々生ひそはる小松のみどりひきつくさめや」(能宣集・七五、「子の日」題)。「松」の「生ひ添ふ」は、祝や賀の歌で詠まれるケースが多い。

【所載】夫木抄・一三七五七

一八七九　風ふけばいくたのうらのいくたびかあるゝこゝろをわれにみすらん

【異同】ナシ

【現代語訳】風が吹くと、生田の浦の海はいくたびも荒れる。疎遠になる心をいったいあなたは幾度私に見せるのでしょうか。

【語句】○風ふけば　風が吹くと。○いくたのうら　生田の浦、摂津国の歌枕。同音の「いくたび」を導く。○あるゝこゝろ　「あるる」は、初句からの続きで海が荒れる「荒るる」と、恋人が疎遠になってゆく「離るる」とを掛ける。「ふる里にあらぬものからわがために人の心のあれて見ゆらむ」(古今集・七四一)。○われにみすらん　私に見せるのでしょうか。

【所載】伊勢集Ⅰ・三八八／伊勢集Ⅱ・三九二

【参考】拾遺抄・三三〇や拾遺集・八八四に、「津の国のいくたの池のいくたびかつらき心を我に見すらむ」という類歌がある。

一八八〇　おふのうらに生ふるたまものかりそめにあまとぞわれはなりぬべらなる

つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】おふの浦に生育している玉藻を刈り初める、仮りそめに海人と私はなってしまいそうだ。

【語句】○おふのうら　をふのうら。生の浦、麻生の浦、芋生の浦とも。「おふの浦に片枝さし覆ひなるなしのなりもならずも寝て語らはむ」(古今集・一〇九九)。伊勢国の歌枕。ここでは同音を反復して、「生ふる」を導き出す。○たまもの　玉藻の。所載欄の一七七六番歌に「たまもを」とあり、現代語訳はそれに従った。○かり

そめに　「藻」を「刈り初め」と、「仮りそめ」とを掛ける。
【所載】古今六帖・第三帖「あま」一七七六番既出
【参考】作者名「つらゆき」は、一七七六番歌の所載欄の文献に一致する。所載欄の「あま」では、初・二句を「なにはがたをふる玉もを」、三句を「かりそめの」とする。

〔以上五首担当　杉本・加藤〕

一八八一　あはでのみおもへばくるしありそうみのうらみやせましかひはなくとも

【異同】ナシ
【現代語訳】まったく逢うことがないばかりであなたのことを思えば、苦しい。もう恨んでしまおうか、そのかいはなくても。
【語句】○あはでのみ　逢うことがない、という状態ばかりで。まったく逢うことがなくて。○ありそうみの　荒磯海の。「荒磯海」は露頭した岩の多い磯海のこと。ここの「ありそうみの」は、海の「浦」に掛けて「恨み」を導き出すための措辞。○かひはなくとも　恨むかいはなくても。浦の「貝」に効果の意の「かひ」を掛けた。「浦」「貝」は「荒磯海」の縁語。
【所載】ナシ

一八八二　たかしまのあどのみづうみこぎすぎてしほみつうらにいそぎこぐらん

【異同】ナシ
【現代語訳】あの舟は、高島の安曇の湖を漕ぎ過ぎて、いまは潮の満ちている浦に向けて急いで漕いでいることだろう。
【語句】○たかしまのあど　高島の安曇。高島は大地名、安曇はその中の小地名。琵琶湖北西岸、現在の滋賀県高島郡安曇川町のあたり。安曇川河口が湖につき出た岬のようになっていて、舟の航行の際の目標とされていた。○みづうみ　本文に従って「湖」と現代語訳したが、安曇のあたりに湖は実在しない。所載欄万葉集の歌では「あどのみなとを」である。○しほみつうら　潮の満ちている浦。所載欄万葉集の歌では「しほつすがうら」。塩津

と菅浦は琵琶湖北岸の地名だが、古今六帖のこの歌で「しほみつうら」を固有の地名とは解しにくい。
【所載】万葉集・一七三八（旧一七三四）高嶋之　足利湖乎　滂過而　塩津菅浦　今香将滂　タカシマノアドノミナトヲコギスギテシホツスガウライマカコグラム　たかしまのあどのみなとをこぎすぎてしほつすがうらいまかこぐらむ
【参考】「いせ」という作者名があるが、これは万葉集の異伝歌であって、伊勢の作とは考えられない。伊勢集にも収載されていない。

一八八三　きてみればなごのうらまによるかひのひろひもあえず君ぞ恋しき

【異同】ナシ
【現代語訳】来てみれば、このなごの浦に波のうち寄せる貝が拾いきれぬほどであるように、わたしは、収拾もつかぬほどあなたが恋しい。
【語句】○なご　奈呉。万葉集に詠まれている地名。巻七では摂津国、巻十七・十八・十九では越中国として詠まれ、双方に「なご」があったようである。ただしこの歌が、どちらの「なご」であったかは、定め難い。○うらま　万葉集の「宇良末（うらみ）」が「宇良末（うらま）」と誤写・誤読されたことにより生じた語。意味は「浦廻（うらみ）」に同じ。海や湖の岸が大きく湾入しているところ。○ひろひもあえず　ひろひもあへず。拾いきることができず。貝が数多くうち寄せられて拾いつくせない、ということに、恋の気持ちがたえまなくわきあがって収拾がつかない、ということを重ねて言っている。上三句は「ひろひもあえず」に掛かる序詞。
【所載】万代集・二三〇一／夫木抄・一一五〇二／伊勢集Ⅰ・三七九／伊勢集Ⅱ・三八三／伊勢集Ⅲ・四二九
【参考】この歌は、万葉集巻十八の「波立てば奈呉の浦みに寄る貝のまなき恋にぞ年は経にける」（四〇五七〈旧四〇三三〉）と第二・三句が近似し、歌想や序詞の掛かり方にも類似が見られる。

一八八四　あまのすむうらこぐふねのかぢをなみ世をうみわたるわれぞかなしき

【異同】かちをなみ―さほをなみ（大）
【現代語訳】漁師の住む浦を漕ぐ舟に楫がない、ちょうどそのように、頼りとする男もなくてこの世をつらい思

いで生きてゆくわたしこそ、悲しいことだ。
【語句】○かぢをなみ　楫がなくて。「かぢ」は櫓や櫂など舟を運行するための道具。ここでは、世を渡るのに頼りとする男もなくて、ということ。「なみ」の「み」は、形容詞および形容詞型活用語の語幹に付いて、……なので、……だから、の意を表わす。○うみわたる　「海渡る」に「倦みわたる」を掛ける。「倦みわたる」は、つらい思いをしながらずっと生きてゆく、の意。「浦」「舟」「楫」「海」は「海人（あま）」の縁語。
【所載】後撰集・雑一・一〇九〇／小町集Ⅰ・三三／小町集Ⅱ・五二／俊成三十六人歌合・三六／時代不同歌合・四一
【参考】作者名「こまち」は所載欄の文献に一致する。後撰集では、「定めたるをとこもなくて、もの思ひ侍りけるころ」という詞書がある。

一八八五　いなびのはゆきすぎぬらしあまつたひひかせ（サ）のうらにあまつたひ（ナミタテル）みゆ

【異同】あまつたひみゆ（ナミタテル）―あまつたゆみゆ（大）
【現代語訳】いなび野はもう行き過ぎたらしい。「ひかせの浦」に太陽が空をわたってゆくのが見える。
【語句】○いなびの　所載欄万葉集の歌にあるごとく「いなみの（印南野）」か。印南野は、現在の兵庫県明石川の下流域から加古川の下流域へかけての野。○あまつたひ　「日」に掛けて「ひかせの浦」を導き出すための措辞。所載欄万葉集の歌では第三句は「あまつたふ」で、「日」に掛かる枕詞となっている。○ひかせのうら　「せ」に傍記「サ」とあり、「ひかさの浦」か。所載欄万葉集の歌でも「日笠浦（ひかさのうら）」である。日笠浦は現在の兵庫県高砂市曽根町と姫路市大塩町にまたがる日笠山の南側の浦。○あまつたひみゆ　太陽が空をわたってゆくのが見える、の意か。「あまつたひ」が第三句と重なるのが不自然であり、傍記「ナミタテル」の方が歌意はよく通る。所載欄万葉集の歌でも「波立てりみゆ」である。
【所載】万葉集・一一八二（旧一一七八）印南野者　往過奴良之　天伝　日笠浦　波立見　イナミノハユキスギヌラシアマツタフヒカサノウラニナミタテルミユ　いなみのはゆきすぎぬらしあまつたふひかさのうらになみたてりみゆ／夫木抄・一一七一〇／和歌初学抄・二五五

一八八六　しほがまのうらとはなしに君こふるけぶりたえずもなりにけるかな

〔以上五首担当　山下〕

【異同】ナシ
【現代語訳】あの塩竈の浦というわけではないのに、あなたを恋う思いが、まるで塩竈の浦の煙のように、たえるまもなく湧くようになってしまったなあ。
【語句】○しほがまのうら　塩竈の浦。みちのくの歌枕。現在の宮城県塩竈市から松島湾全体にかけての海岸。左大臣源融が、都六条河原院にその景を写して作庭したことで知られる。塩焼く煙、釣する海人や舟などが景物として詠まれた。○とはなしに　……だというわけではないのに。○君こふるけぶり　あなたを恋する思いの煙。燃えあがるような恋のこころを塩焼く煙にたとえた。○たえずもなりにけるかな　絶えるときもなくなってしまったなあ。
【所載】続後撰集・恋二・七三七

一八八七　いかでわれこゝろをだにもやりてしかとをくなるみのうらみがてらに

【異同】ナシ
【現代語訳】どうにかして、私はこの心をだけでも行かせたい。遠くあの鳴海の浦を見がてらに。（なんとかしてこのつらい気持だけでも晴らしたい。あの人と遠くなるこの身の、恨みかたがたに。）
【現代語訳】○いかで　なんとかして。どうにかして。第三句の「てしか」に呼応して強い願望をあらわす。○こゝろをだにもやりてしか　身は行かせられないが、せめて心だけでも行かせたいものだ。「こゝろをやる」には心を晴らす、の意もこめる。○とをくなるみのうらみがてらに　「とをく」は「とほく（遠く）」。「遠く鳴海の浦見がてらに」に「遠く成る身の恨みがてらに」を掛ける。「鳴海の浦」は尾張国の歌枕。現在の名古屋市緑区鳴海町。「遠く成る身」は、相手とのへだたりが遠くなるわが身、ということ。「がてら」は主となる動作のついでに別の動作をすること。……のついでに。……かたがたに。ここでは「浦見がてらにこころを行かせる」と、「恨みがてらにこころを晴らす」の両意を重ねて言っている。
【所載】ナシ

一八八八　みくまのゝうらよりをちにこぐ舟のわれをばよそにへだてつるかな　伊勢

【異同】ナシ
【現代語訳】み熊野の浦から遠くへ向けて漕いでゆく舟のように、あの人は、自分とはかかわりのない者として、私にすっかり隔てを置くようになったなあ。
【語句】○みくまのゝうら　み熊野の浦。歌枕。紀伊国から伊勢国へかけての熊野灘に面した浦々。「浜木綿」と共に詠まれることが多い。○をちにこぐ舟の　はるかな遠方へ向けて漕いでゆく舟のように。上三句は「よそに」を導き出すための序詞。次第に隔たりが大きくなってゆくさまを表わしている。○よそに　かけ離れて関係のないものとして。○へだてつるかな　隔意を持つようになったなあ。疎々しくなってしまったなあ。
【所載】新古今集・恋一・一〇四八／伊勢集Ⅰ・三八〇／伊勢集Ⅱ・三八四／伊勢集Ⅲ・四三〇／近代秀歌・九六
【参考】作者名「伊勢」とあるが、伊勢の歌とは認められない。伊勢集諸本では古歌混入部分にある歌であって、作者不明の古歌である。

一八八九　もしほやくあまのたくひのもえざらばふけゐのうらのうら見つるかな

【異同】うらのうら見つるかな―うらをけふみつるかな（御・桂・大）
【現代語訳】［上句と下句の関係に不整合が感じられるが、本文のままに訳しておく。］藻塩を焼く海人びとの焚く火がもし燃えなかったならば、（煙に妨げられずに）吹飯の浦の海岸を見たことだなあ。
【語句】○もしほやく　藻塩焼く。製塩のために海水を注いだ海藻を燃やす作業。○あまのたくひ　海人の焚く火。製塩のために焚く火である。「あま」は海人。漁や製塩など海に拠って暮らしている人々。○もえざらば　もし燃えなかったならば。仮定の言い方である。○ふけゐのうら　吹飯の浦。和泉国の歌枕。現在の大阪府泉南郡深日（ふけひ）の海岸。平安時代には紀伊国の吹上の浦と混同されることがあった。○うら見つるかな　浦見つるかな。浦を見たことだなあ。「浦」は、海や湖などが湾曲して陸地へ入りこんだところ。「うらのうら見つるかな」と「うら」の語が重なっているのは不自然。傍記および他本の「うらをけふみつるかな」の方が自然である。また、上句が「もえざらば」と仮定形で言われているのに、末句が「見つるかな」と完了形になっているのも不審。「ふけひのうらの」は同音くり返しで「うら見つるかな」を導き出すための技巧か、「浦見つるかな」に「恨みつるかな」を掛けたか、と考えてみても、上・下句の対応の不自然さは解消されない。

【所載】ナシ
【参考】上句と下句のつながり方に不整合が感じられる。特に底本にはなにか本文上の錯誤があるのではなかろうか。

一八九〇　わがこひはしる人あらばたごの浦にたつらん（よせくるイ）なみのかずをかぞへよ

【異同】わかこひは―我恋を（大）
【現代語訳】わたしの恋の思いは、もしそれを知る人があるならば、あの田子の浦にしきりに立つであろう波の数を数えてくれ。ちょうどそれと同じように数かぎりもないのだ。
【語句】○しる人あらば　もしそれを知る人があるならば。所載欄の後撰集では、初・二句が「わが恋を知らんと思はば」となっていて、その方が歌意はよく通る。○たごの浦　田子の浦。駿河国の歌枕。現在の静岡県富士市、駿河湾の海岸。○たつらんなみ　立つらん波。立つであろう波。眼前に見えていない波の景を推量して言っている。
【所載】後撰集・恋二・六三〇／興風集Ⅰ・七三／興風集Ⅱ・二三

〔以上五首担当　林・山下〕

一八九一　ゆふづくよおぼつかなきを玉くしげふたみのうらはあけてこそみめ　中納言かねすけ

【異同】ナシ
【現代語訳】夕月の出る夜はあたりがはっきり見にくいので、二見の浦は夜が明けてから見ることにしよう。
【語句】○ゆふづくよ　夕方出る月。あるいはその月の出る夜。夕月が出る陰暦上旬は月の入りが早いので「を暗し」「おぼつかなし」「ほのか」などとともに用いられることが多い。○玉くしげ　「くしげ」は櫛などを入れる箱。「玉」は美称。ここは「ふた」を導く枕詞。○ふたみのうら　伊勢、播磨、但馬などにある歌枕。所載欄の古今集・四一七番歌の詞書には「但馬の国の湯へまかりける時に、二見の浦といふ所に泊まりて……」とあり、ここは但馬の二見の浦であることがわかる。なお「ふたみ」は地名の「二見」に「蓋」および「身」を掛ける。○あけてこそみめ　夜が明けてから見よう。「明けて」に「開け」を掛け、「蓋」「身」「開け」は「玉くしげ」の

縁語。
【所載】古今集・羈旅・四一七／新撰和歌・一八四／兼輔集Ⅰ・九〇／兼輔集Ⅱ・一六九／井蛙抄・四三一
【参考】作者名「中納言かねすけ」は所載欄の文献に一致する。

一八九二　あしきたの野さかのうらに舟出してみしまにゆかんなみたつなゆめ

【異同】野さかの―野さきの（御・桂）
【現代語訳】葦北の野坂の浦に舟出して、水島に行こう。波よゆめゆめ立ってくれるな。
【語句】○あしきたの　「あしきた」は熊本県葦北郡。○野さかのうら　所在未詳。葦北であるから熊本県南部に位置するはず。○みしまにゆかん　「みしま」は万葉集では「水島」とする。現在の八代市の西南部、南川の河口にある小島という。○なみたつなゆめ　波よ決して立つな。「ゆめ」は副詞。助詞「な」とともに用いられることが多く、強い禁止を表す。
【所載】続後撰集・羈旅・一三二一／万葉集・二四七（旧二四六）葦北乃　野坂乃浦従　船出為而　水嶋尓将去　浪立莫勤　アシキタノノサカノウラニフナデシテミシマニユカムナミタツナユメ　あしきたののさかのうらゆふなでしてみづしまにゆかむなみたつなゆめ／夫木抄・一一五五三／和歌初学抄・二六二

人丸イ本

一八九三　おふのうらにふなのりすらんをとめごがたまものすそにしほみつらんか

【異同】ナシ
【現代語訳】今ごろおふの浦で舟遊びをしているであろう乙女たちの、その美しい裳の裾に潮が満ち寄せていることだろうか。
【語句】○おふのうら　伊勢国の歌枕。一八八〇番歌参照。○たまものすそに　美しい裳の裾に。「たま」は美称。
【所載】拾遺集・雑上・四九三／万葉集・四〇（旧四〇）嗚呼見乃浦尓　船乗為良武　嬾嬬等之　珠裳乃須十二　四宝三都良武香　ア(ヲ)ミノウラニフナノリスラムヲトメラガタマモノスソニシホミツラムカ　あみのうらにふなのりすらむをとめらがたまものすそにしほみつらむか、三六三二（旧三六一〇）安胡乃宇良尓　布奈能里須

良牟　乎等女良我　安可毛能須素尓　之保美都良武賀　アゴノウラニフナノリスラムヲトメラガアカモノスソニシホミツラムカ　あごのうらにふなのりすらむをとめらがあかものすそにしほみつらむか／夫木抄・一一六〇六／人麿集Ⅰ・三六、五七／人麿集Ⅱ・二二〇／人麿集Ⅲ・六一五、七三六／井蛙抄・四二五

【参考】作者名「人丸」に「イ本」との注記があるが、所載欄の文献には一致する。

一八九四　我こふるいもにあひさすたまのうらにころもかたしきひとりかもねん

【異同】我こふる―わかこふる（桂）

【現代語訳】私の恋しく思う彼女に逢えず、玉の浦に、衣を片敷いて一人淋しく私は寝るのだろうか。

【語句】○いもにあひさす　下句から考え、「あひさす」は逢うことができないという意であろうが、語構成が不明。万葉集では「あはさず」とする。○たまのうら　所在未詳。和歌山県那智勝浦近辺の入海かとする説がある。○ころもかたしき　衣片敷き。二人並んで衣を敷いて寝るべきところを、一人分だけ敷き、淋しく寝る意。

【所載】万葉集・一六九六（旧一六九二）吾恋　妹相佐受　玉浦丹　衣片敷　一鴨将寐　ワガコフルイモニアハサズタマノウラニコロモカタシキヒトリカモネム　あがこふるいもはあはさずたまのうらにころもかたしきひとりかもねむ／夫木抄・一一四六四

一八九五　いせのうみにあまのとるてふわすれがひわすれにけらしきみもきまさず

かひ

【異同】ナシ

【現代語訳】伊勢の海で漁師がとるという忘れ貝、その貝のようにあなたも私のことを忘れてしまったらしいですね、おいでになりませんもの。

【語句】◎かひ　蛤、あさり、鮑の類。和歌では、忘れ貝、うつせ貝など、独特の名称のもとに用いられる。また、「甲斐あり」「甲斐なし」などの語と掛けても用いられる。○いせのうみに　「伊勢の海」は歌枕。今の三重県北中部に面した海。○わすれがひ　二枚貝の離れた一片を指すという。一般には、一八九六番、一八九七番のように、それを拾うとつらく恋しい思いが忘れられると詠まれるが、ここでは、自分のことを相手が忘れると詠んでいる。○わすれにけらし　忘れてしまったらしい。「けらし」は過去の事実についての推定。根拠のある場

合が多く、ここでは「きみもきまさず」が根拠となっている。○きみもきまさず　あなたもいらっしゃらない。「きまさず」の「まさ」は尊敬の意を表す補助動詞「ます」の未然形。

【所載】続後撰集・恋五・九八四／夫木抄・一三〇七七

〔以上五首担当　久保木〕

一八九六　よするなみうちもよせなんわが恋ふる人わすれがひをりてひろはん　つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】寄せる波よ。渚にうち寄せてほしい。私が恋しく思う人を忘れることができるというあの忘れ貝を。そうしたら私は、渚におりてそれを拾おう。

【語句】○うちもよせなん　うち寄せてほしい。「うち」は接頭語。「も」は強調。「なん」は他へ誘え望む助詞。ここでは「寄する波」へ作者が誘え望んでいる。○わが恋ふる人わすれがひ　私が恋しく思っているあの人を忘れることができるという忘れ貝。「わが恋ふる人」に「人忘れ貝」を言い掛けた。「わすれがひ」は、二枚貝の二片の貝殻が離ればなれになったのちの、一片のことだという。和歌では、つらいことを忘れさせてくれるものとして詠まれることが多い。一八九五番歌参照。○をりてひろはん　おりて拾はん。ここでは、船から渚におりて「わすれがひ」を拾おう、ということ。参考欄参照。

【所載】土佐日記・四一

【参考】作者名「つらゆき」とあるが、土佐日記で見ればこの歌は、承平五(九三五)年二月四日、帰京途上の船上で「船なる人」が亡児を追慕して詠んだ歌、ということになっている。さらにこの歌に対しては、「ある人」が「忘れ貝拾ひしもせじ白玉を恋ふるをだにもかたみと思はむ」(古今六帖・三一四一)と返歌したともされている。つまり土佐日記の中では、「船なる人」と「ある人」は、亡児の両親、すなわち貫之の妻と貫之自身か、と思われるような叙述になっている。しかし、土佐日記そのものが貫之の作品であることから考えるとき、当該歌および古今六帖三一四一番歌は、共に貫之の作と見るのが順当であろう。

一八九七　わがせこをこふればくるしいとまあらばひろひにゆかむこひわすれ貝　さかのうへのらう女

【異同】ナシ
【現代語訳】あの人を恋しく思っていると苦しい。暇があったならば拾いに行こう。恋忘れ貝を。
【語句】○わがせこ　女性が、夫や恋人など親しい男性をさしていう語。わたしのあの人。○こひわすれ貝　恋忘れ貝。忘れ貝の中でも、特に恋の辛さを忘れさせてくれる貝、ということ。「わすれ貝」は一八九六番歌参照。
【所載】拾遺抄・雑上・四六六／拾遺集・雑恋・一二四五／万葉集・九六九（旧九六四）　吾背子尓　恋者苦　暇有者　拾而将去　恋忘貝　ワガセコニコフレバクルシイトマアラバヒロヒテユカムコヒワスレガヒ　わがせこにこふればくるしいとまあらばひりひてゆかむこひわすれがひ
【参考】作者名「さかのうへのらう女」は所載欄の文献に一致する。「さかのうへのらう女」は大伴坂上郎女のこと。家持の叔母であり、また妻の母でもある。

一八九八　伊勢のうみのなぎさによするうつせ貝むなしたのみによをつくし<ruby>つゝ<rt>つるイ</rt></ruby>

【異同】よをつくし<ruby>つゝ<rt>つるイ</rt></ruby>—よせつくしつゝ（御・桂）
【現代語訳】伊勢の海の渚にうち寄せられる実のないうつせ貝よ。あたかもそのように、あてにもならぬむなしい頼みにとらわれて、私はこの世の命を尽くしている。
【語句】○うつせ貝　虚貝。中身がなくなって空になった貝のこと。上三句は「むなし」を導く序詞。○むなしたのみ　空し頼み。あてにならぬことを頼みにすること。○よをつくしつゝ　この世の命を尽くしながら。「よをつくす」はこの世の一生を送ること。歌の末を「つゝ」で言い止めるのは、余情を残した言い方。
【所載】和歌童蒙抄・九六六

人まろ

一八九九　いとまあらばひろひてゆかむすみよしのきしにありてふ恋わすれがひ

【異同】ナシ
【現代語訳】暇があったら拾って行こう。住吉の岸にあるという恋忘れ貝を。
【語句】○すみよし　住吉。摂津国の歌枕。現在の大阪市住吉区の一帯。○恋わすれがひ　一八九七番歌参照。

【所載】新勅撰集・雑四・一二七九／万葉集・一一五一（旧一一四七）　暇有者　拾尓将徃　住吉之　岸因云　恋忘貝　イトマアラバヒロヒニユカムスミノエノキシニヨルテフコヒワスレガヒ　いとまあらばひりひにゆかむすみのえのきしによるといふこひわすれがひ／夫木抄・一三〇七五／和歌童蒙抄・九六七

【参考】作者名「人まろ」とあるが、根拠不明。所載欄の文献はみな、作者不詳である。なお、人麿集Ⅱには、「いとまあらば取りに来ませよ住吉の岸に生ひたる恋忘れ草」（一九九）という想の似た歌があり、また古今集墨滅歌には「道知らば摘みにも行かむすみのえの岸に生ふてふ恋忘れ草」（一一一一）という貫之の歌がある。

一九〇〇　ありそうみのうらめしくこそおもほゆれかたかひをのみ人のひろへば　みつね

【異同】ナシ

【現代語訳】恨めしく思われることだ。あの人は片貝ばかりを拾っていて、少しも逢おうとしてくれないから。

【語句】○ありそうみのうらめしく　「ありそうみの浦」に「恨めしく」を言い掛けた措辞。「ありそうみ」は荒磯海、露頭した岩の多い磯海のこと。○かたかひをのみ人のひろへば　片貝ばかりをあの人が拾っているから。「かたかひ」は片貝。貝殻が片側だけについている貝のこと。二枚貝のように貝殻が両側から合わさることがないところから、「片貝をのみ拾ふ」とは、相手がこちらに逢おうとしないという意味になる。和歌に「片貝」の詠まれた例は少なく、あるいは当該歌が初出例か。後代、覚性法親王の出観集に「みるめをばともに尋ねてかたかひの逢はで浦々に幾夜寝ぬらむ」（七一〇）がある。

【所載】和歌童蒙抄・九六四

【参考】作者名「みつね」とあるが、その根拠は不明。躬恒集にこの歌はない。ただし、所載欄和歌童蒙抄の歌は、第四句「うたがひをのみ」の形でこれを躬恒の歌としている。

〔以上五首担当　長戸・山下〕

一九〇一　すみよしのはまによるてふうつせがひみなきことしてわがこひんやも（みなにかゝりてイ）（めはイ）

【異同】みなきことして―みなきこともて（御・桂・大）　わかこひんやも（めはイ）―わか恋んやは（大）

【現代語訳】住吉の浜に打ち寄せるというううつせ貝に実がないように、不実な言葉でもって私があなたを恋した

りしようか。
【語句】○すみよし　住吉。摂津国の歌枕。現在の大阪市住吉区。万葉集では「須美乃延」「須美乃江」「住吉」「墨吉」「墨江」などと表記して「すみのえ」と訓んだが、平安時代には、「すみよし」と訓まれるようになった。「忘れ草（カンゾウ）」「松」「神」「浪」が景物。一〇六七番歌参照。○うつせがひ　中身がなくなった空の貝。一八九八番歌参照。上三句は「みなき」を導く序。○みなきことして　御所本他二本の本文「みなきこともて」として解す。不実な言葉でもって。「みなき」は貝の中身がない意と実がない意を掛ける。「こと」は言葉。○やも　反語。逆説的な形の愛の誓い。
【所載】万葉集・二八〇七（旧二七九七）住吉之　浜尓縁云　打背貝　実無言以　余将恋八方　スミノエノハマニヨルテフウツセカヒミナキコトモテワレコヒメ（ム）ヤモ　すみのえのはまによるといふうつせかひみなきこともちあれこひめやも／夫木抄・一一八七五

一九〇二　きのくにの秋のゝはまのわすれがひわれはわすれずとしはふれども

【異同】ナシ
【現代語訳】紀伊の国の秋野の浜の忘れ貝、その名のように私は忘れたりはしません、幾年経っても。
【語句】○きのくにの秋のゝはま　未詳。他に用例なし。所載欄の万葉集では「飽等浜」とするが、こちらも所在未詳。「秋」に「飽き（飽きる、厭わしくなる）」を響かせるか。○わすれがひ　忘れ貝。離れてしまった二枚貝の一片。この貝を拾うと辛い思いを忘れさせてくれるものとされる。「恋忘れ貝」の形で詠まれることも多い。一八九五番歌参照。初句からここまで、「（われは）わすれず」を導く序。「わすれがひ」「われ」「わすれず」と「わ」の頭韻が三回くり返される。
【所載】新拾遺集・恋四・一二六四／万葉集・二八〇五（旧二七九五）木国之　飽等浜之　忘貝　我者不忘　年者雖歴　キノクニノアクラノハマノワスレガヒワレハワスレズトシハフレドモ　きのくにのあくらのはまのわすれがひわれはわすれじとしはへぬとも／夫木抄・一一八四〇、一一八四七

なぎさ
一九〇三　しら浪のたちかへりくるこゝろかないまはなぎさによせんともせず

【異同】ナシ
【現代語訳】白波が寄せては返って来るように、繰り返し立ち戻ってくる私の心であったよ。今は逢うこともないあの人は（渚に寄せようとする波とは違って）もうこちらに寄りつこうともしない。
【語句】◎なぎさ　海や湖などの水辺で、陸地と水面が接するあたり。波打ち際。波の縁から「寄る」「返る」「立つ」といった表現が多用される。また「渚」に「無き」を掛ける例も多い。○しら浪の　白波の。「たちかへり」を導く措辞。「別れつるほどもへなくに白浪の立返りても見まくほしきか」（後撰集・七三〇）。○たちかへりくる　「白波が打ち寄せて返って来る」意に「心が幾度もくり返し戻ってくる」意を掛ける。○こゝろかな　心であることよ。男の心か女の心かはっきりせず解しにくいが、女の心とみる。○なぎさに　渚に。「渚」に、逢瀬が無い意の「無き」を掛ける。逢瀬が無くなった現在の自分の状況を喩える。「逢ふことのなぎさにし寄る浪なればうらみてのみぞ立ちかへりける」（古今集・六二六）。
【所載】ナシ

一九〇四　われのみやあだ名はたつといそにいでゝはまべもみればなみたたちけり

【異同】ナシ
【現代語訳】どうして私ばかりが浮気だという評判が立つのかと磯に出て、逢瀬がないという渚（波打ち際）を見ると、あだ名ならぬ波も立っていたよ。
【語句】○あだ名　誠実ではないという評判。浮気だという噂。「つれもなき人に負けじとせし程に我もあだ名は立ちぞしにける」（後撰集・七三三）。○なぎさをみれば　渚を見ると。「渚」に逢瀬が無い「無き」を掛ける。一九〇三番歌参照。○なみもたちけり　波も立っていることよ。自分と同じように逢瀬の無い「渚」には、あだ名ならぬ「波」が立っていたという趣向。
【所載】ナシ

一九〇五　あふことのなぎさに身をしなしつればかみもなみだにぬれぬ日ぞなき

【異同】かみもなみたに―袖も涙に（大）

【現代語訳】逢うことのないという渚にわが身をなしてしまったので、髪までもが波ならぬ涙に濡れぬ日がないことですよ。
【語句】○あふことのなぎさに　逢うことの「無き」に「渚」を掛ける。一九〇三番歌参照。「逢ふことのなぎさにし寄る浪なればうらみてのみぞ立ちかへりける」（古今集・六二六）。○身をしなしつれば　わが身を「渚」にしてしまったので。「君恋ふる涙の床に満ちぬればみをつくしとぞ我はなりぬる」（古今集・五六七）と似た趣向。○なみだにぬれぬ日ぞなき　涙に濡れない日はない。「涙」の「なみ」に「波」を響かせる。全身を「渚」にしてしまったので、「渚」が常に「波」に濡れ続けているように、我が髪までも「涙」に濡れ続けている、という意。
【所載】ナシ

〔以上五首担当　青木・中野〕

しま

一九〇六　くさかげのあらゐがさきのかさしまを見つゝやきみがみさかこゆらん

【異同】ナシ
【現代語訳】荒藺が崎の笠島を見ながら、あの方は今頃御坂を越えているのでしょうか。
【語句】◎しま　周囲を海や川、池などの水に囲まれた小陸地。海に浮かんだ島の他にも、池に配した築島を海中の島に見立てて「島」と詠まれることもある。古今六帖の「島」題の下には、海に囲まれ、具体的な固有名詞で呼ばれる島を詠んだ歌が収められている。○くさかげの　「荒」の枕詞。掛かり方は未詳。武田祐吉『万葉集全註釈』（改造社・一九四八）は草蔭は荒涼としているので「荒」に冠するとする。○あらゐがさきのかさしま　「あらゐがさき」は荒藺が崎。「あらゐのさき」とも。所在未詳。「かさしま」は笠島。所在未詳。夫木抄では武蔵国にあったとする。「秋の夜のあらゐのさきの笠島にさし出づる月は草かげもなし」（夫木抄・一〇四六二）。○みさか　御坂。坂の美称。「み」は接頭語。
【所載】万葉集・三二〇六（旧三一九二）草陰之　荒藺之埼乃　笠嶋乎　見乍可君之　山道超良無　一云、三坂越良牟　クサカゲノアラヰノサキノカサシマヲミツツカキミガヤマヂコユラム　一云、ミサカコユラム　くさかげのあらゐのさきのかさしまをみつつかきみがやまぢこゆらむ　一云、みさかこゆらむ／夫木抄・一〇四六三／家持集Ⅰ・二五二／家持集Ⅱ・一六六／和歌初学抄・二三八

おほえのあきつな

一九〇七　まれなれどあだ名はたちぬたはれじまよるしらなみをぬれぎぬにして

【異同】あきつな―あさつな（御・桂・大）　まれなれと―まめなれと（大）　ぬれきぬにして―ぬれきぬにきて（御・桂）

【現代語訳】私は誠実だというのに、浮気だという評判がたってしまいましたよ。「恋におぼれる」という名のたはれ島が寄せる白波で濡れるように、（私の衣を）濡れ衣にして。

【語句】○まれなれどあだ名はたちぬ　「まれなれど」は稀だけれど、という意になるが、二句以降とのつながりが悪いため、大久保本や所載欄の後撰集の「まめなれど」で解した。誠実なのに浮気という評判がたったという意。○たはれじま　多波礼島（風流島）。肥後国の歌枕。熊本県宇土市住吉町緑川河口近くの海中にある岩とされる。島の名の「たはれ」に、恋におぼれるという意の動詞「たはる」を響かせる。「名にしおはばあだにぞ思ふたはれ島浪のぬれぎぬ幾夜着つらん」（後撰集・一三五一／伊勢物語・一一一）。○ぬれぎぬにして　濡れ衣にして。ありもしない噂をされることを「濡れ衣を着る」という。所載欄の後撰集の「ぬれぎぬにきて」の方が自然であるが、ここは寄せる白波が私の衣を濡らし、濡れ衣を着せた、根も葉もない噂が立ったという意で解釈した。

【所載】後撰集・雑一・一一二〇

【参考】作者名「おほえのあきつな」は、他本では「おほえのあさつな」。「おほえのあさつな（大江朝綱）」は所載欄の文献に一致する。

一九〇八　わかるれどわかれとおもはずいではなるつるがのしまのたえじと思へば

【異同】ナシ

【現代語訳】［第四句を「つがるのしまの」と解して訳す。］別れても、別れとは思いません。出羽にあるつがるの島が途切れないように、あなたとの仲も絶えることはないと思うので。

【語句】○いでは　出羽。今の山形・秋田の二県にあたる。○つるがのしま　未詳。「いではなるつるがのしま」とあるが、出羽国には見つからず不審。所載欄の夫木抄の一〇四九三番・一一七六四番では、それぞれ出羽国

にある「つがろのしま」、「つがるのはま」となっている。「つがる」（津軽）は、はじめ越の国に属し、のちに出羽国の一部となった地方であり、底本の「いではなるつるがのしま」は「出羽なる津軽の島」の誤字あるいは転訛したものと考えられる。そこで、ここでは底本の「つるが」を「つがる」とみて解していきたい。さらに「つがるのしまのたえじ」と続くことから、連なり続く、つながるという意の動詞「つがる」（繋る）を掛け、「つがるのしま」という名の通り、あなたとの中は絶えないと思う、と言ったものと解釈しておく。○たえじと思へば　絶えないと思うので。「絶ゆ」は、長く続いている物や行為・状態が切れて続かなくなる意。

【所載】夫木抄・一〇四九三、一一七六四

一九〇九　なにはがたしほみちくらしあま衣たみのゝ嶋にたづなきわたる

【異同】ナシ

【現代語訳】難波潟に潮が満ちてきたらしい。田蓑島には鶴が鳴きながら渡って行くことだよ。

【語句】○あま衣　海人衣。海人の着る衣。「雨衣」の意を掛け、雨具の縁で「たみの（田蓑）」の「蓑」を導く。○たみのゝ島　田蓑島。摂津国の歌枕。「みの」という音が蓑を連想させ、雨との取り合わせで詠まれることが多かった。

【所載】古今集・雑上・九一三／新撰和歌・二一五／和歌初学抄・二四二／六百番陳状・一七二

【参考】神楽歌・大前張にも所載される。類歌に「和歌の浦に潮満ちくれば潟をなみ蘆辺をさして鶴鳴きわたる」（万葉集・九二四〈旧九一九〉）がある。

一九一〇　しもつけやむろのやしまにたつけぶりおもひありともいまこそはしれ（はけふイ）

【異同】ナシ

【現代語訳】下野国、室の八島に立つ煙。その煙には元になる火があると、そしてそれは私の心の思いの火であると、今こそわかりましたよ。

【語句】○しもつけのむろのやしま　「しもつけ」は下野。今の栃木県。「むろのやしま」は室の八島。下野国の歌枕。栃木市惣社町にあった八つの島がある池、またはその池があるとされる大神神社をいう。清水が蒸発する様が煙のように見えることで有名。煙の縁で「思ひ」や「恋」の「ひ（火）」に掛けて恋歌が詠まれた。「いか

でかは思ひありとも知らすべき室の八島のけぶりならでは」（詞花集・一八八／藤原実方朝臣）。〇おもひ　「思ひ」の「ひ」に「火」を掛ける。煙の縁語。
【所載】続古今集・恋一・一〇四三／夫木抄・一〇四九七／袖中抄・八九三
〔以上五首担当　三浦・山村英理子〕

たゞみね

一九一一　あなこひしいきてや見ましきのくにゝいまもありてふうらのはつ島

【異同】いきてやみまし―ゆきてやみまし（御・桂・大）　うらのはつ島―うらのよつしま（御）
【現代語訳】ああ、恋しい。行って見ようかなあ。紀の国に今もあるという浦のはつ島を。
【語句】〇いきてや見まし　行って見ようかなあ。「いき」は万葉集から用いられてはいるが、「ゆき」の形の方がより多く用いられている。「や」は疑問の助詞、「まし」は反実仮想の助動詞。「や……まし」と用いられる場合は、迷いやためらいの気持を表わす。〇きのくに　紀伊国。現在の和歌山県と三重県の一部。〇うらのはつ島　当該歌によれば紀伊国の歌枕。五代集歌枕も「紀州」とする。ただし、夫木抄は「摂津又紀州」とし、万代集には「津の国の浦の初島はつかにも見なくに人の恋しきやなぞ」（一七七四）という歌がある。
【所載】後撰集・恋三・七四二
【参考】作者名「たゞみね」とあるが、所載欄の後撰集では「戒仙法師」の作となっている。

一九一二　みちのくにありといふなる松しまのまつにひさしくとはぬ君かな

【異同】ナシ
【現代語訳】みちのくにある、と聞いている松島。その名の「まつ」のように待っているのに、ずいぶん久しく訪ねてこないあなたですね。
【語句】〇みちのく　「みちのおく」の約。旧東海・東山両道の奥。現在の福島・宮城・岩手・青森の諸県に相当する地域。〇ありといふなる　ある、と聞いている。「なる」は、動詞・助動詞の終止形に接続して伝聞・推定を表わす助動詞。〇松しま　みちのくの歌枕。陸前国、現在の宮城県の松島湾。〇まつにひさしくとはぬ　待っているのに長いこと訪れてこない。「松」に「待つ」を掛けた。上三句は「まつ」の音をくり返すことによっ

て「待つ」を導き出す序詞。
【所載】続古今集・恋四・一二九三

一九一三　しろたへのなみうちかへしあま衣うら島にきてぬれやわたらん

【異同】ナシ
【現代語訳】白い波がうち返すようにくり返し「うら島」に来て、私の海人衣はすっかり波にぬれてしまうのであろうか。（白い波がうち返すように雨衣を裏返しに着て、私はすっかりぬれてしまうのだろうか。）
【語句】○しろたへの　白妙の。まっ白な。ここでは「波」にかかる枕詞。○なみうちかへしあま衣うら島にきて　「波のようにくり返し『うら島』に来て」の意に、「波がうち返しているように雨衣をうち返し裏に着て」の意を重ねて言ったものか。「うら島」は固有名詞なのか、「浦の島」という意味の普通名詞なのか、判然としない。「あま衣」では「海人衣」に「雨衣」を掛けたか。「雨衣」は貴族たちが雨や雪を防ぐために装束の上にはおった衣。表布には油をひいた白絹を用い、裏布には油をひかない絹布を用いたという。「うら」では「浦」に「裏」を掛け、「きて」では「来て」に「着て」を掛けた。○ぬれやわたらん　すっかりぬれてしまうのであろうか。「わたる」はすっかりその状態になってしまうこと。暗に「涙にぬれわたるのであろうか」の意をこめているか。「返し」「海人衣」「浦」「ぬれ」は「波」の縁語。「しろたへ」「裏」「着て」は「衣」の縁語。
【所載】ナシ
【参考】なにか人事的寓意のある歌のようだが、具体的な詠歌事情が知られないので、明確な解が示せない。

一九一四　わたつうみのかざしにさせるしろたへのなみもてゆへるあはぢ島みん（かも）

【異同】ナシ
【現代語訳】海の神が髪飾りとして挿しているまっ白な波でもって、まわりを結いめぐらしている、淡路島を見よう。
【語句】○わたつうみの　海の神が。○かざしにさせる　かざしとして挿している。「かざし」は挿頭、髪や冠りものに飾りとして挿した花や木の枝のこと。○しろたへの　一九一三番歌参照。○なみもてゆへる　波でもって結っている。海の神が挿頭としている白波で、淡路島が結いめぐらされている、と見立てた。○あはぢ島　淡

路島。瀬戸内海にあり、兵庫県に属す。
【所載】古今集・雑上・九一一／新撰和歌・二二五／秀歌大体・一〇六／和歌童蒙抄・二二八

一九一五　もかりぶねおきこぎくらしいもが島かたみのうらにたづかけるみゆ

【異同】ナシ
【現代語訳】藻刈舟が沖を漕いで来るらしい。妹が島のかたみの浦に鶴が飛びかけっているのが見えるよ。
【語句】○もかりぶね　藻刈舟。海藻を刈る作業をしている舟。○いもが島かたみのうら　妹が島形見の浦。八雲御抄、五代集歌枕は紀伊国の歌枕としている。現和歌山県の加太の浦か、という。○たづ　鶴の歌語。○かける　翔ける。飛翔する。
【所載】新勅撰集・雑四・一三二七／万葉集・一二一八（旧一一九九）藻苅舟　奥榜来良之　妹之嶋　形見之浦尓　鶴翔所見　モカリブネオキコギクラシイモガシマカタミノウラニタヅカケルミユ　もかりぶねおきこぎくらしいもがしまかたみのうらにたづかけるみゆ／夫木抄・一〇四二八、一一四四六／和歌一字抄・一〇九六／袋草紙・七五七／和歌初学抄・二六五
【参考】「妹が島形見の浦」は、万葉集のこの一首に拠って歌枕となった地名。「妹」「形見」の語によって好まれたものであろう。中世以降の歌によく詠まれている。

〔以上五首担当　林・山下〕

一九一六　よそに見しとこよのしまのふたところあまとしきけばさらにたのまず

【異同】あまとしきけは―ありとしきけは（御・桂・大）
【現代語訳】［第四句は他本「ありとしきけば」に従って現代語訳した。］無縁な場所と見ていた常世の島、あなたには通うところが二所あると聞きましたので、私には関係のない人として決して頼みにしません。
【語句】○よそに見し　自分とは無関係と見た、の意。「よそに見しまゆみの岡も君ませばとこつみかどと宿直するかも」（万葉集・一七四）。○とこよのしま　「常世の島」か。「とこよのしま」の「とこ」に「床」を掛けるか。「とこよの島」の例歌は他に見えないが、「はやう見はべりし女のもとにまかりて、端の方に侍るに、寝てはべる所の見えしかば／いにしへのとこよの国や変はりにしもろこしばかり遠く見ゆるは」（元輔集Ⅰ・二一四）

のように、「とこよの国」に「床」を掛ける例がある。○ふたところ　通う所が二箇所。「二所」の例は和歌に見られなかった。○あまとしきけば　他本や所載欄の夫木抄「ありとしきけば」に拠った。○さらにたのまず　「さらに」は、いっこうに、決しての意、「たのまず」は、頼りにしないの意。和歌には他に見えない表現。
【所載】夫木抄・一〇四三四
【参考】所載欄の夫木抄には「六帖」と明記して、「よそに見し豊浦の島のふた心ありとしきけばわれはたのまん」とある。ふた心があると自分にも脈があるというものか。「とよらの島」は歌枕名寄にも見え、長門の国とする。

一九一七　あめによりたみのゝ嶋をけふゆけばなにはかくれぬものにぞ有ける　つらゆき

【異同】ナシ
【現代語訳】古今六帖・第一帖「あめ」四六五番既出。

一九一八　おもひくれなげきあかしのはまによるみるめすくなくなりぬべらなり　はま　らイ

【異同】ナシ
【現代語訳】あなたを思って日が暮れ、逢えないのを嘆いて夜を明かし、逢える夜は少なくなってしまいそうだ。
【語句】◎はま　海や湖など、水辺にそった平地。岩や石のない砂地である。波の寄せる景や、生業、また地名とともに詠まれる。○おもひくれ　「思ひ」に「日、暮れ」を掛ける。○なげきあかしのはま　「嘆き明かし」に「明石の浜」を掛ける。「はらたちし波いづかたに寄りにけむ思ひあかしの浜は我にて」（一条摂政御集・一一二）。○よるみるめ　「みるめ」は「海松布」と「見る目」（逢う機会）の掛詞。また、「よる」は、海松布が浜に「寄る」と、逢う「夜」とを掛ける。「寄る」「海松布」は、「浜」の縁語。○すくなくなりぬべらなり　少なくなってしまいそうだ。「べらなり」は確定推量の助動詞。第一帖・六一番歌参照。
【所載】夫木抄・一一八四三

一九一九　よそなりしこもふきあげの浜にほすみるめはかたきものにざりける

【異同】こもふきあけの―思ひふきあけの（御・桂・大）　ものにさりける―ものになりける（大）
【現代語訳】私には無縁であったいとしい娘（こ）。菰を吹き上げる吹上の浜にミルメ（海松布）を干すが、あの娘に「見る目」（逢う機会）を持つのは難しいことであった。
【語句】○よそなりし　無縁であった。「よそなり」は無関係であること。○こも　いとしい娘の意の「児（こ）」に、「菰（こも）」を掛ける。菰は、水辺に生えるイネ科の大型多年草で、「まこも草」に同じ。海辺での歌に、「まこもちる吹上の浜の月をみて恋しきことの数ぞまされる」（壬二集・二九一一）。なお、所載欄の夫木抄は他本と同じく「思ひ」。○ふきあげの浜にほすみるめ　吹上の浜に干すみるめ。第二句・三句の「菰吹上の浜に干す」は、「みるめ」を導く措辞。「みるめ」は、「見る目」（男女が逢い合う機会）に、「浜」の縁語「海松布」を掛ける。「吹上の浜」は、紀伊国の歌枕、現和歌山市の海岸。ここは、「菰、吹き上げ」を掛ける。枕草子に、「浜は、有度浜。長浜。吹上の浜。……」と見える。なお、「おほよどの浦に刈りほすみるめだに霞にたえて帰るかりがね」（新古今集・一七二五）という、海松布を干す例歌がある。
【所載】夫木抄・一一八二八

一九二〇　たぢまなる雪のしらはまもろよせにとおもひしものを人のとやみん

【異同】ナシ
【現代語訳】古今六帖・第二帖「くに」一二七四番既出。
【語句】○もろよせにとおもひしものを　一二七四番では「もろよせにおもひしものを」。「と」は引用を示す格助詞。お互いに心を寄せあっていたと思っていたのに、の意。

〔以上五首担当　杉本・加藤〕

一九二一　うどはまのうとくてのみやよをばへんなみのよる〳〵あひみてしかな

【異同】ナシ
【現代語訳】よそよそしいままでいようか（そんなことはできない）。波が岸に寄るごとく（あなたに）近寄っ

て、夜ごとお会いしたいものだ。
【語句】○うどはま　有度浜。駿河国の歌枕。静岡県静岡市の有度山南麓の海浜。東遊の駿河舞発祥の地とされる。「うとし」を導く。「いつとなく恋するがなる有度浜のうとくも人のなりまさるかな」（相模集・五八四）。○うとくてのみや　疎くてのみや。よそよそしいままでいようか。係助詞「や」は反語。○よをばへん　世をば経む。「世を経」は「この世を過ごす」の意。○なみのよる〳〵　「（波の）寄る」に「夜」を掛ける。「夜々」は「毎晩」の意。「波」「寄る」は「浜」の縁語。「我が恋は難波のあしのうらなれや浪のよるよるそよと聞きつつ」（信明集・六）。
【所載】新古今集・恋一・一〇五一

一九二二　ひたぶるにおもひなくてぞ人しれず思こゝろはありそうみのはま

【異同】おもひなくてそ―おもひなはてそ（御・桂・大）
【現代語訳】［第二句「おもひなくてぞ」は、諸本に拠り「おもひなはてそ」として解した。］ひたすらに考えに考えた末に思い切らないでください。表には出さないようおさえていますが、あなたを思う心はあります、ありそうみの浜。
【語句】○おもひなくてぞ　諸本の「おもひなはてそ」により「思ひな果てそ」と解す。「思ひ果つ」は「考えに考えた末に思い切る」意。「な……そ」は禁止をあらわす。○ありそうみ　岩が露頭する波の荒い海をいう普通名詞「荒磯海」。その「あり」に「思う心有り」の「有り」を掛ける。「君がため思ふ心はありそ海の浜の真砂に劣らざりけり」（宇津保物語・三七三）。
【所載】ナシ

一九二三　わぎもこがあかもぬらしてうへし田をかりてをさめむくらなしのはま

人まろ

【異同】ナシ
【現代語訳】いとしい妻が赤い裳の裾を濡らして植えた田（に実った稲）を刈って納める倉がない、くらなしの浜よ。

【語句】○わぎもこがあかもぬらして　我妹子が赤裳濡らして。「わぎもこ」は男から妻や恋人をいう語。「赤裳」は紅色の裳。○うへし田を　植ゑし田を。植えた田を。「し」は過去の助動詞「き」の連体形。
【所載】古今六帖・第二帖「なつのゝ」一一一一番既出
【参考】所載欄の一一一一番では初句から三句は「わぎもこがてさへぬれつゝうふるたを」。

一九二四　こひわびぬかなしきこともなぐさめむいづれなかひのはまべなるらん

【異同】いつれなかひの―いつれなかすの（御・桂・大）
【現代語訳】[下句の「なかひのはまべ」は、諸本に拠り「ながすのはまべ」として解した。]恋のつらさにどうすることもできなくなってしまった。悲しいことも慰めようと思う。どこが「流す」という、長洲の浜辺なのだろうか。
【語句】○こひわびぬ　恋ひわびぬ。「恋ひわぶ」は、恋のつらさに堪えかねる意。助動詞「ぬ」は完了。○なかひのはまべ　諸本および所載欄の拾遺集では「ながすのはまべ」。また定文歌合では「なぐさのはまべ」。ここでは「ながすのはまべ」で訳す。「長洲の浜辺」は、摂津国の歌枕、兵庫県尼崎市の海岸か。「長洲」に「流す」を掛ける。「人しれず落つる涙は津の国のながすと見えで袖ぞ朽ちぬる」（拾遺集・六七六）。
【所載】拾遺集・恋五・九八八／左兵衛佐定文歌合・二五

一九二五　スミヨシノオキツ白波風フケバキヨスルハナヲシレバキヨシモ

【異同】底本、片仮名デ行間ニ小字補入。　オキツ白波―オキツシヲナミ（御）　キヨスルハナヲ―キヨスルハマヲ（桂・大）
【現代語訳】住吉の沖の白波、風が吹くと寄せてくる（波の）花を見ると、まことに清らかなことだ。
【語句】○スミヨシ　住吉。摂津国の歌枕、大阪府大阪市の住吉神社のある地。海岸は景勝地で、神社は航海や和歌の神として崇敬されてきた。○キヨスルハナヲ　来寄する花を。「白波」を花と見立てたか。ただし、「花」では「浜」題にあわない。○ミレバキヨシモ　見れば清しも。助動詞「も」は詠嘆。
【所載】万葉集・一一六二（旧一一五八）住吉之　奥津白浪　風吹者　来依留浜乎　見者浄霜　スミノエノオキツシラナミカゼフケバキヨスルハマヲミレバキヨシモ　すみのえのおきつしらなみかぜふけばきよするはまをみ

ればきよしも

〔以上五首担当　平野・原山〕

一九二六　ますらおはみとりにたゝしをとめごはあかもすそびくきよきはまべを

あか人（人のみイ）

【異同】ナシ
【現代語訳】〔第二句を「みかりにたゝし」という本文で解した。〕勇士は御狩のお供にお出でになり、娘子は赤裳の裾を引いてゆく、清らかな浜辺を。
【語句】○ますらお　ますらを。勇ましく強く立派な男子。勇士。○みとりにたゝし　「みとり」は「見取（広く見渡してその中から選び取ること）」か。これでは意味がよく通じないので、所載欄の万葉集の「みかり（御狩）」として解した。御狩のお供にお出でになりという意。「たゝし」は「立つ」の尊敬語「立たす」の連用形。「日並の皇子の尊の馬並めてみ狩り立たしし時は来向かふ」（万葉集・四九）。○あかもすそびく　「あかも」は赤い裳。裳は腰から下に着ける女性の衣服。「すそびく」は衣の裾を引きずること。万葉集の諸注釈書によると若い女性が裳を引く姿のことで、裾が水に濡れるさまは男性に官能的魅力を与えた。「住の江の出見の浜の柴な刈りそね娘子らが赤裳の裾の濡れて行かむ見む」（万葉集・一二七八〈旧一二七四〉）など、例も多い。
【所載】万葉集・一〇〇六（旧一〇〇一）大夫者　御猟尓立之　未通女等者　赤裳須素引　清浜備乎　マスラヲハミカリニタタシヲトメラハアカモスソビキキヨキハマヘヲ　ますらをはみかりにたたしをとめらはあかもすそびくきよきはまびを
【参考】所載欄の文献には「一首山部宿祢赤人作」とあり、作者名「あか人」に一致する。万葉集では「春三月幸于難波宮之時歌六首」の中の一首で、天平六年（七三四）三月十日から十九日の難波行幸の折の詠。

一九二七　きのくにのふきあげのはまもあるものをしづみはてぬとなになげくらん

【異同】ナシ
【現代語訳】（物を吹き上げるという名のつく）紀伊国の吹上の浜もあるというのに、すっかり沈んで零落してしまったと何を嘆いているのでしょう。（そんなに嘆かなくても。）

【語句】○きのくにのふきあげのはま　紀伊国の吹上の浜。和歌山市紀ノ川口右岸の湊から左岸の雑賀の西浜に至る一帯の地。風が砂や波を吹き上げる浜として詠まれることが多い。「波風の絶えず吹上の浜なればうらなき君ぞ藻塩焼きける」（輔親集・一八）。○しづみはてぬ　沈みはてぬ。すっかり沈んでしまった。落ちぶれてしまった。「いづみにて沈みはてぬと思ひしをけふぞあふみに浮かぶべらなる」（躬恒集・一六八）。
【所載】ナシ

千鳥

一九二八　なにはづにわれまつふねはこぎくらしみつのはまべにちどりなく也

【異同】ナシ
【現代語訳】難波津に私が待つ舟は漕いで来たらしい。御津の浜辺に千鳥が鳴いているよ。
【語句】◎千鳥　チドリ科の鳥の総称。海辺や川瀬などに群れ住む小形の鳥。しばしば澄んだ鳴き声が詠まれる。また、砂浜に残る鳥の足跡から、筆跡・手紙の意を掛けた「あと」と詠み込まれることが多い。○なにはづ　難波津。摂津国の歌枕。大阪市の淀川河口にあった湊。○われまつふねはこぎくらし　私の待つ船は漕いで来たらしい。「らし」はある根拠に基づいて確信をもって推定する意。ここでは、千鳥の鳴き騒ぐ声を聞いて舟が近付いたのを推定している。○みつのはまべ　御津の浜辺。「御津」は官船の出入りのあることを尊んで呼んだ尊称。ここでは難波の御津のこと。摂津国の歌枕で、現在の大阪市から堺市にかけての海浜地帯。「難波津を今日こそ御津の浦ごとにこれやこの世をうみわたる舟」（後撰集・一二四四）。
【所載】続後撰集・冬・四九七／和歌初学抄・二七三

一九二九　こゑをだにきけばなぐさのはま千鳥ふるすわすれずつねにとひこよ

【異同】つねにとひこよ―常に問とよ（大）
【現代語訳】声だけでも聞くと心が慰められる名草の浜千鳥よ、古巣を忘れずにいつも訪れておくれ。
【語句】○なぐさのはま千鳥　なぐさの浜千鳥。名草の浜は紀伊国の歌枕。現在の和歌山市紀三井寺付近の海岸。「なぐさ」に苦しさ・悲しさを慰める意の「慰さ」を掛ける。「はま千鳥」は浜辺に来ている千鳥のこと。「跡みれば心なぐさの浜千鳥今は声こそ聞かまほしけれ」（後撰集・六三五）。○ふるす　古い巣。雛を育て終わって打

ち捨てられた巣。
【所載】夫木抄・六八四九／和歌童蒙抄・七五一

一九三〇　しらなみのたちよるうらのはま千どりあとやたづぬるしるべ成るらん
あさたゞ

【異同】ナシ
【現代語訳】白波が立ち寄る浦の浜千鳥。その足跡が、あなたを訪ねる手引きなのでしょうか。（この歌を始まりとしてお会いしたいものです。）
【語句】○あとやたづぬるしるべ成るらん　足跡があなたを訪ねる導きなのでしょうか。「あと」は足跡。「忘られむ時しのべとぞ浜千鳥行方も知らぬあとをとどむる」（古今集・九九六）。千鳥の跡は筆跡のこと。即ち、この歌をさす。「しるべ」は導き、手引き、案内すること。
【所載】後撰集・恋四・八二八／続後撰集・異本歌・一三八一／朝忠集Ⅰ・一六／朝忠集Ⅱ・二八
【参考】作者名「あさたゞ」は所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当　三浦・山村〕

一九三一　わがこひはなだかのうらのはま千どりおはにもふれぬきみがみゆへに
人によりつゝイ

【異同】ナシ
【現代語訳】私の恋は、名高の浦という名のように噂だけが高いことだ。浦に棲む浜千鳥の尾羽にも触れたことがないように、少しも触れたことがない、あなたの身のせいで。
【語句】○なだかのうら　名高の浦。紀伊国の歌枕。現在の和歌山県海南市名高。黒江湾の湾奥に位置するが、現在では陸地化している。「紀の海の名高の浦に寄する波音高きかも逢はぬ娘ゆゑに」（万葉集・二七三九〈旧二七三〇〉）。ここでは、「名高」という地名に、恋の名（噂）が高い、の意を掛ける。○はま千どりおはにもふれぬ　浜千鳥尾羽にも触れぬ。「名高の浦の浜千鳥尾羽にも」は、「触れぬ」を導くための措辞。「尾羽にも触れぬ」は、全く接触したことがない、の意。○きみがみゆへに　君が身ゆゑに。あなたの身のせいで。故（ゆゑ）に、は原因・理由を表す。

【所載】夫木抄・六九二四、一一五一三

一九三二一　よもすがらねざめてきけばかはつせに心もしのになくちどりかな

【異同】ナシ
【現代語訳】夜通し目を覚まして聞いていると、川瀬で胸が締め付けられるほど切ない声で鳴く千鳥であることよ。
【語句】○よもすがら　夜もすがら。夜通し。一晩中。○ねざめてきけば　寝覚めて聞くと。「寝覚め」は横たわったまま目を覚ましていること。○かはつせ　川つ瀬。川の流れの浅い所。○心もしのになくちどりかな　心もしのに鳴く千鳥かな。胸が締め付けられるほどに切ない声で鳴く千鳥であることよ。「しのに」は、草木がしおれなびく様から転じて、心がしみじみとした気分になることを表す副詞。「近江の海夕波千鳥汝が鳴けば心もしのにいにしへ思ほゆ」（万葉集・二六八〈旧二六六〉）。
【所載】万葉集・四一七〇（旧四一四六）夜具多知尓　寐覚而居者　河瀬尋　情母之奴尓　鳴知等理賀毛　ヨグタチニネザメテヲレバカハセトメココロモシノニナクチドリカモ　よぐたちにねざめてをればかはせとめこころもしのになくちどりかも／綺語抄・一二四／袖中抄・五七七／古来風体抄・一九五

一九三三三　やそしまのうらにあとふむはま千鳥きみはありとぞ思ひけらしな

【異同】ナシ
【現代語訳】多くの島の海岸に足跡を付けている浜千鳥。そのように、文を通わせる先がたくさんあると、あなたは思っていたようですね。
【語句】○やそしま　八十島。多くの島。○うらにあとふむはま千鳥　浦に跡踏む浜千鳥。鳥の足跡を見て文字を作ったという蒼頡の故事に拠り、砂浜についた足跡を筆跡や手紙に見立てる。「跡」は文の意。「忘られん時しのべとぞ浜千鳥行方も知らぬ跡をとどむる」（古今集・九九六）。○きみはありとぞ思ひけらしな　君はありとぞ思ひけらしな。歌意を取りにくいが、文を通わせる先がたくさんあるとあなたは思っていたようですね、といった意か。「けらし」は「けるらし」の約。
【所載】和歌童蒙抄・七四九

【参考】大久保本は、当該歌の後に、「よみ人しらす　千鳥鳴くゐなの河原をみることにやましなもとかおもほゆるかも」（古今六帖・一五五七）を書く。

はまゆふ

一九三四　みくまのゝうらのはまゆふもゝへなるこゝろはおもへどたゞにあらぬかも　人まろ

【異同】こゝろはおもへと―こゝろはおもへ（御・桂）
【現代語訳】み熊野の浦の浜木綿のように百重に恋心はつのるけれど、直接には逢っていないことよ。
【語句】◎はまゆふ　浜木綿。海岸の砂地に自生するヒガンバナ科の多年草。葉は幾重も重なり合い、夏には白い六弁花が十数個傘形に集まって咲く。そうした姿から、和歌では「百重」「重ね」「幾重」「隔つ」を導く措辞となる。○みくまのゝうら　み熊野の浦。「み」は美称の接頭語。熊野の浦は、現在の三重県南東部、熊野灘に面する海岸。「浜木綿」、「舟」と詠み合わされることが多い。○もゝへ　百重。葉が幾重にも重なり合う浜木綿の姿を、深い恋情に喩えた。初・二句は「百重」を導く序詞。○たゞに　直に。直接に。
【所載】拾遺集・恋一・六六八／万葉集・四九九（旧四九六）三熊野之　浦乃浜木綿　百重成　心者雖念　直不相鴨　ミクマノノウラノハマユフモモヘナルココロハオモヘドタダニアハヌカモ　みくまののうらのはまゆふももへなすこころはおもへどただにあはぬかも／人麿集Ⅰ・五／人麿集Ⅱ・三一六／人麿集Ⅲ・三六一／夫木抄・一三五六四／綺語抄・六八〇／袖中抄・二八三
【参考】作者名「人まろ」は、所載欄の文献に一致する。類似する歌に、「み熊野の浦の浜木綿百重ね心はあれど逢はぬ君かな」（兼輔集・六八）がある。

一九三五　みくまのゝうらのはまゆふいくかさねわれより人をおもひますらん

【異同】ナシ
【現代語訳】み熊野の浦の浜木綿は幾重にも重なっている、（そのように深く）私より他の人を恋しく思っているのでしょう。
【語句】○みくまのゝうらのはまゆふ　一九三四番歌参照。○いくかさね　幾重ね。幾重にも重なっている。初

・二句は「幾重ね」を導く序。〇おもひますらん　思ひ増すらん。人と比較して思いが増す意の他動詞。「唐衣脱げば寒さぞまさりけり我より誰を思ひ増すらん」（嘉言集・一三五）。
【所載】和歌童蒙抄・六四七／和歌色葉・二一三
【参考】上句が同じ歌として「み熊野の浦の浜木綿幾重ね我をば君が思ひ隔つる」（古今六帖・二六三四）がある。

〔以上五首担当　中野・吉田〕

一九三六　おもひます人しなければみくまのゝうらのはまゆふかさねだになし

【異同】ナシ
【現代語訳】あなた以上に思う人はいなくて、み熊野の浦の浜木綿の葉が重なる、そのように重ねることすらせず、ひとえに、つまり一途に、あなたを思っています。
【語句】〇おもひます人しなければ　「おもひます」は、思う量の多さを表す語。思いが増す。初・二句は前の一九三五番歌「われより人をおもひますらん」に対応した表現で、「あなた以上に思う人がいない」の意と解した。〇みくまのゝうらのはまゆふ　み熊野の浦の浜木綿。一九三四番歌参照。浜木綿の葉が幾重にも重なることから、ここでは「かさね」を導く序。〇かさねだになし　直訳すると「重ねることすらしない」の意であるが、「まのの浦に生ふる浜木綿重ねなでひとへに君をわれぞ思へる」（落窪物語・四〇）のように、重ねないことは一重（ひとえ）であることであり、相手をひとえに（一途に、ひたすらに）思う意に通じる。当該歌もその意で解した。
【所載】ナシ
【参考】当該歌は、前歌「み熊野の浦の浜木綿いくかさね我より人をおもひますらん」（一九三五）に対する返歌のような形になっている。

一九三七　いとゞしくうきみくまのゝはまゆふにかさねてものなおもはせそ君

【異同】ナシ
【現代語訳】そうでなくてもつらいことの多いわが身、み熊野の浜木綿の葉が重なる、そのように重ねて物思い

をさせないでください、あなた。
【語句】○いとどしく　そうでなくてもひどく。「いとどしく物思ふやどの荻の葉に秋とつげつる風のわびしさ」（後撰集・二二〇）。○うきみくまのゝはまゆふにかさねて　「憂き身」の「み」に「み熊野」の「み」を掛ける。「み熊野の浜木綿」は、浜木綿の葉が幾重にも重なることから、「かさね」を導く序。「かさねて」は、さらに加えて、の意。「霜の上にけさ降る雪のさむければ人をかさねてつらしとぞ思ふ」（重之集・二八六）。○ものなおもはせそ　「な……そ」は禁止を表す。物思いをさせるな、の意。
【所載】ナシ

一九三八　みくまのゝうらのはまゆふいくへかもわれをば人のおもひへだつる

【異同】いくへかも―いくへとも（大）
【現代語訳】み熊野の浦の浜木綿の葉が幾重にも重なる、そのように一体幾重に、私に対してあの人は心を隔てているのか……。
【語句】○みくまのゝうらのはまゆふ　一九三四番歌参照。浜木綿の葉が幾重にも重なることから、ここでは「いくへ」を導く序。○いくへかも　一体幾重にか。「か」「も」はいずれも係助詞で、合わせて詠嘆を伴う疑問を表す。○おもひへだつる　「思ひ隔つ」は、心に隔てをおく、よそよそしくする、の意。「右近は他人（ことひと）なりければ、思ひ隔てて御ありさまを聞かせぬなりけり」（源氏物語・夕顔巻）。また「ゆきかへり千鳥なくなり浜木綿の心へだてておもふものかは」（新撰和歌・二九八）のように、浜木綿が「隔つ」を導く例があり、ここでの「へだつる」も浜木綿の縁で詠み込まれている。
【所載】古今六帖・第五帖「ことひとを思ふ」二六三四
【参考】和歌初学抄に、「み熊野の浦の浜木綿いく重ねへだてて思ふ心そは君」（一二一）という類歌がある。

さき
一九三九　みさきまひあらいそによるいほへなみたちてもゐても君をしぞ思（こそまてイ）

【異同】あらいそによる―あらいそによする（御・桂）　君をしそ思―君をしそ思へ（御）
【現代語訳】岬を巡る荒磯に寄る幾重もの波が、立ったりおさまったりする。そのように、立っても座っても常

に、あなたのことを思っています。

【語句】◎さき　陸地が海や湖などの中へ突き出た所。岬。一般に風光に恵まれた所が多く、古来歌に詠まれた。○みさきまひ　岬舞ひ、か。「良正独り因縁を追慕して車の如くに常陸の地に舞ひ廻る」（将門記）のように「舞ふ」には、「巡る」「ぐるぐる回る」の意がある。所載欄の万葉集では「ミサキワノ」あるいは「みさきみの」であるが、校本万葉集によると、元暦校本や桂宮本など「みさきまひ」の訓をもつ本がいくつかある。○いほへなみ　五百重波。幾重にも波が起こる様子を表した語。○たちてもゐても　立っても座っても、常住坐臥。ここでは、波が起こったりおさまったりする意に、人が立ったり座ったりする意を掛ける。上三句は「たちてもゐても」を導く序詞。「ゐる」は、「立つ」の対義語で、動く物がその場にとどまることを表す。「立てば立つゐればまたゐる吹く風と波とは思ふどちにやあるらむ」（土佐日記・一八）。

【所載】万葉集・五七一（旧五六八）三埼廻之　荒礒尓縁　五百重浪　立毛居毛　我念流吉美　ミサキワノアライソニヨスルイホヘナミタチテモヰテモワガオモヘルキミ　みさきみのありそによするいほへなみたちてもゐてもあがおもへるきみ

一九四〇　おもひつゝくれどきかねつみをがさきま○なかのうらをまたかへるみつ

【異同】ま○なかのうらを—まかなのうらを（御・桂）、まかなれ浦を（大）　またかへるみつ—又かへりみつ（大）

【現代語訳】［第四句は万葉集により「まながのうら」、第五句は大久保本や所載欄の万葉集により「かへりみつ」で解した。］心惹かれながら来たが、近づくことはしかねた。三尾が崎、真長の浦をまた振り返って見た。

【語句】○おもひつゝ　思いながら。「思ひつつ居ればくるしもぬばたまの夜にいたらばわれこそゆかめ」（万葉集・二九四三〈旧二九三一〉）。○くれどきかねつ　来れど来かねつ。「かね」は、「……できない」の意の補助動詞「かぬ」の連用形。「来ても来ることができない」では意が通りにくいが、やって来たものの、近づくことができない意と解した。万葉集の注釈書は「やって来たが行き過ぎがたい」の意とする。○みをがさき　三尾（みを）が崎。万葉集では「水尾埼」とあり、琵琶湖西岸の滋賀県高島郡高島町の南端の岬に比定されている。○まかなかのうら　まかなかの浦は不明。所載欄の万葉集にみえる真長（まなが）の浦は、滋賀県高島郡安曇川町の河口から高島町にかけての琵琶湖の湖岸に比定されている。○かへるみつ　帰るのを見た、の意か。所載欄の万葉集「かへりみつ」によって解した。

【所載】万葉集・一七三七（旧一七三三）思乍　雖来来不勝而　水尾埼　真長乃浦乎　又顧津　オモヒツツクレドキカネテミヲガサキマナガノウラヲマタカヘリミツ　おもひつつくれどきかねてみをのさきまながのうらをまたかへりみつ
【参考】万葉集の注釈書は風光をめでる意に解しているが、あるいは思いをかける女性のもとへやってきた男の逡巡を表したものか。

〔以上五首担当　平野・諸井〕

一九四一　いもがためたまひろひにときのくにのゆくみ（ゆらのみさきイ）のさきにこの日くらしつ

【異同】ナシ
【現代語訳】わが思うあの人のため珠を拾いに、とやって来て、紀の国の「ゆくみの崎」に、この日を暮らしたことだ。
【語句】○いも　男性が恋人や妻を呼ぶ語。○たまひろひにときのくにの　「玉拾ひにと来」に「紀の国」を掛けたか。○ゆくみのさき　この歌の第三句によれば紀伊国にあるはずだが、「ゆくみの崎」では、具体的な所在地は不明。傍記および所載欄万葉集の「ゆらのみさき」に従えば、「由良のみさき」で、現和歌山県日高郡由良町の西部の岬である。
【所載】新勅撰集・雑四・一三二六／万葉集・一二一〇（旧一二二〇）為妹　玉乎拾跡　木国之　湯等乃三埼二　此日鞍四通　イモガタメタマヲヒロフトキノクニノユラノミサキニコノヒクラシツ　いもがためたまをひろふときのくにのゆらのみさきにこのひくらしつ／和歌初学抄・二七八

一九四二　なみのたつきよ（ミ）きがさきにゐる千どりたれ見よとてかあとのさやけき

【異同】あとのさやけき―あとのさやけさ（御）
【現代語訳】波の立つ清見が崎にいる千鳥よ。たれに見よとしてなのか、足跡がこんなにはっきりとついているのは。
【語句】○きよみがさき　清見が崎。駿河国。現在の静岡県清水市清水港の北部、興津の清見寺近くの磯崎。○あと　鳥の足跡。

【所載】夫木抄・一二一六四

一九四三　こゆるぎのいそ（いそ）たちならしいそなつむめさしぬらすなおきにをれなみ

【異同】ナシ
【現代語訳】こゆるぎの磯を動きまわって踏み均らしながら磯の海藻を摘んでいる少女を、濡らすな。沖に居れ、波よ。
【語句】◎いそ　海や湖などの岸辺で、岩の多いところ。古今六帖「いそ」題の下では、四首中三首までが「こゆるぎのいそ」を詠んだ歌である。○こゆるぎのいそ　「こよろぎの磯」ともいう。相模国。現神奈川県大磯町から小田原市国府津あたりへかけての海岸。○たちならし　立ち均らし。行き来して踏み均らすこと。ここでは海藻を採るためにあちこちと動きまわっているさま。○いそな　磯菜。磯に生えている海藻のこと。○めさし　新撰字鏡に「髫　小児髪　女佐之」とあり。前髪を目を刺すほどの長さに切り揃えた子どもの髪型。転じてその髪型にする年ごろの子どものこと。童女について言うことが多いようである。
【所載】古今集・東歌・一〇九四

一九四四　たまだれのこがめやいづらこゆるぎのいそのなみわけおきに出にけり（としゆき）

【異同】こかめやいつら―こかめはいつら（御・桂・大）　おきに出にけり―おきにてにけり（御）
【現代語訳】あの小瓶（こがめ）はいったいどこに行ったのかな。小亀がこゆるぎの磯の波を分けて沖へ出て行くように、きっともう、わたしの手のとどかぬところへ行ってしまったのだな。
【語句】○たまだれの　玉垂れの。「玉垂れ」は玉を緒で貫いて垂らす飾り。「を」（緒・小）などにかかる枕詞。転じてここでは「こ（小）」に掛けた。○こがめ　「小瓶」に「小亀」を掛けた。○こゆるぎのいそ　一九四三番歌参照。○おき　沖。ここでは作者の手の届かぬ后宮の御前をさしている。参考欄参照。「波」「沖」は「磯」の縁語。
【所載】古今集・雑上・八七四／敏行集・三／奥儀抄・五五三／和歌色葉・二七九／八雲御抄・一六五

【参考】作者名「としゆき」は所載欄の文献に一致する。古今集における詞書によれば、これは宇多朝での次のようなできごとの中で詠まれた歌である。すなわち、そのとき蔵人頭であったらしい藤原敏行が、殿上人たちへ「おほみきのおろし」を賜りたいと申し出て、后宮方の女蔵人へ「かめ（瓶）」を渡したのに、女蔵人たちは笑って瓶を后宮の御前に持って出、それきりなんの応答もなかった。そこで敏行が当該歌を詠んで女蔵人へ送った、という。蔵人補任によって敏行が蔵人頭であった時期を検索すれば、寛平七年（八九五）十月から同八年（八九六）四月までであり、右のできごとは、その期間内のことと考えられる。

一九四五　風によるなみのいそにはうぐひすのはるもえしらぬはなのみぞさく　つらゆき

【異同】はなのみそさく―はなのみそなく（御）
【現代語訳】風によって波の寄せてくる磯には、うぐいすが春が来たと知ることのできない花ばかりが、咲くことだ。
【語句】○風によるなみのいそ　風によって寄せてくる波のある磯。○うぐひすのはるもえしらぬはな　鶯の春もえ知らぬ花。鶯が、それによって春が来たと知ることのできない花。磯の白波のこと。鶯は梅の花の咲くことによって春の到来を知るとされていたが、磯の白波をその梅の花と見立てて、しかし波は梅の花ではないのだから、鶯はそれによって春の到来を知ることはできない、としたもの。
【所載】土佐日記・二三
【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当　山下〕

一九四六　君をおもふこゝろは人にこゆるぎのいそのたまもやいまはからまし　たゞみね

【異同】ナシ
【現代語訳】私の君を思う心は人に越えている、そのこゆるぎの磯の玉藻のように美しい君を、今はもう自分のものにしてしまおうか。

【語句】○こゆるぎのいそ　こゆるぎの磯。一九四三番歌参照。「こゆるぎ」に「越ゆ」をかける。同様の例に「とふことを待つに月日はこゆるぎの磯にやいでて今はうらみん」（後撰集・一〇四九）がある。○たまも　玉藻。藻の美称。恋する相手を喩える。「わぎもこが寝くたれ髪を猿沢の池の玉藻と見るぞ悲しき」（大和物語・二五二）のように長く黒い髪を藻にたとえたり、「河の瀬になびく玉藻の水隠れて人に知られぬ恋もするかな」（古今集・五六五）のように藻を「靡く」もの、「寄る」ものとするので、玉藻には恋のイメージがある。「玉藻や」の「や」は軽い疑問を表す。○いまはからまし　今は刈らまし。今は刈ろうか。「玉藻」を「刈」るのは男の、相手を我が物にする行動を表す。

【所載】後撰集・恋三・七二四／躬恒集Ⅱ・一九一／躬恒集Ⅳ・一二七／躬恒集Ⅴ・二四八

【参考】作者名「たゞみね」とあるが、所載欄の文献では躬恒である。

一九四七　おほうみにたつらん浪はいまもあらん君こふらくはやむ時もなし（なみ）

【異同】ナシ

【現代語訳】大海に立っているであろう波は、今も絶えず打ち寄せていることだろう。その波のように、私の君を恋うる気持ちは止むときもないのだ。

【語句】◎なみ　波・浪。海や川、池などの水面に生ずる起伏。但し、古今六帖においては「波」題では海の波を扱い、川波は「川」題で扱っている。○たつらん浪　立っているだろう波。眼前に見えないものを推定していう。○こふらくは　恋ふらくは。「恋ふる」のク語法。上句全体は下句の気持ちを表す比喩。

【所載】新千載集・恋二・一二〇三／万葉集・二七五〇（旧二七四一）大海二　立良武浪者　間将有　公二恋等九　止時毛梨　オホウミニタツラムナミハマモアラムキミニコフラクヤムトキモナシ　おほうみにたつらむなみはあひだあらむきみにこふらくやむときもなし／人麿集Ⅳ・一七五

一九四八　うちよするうらなみ見ればわがこひのつきぬかずこそまづしられけれ（つらゆき）

【異同】まつしられけれ―まつしられけり（御）

【現代語訳】絶え間なく岸に打ちよせる波をみていると、私の恋心もあの波のように限りなく多いものだと、まずは気づかされることだ。
【語句】○うらなみ　浦波。岸に寄せる波。○つきぬかず　尽きぬ数。相手を恋う心が波のように打ち寄せるという表現は前歌と同様である。古今集仮名序の「我が恋はよむともつきじ有磯海の浜の真砂はよみつくすとも」のように、無限とも言えるものよりも自分の恋心は多いとする歌。○まづしられけれ　まず気づかされることだ。「しられ」の「れ」は自発。自ずと気づくこと。なにはともあれ、わかってしまうことだ、の意。
【所載】貫之集Ⅰ・六五五
【参考】作者名「つらゆき」は、所載欄の文献に一致する。

一九四九　すみよしのきしにいつむかおきつえによするうらなみ見つゝしのばん　人まろ

【異同】ナシ
【現代語訳】[第二句を「きしにいへもが」第三句を「おきにへに」との本文で訳した。]住吉の岸に家が欲しいなあ、そして沖へ岸へ寄せている白浪をみながら、あの人のことを偲ぼう。
【語句】○すみよし　住吉。一八四一番歌・一九〇一番歌参照。○いつむか　不詳。傍記による「いつもか」でも、意味が通らない。また、他本には傍記「もかイ」を「もにイ」とするが、これも意味が通らない。所載欄の万葉集では「いへもが」となっているので、「いへもか」の誤写か。万葉集の本文では、家が欲しいなあの意で、これに従う。○おきつえに　漢字を宛てると「沖つ江に」となるが、沖は陸から遠い所、江は陸地に入り込んでいる所で意味をなさない。万葉集では「奥尓辺尓」（おきにへに）とある。沖に、また海岸の入り江にの意で、今これに従う。
【所載】万葉集・一一五四（旧一一五〇）墨吉之　岸尓家欲得　奥尓辺尓　縁白浪　見乍将思　スミノエノキシニイヘモガナオキニヘニヨスルシラナミミツツオモハム　すみのえのきしにいへもがおきにへによするしらなみみつつしのはむ
【参考】作者名「人まろ」とあるが、万葉集では作者未詳である。

一九五〇　あられふるとをつおほうらによるなみのたとひよるともにくからなくに

【異同】とをつおほうらに―遠つ大海に（大）
【現代語訳】霰が降る遠い大浦に打ち寄せる波のように、あの人が私に思いを寄せるとしても、憎く思うことは無いのに。
【語句】○あられふる　霰降る。枕詞。霰の降る「とほとほ」という音から「遠つ」に掛かる。○とをつおほうら　遠つ大浦。遠い海辺。遠くにいる人を暗に言っている。○よるなみの　寄る波の。波が浦に寄せる意に、人が心をよせる意を掛ける。○たとひよるとも　たとひ寄るとも。たとえ遠くの浦が心を寄せたとしても、の意。たとひ……ともは、逆接の仮定条件句。「あられふるとをつおほうらによるなみの」までは「たとひよるとも」の序。○にくからなくに　憎からなくに。憎くはないのにの意。「憎し」の未然形「憎から」と打消の「ず」のク語法と助詞「に」で構成されている。ここでは思いを寄せられ、まんざらでもない気持ちを表す。
【所載】万葉集・二七三八（旧二七二九）霰零　遠津大浦尓　縁浪　縦毛依十方　憎不有君　アラレ（ミゾレ）フルトホツオホウラニヨルナミノヨシモヨルトモニクカラナクニ　あられふりとほつおほうらによするなみよしもよすともにくくあらなくに

〔以上五首担当　林・杉本〕

一九五一　たてばたつゐればまたゐる吹かぜとなみとは思ふどちにやあるらん

【異同】ナシ
【現代語訳】風が立つと波も立つ。風が落ち着いていると波も落ち着いている。吹く風と波とは仲のよい者同士なのだろうか。
【語句】○たてばたつ　主語は「吹（く）かぜ」と「なみ」。○ゐればまたゐる　「たてばたつ」に対応する。風や波が静かな状態をいう。○思ふどち　思う者同士。親しい者同士。
【所載】土佐日記・一八
【参考】所載欄の土佐日記によると作者は「めのわらは」で、「いふかひなき者の言へるにはいと似つかはし」との評が添えられている。一九五二番歌参考欄参照。

一九五二　まちつけてもろともにこそかへるものなみよりさきに人のたつらん

二首つらゆき

【異同】二首つらゆき―底本ハ行間ニ小字補入。
【現代語訳】波というものは、待ち受けて、一緒になって帰るもの。それなのにどうしてあなたは返る波より先に立ち帰るのでしょう。
【語句】○まちつけて　（人や時期を）待ち受けて。待ち迎えて。○人のたつらん　どうして人が立っているのだろう。「たつ」は波の縁語。ここは直前に「かへるもの」とあるので、立ち帰る意であろう。「らん」は現在体験している事態について、その原因、理由等を推量する意を表す。所載欄の貫之集によれば、当該歌は「男、女、舟に乗りて遊ぶ」という題の屏風歌である。男が独り先に帰ろうとするのを女が難じている形に詠んだものであろうか。
【所載】貫之集Ⅰ・三七六／袋草紙・三四四
【参考】「二首つらゆき」は、底本では補入形式で書かれているが、以下の歌の作者として述べているのではなく、以上の二首についての記述であろう。一九五二番歌は貫之集に見えるものであり、一九五一番歌は土佐日記に「めのわらは」の作として記されているものの、やはり貫之作と考えられていたのであろう。

一九五三　すみよしのきしのまつねをうちさらしきよするなみのおとのきよけさ（さやイ）

【異同】きよするなみの―きする浪の（大）
【現代語訳】住吉の岸の松の根をうち洗い、寄せてくる波の音のすがすがしいことよ。
【語句】○すみよしの　「すみよし」は摂津国の歌枕。現在の大阪市住吉区一帯。もともとは「スミノエ」であったが、「住吉」と表記したところから「スミヨシ」の読みが生じた。もっとも平安時代になると「スミノエ」は「江」の意識で、「スミヨシ」は郡や里の地名意識で、それぞれに使い分けられていたとの説もある。いずれにしても「波」や「松」とともに詠まれることが多い。○うちさらし　波が寄せて洗って。○きよするなみの来て寄せる波の。○きよけさ　所載欄に見える万葉仮名「清羅」は通常「さやけさ」と読むが、当該歌では「きよけさ」とする。なお「羅」はうすぎぬの意で、「紗」と同義であるところから「さ」と読むという。
【所載】万葉集・一一六三（旧一一五九）住吉之　岸之松根　打曝　縁来浪之　音之清羅　スミノエノキシノマツガネウチサラシヨリクルナミノオトノサヤケサ　すみのえのきしのまつがねうちさらしよせくるなみのおとの

さやけさ

一九五四　いかにしてやむべきものぞ君を思ふこゝろありそによするしら波

【異同】ナシ
【現代語訳】どのようにして収まるのだろうか、とても収まることはできません。あなたを思う心があって、その心のような、荒磯に寄せる激しい白波は。
【語句】○こゝろありそに　「心あり」に「ありそ（荒磯）」を掛ける。「ありそ」は荒涼とした磯。あるいは波の荒い磯。
【所載】ナシ

一九五五　たちかへりあはれとぞ思ふよそにてもきみにこゝろをおきつ白波

もとかた

【異同】ナシ
【現代語訳】繰り返し繰り返し恋しいと思います。遠く離れていても、私はあなたに心を寄せた沖の白波です。
【語句】○たちかへり　「おきつ白波」の縁語。ここは、繰り返し、の意。○よそにても　離れたところにいても。○きみにこゝろをおきつ白波　「君に心を置きつ」に「沖つ白波」を掛ける。
【所載】古今集・恋一・四七四／新撰和歌・二一八／時代不同歌合・七七／後六々撰・九九／和歌初学抄・一八
【参考】作者名「もとかた」は、所載欄の古今集、後六々撰に一致する。他は作者名不記載。

〔以上五首担当　久保木〕

一九五六　草も木も色かはれどもわたつうみのなみの花こそ秋なかりけれ

ふむやのあさやす

【異同】ナシ
【現代語訳】草も木も（秋になると）色が変わるけれど、大海の波の花には、秋がなかったのだなあ。

【語句】○わたつうみ　「わたつみ」の転。本来は、海神の意だが、転じて海、海原の意で用いられるようになった。ここでは後者の意。○なみの花　波の花。泡立った波を花に見立てる表現。
【所載】古今集・秋下・二五〇／新撰万葉集・三六四／井蛙抄・一四二
【参考】作者名「ふむやのあさやす」とあるが、所載欄の古今集は「文屋康秀」とする。

一九五七　すみのえの身(めイ)にちかゝらばうちよ(はまにゐてイ)するなみのかずをもよむべき物を　伊勢

【異同】ナシ
【現代語訳】住の江が身近にあるならば、そこに打ち寄せる波の数をも数えることができますのに。
【語句】○身にちかゝらば　身に近からば。身近にあるならば。○うちよする　打ち寄する。
【所載】古今六帖・第三帖「江」一六六三番既出
【参考】所載欄の「江」では第二句を「めにちかゝらば」、第三句を「きしにゐて」とする。

一九五八　すみよしのきしにむかへるあはぢ嶋あはれと君をいはぬ日ぞなき(はしイ)

【異同】ナシ
【現代語訳】（住吉の対岸にある淡路島。）「あはれ（ああ、恋しい）」とあなたのことを言わない日などありません。
【語句】○すみよし　住吉。摂津国の歌枕。住の江に同じで、現在の大阪市住吉区一帯。一〇六七番歌、一九五三番歌参照。○あはぢ嶋　淡路島。現在の兵庫県、瀬戸内海上の島。上句は、「あは」の同音で「あはれ」を導く序となる。
【所載】拾遺集・恋五・九二六／万葉集・三二一一（旧三一九七）住吉乃　崖尓向有　淡路嶋　・怜登君乎不言日者无　スミノエノキシニムカヘルアハヂシマアハレトキミヲイハヌヒハナシ　すみのえのきしにむかへるあはぢしまあはれときみをいはぬひはなし／夫木抄・一〇五五八／和歌初学抄・二三九／古来風体抄・一四九
【参考】作者名はないが、所載欄の拾遺集、夫木抄には「人麿」とある。

一九五九　身をつくし心つくしておもふにもこのまむことなゆめにしみゆる（みほつくし／もなしとイ）

【異同】ナシ
【現代語訳】［第四句意味不明。万葉集の「このまももとな」で訳した。］身を尽くし、心を尽くして（私があの人を）思うにつけても、今のこの間も、やたらと（私の）夢に見えることだ。
【語句】◎みほつくし　みをつくし（澪標）。「水脈（みを）の串」の意。通行する船に水脈や水深を知らせるために目印として立てる杭のこと。和歌では、難波の景物として詠まれることが多く、「身を尽くし」に掛けて用いることが多い。「尽くし」や「深き」にかかる枕詞としても用いられる。○身をつくし　身を尽くし。身を尽くして。当該歌では「澪標」の意はないが、同音によりこの題の下に置かれたものであろう。○おもふにも　思ふにも。歌意を取りにくいが、自分が相手を思うから、相手が夢に見える、の意か。「思ひつつ寝ればかもとなぬばたまの一夜もおちず夢にし見ゆる」（万葉集・三七六〇（旧三七三八））。相手が思ってくれるから自分の夢に現れる、と詠む方が一般的であり、所載欄の万葉集の「オモフカモ」または「おもへかも」の方が意が通りやすいが、ここは底本どおり現代語訳をした。○このまむことな　意味不通。所載欄の万葉集西本願寺本の訓により「此の間ももとな」で解した。「もとな」はやたらに、むやみに、無性になどの意の副詞。
【所載】万葉集・三一七六（旧三一六二）水咫衝石　心尽而　念鴨　此間毛本名　夢西所見　ミヲツクシココロツクシテオモフカモコノマモモトナユメニシミユル　みをつくしこころつくしておもへかもここにももとないめにしみゆる／袖中抄・九三三

一九六〇　わびぬればいまはたおなじなにはなるみをつくしてもあはむとぞ思　もとよしのみこ

【異同】ナシ
【現代語訳】どうせつらい思いをしているのだから、今となってはもう同じことだ。（難波にある澪標ではないが）我が身を滅ぼしてでも逢おうと思いますよ。
【語句】○わびぬれば　侘びぬれば。「侘ぶ」は、思うようにならずつらがる、心細く思う、恨めしく思うこと。○いまはたおなじ　今はた同じ。今となってはもう同じことだ。「はた」は他の事柄と関連させて判断や推量を

する際に用いる副詞。○なには　難波。摂津国の歌枕。現在の大阪市、淀川の河口付近。○みをつくしても　「みをつくし」（澪標）に「身を尽くし」を掛ける。「身を尽くしても」とは、この身の一切を尽くしても、我が身を滅ぼしても、ということ。

【所載】後撰集・恋五・九六〇／拾遺抄・恋下・三一七／拾遺集・恋二・七六六／元良親王集・一一五／時代不同歌合・六五／百人秀歌・二〇／百人一首・二〇／定家十体・一／袖中抄・九三四／古来風体抄・三三〇／近代秀歌・九二／詠歌大概・九八／三五記・一／心敬私語・一一

【参考】作者名「もとよしのみこ」は、所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当　長戸・吉田〕

一九六一　君こふるなみだのとこにみちぬればみをつくしとぞいまはなりぬる　おきかぜ

【異同】ナシ

【現代語訳】あなたを恋しく思う涙が寝床に満ちあふれたので、（私はその中に立つ）澪標となって、今はわが身を尽くし、疲れ果ててしまいました。

【語句】○なみだのとこにみちぬれば　涙の床に満ちぬれば。涙が床に満ちてしまったので、の意。○みをつくし　涙でできた水脈に立つ「澪標」に「身を尽くし」を掛ける。一九五九番歌、一九六〇番歌参照。

【所載】古今集・恋二・五六七／新撰万葉集・四四六／興風集Ⅰ・九、六四／興風集Ⅱ・一八／寛平御時后宮歌合・一五九／三十人撰・七九／三十六人撰・一〇九／和歌童蒙抄・三二七／袋草紙・五一／袖中抄・九三二

【参考】作者名「おきかぜ」は所載欄の文献に一致する。

一九六二　かはなみもうしほもかゝるみをつくしよするかたなき恋もするかな

【異同】うしほもかゝる―うしほ草もかゝる（大）

【現代語訳】川波も海水も寄せ来てかかる澪標。この身の一切を尽くして、寄る辺のない恋をすることだよ。

【語句】○うしほ　うしほ（潮）。潮は、海水。また海水の流れ。「白浪のうち騒がれて立ちしかば身を潮にぞ袖は濡れにし」（後撰集・一一五八）。○よするかたなき恋　寄する方なき恋。寄る辺のない恋。

【所載】袖中抄・九三七

一九六三　なにはがたしほひにたちて見わたせばあはぢのしまにたづかけるみゆ
かた

【異同】ナシ
【現代語訳】難波潟の潮が引いた後に立って見渡すと、淡路島に向かって鶴が高く飛んでいるのが見えるよ。
【語句】◎かた　潟。遠浅の海岸で、潮が引くとあらわれる一帯。和歌では、難波潟、香椎潟など特定の地名として詠まれることも多い。○なにはがた　難波潟。摂津国淀川の河口一帯の古称。○しほひにたちて　潮干に立ちて。潮干に立って。「潮干」は潮が引くこと、また潮が引いたあとの浜、干潟。「難波潟潮干なありそね沈みにし妹が姿を見まく苦しも」（万葉集・二二九〈旧二二九〉）。○あはぢのしま　淡路の島。一九五八番歌参照。○たづかけるみゆ　鶴（たづ）翔る見ゆ。「翔（かけ）る」は、鳥などが空高く飛ぶ、飛び回るの意。「藻刈り舟沖漕ぎ来らし妹が島形見の浦に鶴翔る見ゆ」（万葉集・一二一八〈旧一一九九〉）。
【所載】続古今集・雑中・一六三六／万葉集・一一六四（旧一一六〇）難波方　塩干丹立而　見渡者　淡路嶋尓　多豆渡所見　ナニハガタシホヒニタチテミワタセバアハヂノシマニタヅワタルミユ　なにはがたしほひにたちてみわたせばあはぢのしまにたづわたるみゆ

一九六四　なにはがた塩ひにいでゝたまもかるあまをとめごはながなつげさね
たなひのせた人　たちまの命婦イ

【異同】底本ハ行間ニ作者名小字補入。　たちまの命婦イ—うちまの命婦イ（大）　なかなつけさね—なかれつけさね（大）
【現代語訳】難波潟の潮が引いた後にやってきて玉藻を刈り取る海人乙女たちよ、どうかあなたの名前を教えてくださいな。
【語句】○たなひのせた人　たちまの命婦イ　作者名に、「たなひのせた人」と「たちまの命婦」の二人の名前があること不審。この場合、「たなひのせた人」が作者名で、他本に「たちまの命婦」の名がある、ということか。この両者については、いずれも不明。また、両者の関係についても不明。○あまをとめごは　海女少女子は。

「海女少女子」は、年若い海女。○ながなつげさね　汝が名告げさね。「さね」は、尊敬の助動詞「す」の未然形に終助詞「ね」が付いたもの。……なさってくださいな。「わが背子は仮廬作らす草無くは小松が下の草を刈らさね」（万葉集・一一〈旧一一〉）。

【所載】万葉集・一七三〇（旧一七二六）難波方　塩干尓出而　玉藻苅　海未通女等　汝名告左祢　ナニハガタシホヒニイデテタマモカルアマノヲトメラナガナツゲサネ　なにはがたしほひにいでてたまもかるあまをとめどもながなのらさね／夫木抄・一一九六〇、一三四五五

【参考】作者名「たなひのせた人　たちまの命婦イ」とあるが、所載欄の万葉集では「丹比真人」とする。

一九六五　いつしかといぶせかりつるなにはがたあしこぎわけてみふねきにけり　つらゆき（けるイ）

【異同】ナシ

【現代語訳】早く着いて欲しいと気が晴れなかった、その難波潟に葦を漕ぎ分けてやっとこの御船はやって来たことだ。

【語句】○いつしかと　いつになったら着くのかと。「いつしか」は、早くそうなって欲しいと、待ち望む気持ちを表す。○いぶせかりつる　「いぶせし」は、はっきりしなくて気持ちが晴れないさま。不安だ、鬱陶しい、などの意。「たらちねの母が飼ふ蚕の繭隠りいぶせくもあるか妹に逢はずして」（万葉集・三〇〇四〈旧二九九一〉）。○あしこぎわけて　葦漕ぎ分けて。難波潟は葦の群生地として知られる。○みふねきにけり　み船が来たことだ。「み」は尊称の接頭語。

【所載】土佐日記・四九

【参考】作者名「つらゆき」とあるが、貫之集には見えない。所載欄の土佐日記の中では「淡路専女（あはぢのたうめ）」の歌とする。土佐日記中の歌を貫之作とする点、一九五二番歌などと同じ。

〔以上五首担当　青木・吉田〕

一九六六　夏そびくうなかみがたのおきつすにふねはとゞめよさよ更にけり

【異同】ナシ

【現代語訳】海上潟の沖の洲に船は泊めてください。もうすっかり夜が更けてきましたよ。
【語句】○夏そびく　地名「うなかみ」にかかる枕詞。夏麻（なつそ、夏に畑から取る麻）を引き抜いて績（う）む意で、「うなかみ」の「う」にかかるか。○うなかみがた　海上潟。所載欄の万葉集左注に「右一首上総国歌」とあり、現在の千葉県市原市あたりの東京湾岸の干潟。○おきつす　沖の方にある砂州。
【所載】万葉集・三三六二（旧三三四八）奈都素妣久　宇奈加美我多能　於伎都渚尓　布祢波等杼米牟　佐欲布気尓家里　ナツソビクウナカミガタノオキツスニフネハトドメムサヨフケニケリ　なつそびくうなかみがたのおきつすにふねはとどめむさよふけにけり／和歌童蒙抄・二七一
【参考】上三句が共通した歌に「夏麻引くうなかみがたの沖つ洲に鳥はすだけど君は音もせず」（万葉集・一一七九〈旧一一七六〉）がある。

一九六七　みなと
みなとかぜいたくふくらしなごのえにつまよびかはしたづさはぐみゆ

【異同】ナシ
【現代語訳】河口の風がひどく吹いているようだ。奈呉の入り江では連れ合いを呼び交わして鶴が騒ぐのが見える。
【語句】◎みなと　水門（みなと）、湊。河海の水の出入りする口。船が停泊する所。また、物事が行き着くところ。古今六帖の「みなと」の題の下には河口を詠んだ歌が収められている。○みなと風　入り江、河口に吹く風。○いたくふくらし　ひどく吹いているようだ。○なごのえ　奈呉の江。ここでは越中国の歌枕で、現在の富山県新湊市の放生津潟。○つま　連れ合い。すべての動物のつがいの一方をいい、雌雄の別は問わない。○たづさはぐみゆ　たづさわぐ見ゆ。鶴が騒ぐのが見える。
【所載】続古今集・雑中・一六三五／万葉集・四〇四二（旧四〇一八）美奈刀可是　佐牟久布久良之　奈呉乃江尓　都麻欲比可波之　多豆左波尓奈久　一云多豆佐和久奈里　ミナトカゼサムクフクラシナゴノエニツマヨビカハシタヅサハニナク一云タヅサワクナリ　みなとかぜさむくふくらしなごのえにつまよびかはしたづさはになく一云たづさわくなり／夫木抄・七七四〇／綺語抄・八〇
【参考】当該歌に作者名はないが、所載欄の万葉集によれば大伴家持の作。

一九六八　いる月（てイ）のながるゝみればあまのがはいづるみなとはうみにざりける　つらゆき

【異同】うみにさりける―海になりけり（大）
【現代語訳】沈む月が天の川を流れるように移動して海に入っていくのを見ると、天の川の水が出ていく河口はやはり海であったのだな。
【語句】○あまのがは　天の川。銀河。天漢。月は天の川を流れると捉えられていた。「あまの河雲のみをにてはやければ光とどめず月ぞ流るる」（古今集・八八二）。○うみにざりける　「うみにぞありける」の略。海であったのだなあ。
【所載】後撰集・羈旅・一三六三／夫木抄・一一八七六／土佐日記・一〇
【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。土佐日記では承平五（九三五）年正月八日、大湊に碇泊中に月が海に入るのを見て、業平の「あかなくにまだきも月のかくるるか山の端逃げて入れずもあらなむ」（古今集・八八四）という歌を思い出して詠んだとされる。

一九六九　もみぢ葉のながれてとまるみなとにはくれなゐふかき浪ぞ立ける　そせい或本伊勢

【異同】ナシ
【現代語訳】もみじの葉が流れた末に行き着く河口には、深い紅色の波が立っていることだ。
【語句】○くれなゐふかき浪　紅深き波。紅葉が水面に散って、波が紅に染まって見える様をいう。同様の詠みぶりの歌として「みなかみに紅葉散るらし風をいたみ唐くれなゐの波たかくみゆ」（高遠集・一四八）がある。
【所載】古今集・秋下・二九三／新撰和歌・一一四／素性集Ⅰ・五一／素性集Ⅱ・二五／素性集Ⅲ・二五／古来風体抄・異本歌・六一二／桐火桶・一〇八
【参考】作者名「そせい或本伊勢」とあるが、古今集、素性集等所載欄の文献から作者は素性と考えられる。伊勢集にこの歌は見えない。

とまり

一九七〇　おきつなみへなみたつともわがせこがみふねのとまりになみたゝめやは

いしかはのおほきみ（かはらの左大臣イ）

【異同】ナシ
【現代語訳】沖や岸辺にどんなに波が立とうとも、あなたの御船の泊まる港に波が立つでしょうか。いや、立ちはしませんよ。
【語句】◎とまり　泊まり。船の碇泊するところ。また旅人が宿を取ること、およびその場所。ここでは船着場のことで、和歌ではこの意味で用いられることが多い。〇おきつなみへなみたつとも　沖の波や岸辺の波がどんなに立とうとも。「おきつなみ」は沖の波。「へなみ」は辺波。「辺」は岸辺の意で、岸辺または舟べりに寄せる波のこと。「沖つ波辺波静けみ漁すと藤江の浦に舟ぞ騒ける」（万葉集・九四四〈旧九三九〉）。〇わがせこ　女性が親愛の情を込めて男性に用いるのが一般的だが、ここでは男性同士が互いを親しみを込めて用いている。あるいは女性の立場に立っての詠か。
【所載】万葉集・二四八（旧二四七）奥浪　辺波雖立　和我世故我　三船乃登麻里　瀾立目八方　オキツナミヘナミタツトモワガセコガミフネノトマリナミタタメヤモ　おきつなみへなみたつともわがせこがみふねのとまりなみたためやも
【参考】作者名「いしかはのおほきみ」とあるが不詳。傍記にある「かはらの左大臣」は源融。所載欄の万葉集の左注には「右今案、従四位下石川宮麿朝臣慶雲年中任大弐、又正五位下石川朝臣吉美侯神亀年中任少弐、不知両人誰作此歌焉」とあり、長田王の筑紫派遣の際の歌に和した石川大夫の詠作とわかる。石川大夫は慶雲年中に大弐に任ぜられた従四位下石川宮麻呂朝臣か、神亀年中に少弐に任ぜられた正五位下石川朝臣吉美侯のどちらかとされる。

一九七一　おほば山（えイ）かすみたなびく風ふきてわがふねとめむとまりしらずも

【異同】ナシ
【現代語訳】おおば山に霞がたなびく。風が吹いて、私の船を泊めようとする港も分かりませんよ。
【語句】〇おほば山　未詳。大葉山、祖母山とも。万葉集・一二二八（旧一二二四）や夫木抄・八五四二にこの地名を詠んだ歌が見える。万葉集諸注釈書は歌の配置から近江国（滋賀県）琵琶湖あたりの山の名かと考察して

いるが、夫木抄・歌枕名寄は紀伊国とする。所載欄の古今六帖八八二番では「おほえやま」。〇わがふねとめむとまりしらずも　私の船を泊めようとする港も分かりませんよ。「も」は感動を表す終助詞。

【所載】古今六帖・第二帖「山」八八二番既出

【参考】所載欄の「山」では、初句「おほえ山」、二句「かすみたなびき」、四句「われふねとめむ」、五句「とまりとめずも」とする。

〔以上六首担当　三浦・山村〕

本云
嘉禄三年七月日以戸部御本書写了（京極入道中納言）
校合又了　源朝臣　在判

寛喜二年十二月十九日以入道左大弁本
書写了　件本家長朝臣本云々

此内四百八十三首

一校了

【異同】校合又了―校合畢（大）　入道左大弁本―入道右大弁本（御・桂・大）　書写了―書写校了（御・桂）、書写校合畢（大）　此内四百八十三首―ナシ（大）　一校了―ナシ（大）

あとがき

第三帖の注釈をお届けする。二〇一二年三月に、お茶の水女子大学付属図書館の E-book サービスにより、WEB に掲載した第一帖、同じく二〇一四年七月に掲載した第二帖に続くものである。底本、凡例などに変更はない。

公刊の方法としてとった WEB への掲載は、環境さえ整えば世界のどこででも無償で読めること、オンデマンドにより製本も入手できること（これは有償）、これらが評価され、二〇一三年、国立大学図書館協会の表彰を受けた。

電子媒体と紙媒体はそれぞれ長所があるが、近年、前者の広がりは、めざましく、古今和歌六帖の十三の伝本を一覧できる翻刻が CD として発表された。『古今和歌六帖の本文と享受に関する総合的研究』（代表研究者　黒田彰子　科学研究費基盤研究（C）平成２２年度～２５年度）がそれである。現存する伝本はすべて江戸時代以降のものであって、それ以上遡れないこと、永青文庫本は同一親本から転写された桂宮本、御所本と対比しながら用いることで、現存最善本の位置にあると結論する。我々の底本の選定、対校する写本の選定の判断と一致する。研究者であれば、それぞれの写本、版本、複製本ないしは写真版を見るはず、という前提にたち、

底本の書き入れを含め、なるべくその現状が再現できるよう翻刻しているが、このCDは伝本間の比較対照に参考となる。

第三帖は次のメンバーが作成した。担当順に

長戸千恵子・*青木太朗・*犬養悦子・尾高直子・*三浦狭依・杉本まゆ子・平野由紀子
斎藤熙子・加藤静子・中野方子・山下道代・久保木哲夫・諸井彩子・林マリヤ・
*市東奈々・原山絵美子・*橋本智美・吉田優子・山村英理子

である（*は退会者）。

輪読会は今年で十一年を迎え、会員も変化した。五首ずつ担当することは変わらないが、発表者がそのまま清書するとは限らない。担当者名が二つある場合、前者が発表したレジュメを参考にしながら、後者の文責で清書している。二〇一四年一月に永眠した三浦狭依さんの第三帖への寄与は大きく、校正および清書は他のメンバーに委ねられた。連名はその間の事情を物語るものである。

二〇一六年三月二四日

平野由紀子

古今和歌六帖全注釈　第三帖

2016 年　7 月 20 日　初版発行

2019 年 10 月 10 日　第２版発行

著　者　古今和歌六帖輪読会

発　行　お茶の水女子大学附属図書館(E-book サービス)

〒112－8610　東京都文京区大塚２－１－１
https://www.lib.ocha.ac.jp/
電話　03-5978-5835　FAX 03-5978-5849

ISBN978-4-904793-20-6　　C3092

本著作の著作権は著者が保持しています。著作権法上の著作権の制限を超える利用については、
お茶の水女子大学附属図書館にお問い合わせください。